

日本文理大学
「地（知）の拠点整備事業」
成果報告書

平成 26 ~ 30 年度

おおいた、つくりびと

日本文理大学COC事業

NBUが大分で育む、豊かな心と地域愛。

体感。感動。感謝。

おおいた、つくりびと®

豊かな自然と歴史や文化を大切に守り続ける、
素晴らしい大分県が、私たちのキャンパスです。

NBU日本文理大学が取り組むCOC事業

「豊かな心と専門的課題解決力を持つおおいた地域創生人材の育成」。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。

お金やモノだけでは図ることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。

日本の未来を担う若者ができることは？

きっと、その答えはひとつではありません。

だからこそ今、私たちは動き始めます。

そのステージは、私たちの大学がある大分県。

大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。

私たちは自分の力を信じて未来を拓く

そんな、『おおいた、つくりびと』になりたい。



文部科学省

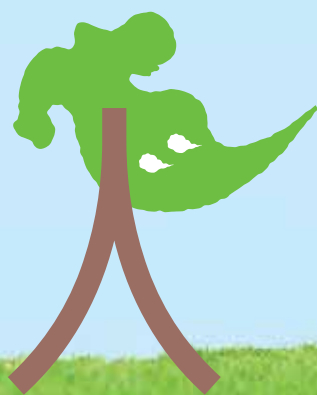
地(知)の拠点



NBU 日本文理大学

目次

1. 事業概要・目的・計画・成果	1
2. 大学COC事業 プロジェクトシート	51
3. 地域志向プロジェクト研究 卒業研究・論文・設計 地域志向関連リスト	138
4. 大学COC事業 活動報告会	157
5. 事業検討・評価委員会 連携推進会議	168
6. 大学COC事業 報道リスト	188



1 . 事業概要・目的・計画・成果



事業概要

平成26年度予算案 34億円
(平成25年度予算額 23億円)

1. 背景 <大学に対する期待>

- 地域の課題解決に応える教育研究を行ってほしい。
- 学生が地域社会に出てから役立つ学びに力を入れてほしい。
- 教員個人のつながりから、大学が組織的に取り組む連携体制に発展させてほしい。

<大学が地域の課題解決に取り組む意義・効果>

- ◎大学が地域の再生・活性化に貢献
- 大学が地域の課題をより直視 → 教育研究の活性化
- 学生が地域の課題解決に参画 → 学生の実践力育成

2. 事業のねらい

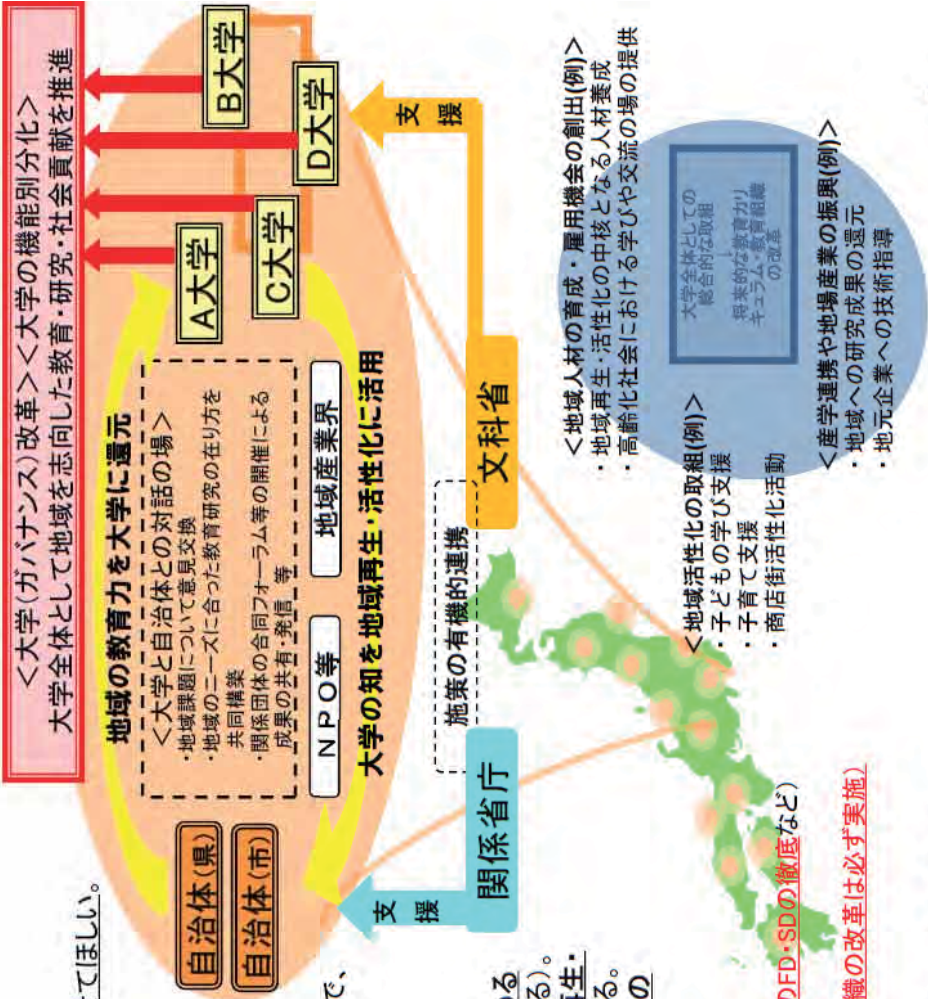
- 全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を進める大学を支援することで、
→学長のリーダーシップの下、大学のガバナンス改革を推進
→各大学の強みを活かした大学の機能別分化を推進

3. 支援対象と目標

- ・自治体等と連携し、全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を進める大学(短大・高専を含む)が対象(自治体・大学ともに、複数・単独があり得る)。
- ・学内組織が有機的に連携し、「地域のための大学」として全学的に地域再生・活性化に取り組む、将来的に教育カリキュラム・教育組織の改革につなげる。
- ・地域の課題(ニーズ)と大学の資源(シーズ)のマッチングや自治体・大学の協働による地域振興の取組を進める。

4. 支援条件

- ①全学的な取組としての位置付けを明確化(学則等の位置付け、全教職員へのFD・SDの徹底など)
- ②大学の教育研究と一体となった取組
(全学生が在学中に一科目は地域志向科目を履修する教育カリキュラム・教育組織の改革は必ず実施)
- ③大学と自治体が組織的・実質的に協力(協定、対話の場の設定など)
- ④これまでの地域との連携の実績
- ⑤自治体からの支援の徹底 - マッチングファンド方式- (財政支援、建物無償貸与、人員派遣など)



【事業概要】

日本文理大学における地（知）の拠点整備事業「豊かな心と専門的課題解決力を持つおおいた地域創生人材の育成」は、本学の建学の精神である「産学一致」に「人間力の育成」「社会・地域貢献」を加えた教育理念に基づき実績を上げてきた産業界・地域社会を意識した実践活動を主体とした全学での人間力教育をベースとして、地域課題である少子高齢社会を豊かに乗り切るために必要な豊かな心と専門的課題解決力を兼ね備える「地域創生人材」育成へ発展させ、これを地域との実践的協働活動により実現する事業である。県内の少子高齢化が深刻である地域での「体験交流活動」「課題解決に必要な知識の修得」「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」を可能とする教育カリキュラム体系への全学的な再編と社会貢献活動との有機的な接続、それに基づく研究プロジェクト活動の推進を実現する地（知）の拠点改革を実現し、地域力の向上につなげるものである。

【目的】

本事業の全体の目的は、地域課題である少子高齢社会を豊かに乗り切るために必要な豊かな心と専門的課題解決力を兼ね備える「地域創生人材」を育成することであり、具体的には、以下の通りである。

I. 教育

大分県内の少子高齢化が深刻であり、本学から30分圏内の大分市佐賀関地区及び1時間圏内の豊後大野市での「体験交流活動」＋「課題解決に必要な知識の修得」＋「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」を学修のサイクルとした教育体系に再編、確立する。また、これらの学修サイクルにおいて、学部、学科横断型の教育カリキュラム体系（副専攻制度）、連携ゼミ活動を可能とする体制を合わせて確立する。さらには、正課外学習活動も本学における人材育成（ディプロマポリシー）においては重要な役割を果たすことから、大分の豊かな自然を活用した教育・社会貢献活動である「大分チャレンジアワード」制度を正課外プログラムとして創設する。以上の取り組みにより、地域を志向した教育カリキュラム体系への全学的な再編を実現し、地域創生人材を輩出する。

II. 研究

本学の限られた研究資源（人材、研究時間）の中で、地域の課題を効率的かつ実践的に解決でき、地域に直接還元できる組織づくりを「産学官民連携推進センター」を窓口として完成させる。地域ニーズに対応できるよう大学が持つシーズをチームプロジェクトとして編成し、必要としている企業・地域とのマッチングを図る。これらの取組により、研究プロジェクト活動の推進を実現する地（知）の拠点改革を実現し、地域の課題解決につなげる。

III. 社会貢献

学生の正課活動と正課外活動をリンクさせ、県民と学生の協働学習・協働実践が実現しやすい環境を整え、学生ボランティア活動がさらに有効なものとなるように発展させる。また、地域貢献活動や公開講座を拡充し、行政と連携し、「地域創生人材」育成のための「県民参画講座」を開講する。これらの取組により、地域との実践的協働活動の体制を実現し、地域再生・活性化を推進する。

IV. 全体

以上の取組を統括し、学長のリーダーシップのもと、教育改革・改善の調整・推進にあたる学長室を有効に機能させる。学内の全学部・学科及びセンター・部局の連携を促進、調整するほか、「自治体」「地域住民」「地域企業」「関係財団・NPO」等のステークホルダーとの横の連携を強化し、本事業目的を実現するためのそれぞれの強みを活かした「実践的協働学習体制」を構築し、地域を志向した教育カリキュラム体系への全学的な再編と社会貢献活動との有機的な接続、それに基づく研究プロジェクト活動の推進を実現する地（知）の拠点改革、ガバナンス改革を実現する。

【平成26年度事業計画】

I. 教育

- ① 9～3月 時間割における「実践型教育実施枠」の確保、地域づくり副専攻の開設
- ② 9～3月 正課教育における「体験交流活動」、ゼミ活動における「課題解決型学修」の試行
- ③ 9～3月 大分をフィールドとした正課外活動の場の増加、「大分チャレンジアワード」の試行
(大分市佐賀関地区での活動：②③共通)
 - ・1次体験活動（農業漁業）、海岸等の環境保全活動、防犯ボランティア活動
 - ・商店街での地域活性化活動の実践
 - ・NPOの経営支援
 - ・さかのせきローカルデザイン会議の拡充及び定期的な実施（学生と地域の意見交換）
(豊後大野市での活動：②③共通)
 - ・1次体験活動（林業）、集落におけるコミュニティ維持活動（福祉支援活動）
 - ・エコパークに関連した観光資源発掘活動
 - ・学生グリーンツーリズム協会の設立準備

II. 研究

- ④ 9～3月 産学官民連携推進センターが中心となり、地域研究のシーズとニーズを調査、整理
- ⑤ 10月 地域志向プロジェクト研究の学内公募、採択
- ⑥ 10～3月 地域志向プロジェクト研究の実施

III. 社会貢献

- ⑦ 12～2月 未来志向型の市民対象公開講座「大分学・大分楽」の実施
- ⑧ 1～2月 地域企業向け地域創生人材講座の実施

IV. 全体

- ⑨ 9～3月 学長室に事業推進ワーキンググループ（WG）を設置、事業推進・統括
(各科目の教育内容・ゼミ活動内容の精査、実践教育推進のための体制整理、「大分チャレンジアワード」の制度設計、次年度実施の地域志向科目内容の確認)
- ⑩ 9月 事務補佐職員1名の採用
- ⑪ 10月 地域志向活動推進のためのアクティブラーニング設備の充実
- ⑫ 10月 特任教員（地域コーディネータ）1名の採用
- ⑬ 10月 連携推進会議の開催
- ⑭ 11月 事業パンフレット・ホームページの制作・公表、シンポジウムの開催
- ⑮ 12月 本学の地域貢献度、地域ニーズを把握する県民アンケート調査の実施
- ⑯ 2～3月 地域志向活動推進のためのFD/S D研修会の実施
- ⑰ 2～3月 事業検討・評価委員会の開催・年次成果報告書の発行

【平成27年度事業計画】

I. 教育

- ① 4月 教養基礎科目である「大分学・大分楽」を必修化
- ② 4～3月 正課教育における「体験交流活動」「課題解決に必要な知識の修得」「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」を学修サイクル体系として試行
- ③ 4～3月 大分をフィールドとした正課外活動の場の増加、「大分チャレンジアワード」の本格運用
(大分市佐賀関地区周辺での活動：②③共通)
 - ・学生地域活動拠点の開設、運営
 - ・前年度試行した1次体験活動（農業漁業）、海岸等の環境保全活動、防犯ボランティア活動、NPOの経営支援の本格実施
 - ・前年度確立した学生と地域の意見交換の場である「さかのせきローカルデザイン会議」の定期的な実施
 - ・地域コミュニティの活性化活動（福祉活動、地域づくり活動、商店街活動）、地域支援ものづくりの本格実施
 - ・商店街組合・NPO・商工会との連携による職業体験活動
 - ・総合型地域スポーツクラブの支援活動の試行
(豊後大野市での活動：②③共通)
 - ・学生グリーンツーリズム協会(エコパークの観光資源発信活動)の設立、拠点の開設、運営
 - ・前年度試行した1次体験活動（農林業）、集落におけるコミュニティ維持活動の本格実施
 - ・高齢者向け学生IT講習会の実施
 - ・6次化活動体験、地域でのサービスラーニング体験活動、地域支援ものづくりの本格実施
 - ・課題解決型学修による集落コミュニティ活性化活動

II. 研究等

- ④ 4～5月 地域志向プロジェクト研究の学内公募、採択
- ⑤ 5～3月 地域志向プロジェクト研究の実施

III. 社会貢献

- ⑥ 9月 ジオ・エコパーク活用のための地域住民向け講習会の実施
- ⑦ 11～12月 未来志向型の市民対象公開講座「大分学・大分楽」の実施
- ⑧ 1～2月 実践を伴う地域企業向け地域創生人材講座の実施

IV. 全体

- ⑨ 4～3月 学長室（事業推進WG）による事業推進・統括・情報発信
- ⑩ 4月 事務補佐職員1名の追加採用
- ⑪ 4月・1月 学生能力アセスメントテスト（nEQ、PROG）の実施、専門的課題解決力アセスメントの開発・試行
- ⑫ 5月・10月 連携自治体との連携推進会議の開催
- ⑬ 9月・3月 地域志向活動推進のためのFD/SD研修会の実施
- ⑭ 11月 大学COC事業合同フォーラムの開催（県内COC事業採択校である大分県立看護科学大学と合同開催）
- ⑮ 2月 学修成果・地域志向研究成果発表会の対象地域での開催
- ⑯ 3月 事業検討・評価委員会の開催、年次成果報告書の発行

【平成28年度事業計画】

I. 教育

- ① 4～3月 正課教育における「体験交流活動」「課題解決に必要な知識の修得」「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」の学修サイクル体系の確立に向けたカリキュラム内容の再調整、試行と本格運用
- ② 4～3月 大分をフィールドとした正課外活動の場の増加、「大分チャレンジアワード」の運用（大分市佐賀関地区周辺での活動：①②共通）
- ・学生地域活動拠点の運営（2箇所、関地区および木佐上地区）
 - ・以下の前年度までの教育活動の内容を見直し、活動を改善、充実させる
 - ・1次体験活動（農業漁業）、海岸等の環境保全活動、防犯ボランティア活動、NPOの経営支援の実施
 - ・学生と地域の意見交換の場である「さがのせきローカルデザイン会議」の定期的な実施
 - ・地域コミュニティの活性化活動（福祉活動、地域づくり活動、商店街活動）、地域支援ものづくりの実施
 - ・高齢者向け学生IT講習会の実施
 - ・総合型地域スポーツクラブの支援活動
 - ・前年度までの活動に加え、以下の活動を試行、実施する
 - ・課題解決型学修によるものづくり成果の還元活動
 - ・課題解決型学修による6次化活動にむけた本格調査の開始（豊後大野市での活動：①②共通）
 - ・学生ツーリズムのための学生地域活動拠点の運営
 - ・以下の前年度までの教育活動の内容を見直し、活動を改善、充実させる
 - ・1次体験活動（農林業）、集落におけるコミュニティ維持活動
 - ・地域でのサービスラーニング体験活動（観光・コミュニティビジネス・福祉支援等）、地域支援ものづくりの実施
 - ・課題解決型学修による集落コミュニティ活性化活動
 - ・前年度までの活動に加え、以下の活動を試行、実施する
 - ・エコパーク等学生ガイドの育成に向けた取り組み
 - ・課題解決型学修によるものづくり、コミュニティビジネス成果の還元活動
 - ・課題解決型学修による6次化活動にむけた本格調査の開始

II. 研究

- ③ 4～5月 地域志向プロジェクト研究の学内公募、採択
- ④ 6～3月 地域志向プロジェクト研究の実施
- ⑤ 3月 学内紀要の地域創生特集号発行

III. 社会貢献

- ⑥ 4～3月 地域創生リーダー制度のシステム（履修証明制度）の整備、試験運用
- ⑦ 6～2月 エコパーク等に関連した近隣住民の知識を深めるためのワークショップ講座開講
- ⑧ 8～12月 外来生物駆除等のための地域住民向け講習会の実施
- ⑨ 9～3月 地元企業の大分CSRプログラムの検討、実施（大分のニーズに合ったCSRの提案）
- ⑩ 11～12月 未来志向型の県民対象公開講座「豊後大野里の旅観光」「大分学・大分楽」の実施
- ⑪ 4～3月 実践を伴う地域企業向け地域創生人材講座の実施

IV. 全体

- ⑫ 4～3月 学長室（事業推進WG）による事業推進・統括・情報発信
- ⑬ 4月、2月 学生能力アセスメントテスト（nEQ、PROG）の実施、専門的課題解決力アセスメントの開発・試行
- ⑭ 5月、10月 連携自治体との連携推進会議の開催
- ⑮ 3月 地域志向活動推進のためのFD/SD研修会の実施
- ⑯ 9月 九州地区COC採択校「学生発表交流会」の実施
- ⑰ 8～9月 本学の地域貢献度、地域ニーズを把握する県民アンケート中間調査の実施
- ⑱ 8月 中間事業成果パンフレットの制作・公表
- ⑲ 2月 大学COC事業合同シンポジウムの開催（県内COC採択校である大分県立看護科学大学と合同開催）
- ⑳ 2月 学修成果・地域志向プロジェクト研究成果発表会の対象地域での開催
- ㉑ 3月 外部評価委員会の開催、年次成果報告書の発行

【平成29年度事業計画】

I. 教育

- ① 4～3月 正課教育における「体験交流活動」「課題解決に必要な知識の修得」「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」の学修サイクルの取り組みを実施し、学修サイクル体系の拡充化
- ② 4～3月 大分をフィールドとした正課外活動の場の増加を図り、「大分チャレンジアワード」を運用
(大分市佐賀関地区周辺での活動：①②共通)
- ・学生地域活動拠点の運営(2箇所、関地区および木佐上地区)
 - ・以下の前年度までの教育活動の内容を見直し、活動を改善、充実化
 - ・1次産業体験活動(農業漁業)、海岸等の環境保全活動、防犯ボランティア活動、NPOの経営支援の実施
 - ・学生と地域の意見交換の場である「さかのせきローカルデザイン会議」の定期的な実施
 - ・地域コミュニティの活性化活動(福祉活動、地域づくり活動、商店街活動)
 - ・課題解決型学修による地域支援ものづくりの実施及び成果の還元活動
 - ・高齢者向け学生IT講習会の実施
 - ・総合型地域スポーツクラブの支援活動の実施
 - ・課題解決型学修による6次化活動
- (豊後大野市での活動：①②共通)
- ・学生ツーリズム等のための学生地域活動拠点の運営
 - ・以下の前年度までの教育活動の内容を見直し、活動を改善、充実化
 - ・1次産業体験活動(農林業)、集落・地域におけるコミュニティ維持活動
 - ・地域でのサービスラーニング体験活動(観光・コミュニティビジネス・福祉支援等)
 - ・課題解決型学修による地域支援ものづくり、コミュニティビジネスの実施及び成果の還元活動
 - ・課題解決型学修による集落コミュニティ活性化活動
 - ・エコパーク等学生ガイドの育成及び課題解決型学修によるエコパーク構想の取り組み実施

II. 研究

- ③ 4～5月 地域志向プロジェクト研究の学内公募、採択
- ④ 5～3月 地域志向プロジェクト研究の実施

III. 社会貢献

- ⑤ 4～3月 地域人・社会人向けの地域創生リーダー養成制度のシステム(履修証明制度)の試験運用を実施
- ⑥ 6～2月 エコパーク、外来生物除去等に関連した地域住民の知識を深めるワークショップ講座、ツアーの実施
- ⑦ 6～2月 事業協働機関と連携して、実践を伴う地域人・企業向け地域創生人材講座の実施
- ⑧ 6～3月 地元企業の大分CSRプログラムとして、大学・学生と企業が協働した地域の子ども向け講座の企画、実施(大分のニーズに合ったCSRの提案)
- ⑨ 11～2月 未来志向型の県民対象公開講座「大分学・大分楽」の実施

IV. 全体

- ⑩ 4～3月 学長室(事業推進WG)による事業推進・統括・情報発信を実施し、全学での事業展開化
- ⑪ 4月、2月 学生のジェネリックスキルの向上を計測する学生能力アセスメントテスト(nEQ、PROG)と専門的課題解決力の向上を計測するアセスメントを連携して実施し、地域創生人材としての能力を体系的に測定する方法を試行
- ⑫ 5月、10月 連携自治体との連携推進会議を開催
- ⑬ 2月 学修成果・地域志向プロジェクト研究等の取り組み成果の発表報告会を連携・関係機関と共同で、それぞれの対象地域において開催
- ⑭ 3月 地域志向活動推進のためのFD/S D研修会を実施
- ⑮ 3月 年次成果報告書を発行、配布し、地域や関係機関に広く取組成果を周知
- ⑯ 3月 外部評価委員会を開催し、本年度の取り組みに対する評価の実施

【平成30年度事業計画】

I. 教育

- ① 4月～3月 正課教育における「体験交流活動」「課題解決に必要な知識の修得」「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」の学修サイクル体系を完成させる。
- ② 4月～3月 大分をフィールドとした正課外活動の場の増加を図り、「大分チャレンジアワード」を安定運用する。
- (大分市佐賀関地区周辺での活動：①②共通)
- ・学生地域活動拠点の運営（2箇所、関地区および木佐上地区）
 - ・以下の前年度までの活動の完全履行、完成
 - ・1次産業体験活動（農業漁業）、海岸等の環境保全活動、防犯ボランティア活動、NPOの経営支援の実施
 - ・学生と地域の意見交換の場である「さかのせきローカルデザイン会議」の定期的な実施
 - ・地域コミュニティの活性化活動（福祉活動、地域づくり活動、商店街活動）
 - ・課題解決型学修による地域支援ものづくりの実施及び成果の還元活動
 - ・高齢者向け学生IT講習会の実施
 - ・総合型地域スポーツクラブの支援活動の実施
 - ・課題解決型学修による6次化活動・交流人口の拡大
- (豊後大野市での活動：①②共通)
- ・学生ツーリズム等のための学生地域活動拠点の運営
 - ・以下の前年度までの活動の完全履行、完成
 - ・1次産業体験活動（農林業）、集落・地域におけるコミュニティ維持活動
 - ・地域でのサービスラーニング体験活動（観光・コミュニティビジネス・福祉支援等）
 - ・課題解決型学修による地域支援ものづくり、コミュニティビジネスの実施及び成果の還元活動
 - ・課題解決型学修による集落コミュニティ活性化活動
 - ・地域資源等に関する学生ガイドの育成及び課題解決型学修による地域資源を活かした地域活性化の取り組み実施

II. 研究

- ③ 4月～5月 地域志向プロジェクト研究の学内公募を実施し、採択する。
- ④ 5月～3月 地域志向プロジェクト研究を実施し、これまでの成果とあわせて、教育、地域へ還元する。

III. 社会貢献

- ⑤ 4月～3月 地域人・社会人向けの地域創生リーダー養成制度のシステム（履修証明制度）を確立、実施する。
- ⑥ 6月～2月 エコパーク、外来生物駆除等に関連した地域住民の知識を深めるワークショップ講座、ツアーを実施する
- ⑦ 6月～2月 事業協働機関と連携して、実践を伴う地域人・企業向け地域創生人材講座を実施する。
- ⑧ 6月～3月 地元企業の大分CSRプログラムとして、大学・学生と企業が協働した地域の子ども向け講座を企画、実施する（大分のニーズに合ったCSRの提案）。
- ⑨ 11月～2月 未来志向型の県民対象公開講座「大分学・大分楽」を実施する。

IV. 全体

- ⑩ 4月～3月 学長室（事業推進WG）による事業推進・統括・情報発信を実施し、全学での事業展開、地（知）の拠点を確立する。あわせて、事業終了後の継続について関係機関と協議する。
- ⑪ 4月・2月 学生のジェネリックスキルの向上を計測する学生能力アセスメントテスト（nEQ、PROG）と専門的課題解決力の向上を計測するアセスメントを連携して実施し、地域創生人材としての能力を体系的に測定する方法を確立する。
- ⑫ 6月・11月 連携自治体との連携推進会議を開催する。
- ⑬ 9月 地域志向活動推進・定着のためのFD/SD研修会を実施する。
- ⑭ 12月 本学の地域貢献度等を把握する県民アンケート調査を実施する。
- ⑮ 2月 学修成果・地域志向プロジェクト研究等の成果及び本事業全体の成果についての発表報告会を連携・関係機関と共同で、それぞれの対象地域において開催する。
- ⑯ 3月 事業成果報告書を発行、配布し、地域や関係機関に広く取組成果を周知する。
- ⑰ 3月 外部評価委員会を開催し、本年度及び本事業全体の取り組みに対する評価を受ける。あわせて、取り組みの自律化に向けた体制を確認する。

日本文理大学COC事業

『豊かな心と専門的課題解決力を持つおおいた地域創生人材の育成』

NBUが大分で育む、豊かな心と地域愛。

体感。感動。感謝。

おおいた、つくりびと

事業概要

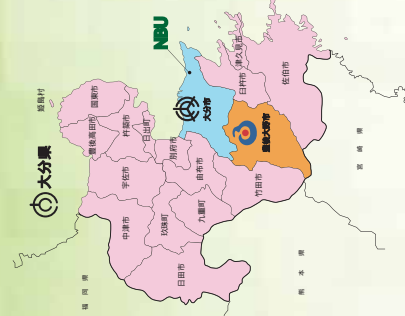
本事業の目的は、大分県の地域課題である少子高齢社会を豊かに乗り切るために必要な豊かな心と専門的課題解決力を兼ね備える「地域創生人材」を「おおいた、つくりびと」を育成することである。

【教育分野】 大分県内の少子高齢化が深刻な地域を主な対象に「体験交流活動」「課題解決に必要な知識の修得」「ステークホルダーとの協働による課題解決型学習」の学修サイクルによる教育体系を確立し、地域創生人材の輩出をはかる。

【研究分野】 地域課題を効率的かつ実践的に解決でき、地域に直接還元できる組織づくりを完成させ、地域の課題解決につなげる。

【社会貢献】 県民と学生の協働学習・協働実践が実現しやすい環境を整え、ともに、行政と連携した「県民参画講座」を開講し、地域再生・活性化を推進する。以上の各分野の取り組みを通じて、地域を志向した教育カリキュラム体系への全学的な再編を行うことで、教育分野と社会貢献活動との有機的な接続と、それに基づき研究プロジェクト活動の推進を実現する「地(知)の拠点」を形成する。本事業は2014年度文部科学省「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」に選定され、5年間の事業として推進してきた。今後は本事業で培ってきた基盤をもとに事業の継続を図るとともに、『地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)』内での先導役として、県内大学等と積極的な連携を行う。

連携自治体



『おおいた、つくりびと』が取り組む
地域再生・活性化7つの視点

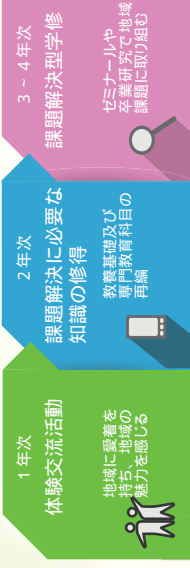
- 1 小規模・高齢化が深刻な集落・地域コミュニティの維持・活性
- 2 人口減少社会を支えるための先進的な“ものづくり”
- 3 自然の積極的な活用による保全と地域活性(観光・教育)
- 4 地域商店・商店街の活性化による地域振興
- 5 健康増進・生活支援によるコミュニティの維持
- 6 NPO法人の活動・経営支援
- 7 地域ブランドの発掘による交流人口の増加・産業の活性化(6次化)

豊かな自然と歴史や文化を大切に守り続ける、素晴らしい大分県が、私たちのキャンパスです。

教育 × 体感 × 感動 × 感謝

「主体的な学びのスタイルへ」
地域への愛着を持ち、主体的に課題を発見し、専門的なスキルを活用して住民や関係者とともに、地域の課題解決に取り組むことができる人材を育成するために必要な力をつける学修サイクルを確立。

「地域創生人材」育成のための学修サイクル



教育 × 研究 × 社会貢献



4 地域商店・商店街の活性化による地域振興

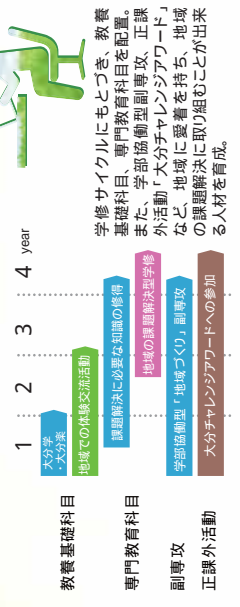
2018年度：7プロジェクト、累計：9プロジェクト

三重町市場ストリート「絵本バレット」における地域振興活動(連携自治体：豊後大野市)
豊後大野市三重町市場通りにおける国民文化祭・おおいた2018応援事業「絵本バレット」において、来場者がわくわくどきどきするよう学生目線ならではの制作物を商店街に制作、設置した。建築学科では、麻生家井戸や山頭火湧水などのノンタポイントをインスタポイントをインスタ映えするスポットに裝飾等することで誘客をもちました。また、経営経済学科では、「豊後大野レール館」を空き店舗を活用して「豊後大野レール館」を開館した。これらの成果を当地で開催された「ものがたり観光行動学会」で発表した。



【その他の主なプロジェクト】
・学芸連携による「地域創生人材」の育成講座
・地域企業向け「地域創生人材」酒造のための管理能力向上講座
・中津市中心部における地域の魅力発掘と課題解決プロジェクト
・おおいた地域創生リーダー養成講座 in 佐伯

カリキュラムフロー



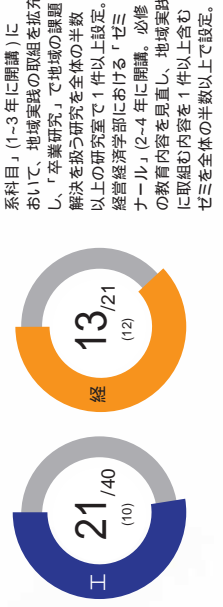
地域志向科目数 (2018年度実績)



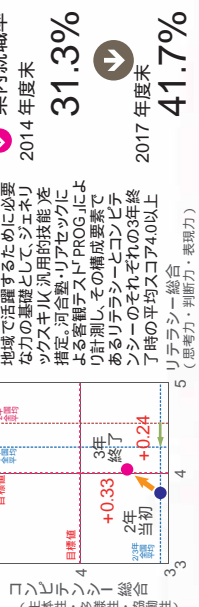
ステークホルダーとの協働による課題解決型学修科目

- 地域での体験交流活動を教育内容に含む科目
- 地域における課題解決に必要な知識を修得する科目

地域志向のゼミ活動状況 (2018年度実績)【最終年度達成目標】



ジェネリックスキル (汎用的技能) の成長 (現3年生)



QR ACCESS



coc-nbu.jp

T: 870-0397 大分県大分市一本1727
Tel: 097-592-1600 (大代表)
Web: <http://www.nbu.ac.jp>

【COO事業】
Tel / Fax : 097-524-2663 (直通)
Web : <http://coc-nbu.jp>
e-mail : coc@nbu.ac.jp

NBU 日本文理大学

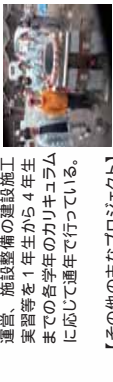
1 小規模・高齢化が深刻な集落・地域コミュニティの維持・活性化

2018年度：14プロジェクト、累計：17プロジェクト (連携自治体：豊後大野市)

豊後大野市大野町士師地区における住民と学生による地域コミュニティ維持活動
(連携自治体：豊後大野市)

市内で最も高齢化が進む集落の一つである士師地区において、住民の協力を得た農業や環境整備体験、地域インテンションワークショップ交流拠点である「ふるさと体験村」の開村式の運営、施設整備の建設施工実習等を1年生から4年生までの各学年のカリキュラムに対応して行っている。

【その他の主なプロジェクト】
・大分市木上「まなび庵」IT講習会
・佐賀県半島における地域体験交流活動研修
・中井田駅を中心とするまちづくりプロジェクト



2 人口減少社会を支えるための先進的な「ものづくり」

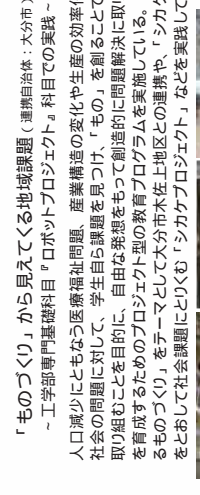
2018年度：4プロジェクト、累計：11プロジェクト (連携自治体：大分市)

「ものづくり」から見える地域課題
(連携自治体：大分市)

- 工学部専門基礎科目「ロボットプロジェクト」科目での実践

人口減少にもとまなう医療福祉問題、産業構造の変化や生産の効率化など様々な社会の問題に対して、学生自ら課題を見つけ、「もの」を創ることで課題解決に取り組むことを目的に、自由な発想をもった創造的に問題解決に取り組める人材を育成するためのプロジェクト型の教育プログラムを実施している。「地域に生きるものづくり」をテーマとして大分市木上地区との連携や、「シカケ(仕掛け)」をとおして社会課題に取り組む「シカケプロジェクト」などを実践している。

【その他の主なプロジェクト】
・生かしのある暮らしを創るオープンイノベーションワークショップ
・マイクログリッド風車を用いたIoT統合プラットフォーム拠点事業



3 自然の積極的な活用による保全と地域活性化(観光・教育)

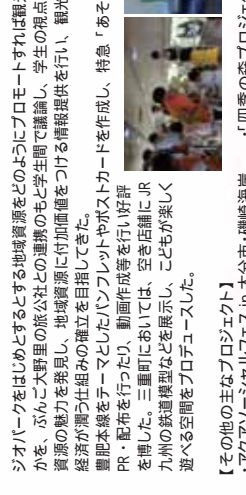
2018年度：6プロジェクト、累計：13プロジェクト (連携自治体：豊後大野市)

地域資源を活用した地域観光プロモーション活動プロジェクト
(連携自治体：豊後大野市)

ジオパークをはじめとする地域資源をどのようにプロモートすれば観光客呼び込めるかを、ぶんご大野市の旅社と連携のもと学生間で議論し、学生の視点に立て、地域の魅力を発見し、地域資源に付加価値をつける情報発信を行い、観光客が訪れ、地域経済が潤う仕組みの確立を目指してきた。

豊肥本線をテーマとしたパンフレットやポストカードを作成し、特急「あそぼーい」等でのPR・配布を行った。動画作成等を行い好評を得た。三重町においては、空き店舗にJR九州の鉄道模型などを展示し、こどもが楽しく遊べる空間をプロデュースした。

【その他の主なプロジェクト】
・アクスン・シラールエス in 大分市・磯崎海岸
・「四季の森プロジェクト」による環境保全の取り組み
・外来生物駆除等に関する市民・学生の普及活動「最新の研究による地域の宝物」中津干潟の現在と将来



5 健康増進・生活支援によるコミュニティの維持

2018年度：5プロジェクト、累計：10プロジェクト (連携自治体：豊後大野市)

総合型地域スポーツクラブの教室・イベントを通じた教育実践活動
(連携自治体：大分市)

本学の地元・大分地区にある総合型地域スポーツクラブ「OZAI元氣クラブ」は会員数が増え、幅広い年齢層の参加者が地域での「居場所づくり」として活動が展開できる。球技協働で機能訓練や認知症予防等の取組を実施するとともに、参加者の生きがいづくりに地域貢献・役割の創出につながるような取組を検討しながら実践している。

【その他の主なプロジェクト】
・豊後大野市内の小規模中学校における予防的心理教育プログラムの展開
・大学で楽しく学ぶ小学生対象NBU体験教室「地域住民を主体とした地域づくりによる介護予防研究



6 NPO法人の活動・経営支援

2018年度：1プロジェクト、累計：1プロジェクト (連携自治体：大分市)

地域活性化プロジェクト「菜・菜マルシェ」の取り組み
(連携自治体：大分市)

旧佐賀県中津郡であった佐賀県南地区に人口4,828人に対し、高齢化率が55.7%とされている(2015年度国勢調査)。地域コミュニティの維持が課題となっており、現地のNPO法人などが多彩な活動を行っている。毎月第四土曜日に、開会し開き曜日の中心にある佐賀県交番前広場において、地域交流イベント「菜・菜マルシェ」を開催しており、今年度も6周年を迎えた。近年では津久見高校「つくみ蔵」の売店も不定期でなされるなど、高齢者の参画による新たな活気がもたらされている。マルシェの開催にあたって、マーケティングの分析を行ったり、NPO法人の経営分析や決算支援業務などの活動にも取り組んでいる。



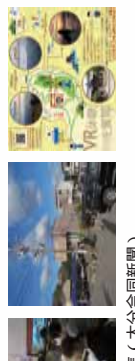
7 地域ブランドの発信による交流人口の増加・産業の活性化(6次化)

2018年度：6プロジェクト、累計：9プロジェクト (連携自治体：豊後大野市)

大分市佐賀県半島の地域課題解決を目指す「せき」がせきローカルデザイン会議」の取り組み
(連携自治体：豊後大野市)

街全体が急速に高齢化する佐賀県は、「まち」としての元気を失いつつある。しかしながら、佐賀県には「熊あじ」開き、以外にも、坂本龍馬らが九州初上陸した際に立ち寄った徳心寺といった歴史建造物や、開港場星屋・開港灯台周辺の佐賀県半島の自然といった地域資源がある。そこで、佐賀県半島、閉鎖的な地域課題解決を目指すための、学生と地域のNPOや団体との協働コミュニティである「せき」がせきローカルデザイン会議」を結成し、様々な活動を続けている。昨年度からは佐賀県半島の地域資源を活かした交流人口拡大への取り組みとして、国道九四四エリーの利用者を主なターゲットとした交流人口拡大社会実験の調査・企画を行っており、本年度のアンケートと年末の裏化期した。地魚を使用したブリカサツに連携マルシェを佐賀県津久見にて実施した。地魚を使用したブリカサツの販売や佐賀県半島の観光 VR 体験等の企画を実施した。

【その他の主なプロジェクト】
・動画・COO制作「地域の芽、学生の目NBUビデオ通信(大分合同開講)」
・COO+協働開発「地域・学生による地域ブランド創造体験」による6次化への取り組み(国東市)



『おあいた、つくりびと』について

詳しくは、これまでの年次報告書 (<http://coc-nbu.jp/annual-report>) で公開

私たちは、このプロジェクトを『おあいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけでは、はかることができない「ほんとの豊かさ」とは何だろう。日本の未来を担う若者ができることは？ さつと、その答えはひとつではありません。だからこそ今、私たちは動き始めます。そのストーリーは、私たちの大学がある大分県、大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかと元気をまちなちをつくりたい。私たちが大分県の未来を拓く『おあいた、つくりびと』になりました。



おあいた、つくりびと

日本文理大学 地（知）の拠点整備事業（大学 COC 事業）
平成 27 年度 事業検討・評価委員会 外部委員 事業評価報告書

平成 28 年 3 月 28 日

日本文理大学 大学 COC 事業

事業検討・評価委員会

日本文理大学は、文部科学省「地（知）の拠点整備事業」に平成 26 年度に選定され、事業を推進している。事業プログラムの実施状況や成果、年次計画等について各年度末に全体的な検討・評価を行うとともに、事業の効果的な実施の確認と必要に応じた改善指示を行い、もって事業の適切な推進に寄与することを目的に、「事業検討・評価委員会」を設置している。

平成 27 年度の委員会を平成 28 年 3 月 28 日に開催し、年次報告書、取り組み状況報告及び意見交換の結果に基づき、外部委員 8 名から「事業全体」「教育」「研究」「社会貢献」について、以下の評価を得た。

評価基準： S:特筆すべき進捗が見られる。

A：順調に進んでいる。

B:やや順調に進んでいる。

C:やや遅れている。

D:遅れている・未実施

（総合評価、事業評価については、各委員の評価をもとに(別紙)にもとづいて判定を行う。）

【事業全体 総合評価】

総合評価： A

- 概ね順調に進んでいる。取組の継続に向け、分かりやすい成果が必要である。
- 「熱意なくして、成し遂げられた偉業は今だかつてない」と云われている。正に日本文理大学の COC 事業には、学長を始めとする教授、職員の熱意が伝わってくる。学生も、その熱意によって動きが活発である。本市では、日本文理大学に元気をもたらしている。感謝
- 教育、研究、社会貢献ともに全学的な取り組みに成功しており、プロジェクトの数と多様さ、参加学生の数、科目の数など申し分のない進捗が見られる。
- COC 事業への全学を挙げた体制によって、さらなる事業展開が計られていくことが期待できます。
- 継続する中で、地元企業の評価の向上、OB、OG ネットワーク強化につながることを期待したい。
- 地域に出ることによりまず人間力が UP してきています。このことが基本となり地域生活についてより深く考え地域課題を実践行動の中から理解してきたと思われます。今後はそれぞれの研究課題を有機的に繋ぎ総合的に地域課題を解決する為の提案ができるようになっていただきたいと思います。

- 大分県立看護科学大学との成果発表会&合同シンポジウムも多くの来場者に取り組みを見せることができ素晴らしかったと思う。他大学の学生活動も盛んで、地域のイベント行事に学生が参加支援することが当たり前になりつつある中で、COC事業として今後どの地域と連携するのか興味がある。例えば私たちNPOと地域が課題解決していきたい時に、COC事業を誘致したいということになれば可能なのか。短期のインターン的なことから長期の地域支援と学生育成をかみあわせて提案ができればと思う。

委員評価：S（1）、A（7）、B（0）、C（0）、D（0）

教育・研究・社会貢献 各事業評価

【教育事業評価】

事業評価： A

- 地域志向科目数に関して目標値を大幅に上回って達成するなど、全学的な取組の成果が表れている。
- 教養基礎科目である「大分学・大分楽」を必修化とするなど、教授と職員が一体となった集団指導体制ができています。地域密着型の大学、地域に必要とされる大学を目指している姿が良く見てとれる。学生も頑張っている。受け入れ自治体として大変ありがたい。
- 正課教育における座学と体験活動、正課外教育における体験活動など多様なバリエーションが用意されており、正課教育の科目数を見ても全学的な特筆すべき進捗が見られる。
- 地域課題の解決というテーマにより、学生たちに使命感や責任感が生じ、内面的な成長や学びへの動機付けとなっている。
- 地域との実践的協働活動の具体的内容、取組状況とも、地域の視点から高く評価できる。
- 学内教育から地域にでることにより、自然科学、コミュニケーション力、現状認識による問題提起、問題解決力等の総合実践の場ができたと思います。
- いろんなテーマに応じたプロジェクト毎に様々なプログラムが行われている中で、同じ学生チームが多くプログラムに関係しているのが見られた。大学全体の学生が様々なプログラムにかかわり、地域との連携や課題解決の体験をしていくかが課題かと思われる。プロジェクトに関わった学生は、地域との接触でコミュニケーション能力や柔軟な適応力が身につけてきていると感じる場面が多くあった。

委員評価：S（1）、A（7）、B（0）、C（0）、D（0）

【研究事業評価】

事業評価： A

- 地域との共同研究を行う教員数が目標を上回っている。
- 本市の土師地区では、防災と生物多様性回復の研究、全市的には、高齢者の徘徊時の解析画像の研究、プラズマの化学反応を応用した農業の可能性の研究など、各分野での研究が真剣に行われている。

- 共同研究が目立ち、ここからも全学一致での取り組みがうかがえる。今後は、とくに学会誌などへの投稿による全国的な波及効果を期待したい。
- 年度を重ねることによる研究の深まり、拡がり期待できます。
- 研究課題がより現実の状況を認識した上での計画、実行であるためその中からの今後の方向性等が見いだせ、より深い問題意識、現状把握ができるようになったのではないのでしょうか。
- 本来の工学、経済の特徴を活かしつつ、地域福祉のもつ課題解決への研究へ取り組んでいる姿勢が感じられる。すぐには成果や効果が表れにくい部分もあるが、研究継続をしてほしい。

委員評価：S (0)、A (8)、B (0)、C (0)、D (0)

【社会貢献事業評価】

事業評価： A

- 地域向けボランティアの活動数が目標を下回っている。
- 本年2月13日(土)、本市庁舎2階において、NBUチャレンジOITA地域創生活動報告会が開催された。市民も予想を上回る参加があり、全体で約100名の参加となった。学生とりくみ報告で7報告、地域プロジェクト研究発表(教員)で3報告、計10報告となり、3時間を費やしたが、参加者は真剣に聴き入っていた。熱気ある報告会となった。
- 参加学生数、プロジェクトの多様性など、進捗として申し分なく特筆すべき成果を上げている。
- 次年度以降、COC事業の教育・研究の成果と連動した事業がさらに増えることが期待できます。
- 社会貢献と聞くと、ごく一般的な物を考えがちですが、実際の活動内容を聞くと、考えてきたイメージと違った、より広がった社会貢献と考えられ、行動範囲の可能性が出来たのではないのでしょうか。
- 大分市佐賀関地区、豊後大野市など地域との良好な関係もでき、住民の方から学生に対して期待度も高く評価されていること。

委員評価：S (3)、A (4)、B (1)、C (0)、D (0)

事業検討・評価委員会 外部委員 名簿

大分県 企画振興部 部長 廣瀬 祐宏 (代理：審議監 中島 英司)

大分市 商工農政部 部長 吉田 茂樹 (代理：次長 玉野井 雄二)

豊後大野市 副市長 赤嶺 謙二

(一財)日本財団学生ボランティアセンター 理事長 西尾 雄志

(一財)セブン-イレブン記念財団 九重ふるさと自然学校 代表 川野 智美

日本政策投資銀行 大分事務所 所長 武田 浩

大分県中小企業家同友会 代表理事 佐藤 貞一

NPO法人 おおいたNPOデザインセンター 代表理事 山下 莖三

(敬称略)

日本文理大学 地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）
平成28年度 事業検討・評価委員会 事業評価 報告書

平成29年3月30日
日本文理大学 大学COC事業
事業検討・評価委員会

評価基準： S：特筆すべき進捗が見られる。

A：順調に進んでいる。

B：やや順調に進んでいる。

C：やや遅れている。

D：遅れている・未実施

（総合評価、事業評価については、各委員の評価をもとに（別紙）にもとづいて判定を行う。）

【事業全体 総合評価】

総合評価： A

- 概ね順調に進んでいる。今後、地域における取組の広がり（横）と継続性（縦）について、県、市町村の取組を促すとともに、学際的な視点からの課題解決に向けた政策提案なども期待したい。
- 教育、研究、社会貢献すべての項目において、多彩な取組が全学的に推進され地域のための大学としての成果は大きいと思います。今後も柔軟で斬新な発想で行政や関係団体等に積極的な事業提案をされることを期待しています。また、より効果的・効率的な事業を展開するためには事業の再構築等も検討する必要もあると思います。
- 意欲的に活動を展開している。ウィングを広げ過ぎて事業過多になることを心配するが、一年ごとに充実度を増している。
- 学生がプログラム参加を通じて大分を愛するマインドを養い、卒業後に県内就職等を通じて貢献するようになることを願っています。
- 二年目では、多岐にわたり地域との問題点解決のための接点ができたと思われ、後はそれぞれの分野の研究成果にどう互換性を持たせ地域の問題点をまとめ上げるかが、課題になると思われ。来年度の地（知）の拠点の整備事業を楽しみにしております。
- 地域プロジェクト実施で、4年生が1年間関わり続けても、卒業でまた1から関係づくりをしないといけなくなるケースが出てくる。1年生から4年までの学生グループを編成し、プロジェクトにあたっていくと継続性も生まれるし、学生同士で引き継ぎなどしやすくなるのでは。

委員評価：S（1）、A（6）、B（0）、C（0）、D（0）

【教育事業評価】

事業評価： A
<ul style="list-style-type: none"> ● 地域志向科目数が目標 180 に対し 222 科目で、全体の 40 %、ゼミの 60 %となるなど成果をあげているが、副専攻制度、正課外活動の導入が目標に達していない。 ● 学修サイクルの再編、学部・学科横断、学年縦断の教育を通じて、大分に愛着を持った優秀な地域創生人材が育成されていることから、今後も事業の着実な進捗と県内就職率のさらなる向上を期待しています。 ● 正課教育として、1 年生時から「体験交流活動」「課題解決に必要な知識の習得」などをとり入れ、本市では全域で活動展開していただいている。貴大学を挙げた意気込みと学生の真面目な活動は、一年ごとにステップアップしている。 ● 地域創生人材育成のための学修サイクルの確立など、カリキュラムの再編に取り組み、効果が期待できる。 ● 商店街の活性化に関して、これまで実施したプログラムでも十分に教育効果は果たしていると思われるが、中心市街地の活性化には若者の貢献が期待されていることから、今後より積極的に関与されたい。 ● 地域での新しい問題点の発掘を行い、解決方法を探り、発見し、行動する、そして発表することにより、学びの PDCA のサイクルが出来上がっている。 ● 大分市佐賀関など連携地域との体験活動を通じて、さらなる信頼関係も築かれている。年間を通して関わりながら、学生の積極的な意識の向上がみられた。
委員評価：S (2)、A (4)、B (1)、C (0)、D (0)

【研究事業評価】

事業評価： A
<ul style="list-style-type: none"> ● 地域との共同研究を行う教員数が目標に達している。また、積極的に取り組む教員が増えたことが教育項目の地域志向科目数増にもつながっている。 ● 本市では、貴大学との有害鳥獣対策に関する連携事業として、安価で地域住民にも簡単に操作できる IoT を活用したわな検知器と通報システムの開発研究に取り組んでおり、その成果に大いに期待しているところですが、各地域にはそれぞれ特有の課題があります。今後も地域住民との積極的な交流を通じて地域課題を把握し、各専門分野の視点から地域の課題を解決するための住民や企業等との共同研究や活動が進められることを期待しています。 ● 徘徊老人の位置検出システム、見守りシステム、自然エネルギー利用型プラズマ農業の研究、生物多様性回復のための基礎的研究など、様々な課題にチャレンジしている。より完成度が高まることを期待する。 ● 地域との共同研究を行う教員数が着実に増加しており、この点においても全学あげての体制が整いつつあると評価できる。 ● 昨年より多方面にわたり研究開発ができ、地域創成の問題点を複眼的に解析している。 ● 大学本来の事業である研究も、地域課題に直面したテーマに様々な機関と連携して取り組んでいる。
委員評価：S (1)、A (6)、B (0)、C (0)、D (0)

【社会貢献事業評価】

事業評価： A
<ul style="list-style-type: none">● 地域向けボランティアの活動数が目標を上回っている。また、無作為アンケートによる県民の本学に対する本事業分野の地域貢献度の評価が42.1%と目標を大きく上回っている。● 教育活動のほか、学生参加の公開講座、地域での体験活動や地域住民との意見交換などの取組により学生の社会貢献に対する意識が向上していることは高く評価されると思います。● 豊後大野市全域で活動している。市民も日本文理大学の認知度が高くなっている。若者が地域に来て、地区民と話し、交流することに意義がある。価値がある。● 地域で求められているのは、地域活性化のための産業振興や人材育成のために異分野同士のマッチングや多組織からなる協働を取り計らえるコーディネーターであると感じている。そのような人材の育成をプロジェクトの中で進めて頂ければありがたい。● 小学生からお年寄りまで幅広い世代と交流し、様々なプログラムにより地域貢献を果たしている点は高く評価できる。今後は中高生等、更に対象を拡げることが期待したい。● 学生が地域に入ることにより、いろんな効果があったと思うが、何と言っても地域を巻き込み、地域の人たちに希望を与えたことが最高に素晴らしい。● なかなかすぐに結果がみえてこない分野・取り組みだと思います。県内各地の課題に取り組みたいところですが、今行っている活動の対外的な成果も見据え質を上げていってほしい。県内で連携できるNPOとのコーディネートが必要があれば支援したい。
委員評価：S (3)、A (4)、B (0)、C (0)、D (0)

事業検討・評価委員会 学外委員

大分県 企画振興部 部長 廣瀬祐宏

大分市 農林水産部 部長 森本亨

豊後大野市 副市長 赤嶺謙二

(一財)セブン-イレブン記念財団 九重ふるさと自然学校 代表 川野智美

日本政策投資銀行 大分事務所 所長 和田康宏

大分県中小企業家同友会 代表理事 佐藤貞一

NPO法人 おおいたNPOデザインセンター 代表理事 山下莖三

日本文理大学 地（知）の拠点整備事業（大学 COC 事業）
平成 29 年度 事業検討・評価委員会 外部委員 事業評価報告書

平成 30 年 3 月 29 日

日本文理大学 大学 COC 事業

事業検討・評価委員会

評価基準： S:特筆すべき進捗が見られる。

A：順調に進んでいる。

B:やや順調に進んでいる。

C:やや遅れている。

D:遅れている・未実施

(総合評価、事業評価については、各委員の評価をもとに(別紙)にもとづいて判定を行う。)

【事業全体 総合評価】

総合評価： A

- 事業最終年度に向けて概ね順調に進んでいる。引き続き、地域における取組の広がり（横）と継続性（縦）について、県や市町村との連携を図るとともに、学際的な視点からの課題解決に向けた政策提案なども期待したい。
- 順調に進んでいると思われるため「A」評価とした。
- 引き続き取組をお願いしたい。
- 4年間の取り組みを経て構築された COC のスキームが、将来的に COC+や他地域での活動に活かされ、根付くよう、最終年度の取り組みに期待しています。
- 地域課題を理解し課題を見つけて行く事は人材教育には大切であり、参画人数が増えていることについては評価する。目標以上を期待します。
- 関わっている佐賀関地区以外でも、環境系 NPO などから文理大学の学生がよく動いてくれるなど評判が良いという話を聞く。COC の成果と考えられる。

委員評価： S (1)、A (5)、B (0)、C (0)、D (0)

【教育事業評価】

事業評価： A
<ul style="list-style-type: none"> ● 学内の取組において、地域志向科目数（240科目）、地域志向のゼミ活動（59.6%）、正課外活動（72名）が目標を達成したことに加え、学生の進路において、県内就職率が順調に伸び、30年3月卒業の見込みが39.4パーセントと大きく増加していることが評価できる。 一方で、副専攻制度において、目標に達していない点では、取組の改善や指標の取扱いの見直しなど工夫が必要であると考えます。 ● 指標である「地域志向科目数」、「地域志向カリキュラムの再編成」、そして「大分チャレンジアワードの導入」等の項目において、H29達成目標を達成しているため「A」評価とした。 また、県内就職率も順調に伸びていると思われる。 ● 地域での活動を通じて、地域住民の目線で課題をとらえ、自分達の問題として主体的に解決方法考える姿勢を身に付ける等、学生の成長に繋がっている。 ● 学修サイクルの体系化や地域志向科目の増加・充実化が進んでいる。さらにその取り組みにより、COC+の連携校の中でもけん引的な役割を担っている。 ● 学生の心の豊かさの成長に期待が持てる。 ● 地域の方とのコミュニケーション能力や、自主的なイベント準備及び実行の意識が1年間でかなり向上してきている。地域課題の解決に積極的に関わっている。
委員評価：S（2）、A（4）、B（0）、C（0）、D（0）

【研究事業評価】

事業評価： A
<ul style="list-style-type: none"> ● 地域との共同研究を行う教員数が既に最終年度（H30）目標に達するなど、着実な進展が見られる。 豊後大野市や大分市佐賀関での地区報告会を開催するなど、研究の成果のまとめを地域へと還元していることも、検証や発展に向けて今後につながる成果である考える。 ● 指標である「地域との共同研究を行う教員数」がH29達成目標を達成しているとともに、調査年度から順調に伸びていると思われるため「A」評価とした。 ● 活動地域で報告会を開催し、研究成果を地元住民へ還元している。 ● 尚一層の地域課題の問題意識を考える効果が頼もしい。 ● 過疎高齢化、人口減少の地域との活性化研究など実施している点。
委員評価：S（1）、A（5）、B（0）、C（0）、D（0）

【社会貢献事業評価】

事業評価： A

- 履修証明制度としての教育プログラムを実施できなかったことは残念であるが、リカレント教育も含めた今後の検討、対応に期待したい。
地域向けボランティアの活動数が目標を上回っていること、特に学生の主体的な活動が伸びていることは重要な成果と考える。
- 指標である「地域向けボランティアの活動数」について、H29 達成目標(800名)を上回る実績のため「A」評価とした。
- 過疎・高齢化の進んだ地域において、若い学生が活動することが、地域の活力となっている。
- 地域向けボランティアの活動数が大きく飛躍するなど、本学校のCOCの取組みが学生の社会貢献への意欲向上につながっていることが伺える。
- 人として成長が期待できる。
- 災害があったせいもあるが、ボランティアに関わる学生が随分と増えている点(県内他大学に比べても多い)

委員評価：S (2)、A (3)、B (1)、C (0)、D (0)

事業検討・評価委員会 外部委員 名簿

大分県 企画振興部 部長 廣瀬 祐宏 (代理：課長 磯田 健)

大分市 農林水産部 部長 森本 亨

豊後大野市 副市長 石掛 忠男

(一財)セブン-イレブン記念財団 九重ふるさと自然学校 代表 川野 智美

大分県中小企業家同友会 代表理事 塚崎 伸一

NPO法人 おおいたNPOデザインセンター 代表理事 山下 荃三

(敬称略)

(別紙)

総合評価、事業評価の算出方法

次式により評価点を算出し、総合評価・事業評価判定表により、判定を決定した。

評価点＝

$$(4.0 \times S \text{ 評価の数} + 3.0 \times A \text{ 評価の数} + 2.0 \times B \text{ 評価の数} + 1.0 \times C \text{ 評価の数}) \div \text{ 評価委員の数}$$

※小数第2位を四捨五入とし、小数第1位までの数値で扱う。

評価点	>3.7	>2.7	>1.7	≧1.0	<1.0
総合評価・事業評価	S	A	B	C	D

平成28年度評価 評価結果

選定年度	平成26年度	整理番号	73
大学等名称	日本文理大学		
事業名称	豊かな心と専門的課題解決力を持つおおいた地域創生人材の育成		

（「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業委員会」による評価）

<p>（総合評価）</p> <p>A：計画どおりの取組であり、現行の努力を継続することによって本事業の目的を達成することが期待できる。</p>
<p>【コメント】</p> <p>【優れている点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・指標の一部が既に目標値を上回っていること、また、地域に役立つ人材を育成するという目標を全学一体となって取り組んでいることは評価できる。 ・学長のリーダーシップの下、ジェネリックスキルをベースに専門的知識を活用し、地域課題解決を目指すという学修サイクルの実現に真摯に取り組んでいる結果、地域からのニーズが高まってきていることは評価できる。

地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+） 中間評価結果

整理番号	39	COC+大学名	大分大学
事業名	地域と企業の心に響く若者育成プログラムと大分豊じょう化プラン		

【総括評価】

A：計画どおりの取組であり、現行の努力を継続することによって本事業の目的を達成することが期待できる。

【コメント】

<優れている点>

- ・本事業の趣旨を理解し、COC+大学、COC+参加校、大分県も含めてしっかりと連携している。特に、日本文理大学との連携－相互学修は高く評価できる。
- ・教育カリキュラム改革が着実に進展している。また、企業との連携により作成した「育成する人材像」をベースに体系的なカリキュラムを構築していることや、コーオペ教育によるPBLの実践、PBLの設計も有効に改良されていることは評価できる。
- ・学修成果を認証する制度の創設など、学生の自主性を促す取組を進めていることは高く評価できる。

<改善を要する点>

- ・今まで以上に地域の課題や各事業協働機関の取組や体制についての現状分析を行って、本事業を実施することが必要である。

計画	計画	項目	内容	期待される成果	実施概要	成果	自己点検評価
研究	④	4～5月 地域志向プロジェクト研究の学内公募、採択	地域課題の解決に向けて、本学の研究資源を活かした学内共同研究を実施し、地域での取り組みを充実させることで、その成果を地域に還元し、地域での取り組みを活動にするための地域志向プロジェクト研究の学内公募、採択を行う。	地域志向プロジェクト研究の学内公募を行うことで、全教員に地域課題の周知を図ることができると同時に、複数教員によるプロジェクト型研究を顕在化することができる。また、採択に至らなかった課題に関しては、フォローアップを行うことで、教員間による新たな地域志向プロジェクト研究立ち上げの可能性を探ることができると期待される。	1. 地域志向教育研究費(200万円)を活用して、本事業で既に定めている7つの地域課題に対する地域志向プロジェクト型研究を5月12日より学内公募を行った(締切6月1日)。公募にあたっては、教員間の専門分野の連携・融合による地域課題解決の促進、学内研究体制の活発化を図るため、3名以上のプロジェクトチームを条件とした。	公募に対して7件の応募(上学部4件、経営経済学部3件)があり、外部委員会3名(黒川誠行、水本真由香、NPO)を含む審査委員会で審査を行い、学長が4件を採択した(工学部3件、経営経済学部1件)。→共同研究者数14名、連携自治体:大分県、大分市、豊後大野市。採択地域課題テーマ数:3分野。 また、本採択課題のうち、2件については、学費減量経費で実施する「教育改善推進事業」への応募を勧めた(別添書①の上、採択)。 ・豊後大野市での地区報告会を2月13日に豊後大野市役所で開催し、3件が研究発表を行った。参加者87名(副市長、地区住民、学生、教職員)。 ・佐賀県での地区報告会を2月20日に佐賀県庁舎センターで開催し、1件が研究発表を行った。参加者78名(支所長、地区住民、学生、教職員)。 ・実績報告書はCOC事業を次報告書に収録。成果の検証は、今後、審査委員会にて行う。	A
委員会 貢献	⑤	5～3月 地域志向プロジェクト研究の実施	地域志向プロジェクト研究を実施し、地域の課題解決に向けた基礎研究の成果を地域に還元する。	地域志向プロジェクト研究の実施により、複数教員によるプロジェクト型研究を促進することができ、地域へ大学の力を還元することができると期待される。	採択通知後、7月1日より研究活動を開始し、H28年8月18日までを研究期間とした。研究期間については、年次報告書にまとめることも、豊後大野市及び大分市佐賀県で開催した学修成果地区報告会での発表を義務づけた。また、研究推進時の留意点、不正防止を目的とした採択者説明会を7月2日に実施した。	・大分県大野市(佐賀県)の地区報告会を2月13日に豊後大野市役所で開催し、3件が研究発表を行った。参加者87名(副市長、地区住民、学生、教職員)。 ・佐賀県での地区報告会を2月20日に佐賀県庁舎センターで開催し、1件が研究発表を行った。参加者78名(支所長、地区住民、学生、教職員)。 ・実績報告書はCOC事業を次報告書に収録。成果の検証は、今後、審査委員会にて行う。	A
委員会 貢献	⑥	9月 シンポジウム「まちづくり」の活用 住民向け講習会の実施	地域自然環境を活かしたシンポジウムを開催して、本取組における大分県・大分市・大分県・大分市・大分市等との意見交換を行う場とする。	地域の自然環境を活かしたシンポジウムを開催して、本取組における大分県・大分市・大分県・大分市・大分市等との意見交換を行う場とする。	1. 大分県大野市(佐賀県)の地区報告会を2月13日に豊後大野市役所で開催し、3件が研究発表を行った。参加者87名(副市長、地区住民、学生、教職員)。 ・佐賀県での地区報告会を2月20日に佐賀県庁舎センターで開催し、1件が研究発表を行った。参加者78名(支所長、地区住民、学生、教職員)。 ・実績報告書はCOC事業を次報告書に収録。成果の検証は、今後、審査委員会にて行う。	自己点検評価	
委員会 貢献	⑦	11～12月 未来志向型の市民対象公開講座「大分県・大分市・大分市・大分市」の実施	未来志向型の市民対象公開講座「大分県・大分市・大分市・大分市」の実施	未来志向型の市民対象公開講座「大分県・大分市・大分市・大分市」の実施	1. 大分県大野市(佐賀県)の地区報告会を2月13日に豊後大野市役所で開催し、3件が研究発表を行った。参加者87名(副市長、地区住民、学生、教職員)。 ・佐賀県での地区報告会を2月20日に佐賀県庁舎センターで開催し、1件が研究発表を行った。参加者78名(支所長、地区住民、学生、教職員)。 ・実績報告書はCOC事業を次報告書に収録。成果の検証は、今後、審査委員会にて行う。	自己点検評価	
委員会 貢献	⑧	1～2月 実践を伴った地域企業向け地域創生人材講座の実施	地域企業向け地域創生人材に関する講座や、大分県・大分市・大分市・大分市等との意見交換を行う場とする。	地域企業向け地域創生人材に関する講座や、大分県・大分市・大分市・大分市等との意見交換を行う場とする。	1. 大分県大野市(佐賀県)の地区報告会を2月13日に豊後大野市役所で開催し、3件が研究発表を行った。参加者87名(副市長、地区住民、学生、教職員)。 ・佐賀県での地区報告会を2月20日に佐賀県庁舎センターで開催し、1件が研究発表を行った。参加者78名(支所長、地区住民、学生、教職員)。 ・実績報告書はCOC事業を次報告書に収録。成果の検証は、今後、審査委員会にて行う。	自己点検評価	

主体	計画	項目	内容	期待される成果	実施概要	成果	自己点検評価
⑨	4～3月	学長室(事業推進WG)による事業推進・統括情報発信	学長のリーダーシップを補佐し、本事業を前向きに推進・統括する。WGの機能を活用し、各取組が実効性を伴うように整理し、円滑に推進すること。また、本事業の目的や意義を地域住民等に周知し理解を得ることができ、あわせてデータベースを活用することによって活動内容のアーカイブ化を行うことができる。	学長室に設置した事業推進WGの機能強化を図ること。学長のリーダーシップを補佐し、事業を適切に統括し、円滑に推進することができる。また、本事業の目的や意義を地域住民等に周知し理解を得ることができ、あわせてデータベースを活用することによって活動内容のアーカイブ化を行うことができる。	27年度の新規教員の採用に伴い、学長室ワーキンググループのメンバーを拡大した(19名体制)。年間スケジュールに応じて、隔週～1月のペースで随時、打ち合せを行った。ホームページについては、主に広報について協議し、情報発信を行った。また、事業成果として、日本私立大学協会(私立大学経営問題協議会)での招待講演(2/25)や九州・沖縄シンポジウム(在寛 2015)(10/31)・1地域課題解決全国フォーラム(在寛)11/26)・10G・700+全国シンポジウム・高知(12/28)等での発表を行った。	ワーキンググループによる方針をもち、各学科、部署との調整を行って結果、円滑な事業推進を図ることができた。ホームページについては、タイムリーな情報発信までにはなっていないが、今後SNSの導入、仕様変更等により、双方向きの情報発信を目指す。私大協議演では全国の私立大学の理事長・学長等188名が参加。九州・全国と各地のOOO大学担当者を中心に本学の取り組みを周知できた。	A
⑩	4月	事務補佐職員1名の追加採用	事務補佐職員1名を追加採用し、本事業において発生する事務作業の効率化を図る。特に大分県佐賀郡地区、豊後大野市それぞれに学生地域活動拠点の新設に開設することから、学生拠点において発生する運営事務、現地における地域連携窓口の運営補佐を行う。	H27年度より本格運用する「大分チャレンジアワード」や「正課活動」や「地域志向プロジェクト」の取組に併せ、学生地域活動拠点を開発・運用すること。そのため、関係する事務作業が急増することから、事務補佐職員1名を追加採用すること。本事業において発生する事務作業の効率化を図ることとする。	4月1日に事務補佐職員1名を追加採用し、左記の事務にあたっていた。	27年度は事業の本格化により、事務作業が急進したが、事務補佐職員の追加により、効率化を図ることができた。	A
⑪	4月	学生能力アセスメントテスト(NEQ, PROG)の実施、専門的課題解決力アセスメントの開発、実行	学生に対して「地域創生人材」の取組能力についての学生個人の強かな心(NEQ, PROG)を実施し、全国平均に對しての学生個人の強かな心(NEQ)やエンジェルプロジェクトの強みと弱みの部分を把握する。あわせて、取組能力をベースにした専門的課題解決力を評価するアセスメントツールを開発、実行し、アセスメントツールの統合化に向けた検討を行う。	H27年度より本格運用する「大分チャレンジアワード」や「正課活動」や「地域志向プロジェクト」の取組に併せ、学生地域活動拠点を開発・運用すること。そのため、関係する事務作業が急増することから、事務補佐職員1名を追加採用すること。本事業において発生する事務作業の効率化を図ることとする。	このころの方針を外部専門家(NEQアセスメント)を導入し(1月)及び2年終了時平均スコア(リテラシー及びコンピテンシー)を測る外部テスト(PROG)を2年当初(4月)及び3年終了時(12月)に実施した。	NEQ 2年終了時平均スコア(リテラシー)は51、「社会的振動意識」93、「自然等に感動する心」46、PROG 3年終了時平均スコア(リテラシー)428、コンピテンシー333 専門的課題解決力評価するアセスメントツールの開発は、3月23日に開始したFD/SD研修におけるアプロマポリのループワークに重なることから、H28年度はこれをベースとして、各科目における専門的課題解決力を評価するループワークの開発、実行を行う。	B
⑫	5月	連携自治体との連携推進会議の開催	本学幹部教員と連携自治体の担当部長等からなる連携推進会議を半期1回開催し、本事業の円滑な推進、連携を図る。	本学幹部教員と連携自治体の担当部長等からなる連携推進会議を開催し、情報共有、意思統一を図ること。本事業の円滑な推進、連携を図ることができ、	第1回を6月26日に、第2回を11月27日に実施。	大分県、大分市、豊後大野市の関係団体部長等が出席し、本事業に対して率直な意見交換ができた。外部出席者は第1回16名、第2回11名が出席した。また、第2回はオブザーバーとして金融機関関係者3行5名が出席した。	A
⑬	9月	地域志向活動推進のためのFD/SD研修会の実施	地域志向活動推進のためのFD/SD研修会を実施し、地域志向科目、活動の実施方法をめざして検討する。また、プログラムの一部は外部講師を招き、各地のCOC事業の取組が分かる機会とする。	FD/SD研修会を実施することで、地域志向の取組を促進すること。また、これまでに実施してきたFD/SD研修会を振り返ること。地域志向科目、活動の実施方法をめざして検討すること。また、お互いの事業内容を知ること、一層の事業促進に繋がることが期待できる。	「ルーブリック」による評価とアプロマポリの活用 化(7月～11月)に実施した。青山学院大学 杉谷 祐 義子 教授が「求めらるる」の学修評価に関する基礎知識(1)の基調講演を、その後、本学のディプロマポリシー(学位授与方針)をルーブリック化するワーキングセッションを行った。	約80名の教職員が参加した。ルーブリックは変化的なパフォーマンスを評価する方法であり、地域活動を主体とするCOC事業において有意義な評価手法であり、その作成過程を体験できた。	B
⑭	11月	大学COC事業合同フォーラムの開催(県内COC事業探訪校である大分県立看護科学大学と合同開催)	大分県内のCOC事業探訪校が合同でフォーラムを開催し、職員やステークホルダーに本事業の成果を発表、発信する。	大分県内のCOC事業探訪校が合同でフォーラムを開催することで、広く県民に地(知)の拠点事業の取組内容を知ってもらうことができる。また、お互いの事業内容を知ること、2大学連携プロジェクトなどへの展開など、一層の事業促進に繋がることが期待できる。	日本理科大学・大分県立看護科学大学 平成27年度 大学COC事業 成果発表会合同シンポジウムへ地域をまもり、地域をつくる。大学の取組がめざして、2月11日(水・祝)にホテルホークホールにて合同シンポジウムを開催した。	両大学の取組が説明、両大学の学生による活動報告(各27名)、ハネテディスプレイ(大分の企業をまもり、つくる)材料作成の可能性(コーディネート)を行った。両大学学生29名、両大学教職員84名の合計366名が出席した。全体評価は大変良かった。153名、「良かった」142名、「普通」15名と大変好評であった。	S
⑮	2月	学修成果・地域志向研究発表会系の対象地域での開催	事業重点地区(大分県佐賀郡地区、豊後大野市)において、学生の学修成果発表、教員の地域志向研究発表を報告会やワーキングショップを開催し、市民やステークホルダーに成果を還元する。	活動対象地域において学生と教員の取組成果発表会を開催すること。地域課題に対するステークホルダーなど、広く市民、ステークホルダー、学内構成員に本事業の取組が分かることで、本事業の目的や意義の理解を得ることができ、あわせて学生の成長の場としても活用できる。	・豊後大野市での報告会には、学外参加者27名、本学教職員27名、本学学生33名の合計67名が参加した。活動報告内容の全体的な評価は大変良かった(44名、良かった44名、あまり良くなかった3名)。 ・佐賀郡地区での報告会には、学外参加者16名、学教職員25名、本学学生37名の合計78名が参加した。活動報告内容の全体的な評価は大変良かった(32名、良かった68%)。	・豊後大野市での報告会には、学外参加者27名、本学教職員27名、本学学生33名の合計67名が参加した。活動報告内容の全体的な評価は大変良かった(44名、良かった44名、あまり良くなかった3名)。 ・佐賀郡地区での報告会には、学外参加者16名、学教職員25名、本学学生37名の合計78名が参加した。活動報告内容の全体的な評価は大変良かった(32名、良かった68%)。	A
⑯	3月	事業検討・評価委員会(事業推進WG)の開催、年次成果報告書の発行	外部委員を含めた事業検討・評価委員会を開催し、H27年度の事業成果を総括、評価すること。また、H28年度の事業について見直し、改善を図ること。また、年次成果報告書を作成し、発行する。また、年次成果報告書を広く公表・普及する。	外部委員を含めた事業検討・評価委員会を開催し、H27年度の事業成果を総括、評価すること。また、H28年度の事業について見直し、改善を図ること。また、年次成果報告書を作成し、発行する。また、年次成果報告書を広く公表・普及することとする。	外部委員として、自治体委員3名(大分県、大分市、豊後大野市)、民間委員5名(日本政策投資銀行、大分県中小企業家同友会、日本財団伊藤、NPJ)を任命し、3月28日(月)に事業検討・評価委員会を開催し、年次報告書を作成し、発行した。	委員会での意見を踏まえ、次年度への事業改善、カリキュラム改善につなげる予定である。	

※自己点検評価: S:特筆すべき進歩が見られる。A:順調に進んでいる。B:やや順調に進んでいる。C:やや遅れている。D:遅れている。未実施

平成28年度 日本文理大学 COC事業総括シート

概要	事業全体の概要	実施概要	成果	自己点検評価
<p>本事業の全体の目的は、地域課題である少子高齢化を克服するために必要な豊かな心と専門的課題解決力を兼ね備える「地域創生人材」を育成することである。つまり、教育では次分内入材の少子高齢化が深刻な地域を主な対象に「体験交流活動」「課題解決に必要な知識の修得」「ステークホルダーとの協働」による課題解決型学修の学修サイクルによる教育体制を確立し、地域創生人材を輩出する。研究では、地域課題を克服する組織づくりを完成させ、地域に直接還元できる組織づくりを完成させ、地域の課題解決に貢献する。実践では、県民と学生との協働・学習・協働実践が実現しやすい環境を整え、行政と連携した「県民参画講座」を開催し、地域再生・活性化を推進する。学長のリーダーシップのもと、以上の取組を通して、地域を志向した教育カリキュラム体系への全学的な再編と社会貢献活動との有機的な接続、それに基づいたプロジェクト活動の推進を実現する地(知)の拠点改革、ガバナンス改革を実現する。</p> <p>本年度の目的は、教育では学修サイクルの本格運用を目指し、教育カリキュラム体系の全学的な再編に向けた環境整備を実現する。また「大分チャレンジアワード」の本格運用を行う。研究では、地域志向プロジェクトの学内公募、研究を実施し、地域の課題解決に向けた研究成果を地域へ還元していく。社会貢献では、地域が持つ魅力等の公開講座・ワークショップ等を実施すること、地域との連携協働活動の体制構築、確立を目指す。以上の取り組みを通じて、地(知)の拠点としての基盤構築を実現する。</p>	<p>事業中間年度にあたる本年度は、「体験交流活動」「課題解決」に必要な知識の修得「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」からなる学修サイクルの全学での本格運用がスタートした。地域志向のゼミ活動、卒業研究教員も昨年年度以上に増加しており、より一層地域への教育研究成果の還元につながっている。正課外活動については、「大分チャレンジアワード」の本格運用の年目となっており、社会貢献活動についても、環境保全に関する各種公開講座、企業向け地域創生人育成の講座等、活動が昨年年度以上に充実した。また、学生活動においても、環境教育や地域の小学生に対する体験教室など学生生活活動の幅が広がり、また、企画・運営する機会が増加してきている。また、その活動については、当初計画をほぼすべて達成することが出来た。あわせて学長のリーダーシップのもと、学内の地(知)の拠点を夏に受審した書類提出7月22日、面接審査9月28日)。</p>	<p>本年度における取り組みの成果としては、 ○教育活動：「地域志向科目」として222科目を開講し、最終のH30年度の目標(200科目以上)を既に上回る科目を開講できた(地域志向科目率39%)。地域志向のゼミ活動を目標の50%を既に上回った。プロジェクト活動として大分市佐賀間地区周辺及び豊後大野市全域において、40プロジェクト以上の活動を行った。また、「大分チャレンジアワード」については、在籍学生数の関係で、修了生は目標を下回ったが、次年度に向けた受講者の動員により次年度は当初目標に届く見込みが付いている。 ○研究分野：地域志向プロジェクト研究の公募、採択を行い、5件の地域志向プロジェクト研究を実施した。それぞれのプロジェクトとも一定の成果をあげており、教育現場による研究の可能性が広がってきた。次年度も同様の規模の地域志向プロジェクト研究を展開する。 ○社会貢献活動：学生参加型の公開講座、企業向け人材育成講座を実施し、地域の若手学生・教員との意見交換の場を設けることで、地(知)の拠点を学生が参加し、地域に発信、理解を得ることが出来た。また、これらの講座に学生が参加することで、地域課題へ取り組み姿勢が変化し(11講座開設)。 ○全体・ホームベース・キャリア・フレット、また域外での成果発表を通して、学内外への事業内容の周知のほか、新聞・メディアにおいても活動内容が報道されるなど、活動の広がりが見込んでいる。また、FD/SD研修会を実施することで、学内外のCOC事業へのさらなる協力体制の構築を行うことで、地域志向の学生教育を実施する体制がほぼ完成した。 ◎文部科学省平成28年度評価の結果、「A」計画通りの取組であり、実行の努力を継続することによって本事業の目的を達成することが期待できる。」の評価を得た。</p>	<p>A</p>	

計画	項目	実施概要	成果	自己点検評価
① 4～3月	<p>正課教育における「体験交流活動」「課題解決」に必要な知識の修得「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」の学修サイクルの確立に向けたカリキュラム内容の再調整、試行と本格運用</p>	<p>全学(2学部(学域))において、教養基礎・専門科目における学修サイクルの本格運用を開始した。各学科プロジェクト活動、ゼミ活動を中心に活動重点地域である大分市佐賀間地区周辺、豊後大野市全域で各種の活動を全面展開した。また、昨年度開設した佐賀間・関あじ開きば通りコミュニティ食堂「よらんせえ」内及び豊後大野市清川町「ロジックよかわ」内の学生活動拠点を継続使用したほか、6月4日に大分市佐賀間・木佐上校区に地域と共同で木佐上コミュニティセンターを開講した。</p>	<p>地域志向科目として222科目を開講し(本年度目標160科目)、最終のH30年度の目標(200科目以上)を既に上回る科目を開講できた(地域志向科目率39%)。地域志向のゼミ活動を目標の50%を既に上回った。プロジェクト活動として大分市佐賀間地区周辺及び豊後大野市全域において、40プロジェクト以上の活動を行った。また、「大分チャレンジアワード」については、在籍学生数の関係で、修了生は目標を下回ったが、次年度に向けた受講者の動員により次年度は当初目標に届く見込みが付いている。 ○研究分野：地域志向プロジェクト研究の公募、採択を行い、5件の地域志向プロジェクト研究を実施した。それぞれのプロジェクトとも一定の成果をあげており、教育現場による研究の可能性が広がってきた。次年度も同様の規模の地域志向プロジェクト研究を展開する。 ○社会貢献活動：学生参加型の公開講座、企業向け人材育成講座を実施し、地域の若手学生・教員との意見交換の場を設けることで、地(知)の拠点を学生が参加し、地域に発信、理解を得ることが出来た。また、これらの講座に学生が参加することで、地域課題へ取り組み姿勢が変化し(11講座開設)。 ○全体・ホームベース・キャリア・フレット、また域外での成果発表を通して、学内外への事業内容の周知のほか、新聞・メディアにおいても活動内容が報道されるなど、活動の広がりが見込んでいる。また、FD/SD研修会を実施することで、学内外のCOC事業へのさらなる協力体制の構築を行うことで、地域志向の学生教育を実施する体制がほぼ完成した。 ◎文部科学省平成28年度評価の結果、「A」計画通りの取組であり、実行の努力を継続することによって本事業の目的を達成することが期待できる。」の評価を得た。</p>	<p>S</p>
② 4～3月	<p>大分をフィールドとした正課外活動の場の増加、「大分チャレンジアワード」の運用</p>	<p>年間を通じて、自然体験、スポーツ、ボランティア活動、教養体験の4分野に11名の学生が取り組んだ。</p> <p>※それぞれの活動の概要についてはプロジェクトシートを参照。</p>	<p>本年度チャレンジアワード登録者12名、修了者11名、H26年度からの累積修了者45名(目標未達成)、本年度満足度4.23(目標達成)。</p> <p>※それぞれの活動の成果についてはプロジェクトシートを参照。</p>	<p>B</p>

計画	項目	実施概要	成果	自己点検評価
③ 4～5月	地域志向プロジェクト研究の学内公募、採択	「地域志向プロジェクト研究」(180万円)を活用して、本事業で設定している7つの地域課題に対する地域志向プロジェクト研究を5月13日より学内公募を行った(締切5月31日)。公募にあたっては、教員間の専門分野の連携・融合による地域課題解決の促進、学内研究体制の活性化を図るため、3名以上のプロジェクトチームを条件とした。また、H27年度採択の4件について、今回のプレゼンテーション審査(6月20日)時に事後評価を行った。	公募に対して5件の応募(工学部4件、経営経済学部1件)があり、外部委員3名(豊和銀行、大分県信用組合(豊和のみ)、大分銀行(豊和のみ))を含む審査委員会で書面審査、プレゼンテーション審査(6月20日)を行い、学長が5件を採択した(工学部4件、経営経済学部1件)。→共同研究者数16名、連携自治体、大分県、大分市、豊後大野市、振興地域課題テーマ数2分野、H27年度からの継続研究9件、H27年度採択プロジェクトの事後評価を行い、A評価1件、B評価3件となった。	A
④ 6～3月	地域志向プロジェクト研究の実施	採択通知後、研究活動を開始し、H29年2月10日までを研究期間とした。研究成果については、年次報告書にまとめるとして、大分市佐賀園及び豊後大野市で開催した学修成果地区報告会での発表を義務づけ、遂行した。	佐賀園での地区報告会を2月28日に佐賀園市民センターで開催し、2件が研究発表を行った。参加者69名(支所参事補、地区住民、学生、教職員)。豊後大野市での地区報告会を3月8日に豊後大野市役所で開催し、3件が研究発表を行った。参加者70名(市長、副市長、地区住民、学生、教職員)。実績報告書はCOC事業年次報告書に収録。成果の検証は、今後、審査委員会にて行う。	A
⑤ 3月	学内紀要の地域創生特集号発行	地域創生特集号の紀要発行に向けた検討を紀要編集委員会と行った結果、通常の発行サイクルに合わせて、次年度発行の第45号第2巻での掲載とすることとして進めていくこととした(H29年4月募集、10月発行予定)。	今年度の研究成果を持ち、次回の紀要発行サイクルに合わせてこととしたため、発行は次年度に延期とした。	C

計画	項目	実施概要	成果	自己点検評価
⑥ 4～3月	地域創生リーダー制度のシステム(履修証明制度)の整備、試験運用	COC関連の大分県事業として本年度実施した「おおいの地域創生リーダー養成講座」に1年生が1名参加し、その他実施した「県民向け講座」を豊後大野市役所にて実施した。次年度にさらに検証を重ね、H30年度以降の本格運用に向けて、運用システムを立案する。	左記の中核事業を実施した結果、講座による地域創生に向けた人材育成の教育効果が一定程度見込めることが明らかになった。現時点では履修証明制度の基盤(120時間以上を満たしていないため、引き継ぎ制度の確立に向けた果等を行う必要がある)。	B
⑦ 6～2月	エコバーク等に関連した近隣住民の知識を深めるためのワークショップ開催	本学教員が講師、指導を行った(7月29日)。相母・傾山系の風景を楽しみながら歩(歩)の構築を通じたエコバーク等の育成及び住民とのワークショップによる住民意識向上を目的とした学生合宿研修を8月29日～30日に実施した。	市内ワークショップは行政関係者約15名、学生合宿では学生14名、住民約10名が参加した。これらの活動を通じて、地域自然環境に関する理解の促進に留まらず、新しい価値観で地域の資源を見つめる機会につながった。	A
⑧ 8～12月	外来生物駆除等のための地域住民向け講習会の実施	地域自然環境保存・活用意識の向上(エコバーク)を目的とした地域住民向け講座「人も自然もアワセまちづくり講座」を豊後大野市の主催のもと、NPO法人おおいの水フォーラムと本学の共催で、9月7日に豊後大野市役所にて実施した。	地域住民、行政関係者、教育関係者、学生等約50名が参加し、絶滅生物の現状や「エコバーク」に生物多様性戦略の可能性についての意識向上につながった。	A
⑨ 9～3月	地元企業の大分CSRプログラムの検討、実施(大分のニーズに合ったCSRの提案)	大分県信用組合との包括協定を活用し、「けんしん大学」講座を共同運営により、28年度前期・後期に各5回のシリーズ講座として実施した(4月23日、5月21日、6月18日、7月16日、9月17日、10月15日、11月26日、1月21日、2月25日、3月11日)。	大分県信用組合の顧客企業や一般企業、従業員を対象に両学部の5名の教員が講師を担当した(コアメンバーを含む)。毎回30名程度の受講者が参加し、地域創生に根ざした企業運営のあり方を広げることができた。	A
⑩ 11～12月	未来志向型の県民対象公開講座「豊後大野市の旅観光」大分学・大分県」の実施	「ものごたがり観光行動学会」第6回年次大会・九州広域観光シンポジウム「普救使いのローカル線」沿線の日常」が注目される観光の時代の時代を本学が共催して開催した(11月19日)。 ・相母・傾山地域のエコバーク登録活動報告として、2017大分学講座(東京大分学研究会主催)において、本学教員が講演を行った(2月4日)。	「ものごたがり観光行動学会」では、地域住民、学委員、本学学生、教職員ら約170名が参加した。プレセッションでは、豊後大野市での活動報告を学生らが先行し、基調講演者であるJR九州社長らに事前に成果を発表することができた。 ・大分学講座には首都圏在住の県出身者ら22名が参加し、大分の魅力を全国に発信することができた。	A
⑪ 4～3月	実践を伴う地域企業向け地域創生人材講座の実施	COC関連の大分県事業として「おおいの地域創生リーダー養成講座」(12月11日・17日・23日)を実施した。大分市産業活性化プラザ主催の「地域企業向け「地域創生人材」育成のための経営学実践講座2017(全6回)」を共同実施した。また、最終回は本学との共催で「組織を動かす」ゲームで学ぶ組織マネジメントとして実施した(1月12日・19日・28日、2月2日・9日・16日)。	COC関連講座は、両学部の教員7名が担当し、県内の社会人18名が参加した(その他、大学生46名、高校生5名が参加)。講座は、大学生・高校生・社会人が混成チームを組み、その地域の魅力を発見する導入講義とまち歩きワークショップ形式の後、成果を発表する実践形式をとり、効果的な人材育成につながった。 ・大分市産業活性化プラザ講座には、経営経済学部の3名の教員が担当し、アクティブラーニング型の実践講座を中心に実施した。毎回20名程度の受講者が参加した。	A

計画	項目	実施概要	成果	自己点検評価
⑫ 4～3月	学長室(事業推進WG)による事業推進・統括・情報発信	年間スケジュールに於いて、月1回程度のペースで学長室会議、学長室ワーキングを随時開催、打合せを行った。 ホームページについては、主要な取組について掲載し、情報発信を行った。 事業成果の外部への発信として、「第65回九州地区大学教育研究協議会・地域連携教育研究会」(9月3日)での招待発表、「九州・沖縄COC/COCベンチマーク・地域連携2016」(10月29日)第二分科会での招待発表及びポスター発表、「さがの未来を創る地方創生と人材育成シンポジウム」(11月23日)での基調講演、1平成28年度九州地区私立大学事務連絡協議会・大分・宮崎大会(12月2日)での基調講演、北陸大学主催シンポジウム「高大接続の意義と教育改善」(12月4日)でのパネリスト報告、「宮崎学園短期大学FD/SD研修会」(3月16日)での講演等を行った。また、他大学からの視察受け入れ(宮崎大学、佐賀大学、鹿児島大学、金沢大学)を行った。	学長室ワーキンググループによる方針をもち、各学科、部署との調整を行った結果、円滑な事業推進を図ることができた。 ホームページについては、COC専用ページ、大学公式ページの連携によるタイムリーな情報発信、COCホームページのアーカイブ化、YouTubeサイトの充実等により、多くの情報発信を行うことができた。 また、九州・全国と各地のCOC担当者を中心に本学の取り組みを周知することができた。	A
⑬ 4月、2月	学生能力アセスメント(nEQ, PROG)の実施、専門的課題解決力アセスメントの開発、試行	「こころの力」を測る外部テスト(nEQアセスメント)を入学期(4月)及び2年終了時(1月)に、「リテラシー」及び「コンピテンシー」を測る外部テスト(PROG)を2年当初(4月)及び3年終了時(12月)に実施した。 上記の外部テストとの整合性を考慮しながら、ルーブリック表の妥当性や実行可能性を探るため、ジェネリックスキルを含めた専門的課題解決力を評価するルーブリック表を作成した。評価の試行として、1年生は後期開始時(10月)と終了時(1月)に、2～4年生は学年終了時にそれぞれ学生による自己評価を実施した(2年は1月、3年は12月、4年は卒業式)。	nEQ 2年終了時平均スコア(リテラシー)50、PROG 3年終了時平均スコア(リテラシー)49、コンピテンシー3.68 nEQは年次目標を上回る成果を得た。nEQは年次目標を達成できなかったが、入学期からの成長は統計的に有意な水準で伸びていることが確認できた。 専門的課題解決力を評価するアセスメントツール(ルーブリック)の開発が完了し、適宜ふり返ることにより、能力のチェックができるようになった。	A
⑭ 5月、10月	連携自治体との連携推進会議の開催	第1回を6月27日に、第2回を11月30日に実施。	大分県、大分市、豊後大野市の関係部課長らが出席し、本事業に対して確直な意見交換ができた。外部出席者は第1回19名、第2回16名が出席した。また、オプザバーとして金融機関・新聞社関係者が第1回は3社4名、第2回は5社7名が出席した。今年度より自治体構成員として豊後大野市高齢者福祉課を追加した。第2回は分科会方式として各プロジェクト担当者から報告、意見交換することで、議論を活発化させた。	A
⑮ 3月	地域志向活動推進のためのFD/SD研修会の実施	他大学のCOC事業を知る研修会として、富山県立大学の奥田實コーディネーターを招聘し、3月22日に実施した。	70名の教職員が参加した。工学系のCOC事業の先進事例を知り研修機会としては今回が初めてであり、今後の事業発展に向けてよい機会とすることができた。	A
⑯ 9月	九州地区COC採択校(学生発表交流会)の実施	9月8日～9日の1泊2日で本学湯布院研修所を会場に、「盛りたくなる町(もう一度)訪れたくなる町」をテーマに複数大学の学生が学生を組んで湯布院のまちを歩き、ワーキングを通じた体験に基づいた内容をチームで発表する「九州・沖縄COC 学生情報交換会 in 湯布院」を開催した。	学生20名(大分県産5人×4チーム)、教職員18名(日本文理大学、宮崎大学、鹿児島大学、佐賀大学、熊本県立大学、西九州大学、大分大学(教職員のみ))の参加を得た。湯布院温泉観光協会と連携することで、内容をより充実することができた。九州各地で学ぶ学生が、国公私立の大学、学部の枠を越え、協働でまち歩き、グループワークを行うことで、お互いが刺激しあい、自分たちの長所と短所を知るよい機会となった。	S
⑰ 8～9月	本学の地域貢献度、地域ニーズを把握する県民アンケート中間調査の実施	3月3日より25日までの回答期間で、県民1,000名に対し、地域貢献度調査を実施した(豊後大野600名、佐賀県200名、その他200名を無作為抽出)。	189名から回答があり、本学が地域貢献の役割を果たしているという割合の今回目標33%を上回る37.9%が果たしていること回答した(3月22日暫定値)。	A
⑱ 8月	中間事業成果パンフレットの制作・公表	パンフレット形式では発行できなかったが、リーフレット形式(A3判両面1枚)で取りまとめ発行、配布した。	リーフレットとして、上記⑭のアンケート調査とともに配布した。また、同種のリーフレットを県内外のシンポジウム等を通して広く発信することができた。	B
⑲ 2月	大学COC事業合同シンポジウムの開催(県内COC採択校である大分県立看護科学大学と合同開催)	日本文理大学・大分県立看護科学大学平成28年度 大学COC事業 成果発表会 & 合同シンポジウム～地域をまもり、地域をつくる、大学の取り組み～として、2月18日にホルトホール大分大会議室において合同シンポジウムを開催した。	共愛学園前橋国際大学の天森学長による基調講演、両大学の取り組み説明、両大学の学生による活動報告(各2件)、パネルディスカッションCOCの成果をどう考えるか(コーディネーター、佐賀大学 五十嵐教授、パネリスト4名、コメンタリー大森学長)を行った。 一般参加者110名、両大学学生49名、両大学教職員85名の合計244名が出席した。全体評価は大変良かった。42%、「良かった」46%、「普通」3%と大変好評であった。	S
⑳ 2月	学修成果・地域志向プロジェクト研究成果発表会の対象地域での開催	・佐賀県地区での報告会を2月28日に佐賀県市民センターで実施し、学生の地域活動・研究活動報告7件、教員のプロジェクト研究報告2件を行った。 ・豊後大野市での報告会を3月3日に豊後大野市役所で実施し、学生の地域活動・研究活動報告6件、教員のプロジェクト研究報告3件を行った。	佐賀県での報告会には、学外参加者17名、本学教職員25名、本学学生77名の合計80名が参加した。活動報告内容の全体的な評価に対して96%が良かったとの回答を得た。 ・豊後大野市での報告会には、学外参加者17名、本学教職員32名、本学学生21名の合計70名が参加した。市長、副市長にも参加いただくことができた。活動報告内容の全体的な評価に対して100%が良かったとの回答を得た。	A
㉑ 3月	外部評価委員会の開催、年次成果報告書の発行	・外部委員として、自治体委員3名(大分県、大分市、豊後大野市)、民間委員4名(日本政策投資銀行、大分県中小企業家同友会、セブンイレブン記念財団、NPO法人おおいのNPOチャイナセンター)を任命し、3月30日に事業検討・評価委員会を実施する。 ・H28年度年次報告書を3月末に発行、関係機関に配布する。	委員会で委員を踏まえ、次年度への事業改善、カリキュラム改善につなげる予定である。	A

※自己点検評価：S:特筆すべき進捗が見られる。A:順調に進んでいる。B:やや順調に進んでいる。C:やや遅れている。D:遅れている。未実施

事業達成目標の進捗状況

【教育】

	H26現状(H26年度始め)	H27現状(H27年度始め)	H27達成状況(H27年度末)	H28達成状況(H28年度末)	H29達成状況(H29年度末)	H30達成状況(暫定値)	最終(H30)年度達成目標
地域志向科目数	26科目 4単位	26科目 12単位	160科目 12単位	222科目 12単位	240科目 12単位	270科目 12単位	200科目 12単位
地域志向カリキュラムの再編成 (全学生が12単位以上を取得)	0名	0名	4名	4名	5名	47名	30名
副専攻制度	3名	17名	34名	45名	72名	112名	100名
正課外活動「大分チャレンジアワード」の導入	地域志向科目を設定	体験科目:平均3.9 知識修得科目:平均3.9 課題解決型学修科目:平均3.9 正課外学習活動:-	体験科目:平均3.71 知識修得科目:平均3.59 課題解決型学修科目:平均4.03 正課外学習活動:4.25	体験科目:平均3.98 知識修得科目:平均3.82 課題解決型学修科目:平均4.01 正課外学習活動:平均4.25	体験科目:平均4.09 知識修得科目:平均3.86 課題解決型学修科目:平均4.13 正課外学習活動:平均4.47	体験科目:(集計中) 知識修得科目:(集計中) 課題解決型学修科目:(集計中) 正課外学習活動:平均4.31	体験科目:平均4.0以上 知識修得科目:平均3.5以上 課題解決型学修科目:平均4.2以上 正課外学習活動:平均4.2以上
地域志向科目を履修した学生の満足度	nEQ 2年終了時平均スコア 「リーダーシップ」J51 「社会的役割意識」J53 「自然等に感動する心」J44 PROG 3年終了時平均スコア 「リテラシー」J3.42 「コンピテンシー」J3.48	nEQ 2年終了時平均スコア 「リーダーシップ」J50 「社会的役割意識」J52 「自然等に感動する心」J44 PROG 3年終了時平均スコア 「リテラシー」J3.52 「コンピテンシー」J3.50	nEQ 2年終了時平均スコア 「リーダーシップ」J51 「社会的役割意識」J53 「自然等に感動する心」J46 PROG 3年終了時平均スコア 「リテラシー」J4.25 「コンピテンシー」J3.37	nEQ 2年終了時平均スコア 「リーダーシップ」J50 「社会的役割意識」J53 「自然等に感動する心」J45 PROG 3年終了時平均スコア 「リテラシー」J4.48 「コンピテンシー」J3.68	nEQ 2年終了時平均スコア 「リーダーシップ」J50(48) 「社会的役割意識」J51(49) 「自然等に感動する心」J45(44) ※()は入学時スコア PROG 3年終了時平均スコア 「リテラシー」J4.06(4.18) 「コンピテンシー」J3.71(3.56) ※()は2年開始時。リテラシーはレベル判定変更あり。	nEQ 2年終了時平均スコア 「リーダーシップ」J51(49) 「社会的役割意識」J52(52) 「自然等に感動する心」J44(43) ※()は入学時スコア PROG 3年終了時平均スコア 「リテラシー」J4.02(3.78) 「コンピテンシー」J3.41(3.08) ※()は2年開始時。	nEQ 2年終了時平均スコア 「リーダーシップ」J52 「社会的役割意識」J54 「自然等に感動する心」J50 PROG 3年終了時平均スコア 「リテラシー」J4.00 「コンピテンシー」J4.00
県内就職率	31.35%	31.32%	33.66%	34.38%	41.69%	(暫定)35.1%	35%

【研究】

	H26現状(H26年度始め)	H27現状(H27年度始め)	H27達成状況(H27年度末)	H28達成状況(H28年度末)	H29達成状況(H29年度末)	H30達成状況(暫定値)	最終(H30)年度達成目標
地域との共同研究を行う教員数	8名	8名	14名	16名	24名	27名	20名

【社会貢献】

	H26現状(H26年度始め)	H27現状(H27年度始め)	H27達成状況(H27年度末)	H28達成状況(H28年度末)	H29達成状況(H29年度末)	H30達成状況(暫定値)	最終(H30)年度達成目標
地域向けボランティアの活動数	675名	723名	804名	816名	1,895名 (うち災害ボランティア737名)	1,083名	800名
地域向け公開講座数	3講座	3講座	11講座	11講座	12講座	11講座	7講座
県民の本学に対する本事業分野の地域貢献度の評価	(推定値)20%	27%	未実施 % (予定なし)	41.5%	未実施 % (予定なし)	54.7%	40%

「地域志向科目」について

大学 COC 事業では、「地域での体験交流活動」「課題解決に必要な知識の修得」「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」の学修サイクルにより、学生が地域に愛着を持ち、主体的に課題を発見し、専門的課題解決力（知識をただ持っているだけでなく、知識を活用し、組み合わせ、また様々なステークホルダーや他の学生と協働し、地域社会に役立つ解決策を導き、実践することで身につけた専門力を定着させる）を習得させることを目指している。これらの学修活動を通じて、県内のみならず、社会で主体的に活躍できる人材を育成することが目的である。

上記の学修サイクルに関わる科目を「地域志向科目」と定義し、平成 27 年度シラバスより、該当するカテゴリーを明示している。

1. カテゴリーⅠ「地域での体験交流活動を教育内容に含む科目」

- ・大分県内の地域（学外）へ学生が出向き活動する内容がある。
- ・大分県内に所在する企業・団体等を訪問し、外部の人との交流（講話や意見交換を含む）がある。
- ・大分県内の企業・自治体・団体・住民の方を対象とした学生発表がある。
（大分県内に関する調査・研究内容を含む場合は「カテゴリーⅠ」）

…（例）農林業体験や高齢化が深刻な地域コミュニティに入っの住民との交流の中で、地域のことを肌で感じ、自分たちの地域での役割を認識し、学修への意欲と主体性、ジェネリックスキル、人間力を高める

2. カテゴリーⅡ「地域における課題解決に必要な知識を修得する科目」

- ・大分県内に関する歴史・文化・産業・社会・地域問題など大分に関する具体的な知識の教授を行う内容（全国や県外と大分との対比を含む）がある。
- ・大分県内に関わるものをケーススタディとして扱う講義・演習がある。
- ・大分県内の企業・自治体・団体・住民の方の講話（ゲストスピーカー）がある（非常勤講師が学問的なことのみを教授するケースは除く）。
- ・大分県内に関する調査・研究内容についての学生発表がある。
- ・カテゴリーⅢ「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修科目」において必要となる知識・技能を教授する内容がある（授業計画の学修内容に明示することが必要）。

…（例）単に知識を獲得するだけでなく、獲得した知識を地域の題材や課題に結合する、もしくは地域の題材や課題をもとに理論的な知識を構築するための能動的な学修（書く、話す、議論する、分析する、発表するなど）を通じて、知識の活用法や思考・判断力を深く認知化させる

3. カテゴリーⅢ「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修科目」

- ・大分県内の課題を解決する調査・研究内容を明示的に扱っている（ゼミ・卒研含む）。
- ・調査・研究内容を大分県内の企業・自治体・団体・住民の方を対象として学生発表している。

…（例）地域での実践活動により獲得した知識を活用してリアルな課題を発見、整理し、解決策を立案し、実践する

日本文理大学 平成30年度 地域志向科目 一覧表

構築する地域志向学修サイクル (H30年度目標: 200科目以上)

地域志向のゼミ活動 (H30年度目標: 各学部ゼミ数の半数以上)

	開講科目数(セミ除)	ゼミ・卒研科目数	合計科目数		地域志向ゼミ数	全体ゼミ数	割合
カテゴリー I: 地域での体験交流活動を教育内容に含む科目	26 科目	17 科目	43 科目	【工学部】卒業研究	21 研究室	40 研究室	52.5%
カテゴリー II: 地域における課題解決に必要な知識を修得する科目	98 科目	70 科目	168 科目	【経営経済学部】ゼミナールIV	13 ゼミ	21 ゼミ	61.9%
カテゴリー III: ステークホルダーとの協働による課題解決型学修科目	27 科目	32 科目	59 科目	合計	34 研究室・ゼミ	61 研究室・ゼミ	55.7%
合計	151 科目	119 科目	270 科目				

地域志向科目のうち アクティブラーニング科目数 ※アクティブラーニング科目は表中太字	241 科目	89.3%
--	--------	-------

地域志向科目数	全開講科目数	地域志向科目割合
270 科目	630 科目	42.9%

学年	1		2		3		4	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期

教養基礎科目								
大分を知り、地域に貢献できる素養を身につける	【必】大分学・大分県	森里海道環学と地球的課題						
人間力コア科目/キャリア科目	【必】社会参画入門 【必】人間力概論	【必】社会参画実習1 現代社会要論	【必】社会参画応用	【必】社会参画実習2				
自分を取り囲む世界と交流するための知識とスキルを身につける		ヒューマンアート	第二外国語1 (中国語)	第二外国語2 (中国語)				
汎用力科目	ジェネリックスキル養成1	ジェネリックスキル養成2 大分の地域ブランド創造体験						
特別科目	提携講座 (ボランティア概論)							

工学部 機械電気工学科								
プロジェクト分野		ロボットプロジェクト入門2	ロボットプロジェクト基礎1	ロボットプロジェクト基礎2				
研究キャリア分野							卒業研究 (2) (通年)	

工学部 建築学科								
環境・地域分野			自然生態学	環境水理学	環境・地域創造演習			
建設基礎分野			データ解析演習		【必】地域再生論			
建築設計製図分野			【必】設計製図1	【必】設計製図2	設計製図3	設計製図4	設計製図5	
建築計画分野			CAD1		CAD2	CAD3		
建築生産分野					ランドスケープ			
建築法規分野					都市計画			
研究・資格・インターンシップ分野	プロジェクト1 (通年) 建築フィールドワーク インターンシップ		プロジェクト2 (通年) 提携講座 (グローバルコミュニケーション演習)		プロジェクト3 (通年) 研究ゼミナールA (4) 研究ゼミナールA (7)	研究ゼミナールB (4) 研究ゼミナールB (7)	【必】卒業研究 (5) (通年) 【必】卒業研究 (6) (通年)	

工学部 航空宇宙工学科								
熱・原動機分野			【必】熱力学					
プロジェクト分野		ロボットプロジェクト入門2	ロボットプロジェクト基礎1	ロボットプロジェクト基礎2				
卒研分野							卒業研究 (3) (通年)	

工学部 情報メディア学科								
情報システム基礎分野		【必】IT基礎						
メディア処理分野			データ解析及び演習					
組込み分野					情報システム回路入門	組込み演習		
ネットワーク分野			【必】インターネット基礎	【必】インターネット応用	インターネット実験			
データベース分野					データベース実験			
情報デザイン基礎分野				コンテンツ企画論				
視覚デザイン分野						3D CAD応用		
映像デザイン分野	映像企画・取材学			映像構成・演出学及び演習1	映像構成・演出学及び演習2			
総合演習分野						【必】情報メディア総合演習		
キャリア開発分野	情報技術と職業-入門	情報技術と職業-演習 (通年)			情報技術と職業-実験 (通年)			
プロジェクト演習分野	ロボットプロジェクト入門2	ロボットプロジェクト基礎1	ロボットプロジェクト基礎2					
ビジネスコンピュータ・リテラシー分野				ICT応用	コンピュータ実習3			
教育分野			初等教育のためのICT活用1	初等教育のためのICT活用2				
ゼミナール分野					研究ゼミナールA (3) 研究ゼミナールA (2)	研究ゼミナールB (3) 研究ゼミナールB (2)	卒業研究 (3) (通年) 卒業研究 (2) (通年)	

学年	1		2		3		4	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
経営経済学部 経営経済学科								
専門基礎分野	簿記入門 経営学入門	経済学入門 【必】社会福祉入門						
地域マネジメント分野	フィールド・スタディ I A	フィールド・スタディ I B	フィールド・スタディ II (通年) 社会調査法 観光学入門	まちづくりマーケティング 観光ビジネス論	サービスラーニング III (通年) まちづくりマーケティング演習 地域経営論 地域イノベーション論	フィールド調査(フィールド研修) 地域ブランド論 地域企業論		
経済学分野	日本経済事情		日本経済論 ミクロ経済学 経済政策論	金融論	国際金融論	NPO・NGO論		
法律学分野					憲法A 労働法	憲法B 行政法		
会計ファイナンス分野			原価計算論A 財務諸表論	原価計算論B 会社簿記	監査論A	管理会計論B 監査論B 産学協働講座(経営分析の実践)		
スポーツビジネス分野				地域とスポーツ 特殊講義(スポーツイベント実践)(通年) 生涯スポーツ論	スポーツ法学 スポーツリテラシーVI(スポーツビジネス実践)(通年)			
スポーツトレーナー分野			スポーツリテラシーIII(スポーツコンディショニング)		ストレングス&コンディショニング指導法(通年)			
社会福祉分野	フィールド・スタディ I A	フィールド・スタディ I B	フィールド・スタディ II (通年) ボランティア実習(通年) 児童福祉論 地域福祉論 社会福祉援助技術演習 I (通年) 公的扶助論 相談援助の基盤と専門職A	フィールド・スタディ II (通年) 福祉経営論 社会福祉原論A 社会福祉原論B 社会福祉原論B 社会福祉原論B 相談援助の基盤と専門職B コミュニティワーク論 家族援助論(通年)	サービスラーニング III (通年) 福祉経営論 社会福祉原論A 社会福祉原論B 社会福祉原論B 社会福祉原論B 社会福祉援助技術演習 II (通年) 社会福祉援助技術現場実習(通年) 社会福祉援助技術現場実習指導(通年) 職労支援サービス 権利擁護と成年後見 コミュニティワーク演習(通年)	コミュニティワーク実習(通年)		
心理学分野		児童心理学	臨床心理学 青年心理学	カウンセリング		精神保健学		
IT・システム分野					データ解析A			
特別科目分野	フィールドワーク		提携講座(グローバルコミュニケーション実習)					
ゼミナール分野			ゼミナールII A (4) ゼミナールII A (8) ゼミナールII A (6)	ゼミナールII B (4) ゼミナールII B (8) ゼミナールII B (6)	ゼミナールIII (1) (通年) ゼミナールIII (13) (通年) ゼミナールIII (4) (通年)	ゼミナールIV (1) (通年) ゼミナールIV (10) (通年) ゼミナールIV (2) (通年)		

※備考
研究ゼミナールA、研究ゼミナールB、卒業研究、ゼミナールIIA、ゼミナールIIB、ゼミナールIII、ゼミナールIV の () 内の数字は、地域志向科目としての登録クラス数。

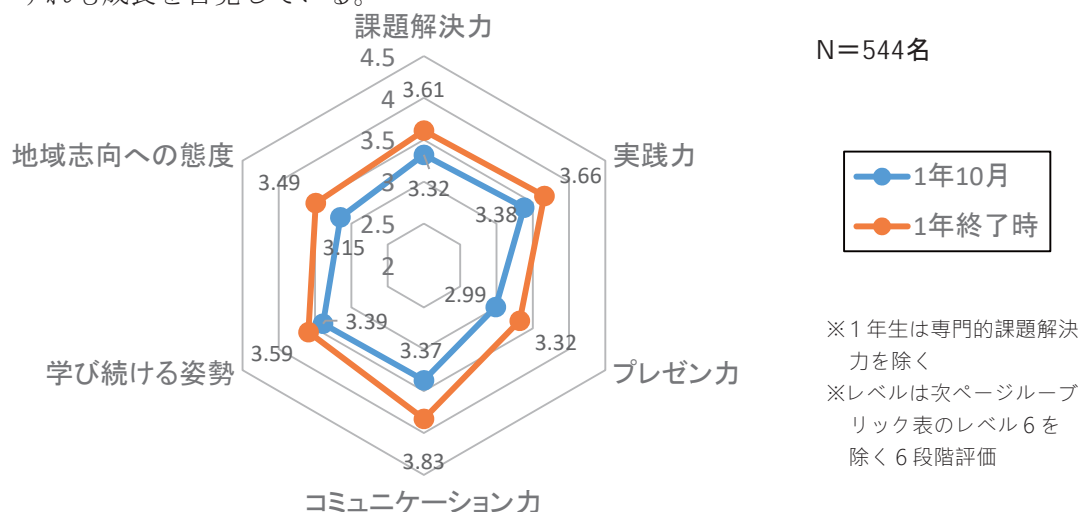
【教育における目標】 ルーブリックによる地域創生人の能力評価

本事業では、地域創生人として育成する能力として、基盤となる学部によらず共通した力（ジェネリックスキル）とあわせて、専門的課題解決力を挙げている。専門的課題解決力を測定、評価するにあたり、本事業では、地域志向への態度を含めた次ページのルーブリック表を作成した。ルーブリックとは、パフォーマンスの質を量的に評価するために用いられる評価基準で、1つ以上の評価観点（＝評価規準、求める具体的なスキルや知識）とそれについての1つ以上の数値的な評価尺度（達成レベル）及び尺度の中身（認識や行為の特徴）を説明する評価基準の記述語からなる。

本事業では、後述の外部テストとの整合性を考慮しながら、ルーブリック表の妥当性や実行可能性を探るため、ジェネリックスキルを含めたルーブリック表を作成した。本年度も昨年度と同様、評価の蓄積として、1年生は後期開始時と終了時に、2～4年生は学年終了時にそれぞれ学生による自己評価を実施した（4年次は集計中）。

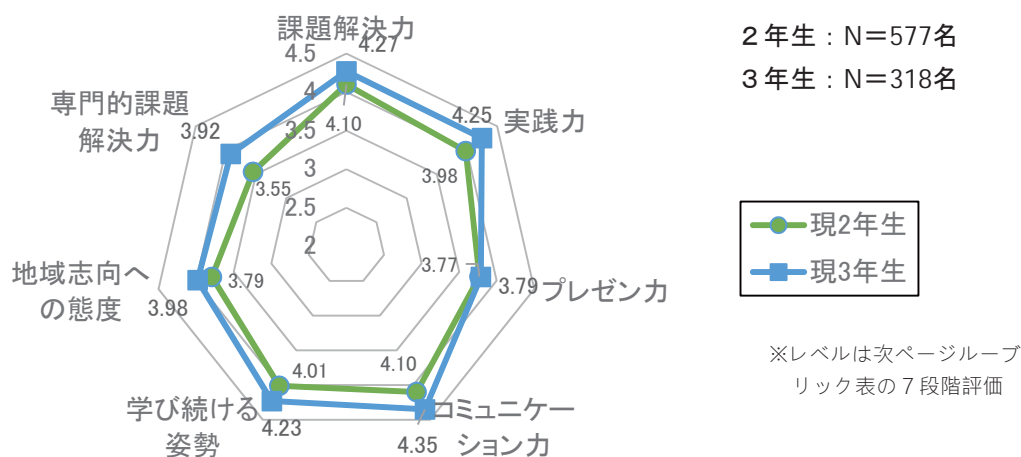
< 1年生の自己評価結果 >

現1年生（2018年入学生）の後期開始時及び終了時の結果の平均スコアを下図に示す。自己評価ではいずれも成長を自覚している。



< 2年生及び3年生の自己評価結果 >

現2年生（2017年入学生）及び現3年生（2016年入学生）の各学年終了時の結果の平均スコアを下図に示す。



COO事業「地域創生人材」育成にかかる卒業時自己評価ルーブリック（2019年3月）

学籍番号:

氏名:

本項目は、大学全体で取り組んでいる文部科学省「地(知)の拠点整備事業(COC)」での地域創生人材育成にかかる能力群を示しています。

問1 各観点について、ルーブリックのレベルを読んで、卒業時点ではまる自己評価レベルに○を記入して下さい。

分類	レベル		7	6	5	4	3	2	1
	評価項目(観点)								
(A) 課題基礎力 (課題解決のための思考とツールを使い実践する)	課題発見・解決力	レベル6を満たした上で、そのレベルを超えることができる。	レベル5に加え、自ら発見した解決すべき課題を具体的に解決することができる。	与えられた情報に加え、自らの既存の知識を生かし、問題を発見したり、解決すべき課題を設定することができる。	与えられた情報の中から、問題を広い観点から洗い出したり、分析することで、問題を発見したり、解決すべき課題を設定しようと試み、一定程度の課題発見・設定ができる。	与えられた情報の中から、問題を洗い出したり、分析することができる。	与えられた情報の中から問題を見たり、解決すべき課題を設定しようとする姿勢がある。	レベル2を達成できていない。	
	実践力	レベル6を満たした上で、そのレベルを超えることができる。	レベル5に加え、困難状況に直面しても、常に積極的にチャレンジし、状況を打開できる。	活動の中で設定した目標に向けて、状況をふまえながら、新しいアイデアを出し、積極的にチャレンジできる。さらに、その経験を次の活動に活かすことができる。	活動の中で設定した目標に向けて、状況をふまえながら、積極的にチャレンジできる。	活動の中で設定された目標達成に向けて積極的にチャレンジできる。	活動の中で設定された目標達成に向けて積極的にチャレンジできる。	レベル2を達成できていない。	
	プレゼンテーション力	レベル6を満たした上で、そのレベルを超えることができる。	レベル5に加え、異なる意見が出た場合にも、理路整然とした説明や反論、柔軟な対応ができ、相手を説得することができる。	プレゼンテーションの方法を習得しており、自分の考えや計画、構想について論理的に説明でき、相手を納得させることができる。	プレゼンテーションの方法を一定程度習得しており、自分の考えや計画について、論理的に説明することができる。	自分の考えを他者に対して、論理的に表現することができるが、論理性や表現力において未熟な点がある。	自分の考えを他者に対して、論理的に表現しようとする姿勢がある。	レベル2を達成できていない。	
(B) 対人基礎力 (人とよい関係をつくる)	チームで活動するためのコミュニケーション力	レベル6を満たした上で、そのレベルを超えることができる。	レベル5に加え、多様な世代・立場の人を巻き込むことができ、適切な対応を取り、チームを率いていくことができる。	レベル4に加え、世代等が多様な集団や、立場が異なる相手に対して、会話や文書などを用いたコミュニケーションを取ることができ、適切な対応が取れる。	グループ内で自分の役割を果たしつつ、自ら進んで情報を伝えたり得たりすることができ、周囲の状況にも気を配ることができる。	グループ内で自分の役割を果たしつつ、自ら進んで情報を伝えたり得たりすることができる。	グループ内で自ら進んで情報を伝えたり得たりすることができる。	レベル2を達成できていない。	
	学び続ける姿勢	レベル6を満たした上で、そのレベルを超えることができる。	レベル5に加え、常に社会の動きを注視し、将来を見越して柔軟に自分自身が取るべき学びや行動を変化させ、継続的に実行できる。	様々な経験やふりかえりを通じて得られた、自分自身がとるべき学びや行動を継続している時に、障害が生じたとしても、それを乗り越えるための方法を考え、粘り強く実行している。	様々な経験やふりかえりを通じて、今後自分自身がとるべき学びや行動が明らかになった時に、それを継続的に行う方法を考え、実行している。	様々な経験やふりかえりを通じて、自分自身がとるべき学びや行動が明らかになった時に、それを継続的に行う方法を試みている。	様々な経験やふりかえりを通じて、自分自身がとるべき学びや行動を考えようとする姿勢がある。	レベル2を達成できていない。	
(C) 対自己基礎力 (自律的に行動する)	地域志向への態度	レベル6を満たした上で、そのレベルを超えることができる。 ※ここでの「地域」は十分に限らず、自分が生まれ育った「地域」などを含む。	レベル5に加え、自分が地域を良い方向に変えていくという強い意志を持って実践的に取り組むことができる。	地域の課題に積極的に関心を持ち、地域特有の課題を見つけ、地域に対して自分が何ができるかを考えながら取り組むことができる。	地域の課題に対して、積極的に関心を持ち、地域特有の課題を見つけようとしている。	地域の課題に対して関心を持ち、一般的な課題を見つけようとしている。	地域の課題に関心を持つことができる。	レベル2を達成できていない。	
	対する興味	レベル6を満たした上で、そのレベルを超えることができる。	レベル5に加え、自分自身がとるべき学びや行動を変化させ、継続的に実行できる。	様々な経験やふりかえりを通じて得られた、自分自身がとるべき学びや行動を継続している時に、障害が生じたとしても、それを乗り越えるための方法を考え、粘り強く実行している。	様々な経験やふりかえりを通じて、今後自分自身がとるべき学びや行動が明らかになった時に、それを継続的に行う方法を考え、実行している。	様々な経験やふりかえりを通じて、自分自身がとるべき学びや行動が明らかになった時に、それを継続的に行う方法を試みている。	様々な経験やふりかえりを通じて、自分自身がとるべき学びや行動を考えようとする姿勢がある。	レベル2を達成できていない。	

問2 あなたが所属した学科の専門教育のうち、あなた自身が一番得意もしくは習得した専門分野の番号1つに○をつけて下さい。

(必ずしもあなたが選択しているコースである必要はありません。一番近い分野を選んで下さい。)

- 機械電気工学科 → ①機械 ②電気 ③エネルギー ④自動車 ⑤ロボット ⑥電子 ⑦機械と電気の融合
- 建築学科 → ①建築デザイン ②建築工学 ③インテリアデザイン ④まちづくり ⑤土木 ⑥地域創生 ⑦環境
- 航空宇宙工学科 → ①航空機整備 ②航空機設計 ③宇宙機器設計 ④航空機製造 ⑤宇宙機器製造 ⑥宇宙システム開発
- 情報メディア学科 → ①ブログ運営 ②ウェブ構築・開発 ③組み込みソフト開発 ④映像デザイン ⑤情報デザイン ⑥eビジネス
- 経営経済学科 → ①地域マネジメント ②ビジネスコミュニケーション ③会計ファイナンス ④スポーツビジネス ⑤スポーツトレーナー ⑥社会福祉 ⑦心理

問3 問2であなたが選んだ専門分野について、以下のルーブリックのレベルを読んで、卒業時点ではまる自己評価レベルに○を記入して下さい。

分類	レベル		7	6	5	4	3	2	1
	評価項目(観点)								
(E) 専門的課題解決力	専門知識と実践的応用力	レベル6を満たした上で、そのレベルを超えることができる。	レベル5に加え、解決すべき地域や社会の課題に対し、専門知識を応用・活用して課題解決に実践的に取り組み、解決に導くことができる。	レベル4に加え、解決すべき地域や社会の課題に対し、専門知識を応用・活用して課題解決に取り組むことができる。	学んでいる専門分野の知識を身に付けるとともに、それをどのように地域や社会に活用できるかを考えることができる。	学んでいる専門分野の知識をある程度身に付けている。	学んでいる専門分野の知識を獲得しようとする姿勢がある。	レベル2を達成できていない。	
	該当レベルに○								

【教育における数値目標】 ジェネリックスキルの育成

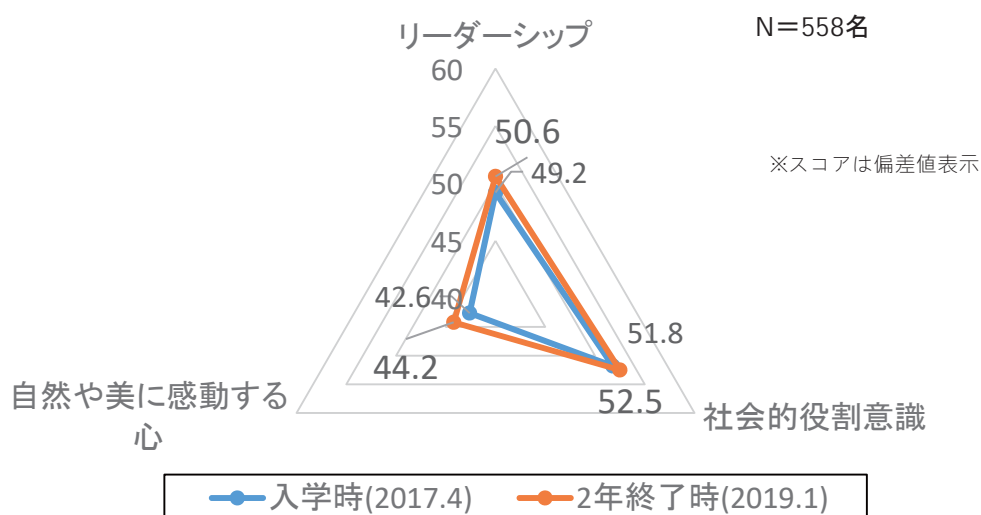
本事業では、地域創生人として育成する学部によらず共通した能力として、地域で活躍するための「こころの力」と汎用的技能を挙げており、具体的には「リーダーシップ」「社会的役割意識」「自然や美に感動する心」「リテラシー（知識を活用し問題解決する力）」及び「コンピテンシー（経験から学ぶ力）」などとしている。

本事業における「地域志向科目」による教育プログラムを通じて、これらの能力の成長を適切に評価するため、「こころの力」を測る外部テスト（nEQアセスメント）を入学時及び2年終了時に、「リテラシー」及び「コンピテンシー」を測る外部テスト（PROG）を2年当初及び3年終了時に実施している。

<こころの力の成長：nEQアセスメント>

現2年生（2017年入学生）の入学時及び2年終了時の平均スコアの結果を下図に示す。

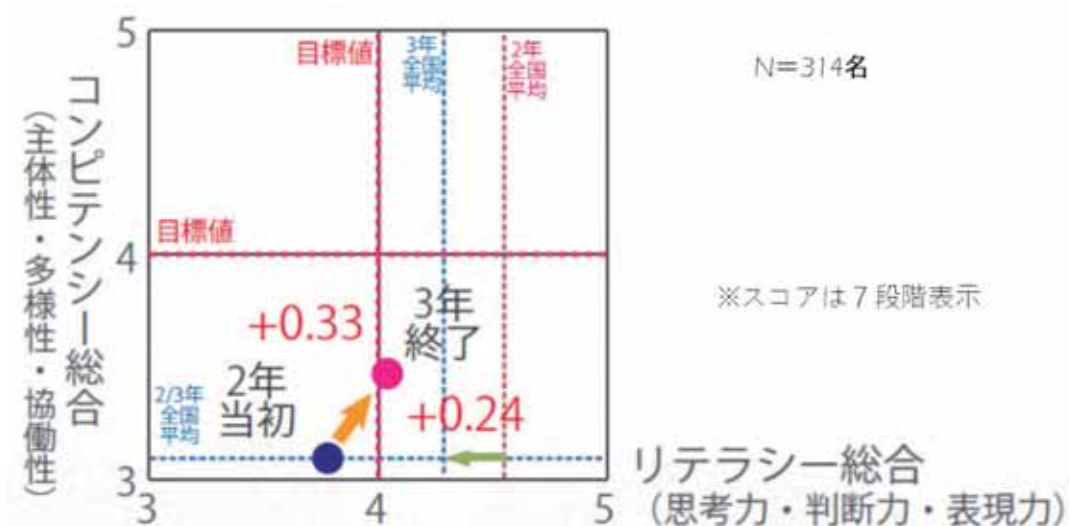
いずれも目標値には届かなかったが、スコアは伸びており成長が確認できた。



<リテラシー及びコンピテンシーの成長：PROG>

現3年生（2016年入学生）の2年当初及び3年終了時の結果を下図に示す。

リテラシー、コンピテンシーとも成長が確認できた。コンピテンシーは目標値には届かなかったが、全国的にはほとんど伸ばすことができていない中、着実な成長が確認できた。



< 参考 >

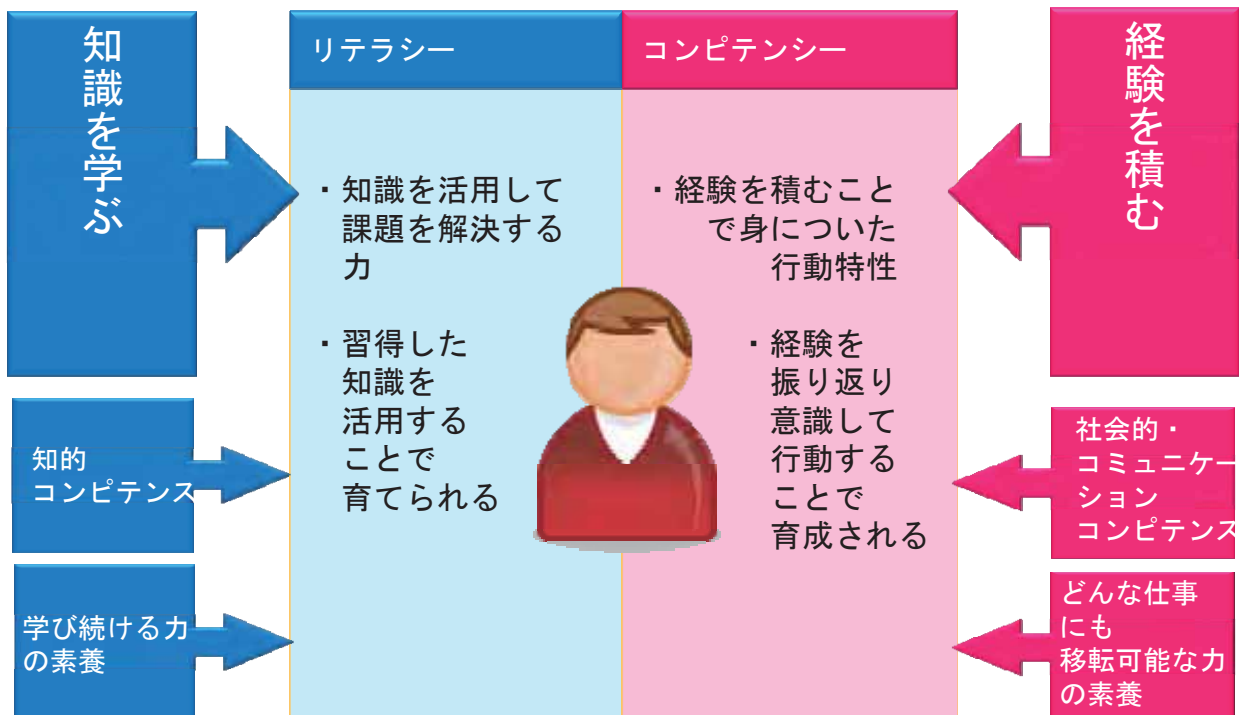
【nEQアセスメントの概要】



労務行政資料より

【PROGの概要】

PROGでは、基礎力を「リテラシー」と「コンピテンシー」の2側面から測定している。「リテラシー」とは、知識を基に問題解決にあたる力で、知識の活用力や学び続ける力の素養をみるもの。「コンピテンシー」とは、経験から身に付いた行動特性で、どんな仕事にも移転可能な力の素養をみるもの。



河合塾・リアセック PROG資料より

「地(知)の拠点整備事業」 【大学 COC 事業】 第3回 地域貢献度調査 報告書

2019年3月

調査概要

調査目的

文部科学省「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」の遂行にあたり、それに付随する本学の取り組みに対し、住民の認知度や取組への満足度等を図ることを目的として実施した。

調査エリア

大分県(取組重点地区である大分市佐賀関地区、豊後大野市は特に重視)

調査手法

①直接配付・郵送回収(大分市佐賀関地区・豊後大野市) ②郵送配付・郵送回収(①以外の地区)

調査設計

<調査の対象と標本の抽出方法>

- ①対象区域居住者800名の自宅へ飛び込み訪問または活動を通じてアンケートを依頼した。
- ②電話帳から無作為に200名を抽出した。

<アンケート配布と回収方法>

- ①直接アンケートを配布。後日、対象者から郵送にてアンケートを返送。
- ②郵送にてアンケートを配布。後日、対象者から郵送にてアンケートを返送。

調査票の 回収結果

配布数	回収数	有効回収数	回収率
1,000件	201件	201件	20.1%

調査期間

2019年月1月7日(月)~2月2日(土)

調査結果 利用上の 注意

数字は、百分比のポイント以下2位を四捨五入しているため、回答比率の合計は、必ずしも100%ちょうどになるとは限らない。

数表、図表、文中に占める「n」は、比率算出上の基数(標本数)である。

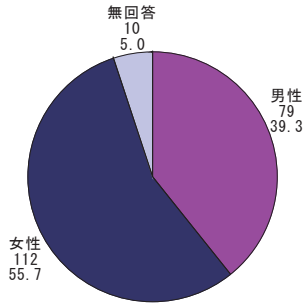
数表、図表に示す選択肢はスペースの関係で文言を省略している場合があるので、巻末の調査票を参照のこと。

活動重点地区での回答者が多いことから、回答傾向に偏りがあることに留意。

標本構成

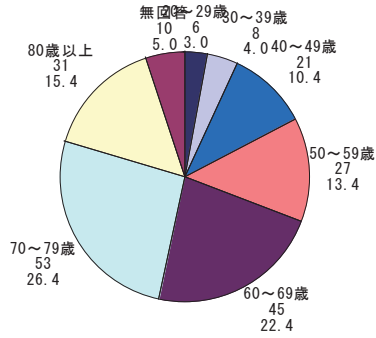
性別構成比

P1 性別 n = 201



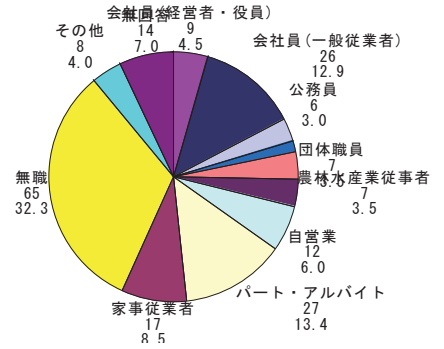
年齢別構成比

P2 年齢 n = 201



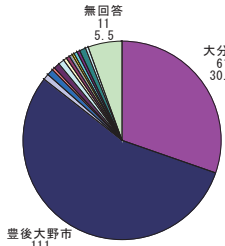
職業別構成比

P3 職業 n = 201

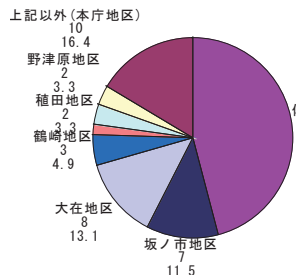


居住地別構成比

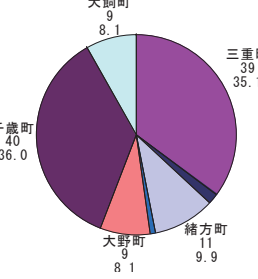
P4 住まい n = 201



P4-1 大分市地区 n = 61

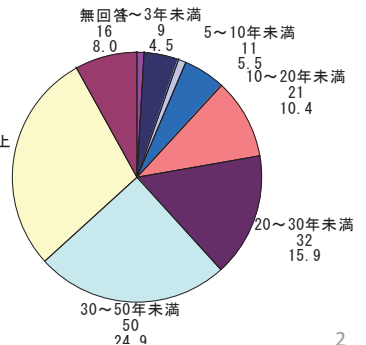


P4-2 豊後大野市地区 n = 111



居住地年数別構成比

P5 居住年数 n = 201



「地(知)の拠点整備事業」【大学COC事業】

調査結果

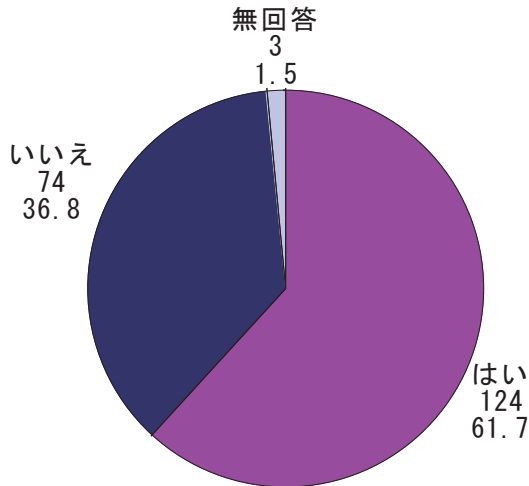
大学の活動について① (大学活動の認知率、貢献度)

活動の認知は全体の61.7%。貢献度については『貢献している』
 (「とても貢献している」+「やや貢献している」)が全体の54.7%を占める。
 (2014年度の認知度29.8%、貢献度26.8%。2016年度の認知度46.0%、貢献度41.5%。)

Q1. 本学の活動をご存じですか。

●大学活動の認知度

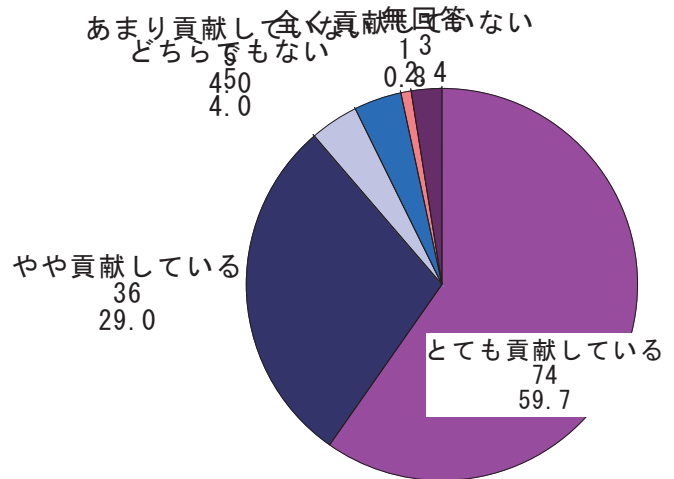
問1-1 本学の活動を知っている n = 201



Q2. 「はい」とお答えいただいた方へ、その活動の取り組みへの感想をお答え下さい。

●大学活動の貢献度 (活動の認知者ベース)

問1-2 貢献度 n = 124



「地(知)の拠点整備事業」【大学 coc 事業】

4

本学の地域貢献度の経年変化①

✓ 本学の地域貢献を評価する県民の割合

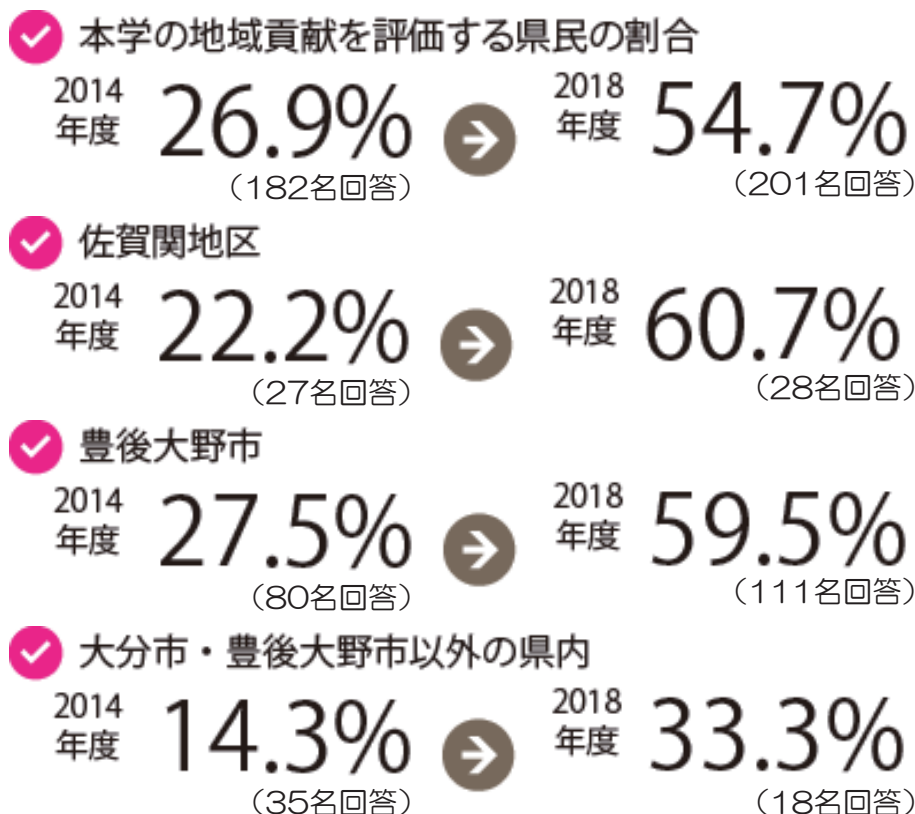
2014年度 26.9% (182名回答) → 2016年度 41.5% (200名回答)

→ 2018年度 54.7% (201名回答)

【最終年度達成目標】 40%以上

5

本学の地域貢献度の経年変化②



「地(知)の拠点整備事業」【大学COC事業】

6

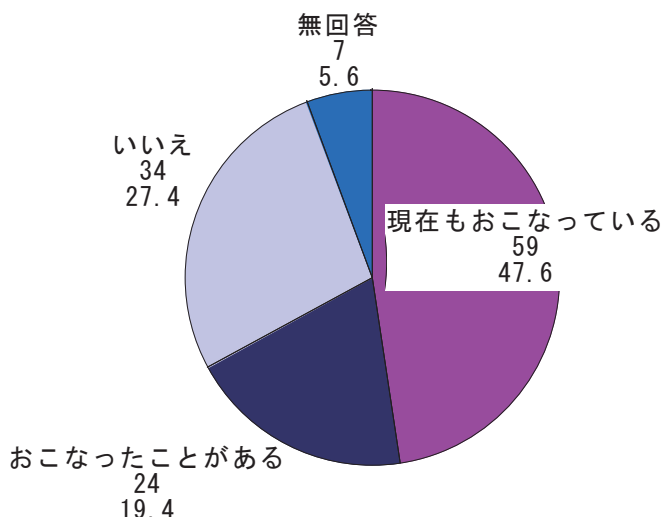
大学の活動について② (活動参加率、地域への波及効果)

**活動認知者のうち実際に活動に参加した方は66.9%。
 活動に参加した方のうち地域への良い効果があったと答えた方は94.0%を占める。**

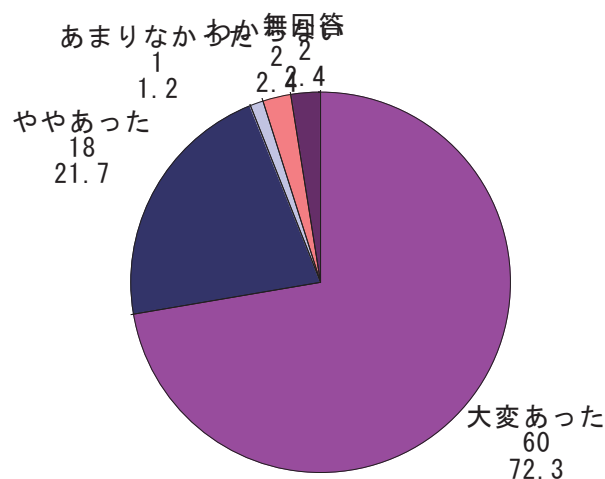
Q3. 本学のCOC活動に直接ご協力、または一緒に取り組みをされたことがありますか。(Q1で「はい」と答えた方のみ)

Qその活動による地域への良い効果がありましたか。(Q3で「現在もおこなっている」「おこなったことがある」と答えた方のみ)

問1-3 活動への参加 n = 124



問1-4 地域への効果 n = 83



「地(知)の拠点整備事業」【大学COC事業】

7

地区別の活動参加率、地域への波及効果



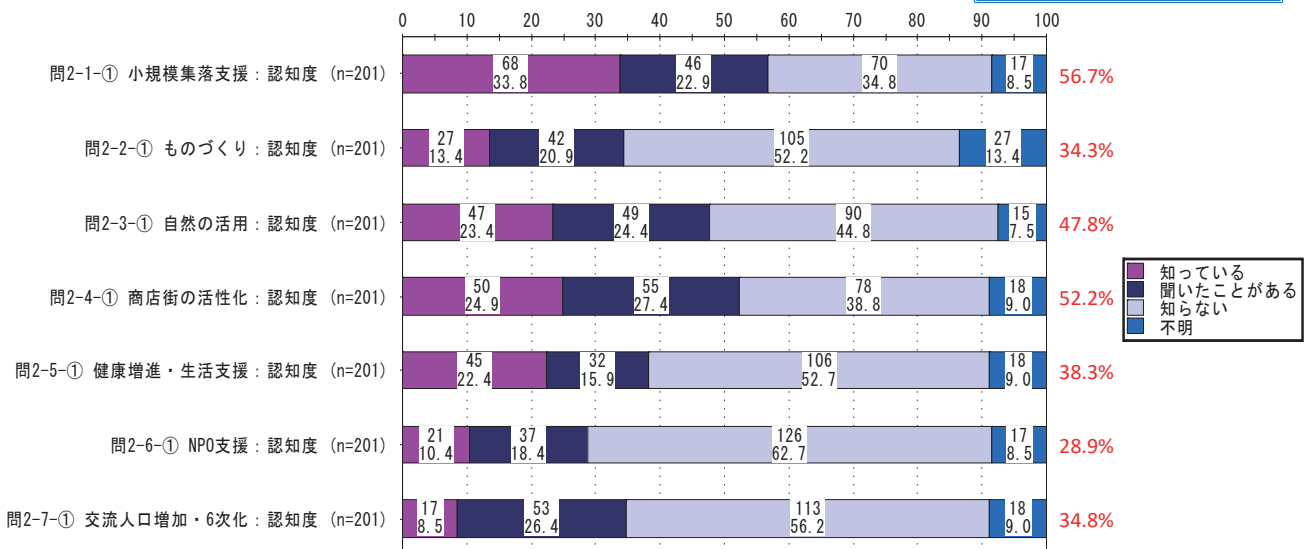
大学の活動について③ (各分野の認知度)

各分野の『認知者』は概ね3割から6割。
 特に「小規模・高齢化が深刻な集落・地域コミュニティの維持・活性」、「地域商店・商店街の活性による地域振興」の認知度が高い(56.7%、52.2%)。(2016年度の傾向とほぼ同じ)

Q. リーフレット等をご覧になって、本学が行ってきた次の分野の活動について、あなたの「①本学活動の認知度」、「②本学活動の満足度(①で1または2と答えた方のみ)」をそれぞれあてはまるものを1つずつ選び、番号に○を付けてください。

「知っている」と「聞いたことがある」の合計割合。

●各分野の認知度



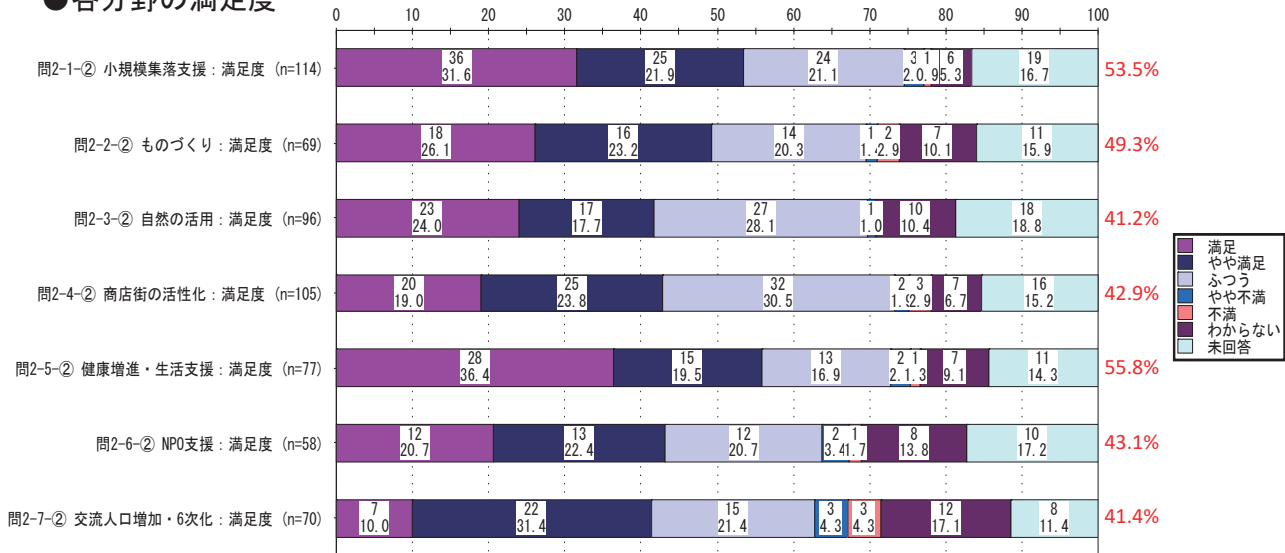
大学の活動について④ (各分野の満足度)

各分野の『認知者』のうちの『満足度』(「満足」+「やや満足」)は4割から6割にのぼる。
特に「健康増進・生活支援によるコミュニティの維持」、「小規模・高齢化が深刻な集落・地域
コミュニティの維持・活性」の満足度が高い(55.8%、53.5%)

Q. リーフレット等をご覧になって、本学が行ってきた次の分野の活動について、あなたの「①本学活動の認知度」、「②本学活動の満足度(①で1または2と答えた方のみ)」をそれぞれあてはまるものを1つずつ選び、番号に○を付けてください。

「満足」と「やや満足」の合計割合。

●各分野の満足度



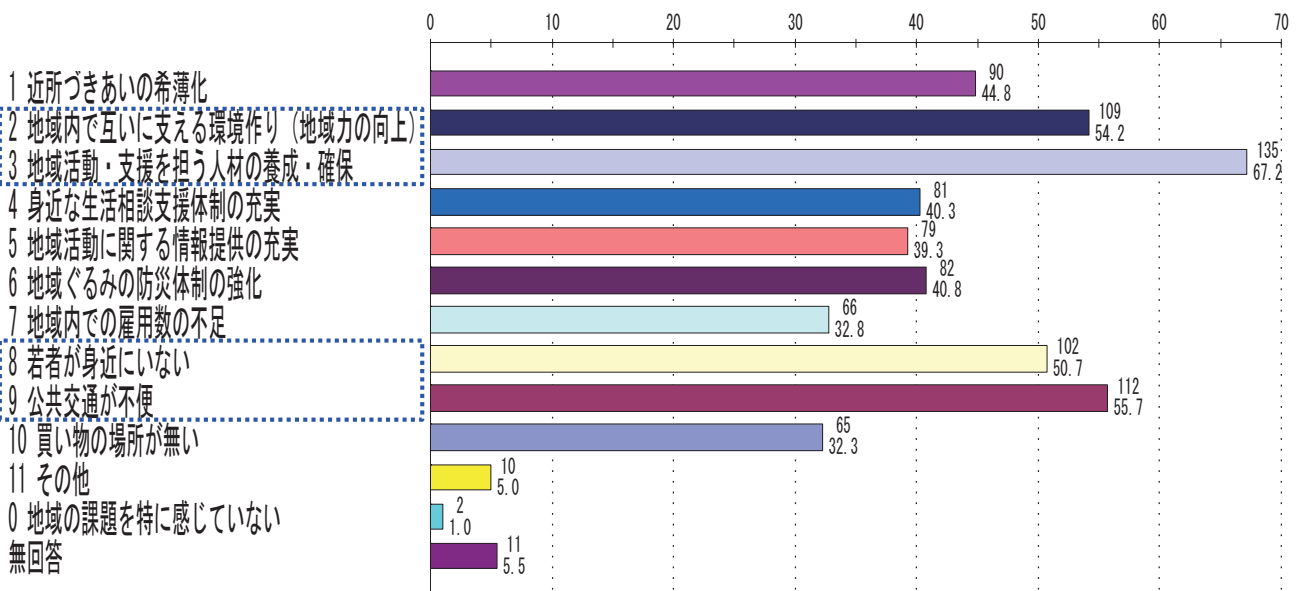
「地(知)の拠点整備事業」【大学COC事業】

地域課題や生活上の問題点

「地域活動・支援を担う人材の養成・確保」、「公共交通が不便」、「地域内で互いに支える環境作り」、「若者が身近にいない」の地域課題や生活上の問題点が過半数を超える。
(「公共交通が不便」以外は2014年度の傾向とほぼ同じ。2016年度とほぼ同じ傾向)

Q. あなたが感じている地域課題や生活上の問題点は以下のうちどれですか。あてはまるものをいくつでも選び○を付けてください。

問3-1 地域課題や生活上の問題点 (複数回答) n = 201



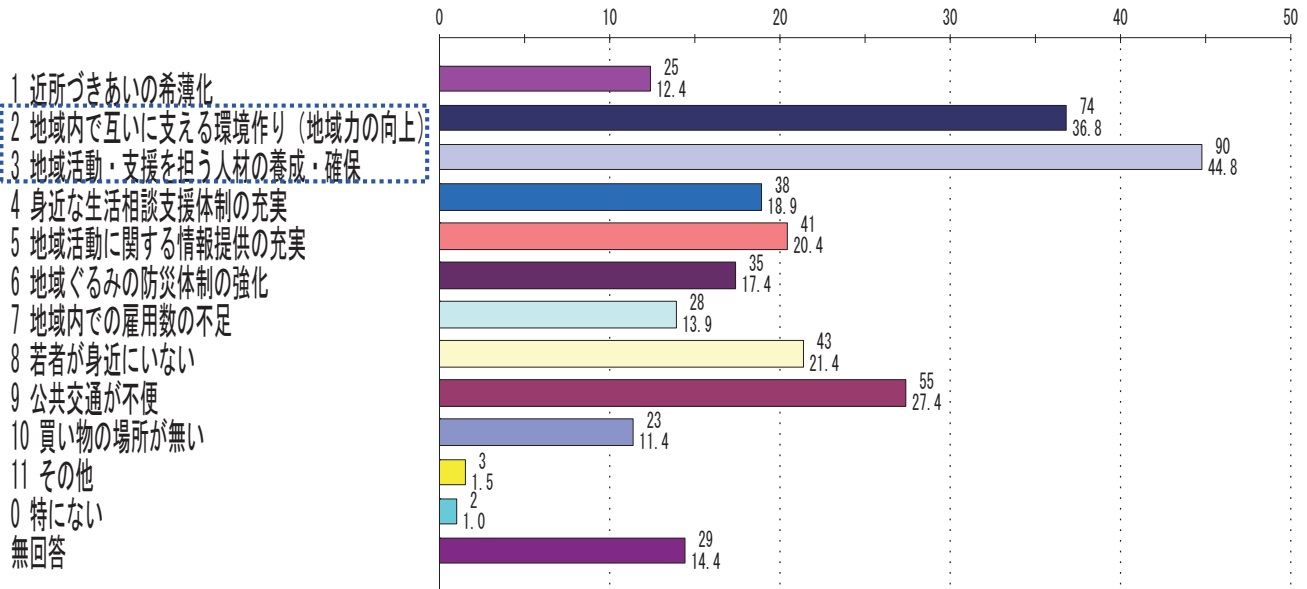
「地(知)の拠点整備事業」【大学COC事業】

本学に今後も取り組んで欲しい課題

「地域活動・支援を担う人材の養成・確保」「地域内で互いに支える環境作り」への取り組み継続への期待が高い
(2014年度、2016年度の傾向とほぼ同じ)

Q. 前問の中で本学に今後も取り組んで欲しい(改善してほしい)課題を3つまで選び、○を付けてください。

問3-2 本学に今後も取り組んで欲しい課題 (3つまで) n = 201



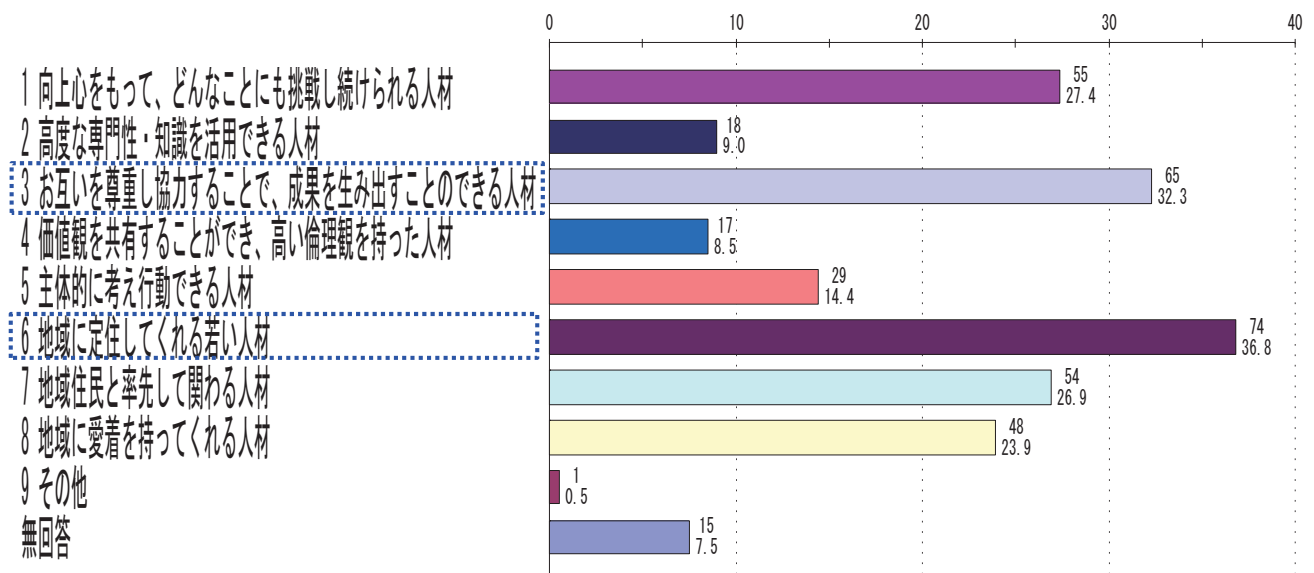
「地(知)の拠点整備事業」【大学COC事業】

地域の中で活躍してほしい人材

「地域に定住してくれる若い人材」、「お互いを尊重し協力することで、成果を生み出すことのできる人材」、「向上心をもって、どんなことにも挑戦し続けられる人材」、「地域住民と率先して関わられる人材」の順に割合が高い。(2014年度の傾向とほぼ同じ)

Q. お住まいの地域の中で今後活躍して欲しい人材としてあてはまるものを、以下のうちから2つまで選び、○を付けてください。

問4 地域で今後活躍して欲しい人材 (2つまで) n = 201



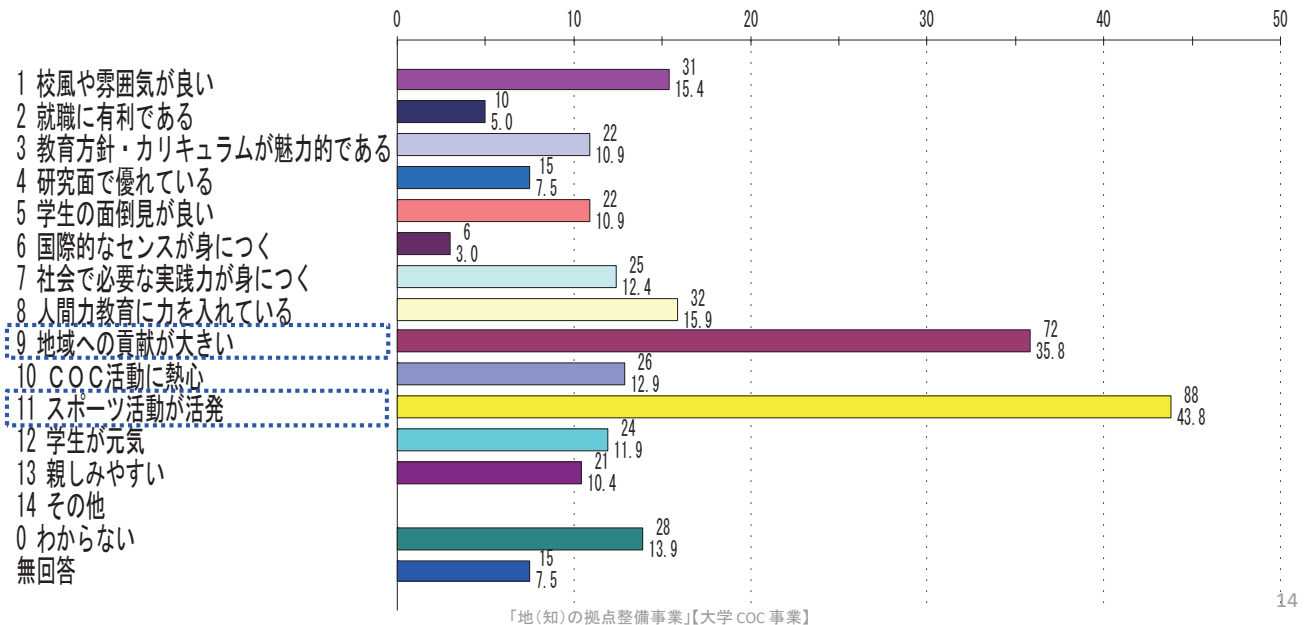
「地(知)の拠点整備事業」【大学COC事業】

本学についてのイメージ

「スポーツ活動が活発」、「地域への貢献が大きい」の割合が突出して高い。
 2014年度調査から割合が伸びた項目は、「地域への貢献が大きい(28.6%→35.8%)」、「校風や
 雰囲気が良い(13.7%→15.4%)」、「学生の面倒見が良い(3.8%→10.9%)」、「教育方針・カリキュラム
 が魅力的である(7.7%→10.9%)」、「親しみやすい(9.9%→10.4%)」

Q. 本学についてどのようなイメージをお持ちですか。あてはまるものを3つまで選び、番号に○を
 付けてください。

問5 本学のイメージ (3つまで) n = 201



調査結果まとめ

調査結果まとめ

活動の認知度や期待度、協力意向

- ☞ 「活動の認知率」は61.7%。「貢献度」は54.7%
- ☞ 貢献度は2014年度:26.7% ⇒ 2016年度:41.5% ⇒ 2018年度:54.7%と着実に伸展し、目標を達成(2018年度:40%以上)
- ☞ 活動認知者のうち実際に活動に参加した方は66.9%
- ☞ 活動に参加した方のうち地域への良い効果があったと答えた方は94.0%
- ☞ 各分野の『認知者』は概ね3割から6割。特に「小規模・高齢化が深刻な集落・地域コミュニティの維持・活性」、「地域商店・商店街の活性による地域振興」が高い
- ☞ 各分野の『認知者』のうちの『満足度』は4割から6割。特に「健康増進・生活支援によるコミュニティの維持」、「小規模・高齢化が深刻な集落・地域コミュニティの維持・活性」が高い

地域課題や問題点、活躍してほしい人材

- ☞ 「地域活動・支援を担う人材の養成・確保」「地域内で互いに支える環境作り」への課題意識及び本学への取り組み継続への期待が高い
- ☞ 地域の中で活躍してほしい人材として、「地域に定住してくれる若い人材」、「お互いを尊重し協力することで、成果を生み出すことのできる人材」の割合が高い

本学のイメージ

- ☞ 「スポーツ活動が活発」、「地域への貢献が大きい」の割合が突出して高い
- ☞ 「地域への貢献が大きい」、「校風や雰囲気が良い」、「学生の面倒見が良い」などの項目の伸びが大きく、COC活動による地域への露出効果が寄与していると思われる

「地(知)の拠点整備事業」【大学COC事業】

16

参考資料(調査票)

参考資料(調査票①)

日本文理大学 地(知)の拠点整備事業【大学COC※事業】 平成30年度 アンケート調査票

※COC…Center Of Community (地(知)の拠点)

問1. これまでに本学の活動を実際に見たり、新聞・テレビ・ホームページなどの報道をご覧になって、本学の地域貢献への取り組みへの感想として、あてはまるものを1つ選び、番号に○を付けてください。

問1-1. 本学の活動をご存じですか。

1. はい 2. いいえ ⇒ 問2へ

問1-2. 問1-1で「1. はい」とお答えいただいた方へ、その活動の取り組みへの感想をお答えください。

1. とても貢献している 4. あまり貢献していない
2. やや貢献している 5. 全く貢献していない
3. どちらでもない



問1-3. 問1-1で「1. はい」とお答えいただいた方へ、本学のCOC活動に直接ご協力、または一緒に取り組みをされたことがありますか。

1. 現在もおこなっている 2. おこなったことがある 3. いいえ

問1-4. 問1-3で「1. 現在もおこなっている」または「2. おこなったことがある」とお答えいただいた方へ、その活動による地域への良い効果がありましたか。

1. 大変あった 3. あまりなかった
2. ややあった 4. 全くなかった
0. わからない

問2. 同封のリーフレット等をご覧になって、本学が行ってきた次の分野の活動について、あなたの「①本学活動の認知度」、「②本学活動の満足度(③で1または2と答えた方のみ)」をそれぞれあてはまるものを1つずつ選び、番号に○を付けてください。

課題番号	項目	①認知度			②満足度					
		知っている	聞いたことある	知らない	満足	やや満足	かたう	やや不満	不満	わからない
1	 小規模・高齢化が深刻な集落・地域コミュニティの維持・活性 【活動内容】高齢化が進んでいる集落等において、地区住民と協働した地域交流拠点の維持・整備や地域づくり活動等を行っています。	1	2	3	1	2	3	4	5	0
2	 人口減少社会を支えるための先進的な「ものづくり」 【活動内容】入出不足を補う農林業支援技術や、高齢者の生活の困り事を支援するロボットの開発・実践等を行っています。	1	2	3	1	2	3	4	5	0

課題番号	項目	①認知度			②満足度					
		知っている	聞いたことある	知らない	満足	やや満足	かたう	やや不満	不満	わからない
3	 自然の積極的な活用による保全と地域活性(観光・教育) 【活動内容】豊後大野市ジオパーク・エコパークや里の旅と連携したひとづくりや、学生活動による観光振興等を行っています。	1	2	3	1	2	3	4	5	0
4	 地域商店・商店街の活性による地域振興 【活動内容】豊後大野市三重町や大分市佐賀間において、人の流れを呼び戻す地域交流イベント等の活動を行っています。	1	2	3	1	2	3	4	5	0
5	 健康増進・生活支援によるコミュニティの維持 【活動内容】総合型地域スポーツクラブの活動支援や、高齢者の福祉・生活支援による地域づくり等を地域と協働で行っています。	1	2	3	1	2	3	4	5	0
6	 NPO法人の活動・経営支援 【活動内容】地域で活躍するNPO(社会貢献等を行う非営利法人や市民団体)との協働活動や財政改善の提案等を行っています。	1	2	3	1	2	3	4	5	0
7	 地域ブランドの発信による交流人口の増加・産業の活性(6次化) 【活動内容】地域の特産品の発掘、ブランド化を行う取り組みを地域と行ったり、道の駅や佐賀間産物の活動等を行っています。	1	2	3	1	2	3	4	5	0

問3. あなたが感じている地域課題や生活上の問題点は以下のうちどれですか。あてはまるものをいくつでも選び○を付けてください。また、その中で本学に今後も取り組んで欲しい(改善してほしい)課題を3つまで選び、○を付けてください。

番号	項目	地域課題・問題点(○はいくつでも)	今後も取り組んで欲しい課題(○は3つまで)
1	近所づきあいの希薄化	1	1
2	地域内で互いに支える環境作り(地域力の向上)	2	2
3	地域活動・支援を担う人材の養成・確保	3	3
4	身近な生活相談支援体制の充実	4	4
5	地域活動に関する情報提供の充実	5	5
6	地域ぐるみの防災体制の強化	6	6
7	地域内での雇用数の不足	7	7
8	若者が身近にいない	8	8
9	公共交通が不便	9	9
10	買い物場所が無い	10	10
11	その他()	11	11
0	地域の課題を特に感じていない・特にな	0	0

「地(知)の拠点整備事業」【大学COC事業】

裏へ

18

参考資料(調査票②)

問4. お住まいの地域の中で今後活躍して欲しい人材としてあてはまるものを、以下のうちから2つまで選び、○を付けてください。

1. 向上心をもって、どんなことにも挑戦し続けられる人材
2. 高度な専門性・知識を活用できる人材
3. お互いを尊重し協力することで、成果を生み出すことのできる人材
4. 価値観を共有することができ、高い倫理観を持った人材
5. 主体的に考え行動できる人材
6. 地域に定住してくれる若い人材
7. 地域住民と率先して関わる人材
8. 地域に愛着を持ってくれる人材
9. その他()

問5. 本学についてどのようなイメージをお持ちですか。あてはまるものを3つまで選び、番号に○を付けてください。

1. 校風や雰囲気が良い 9. 地域への貢献が大きい
2. 就職に有利である 10. COC活動に熱心
3. 教育方針・カリキュラムが 11. スポーツ活動が活発
魅力である 12. 学生が元氣
4. 研究面で優れている 13. 親しみやすい
5. 学生の面倒見が良い 14. その他()
6. 国際的なセンスが身につく
7. 社会に必要な実践力が身につく 0. わからない
8. 人間力教育に力を入れている

問6. 本学の教育・研究・社会貢献活動についての感想や、今後取り組んで欲しいこと、ご要望、ご意見等がありましたら、ご自由にお書きください。(自由回答)

.....

<<最後にあなたのことについてお尋ねします。あてはまる番号に○を付けてください。>>

問1. あなたの性別は

1. 男性 2. 女性

問2. あなたの年齢は

1. 20歳未満 3. 30~39歳 5. 50~59歳 7. 70~79歳
2. 20~29歳 4. 40~49歳 6. 60~69歳 8. 80歳以上

問3. あなたの職種は

1. 会社員(経営者・役員) 7. 自営業
2. 会社員(一般従業者) 8. パート・アルバイト
3. 公務員 9. 家事従事者
4. 団体役員 10. 学生・生徒
5. 団体職員 11. 無職
6. 農林水産業従事者 12. その他()

問4. あなたがお住まいの市町村はどちらですか。大分市・豊後大野市在住の方は、地区までお答えください。

1. 大分市 2. 豊後大野市 3. 別府市 11. 杵築市
(1) 佐賀間地区 (1) 三重町 4. 中津市 12. 宇佐市
(2) 坂ノ市地区 (2) 清川町 5. 日田市 13. 由布市
(3) 大在地区 (3) 緒方町 6. 佐伯市 14. 国東市
(4) 鶴崎地区 (4) 朝地町 7. 臼杵市 15. 日出町
(5) 明野地区 (5) 大野町 8. 津久見市 16. 九重町
(6) 大南地区 (6) 千歳町 9. 竹田市 17. 玖珠町
(7) 穂田地区 (7) 大銅町 10. 豊後高田市 18. 姫島村
(8) 野津原地区
(9) 上記以外
(本庁地区)

問5. 今の居住地には、何年お住まいですか。

1. 1年未満 4. 5~10年未満 7. 30~50年未満
2. 1~3年未満 5. 10~20年未満 8. 50年以上
3. 3~5年未満 6. 20~30年未満

ご協力ありがとうございました。
同封の返信用封筒に入れて、2月2日(土)までにご返函ください(切手不要)。

「地(知)の拠点整備事業」【大学COC事業】

19

おおいた、つくりひと

2 . 大学COC事業 プロジェクトシート



2015年度 COC事業 プロジェクトシート

体感。感動。感謝。
おおいた、つくりびと

豊かな自然と歴史や文化を大切に守り続ける、素晴らしい大分県が、私たちのキャンパスです。

プロジェクト

1

「小規模・高齢化が深刻な集落におけるコミュニティの維持・活性化」

- 101. 豊後大野市大野町土師地区における住民と学生による地域コミュニティ維持活動
- 102. 木佐上地区 IT 講習会
- 103. 韓国料理教室による佐賀関住民との交流会

プロジェクト

2

「人口減少社会を支えるための先進的な”ものづくり”」

- 201. 『地域にいきものづくり』を目指したプロジェクト科目の実践
- 202. 地域創生を目的とした自然エネルギー利用型プラズマ農業に関する基礎研究
- 203. 徘徊老人の位置検出システムのための画像処理ソフトの開発
- 204. 要介護者のコミュニケーション支援システムの開発
- 205. プライバシー問題を生じない見守りシステム実現に向けた電磁波レーダの利活用

プロジェクト

3

「自然の積極的な活要による保全と地域活性化」

- 301. 豊後大野市の地域資源を活かしたサービスラーニング科目への展開
- 302. 豊後大野市ジオパーク・エコパーク・生物多様性戦略に関する市民・学生の普及活動
- 303. 大野町土師地区における防災と生物多様性回復のための基礎的研究
- 304. 地域創生・豊後大野まるごとインターネット・エリアピアビジネス
- 305. 佐賀関半島・触れる観光プロジェクト
- 306. アクアソーシャルフェス in 大分に参加して

プロジェクト

4

「商店街の活性化による地域振興」

- 401. フィールドスタディーを中心とした学生主体の地域活性化カリキュラム
- 402. けんしん大学 まち・ひと・しごと「地方創生」に挑む
- 403. 地域企業向け「地域創生人材」育成のための経営学実践講座

プロジェクト

5

「健康増進及び生活支援によるコミュニティの維持化」

- 501. 小学生を対象とした夏休み体験型自由研究教室
- 502. 地域づくり支援～市民交流の場・楽しく広場「ひょうたん」の活動サポートを通して～
- 503. 佐賀関地区での市内小学生とその保護者を対象とした地域交流教室
- 504. 朝地小学校における継続的な予防的心理教育プログラムの実践
- 505. 大分市大在地区における総合型地域スポーツクラブのイベントを通じた教育実践活動
- 506. 地域住民を主体とした地域づくりによる介護予防に関する域学協働プロジェクト研究

プロジェクト

6

「NPO 法人の活動・経営支援」

- 601. 地域活性化プロジェクト「楽・楽マルシェ」での取り組み報告

プロジェクト

7

「地域ブランドの発掘による交流人口の増加・産業の活性化（6次化）」

- 701. 道の駅原尻の滝インターンシップ
- 702. 6次化産業の取組

プロジェクト

L

「“おおいた、つくりびと” 育成のための地域志向科目・正課外活動」

- 801. 教養基礎教育における地域志向科目の全学必修化
- 802. 身近な政策課題を題材とした課題解決型学修
- 803. 地方創生のための“おおいた”企業求人動画制作
- 804. 大分チャレンジアワード（青少年体験活動奨励制度）の取り組み
- 805. 小学生のお仕事発見ランド in NBU 県央空港キャンパス

2016年度 COC事業 プロジェクトシートリスト

体感。感動。感謝。
おおいた、つくりびと

豊かな自然と歴史や文化を大切に守り続ける、素晴らしい大分県が、私たちのキャンパスです。

「小規模・高齢化が深刻な集落におけるコミュニティの維持・活性化」

プロジェクト

1

- 102. 木佐上地区 IT 講習会
- 103. 国際交流による地域活性化 (地域住民との韓国料理教室)
- 104. 域学連携による学修サイクルの実践 - 建設施工における原価・工程管理実習
- 105. 木佐上コミュニティーセンター開所記念講座
- 106. 小中一貫校に統廃合される小学校 3 校に関する研究
- 107. 豊後大野市中土師地区の生活道路に関する調査及びドローン撮影写真について
- 108. 高齢者向けものづくり教材の開発

「人口減少社会を支えるための先進的な”ものづくり”」

プロジェクト

2

- 201. 『地域にいきものづくり』を目指したプロジェクト科目の実践
- 202. 大分県農業のブランド化と関連産業活性化を目的とした
自然エネルギー利用型プラズマ農業に関する研究開発
- 203. 徘徊老人の位置検出システムのための画像処理ソフトの開発
- 204. 要介護者のコミュニケーション支援システムの開発
- 205. プライバシー問題を生じない見守りシステム実現に向けた電磁波レーダの利活用
- 206. ものづくりによる地域貢献
- 207. 生きがいのある暮らしを創るオープンイノベーションワークショップ

「自然の積極的な活要による保全と地域活性化」

プロジェクト

3

- 301. 豊後大野市の地域資源を活かしたサービスラーニング科目への展開
- 303. 大野町土師地区における防災と生物多様性回復のための基礎的研究
- 304. 豊後大野市を例とした「地方消滅」に関する研究
- 307. 大学生観光まちづくりコンテスト 2016
- 308. 祖母傾山系のエコパーク認定に向けた地域資源の発掘
- 309. 地域資源を活用した地域観光プロモーションにおける需要予測に関する研究

「商店街の活性化による地域振興」

プロジェクト

4

- 401. フィールドスタディーを中心とした学生主体の地域活性化カリキュラム
- 402. 学金連携による「地域創生人材」の育成に向けた取り組み
- 403. 地域企業向け「地域創生人材」育成のための経営学実践講座
- 404. シカケから見えてくる地域課題

「健康増進及び生活支援によるコミュニティの維持化」

プロジェクト

5

- 501. 大学で楽しく学ぼう 小学生対象 NBU 体験教室 2016
- 504. 朝地小学校における継続的な予防的心理教育プログラムの実践
- 506. 地域住民を主体とした地域づくりによる介護予防に関する域学協働プロジェクト研究
- 507. スポーツイベント実践を通じた地域創生人材の育成
- 508. 地域住民主体の地域づくり支援

「NPO 法人の活動・経営支援」

プロジェクト

6

- 601. 地域活性化プロジェクト「楽・楽マルシェ」での取り組み報告

「地域ブランドの発掘による交流人口の増加・産業の活性化(6次化)」

プロジェクト

7

- 701. 道の駅原尻の滝インターンシップ
- 702. 6次化商品開発に取り組む企業との連携
- 703. 動画ニュース制作「地域の芽、学生の目 NBU ビデオ通信」
- 704. 国際交流による地域活性化(韓国料理教室、道の駅原尻の滝インターンシップ)
- 705. 農産物の付加価値アップによる地域の活性化・産業創出活動への参加

「「おおいた、つくりびと」育成のための地域志向科目・正課外活動」

プロジェクト

L

- 801. 教養基礎教育における地域志向科目の全学必修化
- 802. 身近な政策課題を題材とした課題解決型学修
- 803. 地方創生のための「おおいた」企業求人動画制作
- 804. 大分チャレンジアワード(青少年体験活動奨励制度)
- 805. 小学生のお仕事発見ランド in 犬飼
- 806. 豊後大野市における正課外活動「豊後大野プロジェクト」の取り組み
- 807. Kids Smile Project
- 808. 九州・沖縄 COC 学生情報交換会 in 湯布院
- 809. ジェネリックスキル養成研修～COC+ 事業における汎用力の向上～
- 810. おおいた地域創生リーダー養成講座

2017年度 COC事業 プロジェクトシートリスト

体感。感動。感謝。

おおいた、つくりびと

豊かな自然と歴史や文化を大切に守り続ける、素晴らしい大分県が、私たちのキャンパスです。

「小規模・高齢化が深刻な集落におけるコミュニティの維持・活性化」

プロジェクト
1

101. 豊後大野市大野町土師地区における住民と学生による地域コミュニティ維持活動
102. 木佐上「まなび庵」～木佐上 IT 講習会～
103. 留学生料理教室による佐賀関の交流会
108. 高齢者向けものづくり教材の開発
109. 豊後大野市ふるさと体験村における『建築マネジメント演習及び実習』の取り組み
110. 豊後大野市大野町土師地区における『環境・地域創造演習』の取り組み
111. 地域と学生の協働による豊後大野市ふるさと体験村「開村式」の運営
112. 佐賀関半島における地域体験交流活動研修『プロジェクト1』の取り組み
113. 豊後大野市大野町土師地区における地域体験交流活動研修『プロジェクト1』の取り組み

「人口減少社会を支えるための先進的な”ものづくり”」

プロジェクト
2

201. 『地域にいきるものづくり』を目指したプロジェクト科目の実践
206. ものづくりによる地域貢献～被災時避難所としての廃校活用提案～
207. 生きがいのある暮らしを創るオープンイノベーションワークショップ
208. ロボメカデザインコンペ 2017 への取り組みを通じた地域課題への挑戦
209. 地域経済を考慮した地域課題取り組みに向けたプラットフォーム構築

「自然の積極的な活要による保全と地域活性化」

プロジェクト
3

305. 佐賀関半島・触れる観光プロジェクト
309. 地域資源を活用した地域観光プロモーションにおける需要予測に関する研究
310. 豊後大野 PR 動画プロジェクト
311. 豊後大野酒蔵巡りプロジェクト
312. 豊後 DEN 説 2nd Generation
313. あそぼーい！ポストカードプロジェクト
314. 学生の地域資源を活用した観光プロモーション活動におけるコースを横断した教育改革

「商店街の活性化による地域振興」

プロジェクト
4

403. 地域企業向け「地域創生人材」育成のためのマネジメント実践講座
404. 「シカケ」から見える地域課題 シカケプロジェクト
405. 「おおいた地域創生リーダー養成講座 2017 in 三重町」の取り組み
406. 大分市佐賀関・関地区における『環境・地域創造演習』の取り組み

「健康増進及び生活支援によるコミュニティの維持化」

プロジェクト
5

501. 大学で楽しく学ぼう!! 小学生対象 NBU 体験教室 2017
504. 豊後大野市内の小中学生における社会的スキルの学校規模による比較と予防的心理教育プログラムの展開
505. 総合型地域スポーツクラブの教室・イベントを通じた教育実践活動
506. 地域住民を主体とした地域づくりによる介護予防に関する域学協働研究
508. 地域住民主体の地域づくり支援～『サービスマーケティングII』『フィールドスタディI』を通して
509. 住民主体の地域活動について

プロジェクト
6

「NPO 法人の活動・経営支援」

601. 地域活性化プロジェクト「楽・楽マルシェ」での取り組み

プロジェクト
7

「地域ブランドの発掘による交流人口の増加・産業の活性化(6次化)」

703. 動画ニュース制作「地域の芽、学生の目 NBU ビデオ通信」
706. 交流人口拡大による佐賀関半島の活性化に関する研究
707. 大分市佐賀関・関地区の地域課題解決を目指す「さかのせきローカルデザイン会議」の取り組み

プロジェクト
L

「おおいた、つくりびと」育成のための地域志向科目・正課外活動」

801. 教養基礎教育における地域志向科目の全学必修化～『大分学・大分県』『産学一致の勧め』ほか～
802. 身近な政策課題を題材とした課題解決型学修～『社会参画実習1』における学部混成ワークショップ
803. 地方創生のための学生目線による地域企業リクルートビデオ制作プロジェクト
805. 小学生のお仕事発見ランド in 佐賀関
807. Kids Smile Project
809. ジェネリックスキル養成研修～COC+ 事業における汎用力の向上～

2018年度COC事業プロジェクトシートリスト

体感。感動。感謝。

おおいた、つくりびと

豊かな自然と歴史や文化を大切に守り続ける、素晴らしい大分県が、私たちのキャンパスです。

「小規模・高齢化が深刻な集落におけるコミュニティの維持・活性化」

プロジェクト

1

101. 豊後大野市大野町土師地区における住民と学生による地域コミュニティ維持活動
102. 木佐上「まなび庵」～木佐上IT講習会～
103. 国際交流による地域活性化（料理教室による地域住民との交流活動）
106. 大分市立小中一貫校における教師ステーションの利用実態から見た執務空間について
108. 高齢者向けものづくり教材の開発
109. 豊後大野市ふるさと体験村における『建築マネジメント演習及び実習』の取り組み
110. 豊後大野市大野町土師地区における地域インターンシップ『環境・地域創造演習』の取り組み
111. 地域と学生の協働による豊後大野市ふるさと体験村「開村式」の運営
112. 佐賀関半島における地域体験交流活動研修『プロジェクト1』の取り組み
113. 豊後大野市大野町土師地区における地域体験交流活動研修『プロジェクト1』の取り組み
114. 中判田駅を中心とするまちづくりプロジェクト
115. 佐賀関におけるブロック塀の耐震性に関する調査～地域住民への危険ブロック塀の啓発のために～
116. 設計製図3 第1課題「超高齢社会に希望をもたらす二世帯住宅」
117. 第二の人生でまちづくりをしませんか？～豊後大野市 CCRC～

「人口減少社会を支えるための先進的な”ものづくり”」

プロジェクト

2

201. 地域にいけるものづくりの取組み～ロボットプロジェクト関連科目での取組み～
207. 生きがいのある暮らしを創るオープンイノベーションワークショップ
210. マイクロエコ風車を用いたIoT統合プラットフォーム拠点事業
211. 地域に根差したものづくりに情報システム分野ができること
～バイタルモニタに必要な筋活動の計測・分析手法の提案～

「自然の積極的な活要による保全と地域活性化」

プロジェクト

3

301. 豊後大野市の地域資源を活かしたフィールド・スタディ科目への展開
302. ジオパーク・エコパーク等に関する市民・学生の普及活動
306. アクアソーシャルフェス in 大分
308. 祖母傾山系のエコパーク活動を意識した地域資源の発掘
314. 学生の地域資源を活用した観光プロモーション活動におけるコース・学科を横断した教育改革
315. 最新の研究から見てきた地域の宝物『中津干潟』の現在と将来

「商店街の活性化による地域振興」

プロジェクト

4

401. フィールド・スタディを中心とした学生主体の地域活性化カリキュラム
402. 学連携による「地域創生人材」の育成に向けた取組
403. 「地域創生人材」育成のための管理能力向上講座
405. 「おおいた地域創生リーダー養成講座 in 三重町」の取り組み
407. 建築学生が創るノントランポイント～「絵本パレット」ワークショップ連携による市場ストーリーの可能性～
408. 中津市中心部における地域の魅力発掘と課題解決プロジェクト
409. どのようにして地域を活性化させるか？豊後大野レール館を通して

「健康増進及び生活支援によるコミュニティの維持化」

プロジェクト

5

504. 豊後大野市内の小中学生における社会的スキルの学校規模による比較と予防的心理教育プログラムの展開
505. スポーツイベント実践を通じた地域創生人材の育成
506. 地域住民を主体とした地域づくりによる介護予防に関する域学協働研究
508. 地域住民主体の地域づくり支援～『サービスマーケティングⅢ』『フィールドスタディⅡ』を通して
510. 大在地区の子育て支援に関する地域課題解決に向けた取り組みの提案

プロジェクト

6

「NPO 法人の活動・経営支援」

601. 地域活性化プロジェクト「楽・楽マルシェ」での取り組み報告

「地域ブランドの発掘による交流人口の増加・産業の活性化（6次化）」

プロジェクト

7

702. 6次化商品開発に取り組む企業との連携
703. 動画ニュース制作「地域の芽、学生が目 NBU ビデオ通信」
706. 国道九四フェリー四国側利用者の交通行動特性と佐賀関観光志向に関する研究
707. 大分市佐賀関・関地区の地域課題解決を目指す「さかのせきローカルデザイン会議」の取り組み
708. 佐賀関半島・観光VR体験「さかのせきローカルデザイン会議」による観光活性化の取り組み
709. 地域資源を活用した地域観光プロモーションにおける需要予測に関する研究

「「おおいた、つくりびと」育成のための地域志向科目・正課外活動」

プロジェクト

L

801. 教養基礎教育における地域志向科目の全学必修化～『大分学・大分祭』『産学一致の動機』ほか～
802. 身近な政策課題を題材とした課題解決型学修～『社会参画実習1』における学部混成ワークショップ
803. 地方創生のための学生目線による地域企業リクルートビデオ制作プロジェクト
804. 大分チャレンジアワード 青少年体験活動奨励制度
805. 小学生のお仕事発見ランド in 豊後大野
806. 豊後大野市における正課外活動「豊後大野プロジェクト」の取組み
807. Kids Smile Project
809. ジェネリックスキル養成研修～COC+事業における汎用力の向上～
810. おおいた地域創生リーダー養成講座～地方創生時代に活躍できる社会人を目指そう～

はプロジェクトシート未掲載

豊後大野市大野町土師地区における住民と学生による地域コミュニティ維持活動



実施体制：池畑義人、吉村充功、園田一則、杉浦嘉雄、菅雅幸、濱永康仁（建築学科）

実施フィールド：豊後大野市大野町土師地区

連携機関：土師振興協議会、NPO法人ABC野外教育センター

概要

大分県内に多く見られる小規模集落は、超高齢化、人口減少により、地域コミュニティを維持することが難しくなっている。そこで、建築学科では地域の課題を技術者の視点で解決できる人材を育成する「環境・地域創生コース」を設置している。本コースでは、人口 153 人、82 世帯、高齢化率 67%（2015 年国勢調査）の小規模集落である豊後大野市大野町土師地区をフィールドとして、コミュニティの維持策を探り、実践する取り組みを、地区の協力を得て、2011 年度より正規のカリキュラムとして取り組んでいる。本コースでは、「体験交流活動による動機付け」→「知識の修得・定着」→「課題解決型学修」という学修サイクルを明確化した科目群を導入している。このサイクルにより、学生は地域でのやりがいを感じるとともに、自分に不足する知識・技能を自覚し、その後の学びを深化できる。上級学年では実際に地域の課題解決に取り組むことで、将来、地域で活躍するために必要な幅広い能力の定着を図ることを目指している。

環境・地域創生コースに関する主な科目群

科目名	開講学年	属性		体験交流型
プロジェクト1	1年通年	専門	選必	
正課外活動	-	-	-	知識の修得
大分学・大分祭	1年前期	教養	必修	
森里海連環学と地球的課題	1年後期	教養	選択	環境創生型
流域生態論	2年前期	専門	選必	
環境計画論	2年後期	専門	選必	課題解決型
地域再生論	3年前期	専門	必修	
環境・地域創造演習	3年前期	専門	選必	課題解決型
建設マネジメント演習及び実習	3年後期	専門	選必	
研究ゼミナールA/B	3年前後期	専門	選択	
卒業研究	4年通年	専門	必修	

取組内容

1 年次は通年科目『プロジェクト1』において、地域の営みを知るため、季節に応じた農林業・地域環境維持体験活動を 2017 年度は 6/4、8/8、10/7～8（合宿）の 3 回実施した（台風 5 号のため夏合宿を秋合宿に変更）。特に 3 回目は 9 月の台風 18 号の直後ということもあり、河川プールが土砂で完全に堆積するなどの被災状況も目のあたりにした。体験交流活動を通じて地域に対する興味関心が高まった学生は、学年を越えて地域での活動に正課外活動として参加している。2017 年度は地域の交流拠点施設であり、地区住民による自主運営がなされている「ふるさと体験村」の開村式（7/16）の運営スタッフとして、直前の現地準備や当日の受付、駐車場誘導、鮎のつかみ取り・学生自主企画などのイベント運営を行い、盛大に開催できた。

3 年次は課題解決型学修として、2 つの取り組みを行っている。1 つは『環境・地域創造演習』における 2 泊 3 日の合宿形式の授業である（8/31～9/2）。学生チームで地区住民へのインタビュー、フィールドワークを行い、2017 年度は専門分野の視点等から、①継承・発信すべき地域の魅力を整理し、②地域を訪れる人へ記念となるようなグッズ等の試作を、テーマとして実施した（最終日に地区住民への成果発表・提案会）。もう 1 つは、『建設マネジメント演習及び実習』における体験村内の施設整備である。住民の要望等を踏まえ、2017 年度は、五右衛門風呂・竪穴式住居内の靴箱等の製作を 4 班に分かれて実施しており、12/2 に下見、その後、学内での図面製作、資材調達等を経て、12/26 に準備施工を行った。1/20、21 に本施工を実施・完成し、最終的に原価管理等を行い、一連の施工工程を体験できた。

学生の学び

上記に記載した体験村や地域での各種施設の改修や環境整備の充実を現在も進行中である。また、学生との様々な協働活動は地区住民に活力をもたらしており、体験村の振興協議会での自主運営への一助にもなっている。さらには、学生達の訪問を心待ちにしておられ、地区住民の生きがいにもつながっている。

今後の展開

全体的には「地域により積極的に関わろう」、「地域の期待に応えよう」とする主体性が身についた学生が多く見られる。課題解決型学修では、専門知識・技能の活用を通じた専門力の深化が見られる。低学年の各活動では地域住民との交流や学生同士がチームで活動するため、チームワークやコミュニケーションの重要性の理解・向上が見られる。各活動の前には学生が個々の目標を設定し、教員の事前面談、事後の振り返りを徹底しており、学修効果が高まっている。



『プロジェクト1』における体験活動



『環境・地域創造演習』における住民ヒアリング



『建設マネジメント実習』における現地施工実習



木佐上「まなび庵」～木佐上IT講習会～



実施体制：福島学（情報メディア学科）、市田秀樹（COC事業担当）

実施フィールド：大分市木佐上地区

連携機関：木佐上連合区、木佐上コミュニティ

概要 本講座は、2016年度から「タブレットの使い方」から始まった「IT講習会」である。スマートフォンやタブレット端末は、急速に普及し、高齢者のコミュニティにおいても所有している方が増大しているが、まだまだ「持っている」という状態であり、「どう使うの?」という場面が多々存在するが、孫の写真や旅行の写真を手元に残すための便利なグッズとなってきている。そこで、本年度は、「この目的のために学ぼう」に対応して必要な事が学べる講座として、木佐上コミュニティが実施する「まなび庵」の中で実施した。

ここでは「この目的のためにどう使えばいいの?」という疑問に基づいての「まなび」の場とした。また、大分市木佐上地区は、2017年度の台風18号の水害の影響を受け、改めて「防災」「災害発生時」といった「有事」の時の活用法が、コミュニティ内で議論されていたことを踏まえ、これまでのIT講習会で学んだ「LINE」を活用する方法を加えて、本講座を開催した。



図1 「まなび庵」の様子

取組内容 地域にある拡声装置は夕方のメロディや地域の案内といった「地域コミュニティの情報共有」に利用できる施設であるが、本来の目的は「自然災害時に必要な情報を伝える」ための設備である。このように「日頃から使っている」が「いざ」という時にも使えるようになるには必要であり、どんなに優れた機能を持っていても「いざ」という時に「どう使うんだっけ?」では困る状況が生じる。この講座では「LINE」という「普段使うと便利」でかつ「緊急時に役立つ」アプリケーションの使い方を学ぶ。具体的な目標としては、「自分で」「やりたいことができる」ようになることを目指した。



図2 「まなび」に適した環境創り

地域での成果 地域の情報が地図でいろいろ出ていることを見ることから始め、自分達でも登録できることを紹介した。まだ地域の情報発信には結びついていないが、地域のコミュニティ形成と多くの方々に魅力を知っていただく手がかりになった。



図3 木佐上地区の水害の様子

(<http://himawari928.hatenablog.com/entry/20170917/1505644405>)

学生の学び コミュニケーションの基本である「聴き取れる」の次のステップである「聴いてて疲れないか」まで一歩踏み込んで会場作りを行った。これまでは「IT講習会」で「機材と使う技術」だけに着目していたが、「講習会でお迎えする」ことを考えるために「一歩」踏み込んだ「講習会とその環境」にまで気を配った。

今後の展開 スマートフォンに代表されるようなIT技術が使えるようになるだけでなく、「まなび」が「できる事を増やす」ことであること、そしてそれが「豊かで活力あふれる毎日」の礎であることを共有しながら、講座内容が地域の発展につながるように、2018年度の開催を検討していく。

図4 LINEの位置通知機能を使った地域マップの例



国際交流による地域活性化 (料理教室による地域住民との交流活動)



実施体制： 泉丙完（経営経済学科）、永松昌樹（経営経済学科）

実施フィールド： 豊後大野市

連携機関： 豊後大野市まちづくり推進課

概要

国際交流による地域活性化を目指し、豊後大野市において、韓国人留学生と地域住民との国際交流活動を行った。豊後大野市は、別府市や由布市に比べ外国人には知名度が低く、本学の留学生も訪れる機会が少ない地域であった。そこで、本学の留学生に地域をより知ってもらい地域をアピールしてもらうため、留学生による韓国料理教室を行った。料理教室では、日本人学生、地域住民が一緒になって地域食材を使った韓国料理を作ったり、地域食材による地域活性化について議論を行った。

また、本交流会がきっかけとなって、その後に地域住民や留学生と日本人学生との個人的な交流が芽生え、様々な活動を自主的に行ったりしている。



料理教室の様子



事前の検討会

取組内容

豊後大野市において、地域住民、留学生及び日本人学生と一緒に、地域食材を使った韓国料理を作り試食を行った。その後、地域食材を使った地域活性化についてディスカッションを行った。本料理教室は、豊後大野市まちづくり推進課と日本文理大学韓国人留学生会との共同により開催した。

実施日は平成30年7月7日で、参加者は合計36名（留学生6、日本人学生7、地域住民18、教職員3、市職員2）であった。料理教室においては、地域住民、韓国人留学生、日本人学生が一緒になって地域食材を使った韓国料理を作り、交流を深めた。試食会の後、七夕の短冊作りを行い、留学生に日本の習慣についての理解を深めてもらった。



作った料理の試食

地域での成果

地域住民にとっては、馴染みがなかった韓国留学生達と一緒に料理を作るという共同作業を通して学生達との距離を縮め、国際交流が促進された。また、料理会の後には、留学生と日本人が一緒になって願いをこめた短冊を作った。地域住民の方からは、このような活動を継続して欲しいとの要望が強かった。

また、交流会がきっかけになり、学生と地域住民らとの個人的なつながりができ、留学生らや地域住民、日本人学生らと交流も行われるようになった。



短冊作り

学生の学び

韓国人学生にとっては馴染みがなかった豊後大野市での体験を通して地域を知るきっかけになった。また、本イベントを通して、留学生だけでなく日本人学生も自分達とは全く異なる価値観や発想に刺激された。

今後の展開

本活動は一時的なイベントとして終わらすのではなく、継続的に活動を続け、国際交流による地域活性化という新たな可能性を模索していきたいと考えている。



プロジェクト

1

域学連携による学修サイクルの実践 -建設施工における原価・工程管理実習-



実施体制：池畑義人、吉村充功（建築学科）

実施フィールド：豊後大野市 大野町中土師地区

連携機関：土師地区振興協議会

概要 建築学科では 2011 年度から 6 年間にわたって、豊後大野市大野町土師（はじ）地区において体験・交流活動および課題解決型学修を実践してきた。これらの活動に関連する科目群を右表に示している。このように建築学科のカリキュラムは、土師地区をフィールドとして段階的な学修が達成できるように構成されている。土師地区は豊後大野市北部の山間に位置する高齢化率が 80% を超える地域である。この地区の中心部には、河川プールを併設したキャンプ施設である「ふるさと体験村」があり、地域のシンボルとして住民の手によって運営・維持管理されている。この地域を中心に展開される建築学科の学修の過程において、地域住民と学生の交流および、農業や建設分野における地域貢献活動、地域活性化の提案がなされている。この取り組みでは、建築学科の専門科目である『建設マネジメント演習及び実習』（以下、『建設マネジメント』）において地域をフィールドとしたものづくり教育の実践について報告する。

建築学科環境・地域創生コースの科目群

科目名(開講学年)	属性	
プロジェクト1 (1年)	専門	体験・交流活動
正課外活動 (1~2年)	-	
大分学・大分業 (1年)	教養	知識の修得
森里海運環学 (1年)	教養	
データ解析演習 (1年)	専門	
流域生態論 (2年)	専門	
地域再生論 (2年)	専門	課題解決型実習
環境・地域創造演習(3年)	専門	
建設マネジメント(3年)	専門	
研究ゼミナールA/B (3年)	専門	
卒業研究 (4年)	専門	

取組内容 『建設マネジメント』は、建設施工現場において必要とされる、原価・工程管理について学修する科目である。前半は座学によって原価・工程管理の理論を学び、後半では模擬的な建設工事を行うことで原価・工程管理を実践して座学で学んだ理論を定着させている。『建設マネジメント』の実践において、「ふるさと体験村」の五右衛門風呂、収納棚、靴箱を設計・施工し、その過程に関する原価・工程管理を行った。

地域での成果 これらの施設の完成によって、学生自身の手でふるさと体験村の魅力を向上させることができた。また、設計・施工の過程において、学生と地域住民と協議を重ねることで、地域と学生の一体感が強まった。これらの有形、無形の成果によって豊後大野市においても、土師地区は大学と連携して地域が活性化している地域であるという認識が広がりつつある。



建築学科環境・地域創生コースの科目群

学生の学び 1 年次から関わってきたふるさと体験村において、自分たちがお世話になった施設を活用して、原価・工程管理の知識を身につけることができた。また地域の方々の感謝の声を聞くことで、多くの学生が地域で学ぶことの意味を改めて深く理解することができた。

今後の展開 『プロジェクト1』は、地域づくり副専攻の科目として他学科にも開講されている。今後は地域づくり副専攻の受講者を増やし、土師地区以外にもフィールドを拡大しながら他学科にも取り組みを拡げる計画である。



五右衛門風呂を作成する様子



OB から技術指導を受ける様子

NBU 日本文理大学

〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097-592-1600 (大代表)
Web: <http://www.nbu.ac.jp>
【COC事業担当】
TEL / FAX: 097-524-2663 (直通)
Web: <http://coc-nbu.jp>
e-mail: coc@nbu.ac.jp



あおいた、つくりびと

『あおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『あおいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろうか。日本の未来を担う若者ができることは？ きっと、その答えはひとつではありません。だからこそ、私たちは動き始めます。そのステップは、私たちの大学がある大分県。大分への愛着を勇気に変えて、大分できがけないことにチャレンジします。地域の皆さんとともに、もっともっと元氣なまちをつくりまします。私たちは大分県の未来を拓く『あおいた、つくりびと』になりたい。

木佐上コミュニティーセンター 開所記念講座

実施体制：橋本堅次郎、今西衛、鍋田耕作、河村裕次、坂口昌宏（経営経済学科）

実施フィールド：大分市 木佐上地区

連携機関：木佐上連合区、木佐上コミュニティー



概要 大分市佐賀関木佐上地区は、高齢化率が約50%となり、少子化も進行している。このような状況の中、本学では、木佐上小学校（2014年度開校）を拠点としたコミュニティーづくりがスタートとした。このオープニング・セレモニーで、経営経済学科（ビジネスソリューションコース、地域マネジメントコース、こども・福祉マネジメントコース合同）では、木佐上地区のこどもたちを対象に『郷土愛を育む～大分について学ぼう～』をテーマとした講座を開催した。

取組内容 この講座では、まず、こども・福祉マネジメントコースの学生が、「アイスブレイキング」という参加した子どもたちとコミュニケーションを図る活動を行った。この目的は、初対面の人どうしの緊張をときほぐすことにある。

そして、次のコーナーでは、地域マネジメントコースの学生たちが担当する「おおいたパネルクイズ」とビジネスソリューションコースの「コンビニクイズ」が行われた。

「おおいたパネルクイズ」では、宇佐神宮や原尻の滝など、大分各地の名所がパネルクイズ形式で紹介された。自分の郷土の歴史や魅力について楽しみながら学んでほしいと、学生自らが問題を考え、パネルなどを準備した。

「コンビニクイズ」では、日本全国に展開しているコンビニエンスストアの基本的な知識をクイズ形式で学んだり、パズルゲームを通して学んだり、あまり学校では学ばない地域の身近なお店について楽しく学ぶ機会を提供した。

地域での成果 この講座の開催した学生の全体的な感想からは、「体育館でのゲーム、教室でのクイズどちらも子どもたちは楽しそうにしてくれた」、「笑顔がたくさん見れて、楽しかったとみんな言ってくれたので、満足してもらえたと思う」、「子ども、保護者の方も笑顔だったので良かったと思う。最後に「楽しかった」と子どもたちに聞いたが、皆、「楽しかった」と言ってくれた」などがあった。

学生の学び この講座の運営をとおして、子どもたちとの交流において、「自分からこころを開くことの大切さ」、「参加者とともに一緒に楽しむ」ことを学んだ。それから、このような講座で、子どもたちとの距離を縮めるためには、「学生から教えるだけでなく、子どもたちから教えてもらうことの大切さ」を学んだ。

今後の展開 今後は地元の世代間交流を図ることや、地域や大分のことを学ぶ機会を提供することで、大学生と地元の子もたちや高齢者などのさまざまなつながりづくりや学びを通して、木佐上コミュニティーセンターの活性化に向けた一助になればと考えている。



当日にむけてのロールプレイ



おおいたパネルクイズ



コンビニクイズ



閉会式後、みんなで記念撮影



おおいた、つくりびと

NBU 日本文理大学

〒870-0397 大分県大分市一木1727

TEL : 097-592-1600 (大代表)

Web : <http://www.nbu.ac.jp>

【COC事業担当】

TEL / FAX : 097-524-2663 (直通)

Web : <http://coc-nbu.jp>

e-mail : coc@nbu.ac.jp



coc-nbu.jp



『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけではかき回すことができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろうか。日本の未来を担う若者ができることは？ きっと、その答えはひとつではありません。だからこそ、私たちは動き始めます。そのステップは、私たちの大学がある大分県。大分への愛着を勇気に変えて、大分ではかき回すことができないことにチャレンジします。地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくりまします。私たちは大分県の未来を拓く『おおいた、つくりびと』になりたい。

小中一貫校に統廃合される 小学校3校に関する研究



実施体制：林佑哉、西村謙司（建築学科）

実施フィールド：大分市

連携機関：大分市教育委員会、大分市立荷揚町小学校・中島小学校・住吉小学校

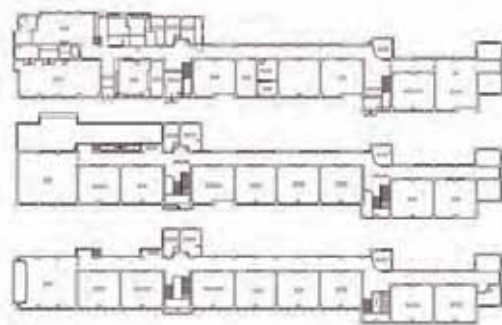
概要 2017年4月に大分市で初の義務教育学校としての小中一貫校が開校される。この学校は、既存の大分市荷揚町小学校、中島小学校、住吉小学校、碩田中学校の4校の統合により、開校する学校であるが、統合校の開校は、既存の学校の閉校をも意味する。特に、荷揚町小学校は、福沢諭吉が開校の契機に関わっていることに加えて、150年近くの歴史を有する学校である。そのような由緒ある学校が、忽然とその歴史を閉じてしまうのではなく、荷揚町他の3校を合わせたすべての学校の歴史的継承が望まれる。本研究は、そのような課題を解決するために、小学校3校の資料を収集整理し、新設校に継承するための基礎的調査を行った。

取組内容 大分市中心市街地にある小学校の歴史的意義を記録するために、大分市教育委員会、大分県公文書館、大分市教員等と連携を取りながら、資料収集を試みた。教育プログラムとしては、学校の実測を行うことで、学校建築の設計手法を習得するとともに、学校の歴史的調査を行うことにより、建築の歴史的意味の再確認、および、建物が、単なる消費財ではなく、人間の生活環境を構築する上で、重要な場所を形成する可能性を有するものである等、その文化的価値の再確認をする教育内容となっている。加えて、福沢諭吉が開校に寄与した学校でもあることから、日本近代の教育内容の歴史的意義の検証を行うことにもつながる研究となっている。

地域での成果 これらの資料収集は、そのまま新設校の小中学校に継承され、碩田学園の生徒が歴史のない学校に入学するのではなく、150年の歴史を継承して営まれている学校に通学することを伝える契機になると考えられる。ひいては、小中学校の生徒が自らの学校に歴史的な誇りを抱き、彼らの先輩が歩んできたように夢と希望をもって学校生活を営むことができるようになることが期待される。

学生の学び 建物が単なる生活の機能を満足させるための道具ではなく、歴史的文化的意味を担いながら、我々の生活環境を豊かに構築する重要な場所となることを学ぶことが期待されている。そのような学習を契機として、既存の建築物を大切にするとともに、そのような思いを持って建築物を新設する建築技術者になることが期待されている。

今後の展開 3校の記録調査は、未だ未完成の部分もある。その補完を行うとともに、碩田中学校の調査を進めたい。加えて、4校の歴史的意義をまとめ、新設校の在校生に伝達、継承できるような内容の資料として整理を試みたい。



NBU 日本文理大学

〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097-592-1600 (大代表)
Web: <http://www.nbu.ac.jp>
【COC事業担当】
TEL / FAX: 097-524-2663 (直通)
Web: <http://coc-nbu.jp>
e-mail: coc@nbu.ac.jp



おaita, つくりびと

『おaita, つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おaita, つくりびと』と名付けました。お金やモノだけではかえることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。日本の未来を担う若者ができることは？ きっと、その答えはひとつではありません。だからこそ今、私たちは動き始めます。そのステップは、私たちの大学がある大分県。大分への愛着を勇氣に変えて、大分できができないことにチャレンジします。地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。私たちは大分県の未来を拓く『おaita, つくりびと』になりたい。

豊後大野市中土師地区の生活道路に関する調査及びドローン撮影写真について



実施体制：矢野翼也、坂田大寛、間藤拓也、金光民、園田一則（建築学科）

実施フィールド：豊後大野市 土師地区

連携機関：株式会社 古城

概要 1年次から豊後大野市中土師地区で、農林業体験やプロジェクトでこの地域に関わってきた4年生が、中土師地区ふるさと体験村周辺生活道路に注目して現況調査を行った。ふるさと体験村から大分市方面（NBU 日本文理大学まで4ルート）への通行する道路を選定し、道路幅や危険箇所・離合箇所を中心に調査を行った。また、ふるさと体験村前他2箇所、交通量調査を実施した。

測量班は、GPSによる基準点をスタテック法で実施するとともにネットワーク型RTK-GPS測量の可能性を確認した。また、本年度から導入したドローンによる写真測量の対象場所に、ふるさと体験村周辺を撮影した。

取組内容 今回の調査において、4ルートとも道路幅が狭い、ガードレールがない、整備不十分等の危険箇所が複数箇所確認できた。現在まで実施された離合場所設置のみの改良に問題点がないかを調査した。この中から最も大分市中心部に近い、県道弓立中戸次線を完全二車線化に改良する案を提案した。この道路改善によって得られる効果を検討した。道路改善後に得られる効果として、河川プールツアーや完成予定の大分川ダムからの観光ルート案を提示した。

本研究室は測量を中心としてGPS測量の実測を中心に学内での観測を実施してきた。今回、調査場所を電波の届きにくい中山間地域である中土師地区での観測も実施して、観測状況の確認を行った。同時に、新しく導入したドローンによる写真測量も実施し成果を比較した。

地域での成果 地域での成果として、提案した改善案を再検討して進める状況になった場合は、学生からの意見として紹介していきたい。今回の発表会で、地域の方との意見交換をしていないので、今後の課題として報告の機会を設ける。また、現地測量により、中土師地区に4級程度の精度であるが、GPS観測基準点が設置できた。ドローンにより撮影したデータを観光PRに必要であれば提供できる。

学生の学び 現地調査した学生は、地域の方から過去の情報を与えて頂いたり、現状の声を聞くことで限界集落で生活する高齢者の問題に正面から取り組むことができた。また、対象地区で調査・測量作業をする時、地域の方と話したりすることで積極的な会話ができるようになった。道路工事における計画・調査・施工に関する知識が深まった。

今後の展開 得られたデータや写真が地域活性化に必要であれば提供する。特に観光PRとして空撮の必要があれば再度撮影を行う。地域活性化の案として、要望があれば道路改善をテーマにして専門企業が参入可能であれば、学生とともに継続調査や共同研究を行う。



NBU 日本文理大学

〒870-0397 大分県大分市一木1727

TEL: 097-592-1600 (大代表)

Web: <http://www.nbu.ac.jp>

【COC事業担当】

TEL / FAX: 097-524-2663 (直通)

Web: <http://coc-nbu.jp>

e-mail: coc@nbu.ac.jp



おおいた、つくりびと

『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。日本の未来を担う若者ができることは？ きっと、その答えはひとつではありません。だからこそ今、私たちは動き始めます。そのステップは、私たちの大学がある大分県。次への要着を勇気に変えて、大分できがけないことにチャレンジします。地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。私たちは大分県の未来を拓く『おおいた、つくりびと』になりたい。

高齢者向けものづくり教材の開発



実施体制： 鈴木秀男 足立元 松永多苗子 星芝貴行 稲川直裕 平居孝之

実施フィールド： 豊後大野市

連携機関： 豊後大野市 養護老人ホーム常楽荘 おがた放課後チャレンジ教室

概要

高齢者施設等で実施されている介護予防やレクリエーションメニューは、体操など体を動かし、気分をリフレッシュするものが主流である。本プロジェクトで開発する教材は、ものづくりを通して、指先を動かし、形や色を判断しながら簡単にかつ楽しみながら組み立てられる電子工作教材である。完成した教材は、「目で見て、耳で聞いて、触って操作して」楽しめる教材であり、視覚や聴覚にも働きかけ脳の活性化につながることも期待される。また、家族や周りの人とのコミュニケーションの促進や生きがいの認識にもつながることが期待できる。

取組内容

開発している教材は、マイコンを用いたものづくり教材である。電子工作を基本として組み立て、マイコンを実装して、動作するものであるが、組み立て時の安全・安心・容易・時短を考慮して、ブレッドボード上での実装で完成するようにしている。実装に関しては、独自の配線パターンと事前加工を施したジャストフィットする部品を用いるようにしている。

これまで、高齢者向けのものづく教室や子供たちとの合同ものづくり教室などを実施し、高齢者・子供たち・施設担当者より、多くの有意義なアドバイスを頂くとともに、実施者としても多くの気づきがあった。今年度は、頂いたアドバイスや要望、気づきをもとに、既存教材の改良と新規教材の開発に取り組んでいる。

昨年作成した脳トレゲームは、3色版であったが、ゲームの楽しさを増すために、4色版を開発した。ボードの制約から特別な工夫を施して完成させている。デジタル表示の電子サイコロについて、部品の見直しとプログラムの改良を施している。

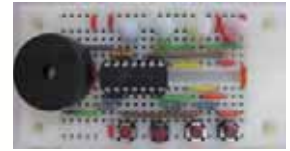
新しい試みとして、グループでの活動を取り入れた教材も開発している。オブジェ班と電飾班に分かれ、お互いの完成品を組み合わせ、クリスマスツリー、クリスマスリース、クリスマス用オブジェのイルミネーションを完成させた。ツリーやリースの電飾では、マイコンを使い、ランダムに点滅する機能を取り入れている。オブジェでは、絵を描いた厚紙を簡単な作業で組み立て、内部からランダムに色が変化する光を当て行燈のような雰囲気を作りだしている。

地域での成果

ものづくり教室終了時のアンケートやリアリングでは、ほとんどの方から「面白い」、「動作原理を知りたい」など、肯定的な評価を頂いている。一方で、組み立てについては、「簡単」から「難しい」まで様々である。これは、対象を限定せずに実施しているためと思われる。

今後の展開

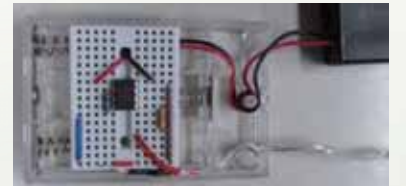
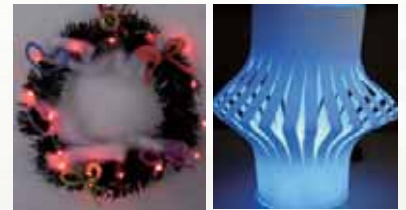
これまでに数多くの教材と実装パターンを開発してきた。今後も、高齢者や子供たちと連携したものづくり教室を展開したいと考えている。そして、健全な高齢者の維持、地域の活性化につながればと考えている。



機能

- ・難易度選択（通常版）
- ・難易度選択（簡易版）
- ・ご褒美メロディー

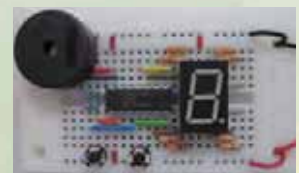
改良した脳トレゲーム



機能

- ・リース及びツリーの作成とイルミネーション
- ・オブジェの作成とイルミネーション
- ・マイコンによるランダム点滅
- ・ランダムな色変化と周期変化
- ・室外イルミネーション対応

クリスマスイルミネーション



機能

- ・サイコロの目の表示
- ・最大9まで表示に変更
- ・大学ロゴ(nbu)の表示
- ・バーの回転表示
- ・カウントアップタイマー
- ・カウントダウンタイマー

改良した電子サイコロ
(デジタル表示版)

『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを「おおいた、つくりびと」と名付けました。お金やモノだけではかえることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろうか。日本の未来を担う若者ができることは？ きっと、その答えはひとつではありません。だからこそ、私たちは動き始めます。そのステージは、私たちの大学がある大分県。大分への愛着を勇気に変えて、大分ではかできないことにチャレンジします。地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくりまします。私たちは大分県の未来を拓く『おおいた、つくりびと』になりたい。

豊後大野市ふるさと体験村における『建設マネジメント演習及び実習』の取り組み



実施体制： 吉村充功、池畑義人(建築学科)

実施フィールド： 豊後大野市大野町土師地区

連携機関： 土師振興協議会

概要 大分県内に多く見られる小規模集落は、超高齢化、人口減少により、地域コミュニティを維持することが難しくなっている。そこで、建築学科では地域の課題を技術者の視点で解決できる人材を育成する「環境・地域創生コース」を設置している。本コースでは、人口 153 人、82 世帯、高齢化率 67% (2015 年国勢調査) の小規模集落である豊後大野市大野町土師地区をフィールドとして、コミュニティの維持策を探り、実践する取組を、地区の協力を得て実施している。「体験交流活動による動機付け」「知識の修得・定着」「課題解決型学修」という学修サイクルを明確化した科目群により、学生は地域でのやりがいを感じるとともに、自分に不足する知識・技能を自覚し、その後の学びを深化できる。上級学年では実際に地域の課題解決に取り組むことで、将来、地域で活躍するために必要な幅広い能力の定着を図ることを目指している。



【下見・準備施工】

取組内容 『建設マネジメント演習及び実習』では、3 年次後期の課題解決型学修として、土師地区の中心部にある地域交流拠点「ふるさと体験村」内の施設整備を行っている。ふるさと体験村の新たな魅力を創るため、住民の要望等を踏まえ、今年度は 5 班に分かれて工作物を建設した。本授業では、建設現場管理方法を理解、習得するため、設計・資材表の作成・施工・原価管理の一連の工程を現地の方々と話し合いながらすべて実施することが特徴である。

【施工実習のスケジュール】

- 11/15 実習概要の方針確認 (学内)
- 11/18 現地下見・測量
- 11/22 ~ 図面、資材調達表等作成 (学内)
- 1/20 準備施工 (一部の班)
- 1/24 施工準備 (学内)
- 1/26 ~ 27 本施工
- 2/7 原価計算、振り返り (学内)
- 2/2 ~ 残施工 (一部の班)



地域での成果 【今年度の工作物】

- ・ポニー園への誘導看板・シャワー室等のスノコ
- ・バーベキューコーナー新設 ・木造ブランコ (遊具)
- ・ドラム缶風呂・長椅子 ・現バーベキューコーナー屋根張替

【作業風景】

実習を通じて、上記の工作物を完成することが出来た。

学生の学び

実際に施工することで、工程の管理や、住民 (施主) とのコミュニケーションの重要性を学ぶことができた。また、図面の作成から施工・片づけまであらゆる作業をこなすことで、技術面と人間性の両面で自信につながった。



今後の展開

本格シーズンである 2019 年の夏より、体験村の利用・宿泊者に利用いただくことと、体験村の魅力向上を図るが、あわせてシーズン中の体験村の運営協力についても継続する。



【完成写真】

NBU 日本文理大学

〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097 - 592 - 1600 (大代表)
Web: <http://www.nbu.ac.jp>
【COC事業担当】
TEL/FAX: 097 - 524 - 2663 (直通)
Web: <http://coc-nbu.jp>
E-mail: coc@nbu.ac.jp



あおいた、つくりびと

『あおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『あおいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけではあることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろうか。日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇氣に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『あおいた、つくりびと』になりたい。

豊後大野市大野町土師地区における 地域インターンシップ『環境・地域創造演習』の取り組み



実施体制：吉村充功、池畑義人、杉浦嘉雄、菅雅幸(建築学科)

実施フィールド：豊後大野市大野町土師地区

連携機関：土師振興協議会

概要 大分県内に多く見られる小規模集落は、超高齢化、人口減少により、地域コミュニティを維持することが難しくなっている。そこで、建築学科では地域の課題を技術者の視点で解決できる人材を育成する「環境・地域創生コース」を設置している。本コースでは、人口 153 人、82 世帯、高齢化率 67% (2015 年国勢調査) の小規模集落である豊後大野市大野町土師地区をフィールドとして、コミュニティの維持策を探り、実践する取組を、地区の協力を得て実施している。「体験交流活動による動機付け」「知識の修得・定着」「課題解決型学修」という学修サイクルを明確化した科目群により、学生は地域でのやりがいを感じるとともに、自分に不足する知識・技能を自覚し、その後の学びを深化できる。上級学年では実際に地域の課題解決に取り組むことで、将来、地域で活躍するために必要な幅広い能力の定着を図ることを目指している。



取組内容 『環境・地域創造演習』は、3 年次の課題解決型学修として合宿形式で実施している。今年度は同地域での暮らしを体験しつつ、協力いただける地域内の各家庭を訪問、インタビューし、それらの調査内容を全体としてアーカイブ化(記録保存)することを目的に、土師振興協議会のご協力を得て、地域インターンシップとして実施した。学生 19 名が 6 チーム(1 チーム 3 ~ 4 名)に分かれて、8 月 7 日 ~ 9 月 3 日の期間中にチーム毎に 3 泊 4 日で土師公民館を拠点に地域に泊まり込み、各班 10 軒を目標に土師地区(中土師、安藤、澤田)を徒歩でフィールドワーク、住民ヒアリング等を行った。調査結果は、GoogleMap に入力し全体で共有した。

地域での成果 調査の結果、全チーム合わせて 40 軒のご家庭を訪問し、現在の暮らしぶりや困り毎などについて聞き取り調査を行い、アーカイブとしてまとめることができた。今後の支援活動を考える上での、データベースとして活用が期待できる。

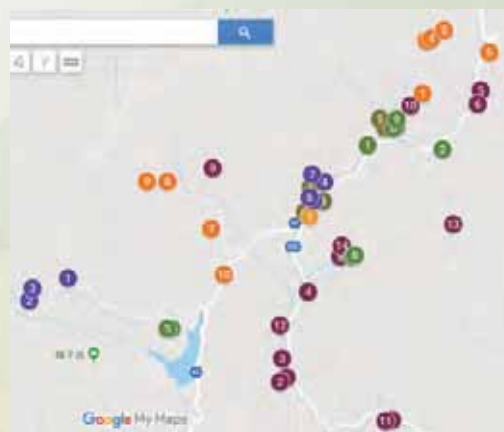
サンプル

- 性別
- 年齢
- 職業
- 暮らしていた職業
- 世帯人数
- 世帯構成
- 居住年数
- 出身地
- 内容

保存 キャンセル

調査結果の入力フォーマット

学生の学び どのご家庭も快くヒアリングに応じていただき、地区住民と直接お話しをする機会が得られた。ヒアリングでは、貴重なお話や今後の地域のことについて、率直な意見が聞け、有意義な時間を過ごすことができた。各チームが手分けして、地区全域を調査したが、住宅地図に記載されている世帯でも、訪ねてみると空き家のケースも多く、高齢化地域の現状を身をもって体験することにもつながった。



調査エリア (Google Map で情報を共有)

今後の展開 今後、アーカイブを活かした支援の在り方を振興協議会と検討する。



『あおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『あおいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。日本の未来を担う若者ができることは？きつと、その答えはひとつではありません。だからこそ今、私たちは動き始めます。そのステージは、私たちの大学がある大分県。大分への愛着を勇氣に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくりまします。私たちは大分県の未来を拓く『あおいた、つくりびと』になりたい。

地域と学生の協働による豊後大野市 ふるさと体験村「開村式」の運営



実施体制：吉村充功、池畑義人(建築学科)

実施フィールド：豊後大野市大野町土師地区

連携機関：土師振興協議会、blue market HAJI POST

概要 大分県内に多く見られる小規模集落は、超高齢化、人口減少により、地域コミュニティを維持することが難しくなっている。そこで、建築学科では地域の課題を技術者の視点で解決できる人材を育成する「環境・地域創生コース」を設置している。本コースでは、人口 153 人、82 世帯、高齢化率 67% (2015 年国勢調査) の小規模集落である豊後大野市大野町土師地区をフィールドとして、コミュニティの維持策を探り、実践する取り組みを、地区の協力を得て実施している。



取組内容 『プロジェクト 1』(建築学科 1 年次科目)での農林業体験や地域コミュニティ維持活動といった体験交流活動を通じて地域に対する興味関心が高まった学生は、学年を越えて地域での活動に正課外活動として参加している。今年度は地域の交流拠点施設であり、地区住民による自主運営がなされている「ふるさと体験村」の開村式(7/15)の運営スタッフとして、学生 23 名が地区住民と協力し、直前の現地準備(河川プールの土砂出し等)や当日の受付、駐車場誘導、エノハのつかみ取り、出店、学生自主企画(的当てゲーム)などのイベント運営を行った。



地域での成果 学生協力が 4 年目となり、地区での取組が拡充している。今年度からは現地でカフェを運営するハジポストさんの呼びかけで県内から多くの出店者が参加され、拡大 Blue market として、参加者に大いに楽しんでもらったイベントとなった。当日は、昨年度を大幅に上回る約 400 名の参加があり、子供たちのにぎやかな声が地域に響いた。



学生の学び ゼミ生を中心とした学生の運営がなされており、今年度は学生の自主企画の実施がなされた。学生たちは事前に役割分担を行い、それぞれのチーム毎に準備を行い、当日の運営をそつなくこなすことができた。また、4 年生は昨年度に整備した五右衛門風呂等の地区への贈呈を行うなど、自分たちが制作したものを地域や来訪者に喜んでもらうことができた。地区には、まだまだ魅力が残っており、こうしたイベントを続けていくことの大切さをあらためて感じた。



今後の展開 2019 年度以降も地区と学生の協働により開村式や体験村の運営を行う。



佐賀関半島における地域体験交流活動研修 『プロジェクト1』の取り組み



実施体制：吉村充功、杉浦嘉雄（建築学科）

実施フィールド：大分市佐賀関地区

連携機関：NPO法人さかのせき・彩彩カフェ、大分県建築士会佐賀関支部、関崎海星館、各自治会 他

概要 私たちが生活する地方では、多くの地域で少子高齢化やコミュニティの衰退が急激に進行しており、新しい風（若者）による活力が求められている。同時に、これまで受け継がれてきた誇るべき地域の伝統、文化、環境が失われつつあり、それらを継承する必要性にも迫られている。本学では、学部・学科の枠をこえて、地域が誇るべき資源を理解する能力を習得すると同時に、地域住民や関係者とより良い地域社会を主体的につくるために必要なジェネリックスキル（汎用的能力）を育成する「地域づくり副専攻」を設置している。その最初の取り組みとして、大分市佐賀関校区での地域体験交流活動を実施する建築学科1年『プロジェクト1』を2017年度より通年科目として開講している。佐賀関校区は、旧佐賀関町の中心部で、漁業と精銅で栄えた港町であるが、現在は人口5千人弱、高齢化率50%強と急激な人口減少、高齢化が進んでいる。本取り組みでは、佐賀関半島にある関崎海星館や関崎灯台周辺での環境整備活動を通じた観光活性化につながる取り組みや、地域の小学生との交流活動を通じて、地域コミュニティの現状を知る機会としている。



関崎海星館での講話



関崎地蔵周辺の活動

取組内容 2018年度の『プロジェクト1』（佐賀関班）には、建築学科22名、経営経済学科1名の合計23名の学生が参加し、3回の現地研修会を実施した（うち1回は合宿）。

第1回研修：6月2日（土）

関崎灯台・関崎地蔵周辺の環境整備、関崎海星館の視察等

第2回研修：8月5日（日）～6日（月）（宿泊研修）

関崎灯台前遊歩道・入口遊歩道の環境整備、子ども達との交流会、ごみ拾い活動（秋の江地区）

第3回研修：10月6日（土）

豊予要塞砲台跡・関崎駐車場の環境整備等

地域での成果 10年以上、手が入っていなかった関崎灯台周辺の環境整備を昨年度に引き続き行った結果、灯台からの眺望がさらに開け、他のエリアと合わせて環境を整えることができた。また、地区外との交流が少ない地区の子どもたちにとって、大学生との交流会は大変良い刺激になったとの声を地域からいただいた。



関崎灯台前の遊歩道の清掃



伐採後の豊予要塞砲台跡からの眺望

学生の学び 環境整備を通じて、地区を整備・維持する大変さを知るとともに、目に見える成果を得たことでやりがいにつながった。また、過疎化の現状を肌で感じる事ができた。

今後の展開 継続的な環境整備活動をキッカケとして、佐賀関半島の本格的な整備、観光活用の動きが出始めた。今後も継続的に佐賀関半島の環境整備を行っていく。



学生企画による子どもたちとの交流会



関崎駐車場でのふり返りの様子

NBU 日本文理大学

〒870-0397 大分県大分市一木1727

TEL: 097-592-1600(大代表)

Web: <http://www.nbu.ac.jp>

【COC事業担当】

TEL/FAX: 097-524-2663(直通)

Web: <http://coc-nbu.jp>

e-mail: coc@nbu.ac.jp



coc-nbu.jp



おおいた、つくりびと

『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけではかえることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。日本の未来を担う若者ができることは？ きっと、その答えはひとつではありません。だからこそ今、私たちは動き始めます。そのステージは、私たちの大学がある大分県。大分への愛着を勇気に変えて、大分できがけないことにチャレンジします。地域の皆さんとともに、もつともつ元気なまちをつくれます。私たちは大分県の未来を拓く『おおいた、つくりびと』になりたい。

113 小規模・高齢化が深刻な集落におけるコミュニティの維持・活性化 豊後大野市大野町土師地区における地域体験 交流活動研修『プロジェクト1』の取り組み



実施体制：池畑義人・吉村充功・杉浦嘉雄・園田一則（建築学科）

実施フィールド：豊後大野市（大野町中土師地区）

連携機関：NPO法人ABC野外教育センター・土師振興協議会

概要

建築学科のカリキュラムは、環境・地域創生コースを中心に右の表に示すような科目群によって体験・交流活動から始まる学修サイクルが構成されている。本報告では、体験交流活動の起点となる「プロジェクト1」の活動成果について報告をする。

取組内容

建築学科の大野町土師地区における活動は2010年度に始まった。当初はプロジェクト演習という15コマの科目であったが、現在では他地域の祭りの活動も含まれ30コマの授業となっている。

この授業では、6月、8月、10月の3回、現地を訪問して農林業体験や地域で維持するふるさと体験村というキャンプ場、道路、水路などの維持保全活動を体験している。6月と10月は日帰り研修であるが、8月は1泊2日の合宿形式で地域住民や学生間の交流をはかっている。2019年度の実験者数は建築学科の学生が1年生を中心に38名、副専攻科目として航空宇宙工学科の学生1名であった。

取り組みの内容は、6月はふるさと体験村のプールの塗装、体験村で使用する薪作り、体験村周辺の草刈り、8月は豪雨で使用できなくなった水路の補修、林業体験、10月は稲作の収穫体験であった。

地域での成果

土師地区においては、この授業を履修した学生が、その後も継続的に地区を訪れるため、学生が地域の活性化になくはならない存在となっている。

学生の学び

地域活動において学生は、どうしても作業をすること自体に意義を見出すことで、作業の完了で満足してしまうことが多い。そこで、プロジェクト1では3回の体験活動の前に全学生について面談を実施している。面談では事前に人口減少に直面する地域の現状を調査して、それを自分の言葉で説明することを求めている。また現地に行く目的を述べさせ、地域における活動が自分の専門分野の学びにつながることを確認している。

体験活動終了後に大学に戻った後も自らの学びを発表させることで、次回の体験活動と2年次以降の専門課程における学びにつなげている。

今後の展開

土師地区における活動はCOC採択以前からの取り組みであるため、COC終了後も内容を見直しつつ継続をしていく。

表 環境・地域創生コースのカリキュラム

科目名(開講学年)	属性	
プロジェクト1 (1年)	専門	体験・交流活動
正課外活動 (1~2年)	-	
大分学・大分楽 (1年)	教養	知識の修得
森里海連環学 (1年)	教養	
データ解析演習 (1年)	専門	
流域生態論 (2年)	専門	
地域再生論 (2年)	専門	課題解決型学修
環境・地域創造演習(3年)	専門	
建設マネジメント (3年)	専門	
研究ゼミナールA/B (3年)	専門	
卒業研究 (4年)	専門	



河川プールの整備



豪雨で使用できなくなった水路の整備



収穫体験



学内における振り返り学習



中判田駅を中心とする

まちづくりプロジェクト



実施体制： 廣田篤彦（昨年度まで）、近藤正一、担当学生：5年間で合計17名（建築学科）

実施フィールド： 大分市中判田地区

連携機関： 大南地区振興協議会、判田校区自治委員連絡協議会 ほか

概要

大分県大分市のJR中判田駅は、平成26年に開業100周年を迎えました。大分駅とともに、別府～人吉・熊本間を通る特急列車が停車する市内有数の駅として、昭和29年には1日で約3,000人を超える利用者がありましたが、平成30年度の1日あたりの平均乗降者数は950人にまで減少しています。その間、駅施設そのものの利便性、駅へのアクセス、駅周辺の安全性・バリアフリーデザインへの対応がほとんどなされておらず、地域住民の方々と協力し、中判田駅を中心とした判田地区らしい魅力あるまちづくりに資する計画とデザインの提案をさせていただき取り組みを継続中です。



中判田駅と駅前ロータリーの提案

取組内容

平成26年に「駅の利用状況・施設改善についての利用実態調査・アンケート調査」を実施したのを皮切りに5年間、合計17名の学生が本プロジェクトを担当し、駅舎の保存と再生、四季を感じる憩いの市民公園、竹工芸のアーケードなどによる賑わいの創出、美しい風景と伝統的なまちなみを堪能できるサイクリングコースの設定、ケーススタディを経て得られた最も利便性の高いロータリーと駅舎の配置計画、構内の緑化・木漏れ日などをイメージした駅舎、五感によって空間を感じ取ることのできる案内性の高い駅舎、無人化を想定したユニバーサルデザインによる駅舎の設計などの提案を行いました。



緑あふれる中判田駅の待合室提案

地域での成果

課題の整理と具体的な計画案をもとに地域の方々の意見交換を積み上げてきました。例えば、アンケート調査では3千名を超える判田地区の方々にご協力いただき、駅を利用して不便に感じるということとして、駅前の道路が狭い、プラットフォームへの階段が使いにくいといった指摘が多く挙げられました。また、観察調査により現在の駅利用者の半数が大分南高校の生徒であり、さらにそのおよそ半分の生徒が踏切のない線路を横断して通学しており危険な状況であることが明らかになりました。現状を踏まえたさまざまな学生提案を地域で報告しました。



跳ね上げ式車椅子ブリッジの提案

学生の学び

中判田駅および周辺のまちづくりを改善することにより、周辺地域の安全性が向上するのみならず、駅の利用者が大幅に増加する可能性のあることが明らかになり、中判田駅を中心としたまちづくりとの関わりの中で、市民との協働を通じて自らが地域創生のために成すべき取り組みを自ら次々と見つけ出していくことができました。



ロープ式ホームゲートの提案

今後の展開

これまでは、交通計画の見直し（交通）、駅そのものの利便性と快適性の向上（建築）、周辺地域との関係の見直しによる機能強化（観光・生活）等がテーマとなってきました。今年度からは駅の無人化に対応するため、ユニバーサルデザインの推進に取り組んでいます。引き続き、大分市民の誇りとなり長く愛される中判田駅の実現につながる活動へと発展させていきたいと考えています。

NBU 日本文理大学

〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097 - 592 - 1600(大代表)
Web: http://www.nbu.ac.jp

【COC事業担当】
TEL/FAX: 097 - 524 - 2663(直通)
Web: http://coc-nbu.jp
e-mail: coc@nbu.ac.jp



おおいた、つくりびと

『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけではかえることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分ですしかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくりまします。
私たちは大分県の未来を拓く『おおいた、つくりびと』になりたい。

佐賀県におけるブロック塀の耐震性に関する調査研究 ～地域住民への危険ブロック塀の啓発のために～



実施体制： 上田 亮(建築学科・4年)、井上正文(建築学科)

実施フィールド： 大分市佐賀関地区

連携機関：

概要

2018年6月18日に発生した大阪北部地震により、高槻市立の小学校に建築基準法施行令違反で設置されていたブロック塀が倒壊し、児童が犠牲となった事件を受け、全国の公共建設物のブロック塀の調査が進められている。本研究では、空き家や古民家の集中している佐賀関地区を調査対象とする。そして、佐賀関全体のブロック塀の危険性や問題点をまとめた資料を作成し、市民センターでの使用や住民への報告会などを通じて住民のブロック塀の安全に対する意識の向上に役立てていくものとする。

地域選定理由

少子高齢化が顕著にあらわれ、高齢者の多い地域であるため身体の不自由な方も多く、万が一ブロック塀の倒壊等が起きた場合に大きな事故に繋がる危険性がある。また、小学生中学生の通学路中にも危険性を秘めたブロック塀が存在するため。高齢化の影響もあり、古民家や空き家が多く点在し設置当時から何も手がつけられていないブロック塀が多く存在し、危険性を秘めているため。当該地域は海に囲まれており地震や津波等の自然災害において甚大な被害を被ることが予想できる。その際に倒壊してしまったブロック塀が避難を妨害してしまうことを最小限に食い止めるため。



取組内容

佐賀関全域(小志生木・大志生木・神崎を除く)のブロック塀を調査し、国交省によるブロック塀のチェック項目(右図参照)を目測で行い、調査した全ブロック塀の類型化を行う。また、調査したブロック塀の位置を地図に落とし込み、ブロック塀の地域ごとの様式の特徴や、位置による劣化等の特色がないかを検討する。



研究成果

調査結果

地図への落とし込み(右図参照)

地域ごとでのブロック塀の様式の特徴

- ・海拔の高い地域にあるブロック塀は、土地の傾斜に対応するためが石垣等の上に建てられている物が多かった。
- ・比較的新しく建てられた住居のブロック塀には、ラインの入ったものや凹凸の出たようなデザインのものが多かった。
- ・住居や倉庫等の壁面にコンクリートブロックを使用しているものが存在した。ひび割れや傾き、また工事もあまり丁寧なものではないものもあり、築年数もかなり経過しているように見受けられた。

地域ごとでの劣化等の特色

- ・地域ごとではそこまで大きな劣化の差は見受けられなかった。佐賀関全体で、住居そのものの築年数が長い建物が多く、それに伴ってブロック塀もひび割れ等の劣化を起こしているものが多かった。

チェック項目から

項目別での順位は右表に示す。

控壁なし 高さ1.2mを超えたブロック塀が多くあった中で、控壁を設けていないものも多く、強い地震の揺れ等により倒壊する恐れがある。

高さ超え ブロック塀そのものは2.0mを超えたものは数えるほどしかなかったが、石垣等の上に建てられているブロック塀が多く、石垣の高さを含めると2.0mを裕に超えるブロック塀が多かった。

鉄筋の有無は調査しきれないが、倒壊の際には周辺への危険性が容易に想像できる。

まとめ

調査した全105件の中で、1つでも問題があったものは94件であり、ほとんどのブロック塀で何かしらの問題があった。

控壁なしのものを除いても74件で半数以上が高さや劣化などで危険性を孕んでいる。強風や手押しによって今すぐに倒壊しそうなものは無かったが、地震等の自然災害によって人命に関わる甚大な被害が出るのが容易に予想できた。



図 地図への落とし込みの例

1	控壁なし	83件
2	高さが2.0mを超え、適切でない	45件
3	石垣の上に建てられている	39件
4	透かしブロックが連続で使用されている	24件
5	ひび割れがある	15件
6	傾き・ぐらつきがある	6件
7	積み増しがある	4件
8	土留めでの使用がなされている	1件

表1 チェック項目別順位



『あおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『あおいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。日本の未来を担う若者ができることは？ きっと、その答えはひとつではありません。だからこそ今、私たちは動き始めます。そのステージは、私たちの大学がある大分県。大分への愛着を勇気に変えて、大分できなくていいことにチャレンジします。地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくりまします。私たちは大分県の未来を拓く『あおいた、つくりびと』になりたい。

設計製図3 第1課題「超高齢社会に希望をもたらす二世帯住宅」



実施体制： 近藤正一、島岡成治（建築学科）

実施フィールド： 大分市佐賀関地区

連携機関： NPO法人さかのせき・彩彩カフェ 他

概要

設計製図3は建築士受験資格を得るための指定科目です。第一課題では、「超高齢社会に希望をもたらす二世帯住宅」と題し、高齢化の進んだ地域を舞台にした二世帯住宅の設計に取り組みます。昨年度に引き続き、今年度もNPO法人さかのせき・彩彩カフェ理事長山田悠二氏にご協力をいただき課題設定を行いました。魅力的なハウジングを提案することにより近未来における地域のあり方に一石を投じてほしいという住民の切実な願いにどう応えていくか、課題敷地の視察を通して見えてきた課題を具体的に解決するための、既成概念にとらわれない学生ならではの発想が期待されます。家族のための住宅としてだけでなく、地域との関わり方を考え、特徴的な土地形状を踏まえ、各自の設定したテーマに沿って魅力的なデザイン提案を行いました。



課題敷地視察の様子

取組内容

超高齢社会において、都市向けに計画された画一的なデザインによる現状の工業化住宅で地域の人々に希望をもたらすことができているとは到底思えません。そこで、3年生の設計課題として、歴史のある風光明媚な土地柄に相応しい魅力的な二世帯住宅のありかたを考案し、そこに住む人にとって最適化されたプランニングおよび空間を構成するとともに、永く地域の宝となり誇りとなるような街並みを形成する意図を喚起するデザインをまとめ上げる取り組みを実施しました。



山田氏による課題レクチャー

地域での成果

完成作品の講評会を実施し、参加者全員の投票により5名が選出され、発表を行いました。ゲストとして、NPO法人さかのせき・彩彩カフェ代表 山田氏、大分市土木建築部建築課 渡邊氏（大分県建築士会佐賀関支部）、佐賀関で活躍している本学卒業生の株式会社セキ土建 嵯峨氏、本学非常勤講師のstudio/CASAS一級建築士事務所 宮部氏、合同会社まちづくり事務所まちもり 穂山氏にお越しいただき、学生各自の発表に対し、貴重な意見・アドバイスをいただきました。



建築家によるエスキスチェック

学生の学び

住宅は設計者にとっても最も身近な建築であり、アイディアの検証が比較的しやすいテーマでもあります。既成概念にとらわれない学生の豊かな発想により、近未来を志向する新しい二世帯住宅のあり方を提案することで佐賀関地区の明るい未来につなげようと、履修者全員が自覚し、能動的に全力で制作に励む体験が、今回の課題における学生の学びとなりました。



完成作品の講評会実施風景

今後の展開

企画・デザイン・作図・模型制作・レイアウト・発表といった一連の設計作業を行う体験を通じ、今後、学生たちが人間力の一部でもある専門能力を活かして社会・地域に貢献できる人材へと成長し、設計分野においてさらに高度な取り組みに挑戦していくための意欲につなげていってくれることが、今後の展開として期待されます。



第二の人生でまちづくりをしませんか？

～豊後大野市CCRC～



実施体制：近藤正一、担当：4年 渡邊麟（建築学科）

実施フィールド：大分市豊後大野市

協力機関：合同会社 まちづくり事務所 まちもり 他

概要

豊後大野市には岩戸の景観や稲積水中鍾乳洞そして沈壁の滝など豊かな自然景観が残されており、御嶽神楽のように古の時代から今世まで受け継がれている文化もあります。しかしながら、近年は市民の高齢化や若者の減少によって景観の保全や地域文化の継承が困難になってきています。

CCRC（Continuing Care Retirement Community）は、主に「継続的なケアがついた退職者コミュニティ」という意味合いがあり、アメリカで「高齢者のための街」をつくるために考案されたものですが、日本でのCCRCの考え方では、都会で働いていた人が元気なうちに退職し、移住先で社会活動や趣味の時間を通じて「第二の人生」を見出すことに重点が置かれています。今回の提案では、入居する退職者が豊後大野市のまちづくりに貢献できるCCRCを目指します。

取組内容

3年次の研究ゼミナールでは、魅力的な食文化によって豊後大野の素晴らしい景観と結びつける方策を考えました。数多く存在する景観スポットの中からいくつかをピックアップし、「体験」「探検」「発見」の3つのテーマに分類し、それぞれについて景観カルテを作成しました。さらにそれらを「食」で紡ぎ、いわば豊後大野を食歩くことで、景観巡りを体験できる企画を考案しました。4年次では、豊後大野市にCCRCを誘致することでどのような未来が描けるかを具体的に構想し提案する卒業設計の制作に取り組みました。

地域での成果

東京在住者のうち50代男性の半数以上、50代女性及び60代のうち約3割が地方への移住の意向を示しています。また、中でも移住後に地域交流や地域貢献活動・趣味等に関わりたい人の割合が大きく、地方へ移住して、アクティブに高齢期を過ごしたいと考えている人が多くみられます。今後、移住者が新たなことにチャレンジできるような建築的・空間的な仕組みを構築し実現していくことで、結果的に、移住者の社会貢献を通じて豊後大野市が活性化し、これまでの居住者にとっても地域に対する誇りと未来に対する希望がもてるようなまちづくりアイデアを盛り込んでいくことができるのではないかと予想しています。

学生の学び

エスキースを通じて、①点：人々の集いの場となる場所づくり、②線：それらをつなぐ暮らしのパターン設定、③面：道の駅「きよかわ」、神楽会館、清川小学校、清川中学校を含み、移住者と市民のふれあい広場としての役割を担うCCRCの提案を考えました。

今後の展開

担当の渡邊は、平成31年4月より豊後大野市役所を設計した（株）後藤建築設計事務所に就職します。引き続き豊後大野市の地域活性化のために尽力していく所存です。



道の駅きよかわ周辺敷地視察の様子



景観カルテと学生WS提案



点と線と面のエスキース・チャート



CCRC移住者と市民のふれあい広場





実施体制：福島学，松永多苗子（情報メディア学科），稲川直裕（機械電気工学科），
 実施フィールド：木佐上地区 藤田浩輝（航空宇宙工学科）
 連携機関：木佐上連合区，木佐上コミュニティー

概要

日本文理大学・工学部・複数学科共通開講科目であるロボットプロジェクト関連科目では、2015年度より木佐上地区をフィールドとしての活動を行っております。開始から4年を経て、1年生の時に木佐上地区で「地域」での学修を経験した学生が4年生となりました。その取組みを通して、地域に生きるものづくりのマインドを持った人材が育ったかを報告します。



取組内容

これまでの取組み（2015年度から2017年度）

- 【2015年度】木佐上地区で調査し試作システムを発表
 - 【2016年度】木佐上地区で調査し試作システムを発表
 - 【2017年度】区の方々と議論し試作システム展示発表
- 成果：地域を実感したエンジニアが育成された
 反省点：取組み成果の積み上げ／継続性が低い。
 講義での取組みでは「引継ぎ」が難しい。
 取組み内容によって時間的制限が厳しい。

本年度の取組み（2018年度）

木佐上地区でこれまでに挙げられた地域課題に3チームで取組む。

- 1) 水害対策・・・雨量計チーム
- 2) 水害対策・・・ダム水量計測チーム
- 3) 獣害対策・・・AIチーム（獣検知）



2017年台風18号による水害

地域での成果

1) 雨量計チーム

雨量を計測しインターネット経由で記録／閲覧できるシステムの試作ができ、設置予定となった。

2) ダム水量計測チーム

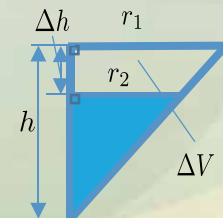
画像から水量を求めるためのモデル実験を行い、ダム空撮映像の取得までできた。

3) AIチーム（獣検知）

地域の負担にならない方法でのAIを利用したシステムの構築に挑戦し、獣が発する特融の音を学習させることに成功した。



設置予定の転倒ます型雨量計



学生の学び

学生はそれぞれに生活を営んでいる地域の一員です。しかし、人によってはその自覚があまりない場合や、自分が地域に何が出来るかを意識できていない場合があります。

木佐上地区での活動を通して「自分が学んでいることで地域の役に立てる」ことを知ります。また、「学び」が「できる事」を増やし、「考える」時の「基準」や「選択肢」となることを学びます。

今後の展開

技術スキルを学修することはエンジニアとして当然ですが、社会的課題を意識し、自ら「考える」ことが出来なければ「心が通う」エンジニアになれるとは限りません。地域を学びのフィールドとすることで「ハートフルな頼れるエンジニア」が育ち、かつ住みやすく活気のある地域創りにつなげていきます。



ダム水位／水量計測の試み

NBU 日本文理大学

〒870-0397 大分県大分市一木1727
 TEL: 097 - 592 - 1600(大代表)
 Web: http://www.nbu.ac.jp

【COC事業担当】
 TEL/FAX: 097 - 524 - 2663(直通)
 Web: http://coc-nbu.jp
 e-mail: coc@nbu.ac.jp



coc-nbu.jp



おおいた、つくりびと

『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけではかえることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。日本の未来を担う若者ができることは？
 きっと、その答えはひとつではありません。
 だからこそ今、私たちは動き始めます。
 そのステージは、私たちの大学がある大分県。
 自分への要着を勇気に変えて、大分できができないことにチャレンジします。
 地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくりまします。
 私たちは大分県の未来を拓く『おおいた、つくりびと』になりました。

202 人口減少社会を支えるための先進的な“ものづくり”

プロジェクト

2

地域創生を目的とした自然エネルギー
利用型プラズマ農業に関する基礎研究

実施体制：川崎 敏之（機械電気工学科）、池畑 義人（建築学科）、
坂井 美穂（情報メディア学科）、小幡 章（航空宇宙工学科）

実施フィールド：日本文理大学

概要 大分県は豊かな自然と大地のおかげで農業が盛んに行われている。しかしながら、図1(a)、(b)に示すように、農家数は減少傾向にあると同時に、40歳未満の若者が特に少ないのが現状で、高齢化、後継ぎ不足という状況が加速傾向にあり、大分県ではこのような状況を改善することが課題となっている。近年、農業への新しいアプローチとしてプラズマ技術が注目されている（プラズマ農業）。プラズマ農業は比較的新しい研究分野であるため、解決すべき課題が多く残されているのが現状で、まだ実用化はされていない。よって、このプラズマ農業により農業が活性化されることは、非常に有効であると考えられる。本研究ではプラズマ農業によって大分県農業が抱える課題を解決することを主な目的とする。また、これまで、農業に関係のなかった企業においては、農業分野への参入も期待される。教員と学生による研究活動から始まり、地域貢献へとつなげたい。まだ始まったばかりではあるが、異分野融合型科学技術による地域課題解決と学生教育を行うプロジェクトとして活動する。

取組内容 近年、人体にも照射可能なプラズマ源が注目を集めている。本研究は図2に示すように、そのようなプラズマを植物の種子に照射して生長を促進させようとするものである。プラズマ照射によって植物（写真はかいわれ）の生長が大きく促進されている様子がわかる。この場合、プラズマをどのように照射するかがキーポイントで、その条件を見出すための実験を行っている。現在は学生らと実験データを蓄積し始めた段階で、まだ地域課題解決に貢献するまでは進んではいない。また、この分野は電気、流体、生物など幅広い専門知識を必要とするため、本工学部全体での活動をより活性化させていく予定である。

学生の学び 学生はチームで研究活動を行っていく中で、実験計画、実施、データ整理と解析、学外発表（図3）を行い、専門知識だけでなくジェネリックスキルなどを含めた将来必要となる力を身につけることができている。また、学外発表など成果をアウトプットすることで、研究成果に対する達成感や満足感を得ることができ、それが研究活動をさらにすすめていく上での向上心につながっている。

今後の展開 本プロジェクトにおいて最も重要である地域との連携ネットワークがまだ構築されていないため、今後は、地域との連携を常に意識しながら、学生らとともにじっくりとデータを蓄積していく。

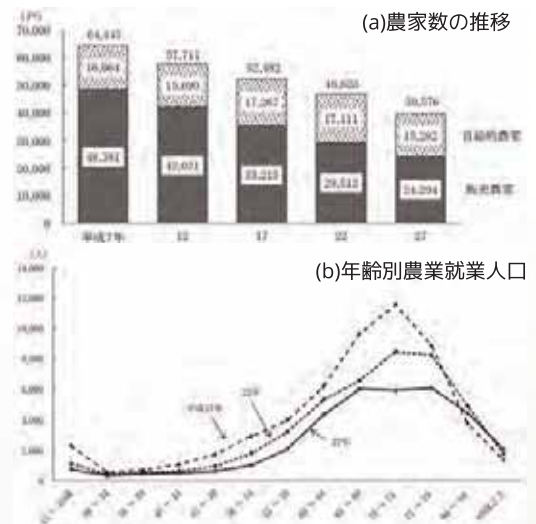


図1 大分県農業の現状

（2015年農林業センサス、大分県企画振興部統計調査課資料（平成27年11月27日公表）より抜粋）



図2 種子へのプラズマ照射と生長への効果



図3 学生による学会発表の様子



おaita, つくりびと

NBU 日本文理大学

〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097-592-1600(大代表)
Web: <http://www.nbu.ac.jp>

【COC事業担当】
TEL/FAX: 097-524-2663(直通)
Web: <http://coc-nbu.jp>
e-mail: coc@nbu.ac.jp

『おaita, つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おaita, つくりびと』と名付けました。お金やモノだけでは計ることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。日本の未来を担う若者ができることは？ きっと、その答えはひとつではありません。だからこそ今、私たちは動き始めます。そのステージは、私たちの大学がある大分県。大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。私たちは大分県の未来を拓く『おaita, つくりびと』になりたい。

203 人口減少社会を支えるための先進的な“ものづくり”

プロジェクト

2

徘徊老人の位置検出システムのための 画像処理ソフトの開発



実施体制：鈴木 秀男、吉森 聖貴、福島 学（情報メディア学科）、稲川 直裕（機械電気工学科）

実施フィールド：豊後大野市

連携機関：豊後大野市、養護老人ホーム常楽荘

概要 高齢化社会に伴い、認知症などによる高齢者の徘徊が社会問題となっている。本研究では、徘徊高齢者の捜索に役立つ、位置検出システムを構築することを目的としている。このシステムでは、徘徊高齢者の位置を検出するために、防犯カメラ等のカメラ映像を使用する。本年度の研究では、カメラ映像を使つての画像認識ソフトウェアの開発を行った。画像認識には、顔認識と歩行認識の組み合わせを利用することとした。

高齢者の経路をビッグデータとして解析することで、高齢者が住みやすい街づくりを実現するだけでなく、位置検出システムを活用して、子供たちの見守り情報など、安全・安心な街づくりへの貢献も目指している。

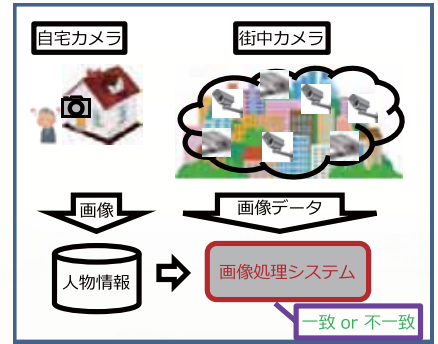
取組内容 本研究では、徘徊高齢者の位置検出を実現するために、ノン・ウェアラブル方式を採用した。ノン・ウェアラブル方式の位置検出とは、徘徊高齢者が特別な機器を身に付ける必要がない方式のことであり、徘徊対象の高齢者の立場からは、身に付けるものを強要（強制）しないため、まったく制約がないことになる。このようなノン・ウェアラブルな位置検出として、街中に設置してある防犯や監視用のカメラ映像を入手し、画像を解析する技術が必要になる。

本研究では、人物の顔による認証と、人物の歩行に関する認証を利用する。さらに、両者を組み合わせることで、認証の信頼性を向上させる。

顔認証は、撮影された動画から人物と顔の画像を複数枚抽出し、人物毎に複数枚の画像を取り出す。このとき、取り出した複数枚の画像を人物毎にまとめたものを未知画像群と呼ぶ。次に、あらかじめ用意してある複数人物のテンプレート画像群と未知画像群の中の未知画像を比較する。その結果、マッチングが成功すれば、人物を特定することができる。このための処理ソフトウェアの開発が本研究の主となる目的である。

地域での成果 顔認証については、室内での実験段階の認識率と屋外での実際の映像を用いた認識率がほぼ同等となったことで、採用したアルゴリズムの正当性は検証できたと考えている。歩行認証については、歩行パターンから解析に必要なバックデータを収集する方法に目途が立ったところである。

今後の展開 認識率は、カメラの解像度、テンプレートの数や種類に依存する。認識率の向上を目指し、検討を重ねたい。また、歩行認証については、機械学習方式を取り入れて、人物を特定することを考えている。最終的には、「顔+歩行」での認証を可能とし、信頼性の向上を目指す。



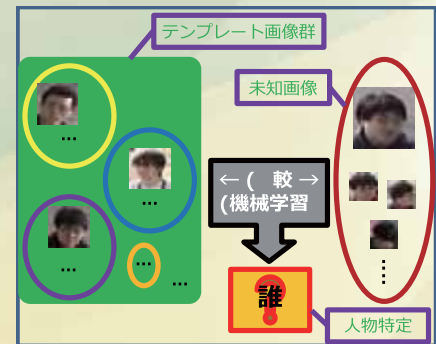
システム概略図



システム運用イメージ図



動画から未知画像群生成



機械学習による人物特定



『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけでは計ることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。日本の未来を担う若者ができることは？きつと、その答えはひとつではありません。だからこそ今、私たちは動き始めます。そのステージは、私たちの大学がある大分県。大分への要着を勇気に変えて、大分ですしかできないことにチャレンジします。地域の皆さんとともに、もっともっと元氣なまちをつくります。私たちは大分県の未来を拓く『おおいた、つくりびと』になりたい。

204 人口減少社会を支えるための先進的な“ものづくり”

プロジェクト

2

要介護者のコミュニケーション支援システムの開発 -共通プラットフォームによる効率良いICT技術の利活用-



実施体制：福島学、坪倉 篤志、濱田 大助（情報メディア学科）、市田 秀樹（COC事業担当）

実施フィールド：大分県、大分市、別府市

連携機関：Uuu（障がい者サポート支援事業）、（医）謙誠会・博愛診療所重度認知症デイケア

概要 コミュニケーションがスムーズでないがゆえに、意志の疎通が困難となり孤立する場合がある。特に地域コミュニティでは、孤立者の存在は豊かな日常生活を送ることに障りが出るだけでなくコミュニティの減退につながりかねない。本取組みは、要介護者の相互コミュニケーション支援を目的とする。その中で研究成果を統合し課題解決につながる「成果を持ち寄れる基盤」を確立する。

取組内容 1) 顔抽出と本人認証および視線方向識別、2) ステレオビジョンによる空間把握、3) 映像統合による地域把握、4) 調音材による住環境改善、5) 共通プラットフォームの有用性確認、に取り組んだ。

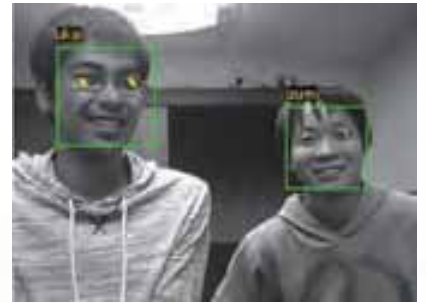


図1 顔・個人・視線方向判別の例

- 1) の成果：図1 顔抽出、個人識別、視線方向判別
展開：何に気を取られているかを取得可能であり、事故防止に応用可能。視線の安定性を使うことで「徘徊検知」への応用が可能。
- 2) の成果：図2 部屋および中にあるものの位置取得
展開：住環境に応じた情報の伝え方を制御することに応用可能。発作や転倒等の危険動作検出への応用が可能。
- 3) の成果：図3 地域の全景取得と部分更新
展開：お祭りなどの地区の集まりでの人の動きを確認することに応用可能。災害時の避難経路確認や防災への応用が可能。
- 4) の成果：図4 住環境改善によるリラックス度の改善
展開：予備実験から睡眠の質が改善する可能性が得られており、生活の質向上への展開を考えている。

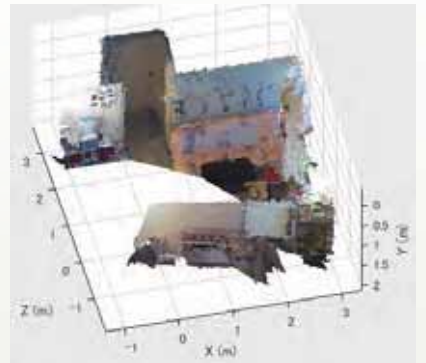


図2 空間把握の例

地域での成果 研究成果を「別府市福祉まつり」で展示発表し、多くの方に体感していただいた。図5に会場の様子（左）と学生が地域の方に成果を説明している様子（右）を示す。



図3 地域把握の例

学生の学び 授業で学んだ内容を「いかに活かすか」が問われる取組みで、アイデアが湧く「源（みなもと）」が「学んだ内容の理解」であることに気づくことができた。また地域課題への取組みを通して「学ぶ目的／意欲／意義」を自分なりに持てるようになった。

今後の展開 検証を行い、誰もがどこでも安心して気軽に使える技術に完成度を高めることと、検証そして展開を通して「笑顔あふれる地域」づくりにつなげていく予定である。

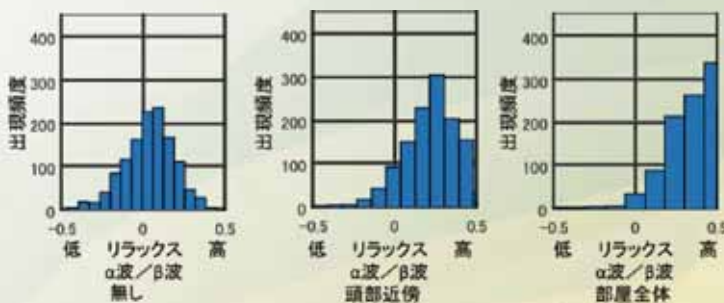


図4 住環境改善例



図5 別府市福祉まつりでの展示発表の様子



『あおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『あおいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけでは計ることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。日本の未来を担う若者ができることは？きつと、その答えはひとつではありません。だからこそ今、私たちは動き始めます。そのステージは、私たちの大学がある大分県。大分への要着を勇気に変えて、大分ですしかできないことにチャレンジします。地域の皆さんとともに、もっともっと元気をまちをつくります。私たちは大分県の未来を拓く『あおいた、つくりびと』になりたい。

プライバシー問題を生じない見守りシステム 実現に向けた電磁波レーダの利活用



実施体制：鶴飼 拓也、福島 学（情報メディア学科）

実施フィールド：大分市

連携機関：(株)エイビス

概要 独居老人に限らず人目の少ない宅内での事故を早期に見発見または予防することは、安心した日常生活を送る上で本人を含む関係者にとって重要である。一般に使われるカメラはプライバシー問題を生じ、見守りではなく「監視」と感じてしまうことがある。一方で検知漏れが人命に関わる場合があるのでいかなる環境であっても高い精度で検知できることと、大量の誤検知による見守り側の危機感減衰を防ぐ「見守り技術」が必要不可欠である。本取組では視覚情報を必要とせずかつ遮蔽物による死角の少ない小出力電磁波レーダを用いた見守りシステム構築の基礎となる電磁波レーダの基礎データ収集と分析を行う。図2に使用した電磁波レーダを示す。

取組内容 電磁波レーダに対して等間隔計測法を用いて動体の距離と電磁波の減衰量の調査を行った。図3に電磁波レーダと対象物の距離・方向・減衰の関係を示す。調査の結果、センサの感度などの電磁波レーダセンサの特性を捉えることが出来た。この特性をもとに、動体の位置推定などを行う。

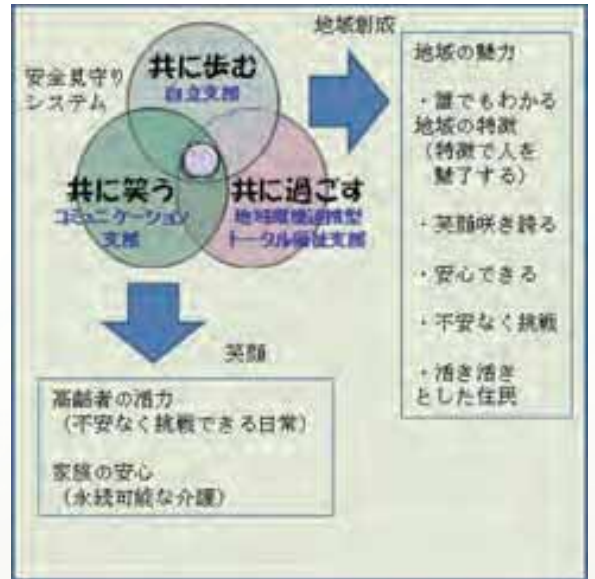


図1 システムの基本コンセプト



学生の学び 木佐上地区での活動に参加し、地域住民の声を聴くことができた。学内での活動だけにとどまらず、地域に赴いて話を聞くことで、実際に地域で何が問題になっているのかを、実感する事ができ、本研究の意義を考えることにつながった。今後、本研究の展開を含め、木佐上地区での活動を検討し、地域において役に立つシステムの開発に取り組む。

今後の展開 2つのセンサから得た信号の減衰量から動体の位置推定を行う。図5に「位置の変化」を計測した例を示す。単に位置がわかるだけでなく、動体の「速度」の変化を計測する。図6に「移動する速度の変化」の例を示す。これらのデータを組み合わせることにより、例えば転倒などの危険動作を動作パターンとしてデータベース化することができ、お風呂場やトイレ等カメラを入れられない場所の安心・安全をもたらす「見守り」を実現していく。

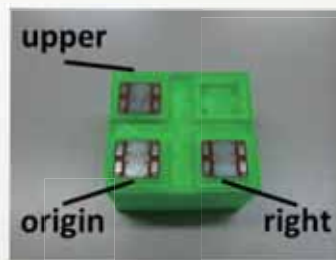


図2 本研究で用いた電磁波レーダ

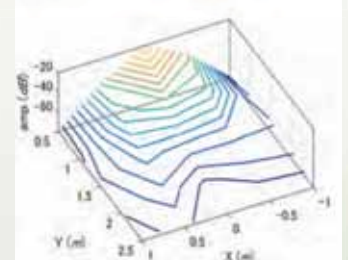


図3 センサからの距離と減衰量の関係



図4 木佐上地区に住んでいる方の話

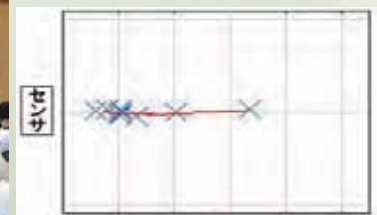


図5 位置推定/時間追従の様子

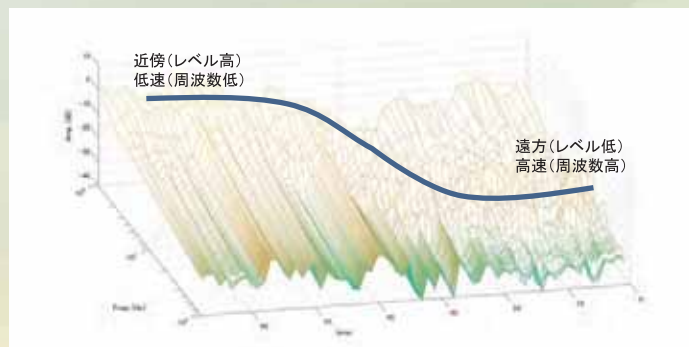


図6 センサ遠方(図左側)から足早にセンサに近づき「立ち止まる」様子をセンサで計測した結果例



ものづくりによる地域貢献 ～被災時避難所としての廃校活用提案～



実施体制：近藤 正一、濱永 康仁（建築学科）

実施フィールド：大分市木佐上地区

連携機関：木佐上連合区、木佐上コミュニティー

概要 建築学科では、1年次から3年次まで各学年に通年科目として『プロジェクト1～3』が開講されており、1年前期の『プロジェクト実習』と合わせて〈プロジェクト系科目〉として位置付けられている。プロジェクト系科目では、1年次に地域における体験交流活動を経験し専門教育の学修に対する動機付けを図り、2年次は専門知識の修得と定着を目指す様々な実践教育を行い、3年次にはより高度な調査・分析に基づく提案を目指す課題解決型学修に取り組む。これら一連の学修サイクルを明確化させるため、各コースにおいてプロジェクト系科目を中心とする専門教育科目の体系化が図られている。そして、それらの中間段階を担う2年通年科目『プロジェクト2』では、とくにインテリアデザインコースとのカリキュラム連携の中で、ものづくりによる地域貢献の技術と豊かな感性を身につけることを目的とし、具体的な地域課題に対する解決方法の提案を行う。

取組内容 旧木佐上小学校は、廃校後、木佐上コミュニティーセンターとして活用されており、木佐上地区の被災時避難所に指定されている。また、近年、避難所での長期間の避難生活において個人や家族のプライバシーを守るためのパーティションが全国的に注目されていることから、『プロジェクト2』では、高機能なパーティションの開発提案とモックアップによる実際の使用報告を課題として取り組んだ。履修した学生たちは、主に竹材を使用した軽量で扱いやすい躯体を作ることにより、簡便に安心できる空間を生み出すための最適な間仕切りの方を考案し、実際に制作し木佐上コミュニティーセンターで報告した。

地域での成果 スタードームと呼ばれる簡易なスケルトンに様々なインフィルを組み合わせることで、用途や目的に合わせた多様かつ魅力的な仮設空間を構築することに成功した。木佐上地区の方々には活用していただける提案となり、さらなる取り組みへの期待から、次年度の活動へつながる成果を上げることができた。

学生の学び 全履修生に対し、各自およびグループごとの取り組みについて振り返るためのレポート提出を義務づけた。1年次に育んだ動機付けが実を結び、より専門性を活かした具体的な提案として結実させることができた。また、チームワークによるプロダクトデザインという高度な課題を十分な水準で成し遂げることができ、これまでの学修へのフィードバックとなるとともに、今後の学修サイクルへとつなげることができる学びとなった。

今後の展開 今回の提案や作品発表は、一定の評価を得たものの、未だ発展の余地があると目される 2018年度は、カリキュラムの連携をさらに強化するとともに、指導体制の見直しや 2017年度までのノウハウを活かした課題の再設定により、実効性の向上を目指す。



『プロジェクト2』の授業風景



アイデアスケッチの例



木佐上コミュニティーセンターでの発表会の様子



モックアップ組み立て実演の様子

生きがいのある暮らしを創る オープンイノベーションワークショップ



実施体制：市田秀樹（COC事業担当）、池畑義人（産学官民連携推進センター）

実施フィールド：大分市

連携機関：産学官民連携推進センター、大分県立芸術文化短期大学、大分県立看護科学大学
社会医療法人 敬和会 大分リハビリテーション病院、大分県医療ロボット・機器産業協議会

概要

これまでの人の暮らしは、モノによって支えられ、モノの進化によって豊かになってきた。しかしながら、大量生産・消費の今日の社会においては、企業利益主導型の暮らしの形態が構成されており、ひとりひとりの暮らしの多様性は、ある意味で置き去りにされている。このような状況の中で、21世紀を迎えた日本では、超高齢化・人口減少等の社会構造の変化を受けて、ひとりひとりの多様性を尊重することの重要性が強く認識され、暮らしの在り方についてそれぞれの立場でひとりひとりが考えていく必要性に迫られている。

このプロジェクト型ワークショップでは、学生、大学関係者、医療機関、企業、自治体などの様々なセクターのメンバーが集まり、対話とものづくりを通して社会課題の解決に取り組む。テーマとしては、今後の超高齢化社会の中で必要とされる「モノ」に焦点をあてる。特に「暮らしを支えるモノ」、具体的には介護・医療・福祉に関わる器具・機器に着目し、それらを必要としている人が自立した生活を送れることを目標に、課題に対するアイデアを創造しカタチにする。



取組内容

本ワークショップでは、①知る、②共感する、③デザインする、④創る の4つのステップで構成される。

①知る：デザインプロセス（デザイン思考など）、インクルーシブデザイン、オープンイノベーションなど、今後の共創社会において課題解決に向けた取り組みに必要なデザイン手法について学ぶ。

②共感する：ユーザーの立場で共感することを通じて課題の本質を探る。そのために、実際に体験したり、ユーザーの行動を観察することを行う。

③デザインする：共感することから得られた課題に対して、創造的に解決するために様々な分野のメンバーやユーザーを巻き込みながらアイデアを検討する。

④創る：プロトタイピングを通してアイデアをカタチにし、対話を進めることで、創造的課題解決に向けた取り組みを行う。

これらのプロセスから成る4回のワークショップ（デザインワークショップ、ヘルスケアハッカソン、アイデアハッカソン、プロジェクトメイキング）と成果発表を行う。2018年度は2つのプロジェクトが成果発表を行った。

地域での成果

参加3大学（NBU、県立芸術文化短期大学、県立看護科学大学）の他に医療機関、ものづくり企業、自治体などの構成員が参画している。このような多様なメンバーが集まる機会は少なく、参加者からは専門外のメンバーとものづくりを行うことで新たな視点を獲得した、今後の業務に活かせるなどの人材育成の観点から大きな成果を上げている。

学生の学び

参加大学の学生にとっては、専門外の学生や社会人とコミュニケーションを取る中で自分の専門性の再認識や、モノを創り上げていく中で必要なスキルの醸成につながっている。またワークショップの場を超えて、複数の共同研究が生まれるなど、その可能性は広がってきている。

今後の展開

本プロジェクトはCOC事業期間中の5年間で一定の成果をあげることができた。今後は5年間の成果を取りまとめて出版することを目指す。



NBU 日本文理大学

〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097-592-1600(大代表)
Web: <http://www.nbu.ac.jp>

【COC事業担当】
TEL/FAX: 097-524-2663(直通)
Web: <http://coc-nbu.jp>
E-mail: coc@nbu.ac.jp



あおいた、つくりびと

『あおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『あおいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろうか。日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくりまします。
私たちは大分県の未来を拓く
『あおいた、つくりびと』になりたい。

ロボメカデザインコンペ2017への取り組みを通じた地域課題への挑戦



実施体制：大里一矢，大塚柊，高橋瑞希，宮崎翔也（情報メディア学科・3年）

実施フィールド：大分市木佐上地区

連携機関：（一社）日本機械学会 ロボティクス・メカトロニクス部門

概要 大分県は、湯治文化にゆかりが深く鎌倉中期の浜脇温泉には大友頼泰によって温泉奉行が置かれ、別府温泉の楠温泉には元寇の役の戦傷者が保養にきた記録が残っている。別府は、1931年(昭和6年)に日本の大学で初めて温泉療法研究施設が開設されている。ここでの湯治文化は農閑期の福祉的側面が強く、疲れを癒し「活力」を取り戻すために利用されることが多かった。しかし現在は「福祉」が「高齢者や障害者向けのサービス」との認識が強いのが現状である。これらのことから「福祉産業」を「継続可能な産業」とし、かつ「地域活性」につなげることを考え地域住民が相互に支え合う地域コミュニティ形成の支援(福祉産業支援)を可能にする装置として「ウェルステッキ」を考えた。



図1 地域コミュニティ支援のコンセプト

取組内容

- 1) 木佐上地区での課題発見
ロボットプロジェクト関連科目を通して発見した地域課題を精査し、課題解決策を考えた。
- 2) Hallow を通じた福祉との向き合い
Hallow (生きがいのある暮らしを創るオープンイノベーションワークショップ) での活動を通し「福祉」についてどうすることが必要なかを考えた。
- 3) 解決策で使う技術の試作
歩行情報、位置情報、音源情報、画像情報、造形技術、を駆使して試作を行った。



図2 木佐上地区での取組み



図3 Hallow での取組み

地域での成果

木佐上地区の地図情報に、日常のアクティビティとして、よく使う道路やひやりとした場所といった位置情報と歩行情報、さらにはよくその場所に居る人等の地域情報を収集するための基礎技術の試作が行えた。この情報から、万が一の災害時に避難誘導や声掛けを行う等を実施する際の地域基礎情報に活用できると考えている。



図4 ロボメカデザインコンペ

学生の学び

1年次の科目からの学びが重なり、お世話になった地域に自分達ができることを考え、プロトタイプし、検証実験に踏み出せるまでのスキル修得のステップを確実に踏んでいる。地域課題に継続的に取り組むことで、地域課題が解決できるだけでなく、自己理解が深まり、修得目標が明確になり「学ぶこと」が「できる事を増やす」ことであることに気づき、自ら学び、発展させる「自分なりのやり方」を発見してきている。

今後の展開

現在、要素技術のプロトタイプができる状況であり、機能毎の検証実験および統合したシステム構築、さらには実証実験に進めればと考えている。



図5 木佐上安心・安全マップ



『おいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。日本の未来を担う若者ができることは？ きっと、その答えはひとつではありません。だからこそ今、私たちは動き始めます。そのステップは、私たちの大学がある大分県。大分への愛着を勇気に変えて、大分できがけないことにチャレンジします。地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。私たちは大分県の未来を担って、『おおいた、つくりびと』になりたい。

地域経済を考慮した地域課題取り組みに向けたプラットフォーム構築



実施体制：福島学、松永多苗子（情報メディア学科）、筑紫彰太（機械電気工学科）、市田秀樹（大学COC事業）、今西衛、本村裕之、山城興介（経営経済学科）

実施フィールド：大分市、大分市木佐上地区

連携機関：木佐上コミュニティー、パークプレイス大分 他

概要 2015年度、2016年度に研究成果を統合するためのプラットフォーム開発を進めてきた。その成果の検証を行うとともに、さらに発展させるため本年度は、統合した成果を活用できるかを検討するため他分野への展開を目指す。そこでは「地域経済」を視野に入れた取り組みを行う。そこで、課題解決を「シカケ」という概念を用いて、工学的な観点と経済学的な観点を組み合わせ、地域経済を含む活性化に向けて進めるための学内における「知」のプラットフォームとして構築することを目標とする。



取組内容 地域課題への取組みとして、次の項目に取り組んだ。

- 1) 木佐上地区での活動
 - a) まなび庵：LINEによる地域コミュニティ
 - b) ロボットプロジェクト入門2（1年生科目）
 - c) ロボメカデザインコンペ（正課外活動）
- 2) 大分地域での活動
 - a) OISA（大分情報産業協会）
 - b) ロボットプロジェクト基礎2（2年生科目）
- 3) 生活の質（QoL）向上

睡眠の質改善に向けた計測実験と結果の評価

地域での成果

- 1) 木佐上地域
 - a) 地域講座の実施と活用による展望の紹介。
 - b) 課題を発見し解決策のプロトタイプ作成と紹介。
 - c) モックアップ（機能試作）とコンセプト評価（受賞）
- 2) 大分地域での活動
 - a) OISA（大分情報産業協会）行事のネット配信
 - b) パークプレイスにおける回遊性改善に向けた取組み
- 3) 生活の質（QoL）向上

計測実験実施と結果の公表（J-COMでオンエア）

学生の学び

- 1) 木佐上地域
 - a) 普段使っている技術の社会的需要
 - b) 地域と触れ合うことで「自分でできる事」の発見
 - c) 社会的評価と企業の取組み
- 2) 大分地域での活動
 - a) 確実性と継続性および結果振返りの重要性
 - b) 製品の安全性と安定性/持続性の難しさとやりがい
- 3) 生活の質（QoL）向上

実験計画と結果の質保証の重要性

今後の展開

地域課題の解決は「1つの技術」だけではなく、それが維持継続できるための「ビジネス的視点」が重要である。効果を評価するための継続的取組みが必要である。また成果の地域へのフィードバックが必要だと考えている。

【将来的】人の行動パターンもアルゴリズム化し、その要素をプラットフォームに追加していく。
人工知能、ビッグデータの活用



図1 まなび庵の取り組み（木佐上コミュニティーセンター）



図2 ロボットプロジェクト入門2 成果発表会



図3 ロボメカデザインコンペ

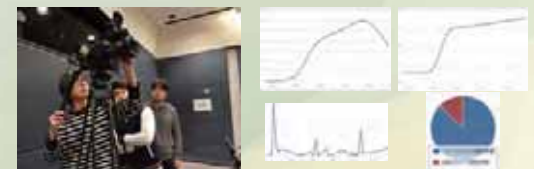


図4 OISA サウンズコンテスト・ネット配信



図5 回遊性効果計測

図6 睡眠実験装置

『おaita, つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おaita, つくりびと』と名付けました。お金やモノだけではかきあがることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろうか。日本の未来を担う若者ができることは？ きっと、その答えはひとつではありません。だからこそ今、私たちは動き始めます。そのステップは、私たちの大学がある大分県。その大分への愛着を勇気に変えて、大分できがけないことにチャレンジします。地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。私たちは大分県の未来を拓く『おaita, つくりびと』になりたい。

地域に根差したものに情報シス

テム分野ができること ~バイタルモニタに必要な筋活動の計測・分析手法の提案~



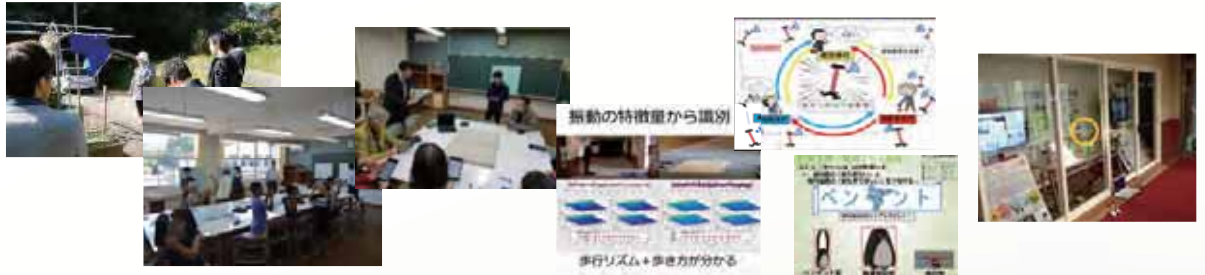
実施体制： 大里一矢，高橋瑞希，山下涼介（情報メディア学科）

実施フィールド： 木佐上地区

連携機関： 木佐上連合区、木佐上コミュニティー

概要

ロボットプロジェクト入門（1年生科目）で木佐上地区との出会いをきっかけに「地域課題」を意識しはじめ、試作を通して「エンジニア」として求められるもの/修得したいものに気付いた学生が、木佐上地区での講習会や必要な技術開発に取り組んだ内容を報告する。



取組内容

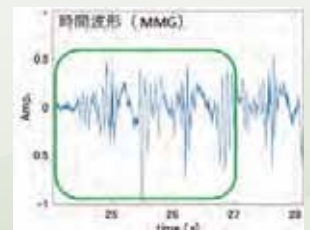
木佐上地区をフィールドに学んだロボットプロジェクト入門で「自分達よりはるかに元気な人生の大先輩」を目の当たりにし、この地域のためにこれまで学んできた専門分野である「情報システム」ができる事は何かを考えました。

その結果、「健康寿命」を長くすることで多くの人が人生の大先輩の豊かな知恵を享受できると考えました。

健康寿命は「バイタル（生きる）サイン（兆候）」を適切に保つことが求められるので、手軽にバイタルを計測することを考えました。しかし正しくなければ意味がないので、手軽さと正確さを両立することを考えました。

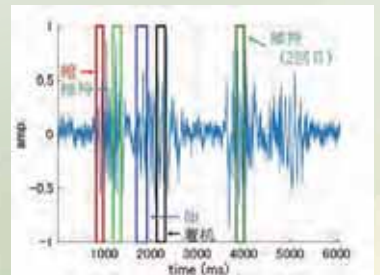
そこで全てのバイタルサインの元となる「筋肉の動き」を計測し、分析する方法に取組みました。ここでは手軽さのために「筋音」で計測することとし、計測できるのかについて実験を含めた検討に取組みました。

カメラ計測画像例（最初の1回曲げ伸ばしの部分）



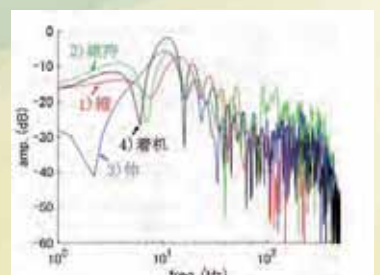
地域での成果

これまでに、フットマットを使った「在宅確認」、フットマットで計測できる振動を使った「歩き方のデータ化」、歩き方に応じた「歩行支援」、をロボプロ入門を通して取り組んできました。今回、それらの成果から「筋肉の動き」がわかることで「安心した外出」や「疲れ度合いの可視化」を可能に出来るかに取組み、最も基本的項目である「計測」に成功しました。



学生の学び

「この人の困りごとを解消するにはどこで学んだ何が使えるか」という発想は、地域をフィールドとしての学びを通して初めて得られるのかもしれませんが、講義で「ありがたいお話」を聴くのではなく「これを解決したい」と思った時に「どう考えればいいのか」「それを実現するにはどう取り組めばいいのか」をするには何が必要かの「自分流」を発見し、成果の出せる程度に理解し、エンジニアの卵として成長しました。



今後の展開

モデルケースでの計測とは言え、従来法の約100倍の精度向上に成功しています。今後、検証実験、実証実験を経て、実際に地域の方々のお役に立てるように展開していきたいです。

NBU 日本文理大学

〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097 - 592 - 1600(大代表)
Web: http://www.nbu.ac.jp

【COC事業担当】
TEL/FAX: 097 - 524 - 2663(直通)
Web: http://coc-nbu.jp
E-mail: coc@nbu.ac.jp



coc-nbu.jp



あおいた、つくりびと

『あおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『あおいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
自分への要着を勇気変えて、大分できかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く『あおいた、つくりびと』になりたい。

豊後大野市の地域資源を活かした
フィールド・スタディ科目への展開

実施体制：今西衛・舛田佳弘・本村裕之・山城興介・工藤順一

実施フィールド：豊後大野市

実施機関：（一社）ぶんご大野里の旅公社、(NPO)おくぶんごツーリズム研究所

概要

豊後大野市には、ジオパークや祖母・傾・大崩ユネスコエコパークなどの地域資源が数多く存在するが、有効な地域観光資源となっていない。そこで、これらの地域資源を活用し、継続的な事業を行える地域観光サービス人材の育成が求められている。

平成27年に経営経済学科地域マネジメントコースを新設し、地域資源観光に経営の概念を取り入れ、地域が顕在的・潜在的にもつ魅力を観光資源として発掘・利活用し、まちづくりマーケティングによって観光サービスを持続可能な事業へとプロデュースし実践する能力を備えた人材の育成を目指している。

取組内容

豊後大野市をフィールドとして「フィールド・スタディ」等の科目を通じて観光を切り口としたの方策を探る活動を行っている。具体的には、豊後大野市の名所を訪問し、現状や課題を洗い出し、豊後大野市にどのような魅力があるのか発見し、地域の可能性を探っている。

本年度は、大きく3つの事業に取り組んだ。

1つ目は、豊後大野市で毎年開催されるチューリップフェスタなどのイベントに関する効果検証である。

2つ目は、国民文化祭応援事業である絵本パレットと連携し、豊後大野レール館を開館（別途プロジェクトシートを参照）した。また、ノンタンARに関するイベントの効果検証などの学生と議論した。

3つ目は、google mapによるナビゲーションの開発である。豊後大野の地域資源はカーナビやgoogle mapに登録されておらず、また、道路も不慣れな人が通ると不安な場所がある。なるべく安全に通ることができるルートを選定した。

地域での成果

1つ目については、地域の方と意見交換の場を開いた。2つ目の豊後大野レール館については、別途プロジェクトシートを参照。ノンタンARについては、ARはとても楽しかった子供たちは喜ぶのではないかと等の意見が出された。3つ目は、地域より是非豊後大野全体でマップを作って欲しいとの要望が寄せられた。

学生の学び

イベントの効果検証、費用対効果を重点的に見てレポートを書いてもらうようにしたので、実際に自分たちもお店を出してみたい、大変さを実感したい、赤字なのかどうか知りたいなど、地域活性化に対してもマーケティングの概念が身についてきているが教員としても実感できた。

また、ある学生からは、イベントにおけるゴミの回収がすごくきちんとしていた、子どもたちの教育にもよいのではないかなど、学生ならではの気づきもあった。

今後の展開

これまでの活動内容から、観光案内が一番の課題であることが分かった。そこで、地域と一緒に観光マップを本格的に作ることを今後取り組むべきことである。



↑アルバイトとしてイベントに参加した学生



↑ 地域の方との意見交換会



↑ ななつ星に手を振る学生



↑ ノンタンARを体験する学生



『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇氣に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『おおいた、つくりびと』になりたい。

豊後大野市ジオパーク・エコパーク・生物多様性戦略に関する市民・学生の普及活動

実施体制：杉浦 嘉雄（建築学科）、船橋 玲二（環境科学研究所）

実施フィールド：豊後大野市、エイトピアおおの

連携機関：豊後大野市、NPO法人おおいた水フォーラム、祖母傾ユネスコエコパーク推進協議会など

概要 豊後大野市では、既に認定されている日本ジオパーク（市内全域）、大分県・宮崎県の2県6市町が登録を目指す「祖母傾ユネスコエコパーク」推進活動（申請区域は市内全域）、県内初の市町村単独による策定を目指す「生物多様性ぶんごおおの戦略」に関する、市民と学生の理解や積極的な参画を探ることを目的して、次の【第1事業】及び【第2事業】の2事業を有機的に実施した。

取組内容 【第1事業】

- 事業名：“大地”と“生きもの”シンポジウムII
- 開催日：平成27年11月14日（土）9：30～17：30
- 開催地：豊後大野市 エイトピアおおの・小ホール
- 対象者：豊後大野市民・学生及び大分県民
- 参加人数：延べ150名
- 本学の参加学生：両学部1年生12名、2年生10名、3年生7名
- プログラム：
 - <第1部>連続講演「ジオ・エコパークで豊後大野市を元気にする」
 - <第2部>連続講演「自然との共生が豊後大野市を元気にする」
 - <第3部>パネルディスカッション
「環境保全と地域振興が両立する仕組みを求めて」

【第2事業】

- 事業名：生きものあふれる田んぼと地域づくりシンポジウム
- 開催日：平成27年2月27日（土）13：00～17：15
- 開催地：豊後大野市 エイトピアおおの・小ホール
- 対象者：豊後大野市民・学生及び大分県民
- 参加人数：延べ80名
- 参加学生：工学部1年生2名、2年生2名、3年生6名
- プログラム：
 - <第1部>先進事例と参加者へのエコ田んぼ実践活動の可能性
 - <第2部>豊後大野市の実践報告
 - <第3部>パネルディスカッション
「生きものあふれる田んぼと地域づくり」をめざして」

地域での成果 第1事業では、ジオパーク、エコパーク、生物多様性戦略、全般の普及活動に重点を置き、第2事業では、豊後大野市の主幹産業である農業、特に田んぼのあり方（環境と経済全般）について焦点をあてたため、市民の上記事業への理解が段階的に深まった。その成果のためか、市民と学生からの質問も積極的に行われた。

学生の学び 抽象的になりがちな“持続可能な地域づくり”に関する学びに対し、この2事業を経験することで、実践者自身による先進事例の紹介や、地元での実践例を具体的に学ぶことができ、さらにこれらの概念に関する具体的なイメージを参加学生の多くが持てるようになった。

今後の展開 今後は参画意識のある学生に対し、例えばフットパス等の手法を用いて「理解」の段階から「実践」段階の体験学習を実施したい。



【第1事業】チラシと記録写真



【第2事業】チラシと記録写真

大野町土師地区における 生物多様性回復のための基礎的研究

実施体制：池畑義人（建築学科）

実施フィールド：豊後大野市大野町土師地区

連携機関：土師地区振興協議会



概要 大分県内に多く見られる小規模集落は、少子高齢化や人口減少により、地域のコミュニティを維持することが困難になっている。建築学科環境・地域創造コースでは、1年次から豊後大野市大野町中土師地区において農業体験やフィールドワークなど様々な体験を通して小規模集落の課題を考えてきた。その中で3年次の環境・地域創造演習では、地域の資源であるふるさと体験村の利活用について調査・提案をした。これらの関わりの中で、図1に示すように体験村の利用者は7月～9月に集中し、それ以外の時期の利用促進が課題であることがわかった。そこで、学生からホタルを地域資源として活用した体験村の利用促進が提案された。現状では、5月下旬から6月上旬にかけて体験村周辺でホタルの生息が確認されるものの、その数は少ない。

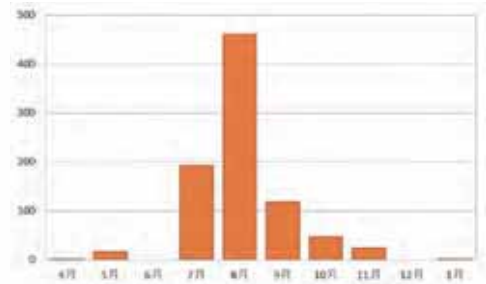


図1. 2016年度ふるさと体験村宿泊者数

取組内容 建築学科環境・地域創生コースでは、ゼミ活動で体験村周辺におけるホタルの実態を調査すると共に、その生息環境を把握することを目指してきた。ホタルおよびエサのカワナには選好値といわれる、自身が好む水深、流速、水温、phなどがある。そこで、図2に示すように体験村の横を流れる柴北（しばきた）川の河川横断面を測量して、河川地形を明らかにした。その測量結果を河川シミュレーター iRIC (<http://i-ric.org/ja/>) に入力して、河川流量に応じた流速、水深の分布を求めた。図3に平常時の流量に近い流量 4.0m³/s における水深の分布を示している。これらの結果から、流量、流速に関する各点の選好値を求め、その分布を示したものが図4である。それぞれの流量で同様のシミュレーションを実施して、計算区間全体の選好値を求め、流量ごとに柴北川の選好値を示したものを図5に示す。HSIは流量と流速に関する総合的な選好値である。図5から流量が少ないほどホタルの生息には適した環境であることが明らかになった。



図2. 調査風景

地域での成果 地域において河川プールは、地域の収入源であると共に他地域との交流のための貴重なツールであるため、本研究の成果は大きな期待を持たれている。また、体験交流活動から始まった地域の学びが工学的な課題解決に帰結することに対し、地域から喜びの声があがっている。

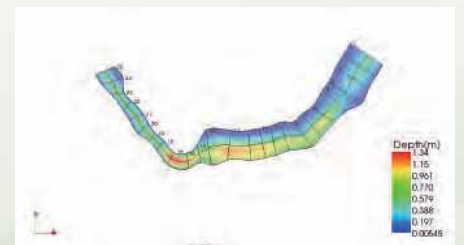


図3. 流量 4.0 m³/s における水深の分布

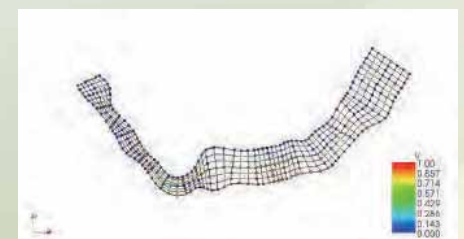


図4. 流量 4.0 m³/s におけるホタルの選好値の分布

学生の学び 1年次からの学びのフィールドであった土師地区において課題解決できることが研究に対する意欲を高めていた。研究の過程において、測量の技術、データの可視化、河川工学の基礎知識を身につけることができた。

今後の展開 今後は研究の精度を高め、机上のシミュレーションを実行に移すことを検討している。具体的には、ホタルの生息に適した流量、河川断面形状を明らかにし、行政当局に対して河川改修の提案をすることを目指したい。

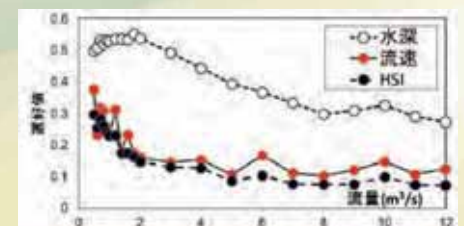


図5. 各流量に対する選好値



豊後大野市を例とした 「地方消滅」に関する研究

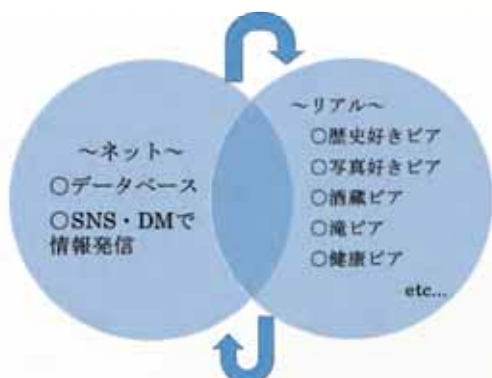
実施体制：大塚優太、原岡慶、永井光、橋本堅次郎（経営経済学科）

実施フィールド：豊後大野市各所

連携機関：豊後大野市

概要 経営経済学科の橋本研究室では 2015 年 3 年次の教育プログラムとして観光資源化が困難な豊後大野市にあえて焦点をあて豊後大野市の事前調査、行政トップの橋本市長へのインタビュー、現地調査を踏まえて豊後大野市の観光資源の再発掘と活用の方法をビジネスとして「豊後大野市の観光」をテーマに 2015 年に「豊後大野市まるごとインターネット・エリアピアビジネス」を作成した。

2016 年度は 2015 年度の成果をさらに発展させ「地方消滅」をテーマに豊後大野市をフィールドとしてどのような対策が関考えられるかをテーマにして研究を行い卒業論文としてまとめ「オムニ・ピア」というアイデアを企画立案した。



オムニ・ピア構想

オムニ・ピア構想

①参考・・・オムニ・チャンネル

リアルとネットを融合させた地方活性化

②ピア（年齢・地位・能力などが）同等の者、仲間

③目標

効率的かつ効果的な地方の魅力の情報発信

既に行っているイベントのさらなる盛り上がり

新たなイベントの実施による豊後大野市のファン増

取組内容 2015年-2016年の教育プログラムと取り組み内容

1. 調査手法の習得 3年次の4月から5月の2か月間
2. 2015年6月：チーム編成を行い「調査」「課題形成」「仮説」の構築を行った。
3. 2015年7月：「市長インタビュー」「現地視察」を実施した。
4. 2015年7月～10月：「豊後大野市の観光資源」をテーマに企画の作成を行った。
5. 大学生観光まちづくりコンテスト 2015（ポスターセッション参加）（2015年9月10日、ホルトホール）
6. 第2回九州未来アワード学生起業アイデア部門（本選ファイナリスト）（2015年12月1日、レンブラントホテル）
7. NBU チャレンジ OITA 地域創生活動報告会 2016 in 豊後大野で発表（2016年2月13日、豊後大野市市庁舎）
8. 2016年12月15日豊後大野市橋本市長インタビュー「地方消滅と豊後大野市」
9. 日本文理大学経営経済学部 卒業論文発表会に参加。「優秀賞」



豊後大野市長へのインタビューを行い、豊後大野市の地方消滅に関しての対応について調査を行った。（2016年12月15日）

地域での成果 地方消滅をテーマに豊後大野市は Food（農業）、Energy（再生可能エネルギー）、Care（介護）の分野で自立へ向けて大変努力をしていることが学生はよく理解できた。しかし内部のことに限らず熱心な取り組みをしているが、外部からお客様を呼び込み経済効果を出す点についてのマーケティング視点の不足に気が付き「オムニ・ピア」というアイデアを提供することができた。

学生の学び 2年間の活動を通して、教員に頼らず「自ら歩む力」が身についたことが実感できた。企画段階からコンテストへの応募、事前の練習、市長へのインタビューなど多様な情報を集約、計画し段取りをつけ実行する一連の流れを身に付けることができた。地方消滅に関しても様々な情報を得ることで、学生自身が自信をもって何事にも取り組む意欲を醸成できた。

今後の展開 2017年度は今年度の成果を活かし、新しい視点をもった観光資源の活性化に取り組むことを予定している。

NBU 日本文理大学

〒870-0397 大分県大分市一本1272
TEL: 097-592-1600（大代表）
Web: <http://www.nbu.ac.jp>
【COC事業担当】
TEL / FAX: 097-524-2663（直通）
Web: <http://coc-nbu.jp>
e-mail: coc@nbu.ac.jp



おおいた、つくりびと

『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。日本の未来を担う若者ができることは？ きっと、その答えはひとつではありません。だからこそ今、私たちは動き始めます。そのステップは、私たちの大学がある大分県。大分への愛着を勇氣に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくりまします。私たちは大分県の未来を拓く。『おおいた、つくりびと』になりたい。

佐賀関半島・触れる観光プロジェクト

実施体制：吉村 充功（建築学科）、市田 秀樹（COC事業担当）

実施フィールド：大分市佐賀関地区

連携機関：NPO法人さかのせき・彩彩カフェ、JT(日本たばこ産業(株))

概要 近年、地域活性化に繋がるものとして、地域の特性を活かした新しいツーリズムが着目されている。これまで観光資源としては気付かれていなかったような地域固有の資源を新たに活用し、体験型・交流型の要素を取り入れた旅行の形態が盛んに企画され、実施されている。大分市佐賀関地域では、人口減少にともなう典型的な経済活動の縮小が起きているが、地域資源に目を向けると、佐賀関半島一帯には、「文化・自然」や「漁業・農業」などの地域資源がある。そこで、学生や地域住民が参加し、地域の魅力を主体的に掘り起こし、観光事業として立案・実行できる人材を養成することを目的とした、『JT NPO 助成「地域の再生と活性化に向けたリーダー育成講座佐賀関半島・触れる観光プロジェクト」（NPO 法人さかのせき・彩彩カフェ/日本文理大学 共同セミナー）』を実施した。



大分合同新聞 2015年7月2日付

取組内容 「地域の再生と活性化に向けたリーダー育成講座佐賀関半島・触れる観光プロジェクト」の実施プログラム

第1回（H27年6月13日）「佐賀関半島の歴史・文化」

第2回（H27年7月11日）「関あじ関さばブランド！」

第3回（H27年8月8日）「地元農産物の特色」

第4回（H27年9月12日）「商業・商店街の活性化策は！」

第5回（H27年10月10日）「海・星をめぐる触れる観光とは！」

第6回（H27年11月14日）「今後の観光とは、おんせん県！」

第7回（H28年1月16日）「案内先で料理を体験する」

実証実験（H28年3月12日）「関あじ関さばまつり会場にて実証実験実施」

各回、地域資源に関わるステークホルダーを講師に招き、佐賀関の現状と今後について参加者との意見交換を行った。

その後、各テーマにもとづいてのワークショップを行い、参加者自身が佐賀関地域の魅力について考えた。

地域での成果 佐賀関地域の魅力についてのプロモーションムービーと若者を惹きつける食についての案を考えた。

プロモーションムービーでは、佐賀関地区の「幸せ」の地名にもとづく「さかのせき潮騒物語」を題材に、「しあわせになりたい」というテーマで制作を行った。食の提案では、ブランド魚「関あじ・関さば」をつかった「関のりゅうきゅう丼」について提案を行った。

「佐賀関半島・触れる観光プロジェクト」の最終成果としての観光プランについては、平成28年3月12日に実際に参加者を募り、実施を行い、参加者には好評を得たが、ターゲット層の絞り込みや、PR不足なところ等問題点もあり、今後の展開についてのヒントを得る事が出来た。

学生の学び 地域資源について、普段、何気なく触れているモノ、見ているモノが、地域資源になり得るということについて経験が出来、また、実際に地域の魅力についての提案を行う事で、地域の状況について再認識させられた。実際に観光プランを実施し、参加者との意見交換を行うことで、体験型・交流型のツーリズムの「楽しさ」や地域資源の活かし方についてのヒントを得る事ができている。

今後の展開 今後、実際の観光プランとして実施する事を検討している。今回の実証実験から、観光ガイドとして、若者（学生）が活躍することによるメリットがある事が、アンケートの結果から得られており、今後はそれを含めたプラン全体の検討を行っていく。

『あいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『あいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけでは計ることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。日本の未来を担う若者ができることは？ きっと、その答えはひとつではありません。だからこそ今、私たちは動き始めます。そのステージは、私たちの大学がある大分県。大分への愛着を勇気に変えて、大分ですしかできないことにチャレンジします。地域の皆さんとともに、もっともっと元氣なまちをつくります。私たちは大分県の未来を拓く『あいた、つくりびと』になりたい。

アクアソーシャルフェス in 大分に参加して

実施体制：人間力育成センター

実施フィールド：大分市佐賀関馬場地区 磯崎海岸

連携機関：大分合同新聞社、トヨタ自動車、NPO法人おおいた環境保全フォーラム、馬場地区自治会

概要 アクアソーシャルフェスとは、全国の新聞社とトヨタ自動車の協賛で、H24年から「水辺の環境保護」を目的としたボランティアイベントの事で、全47都道府県で年に2回開催されている。大分県でもこれまで別府市冷川でホテルの生息環境を守る清掃活動や田ノ浦ビーチでの清掃活動が行われており、本学からも多くの学生がNBUチャレンジプログラムの一環として参加してきた。

取組内容 H26年からは、地域の里山保全活動に取り組む「四季の森プロジェクト」が運営スタッフの一員として、アクアソーシャルフェスに参画し、企画の立案から運営まで一貫して携わった。学生達は、H23年、H24年にアカウミガメが海岸で産卵し大きな話題になった大分市馬場地区の磯崎海岸に着目。「磯崎海岸をアカウミガメの古里にしよう！」というテーマの元、アカウミガメの産卵環境を豊かにする為のビーチクリーニング、竹垣作成などを立案した。当日は、160名を超える参加者が訪れ、海岸整備、美化活動に汗を流した。



四季の森プロジェクトについて

H25年8月に発生した山口・島根豪雨災害における災害ボランティアに参加した1年次生（現在4年生）が、浸水した住宅の殺菌、脱臭対策として竹炭利用の可能性を模索したことから始まった。学生達は、行政やNPO、林業従事者の協力を得ながら、地域の里山の整備を実施すると同時に、大分県森林環境税を活用した竹炭焼きを実施。災害発生時における備品として貯蓄している。現在では、地域の小学生を対象とした環境教室や人口減少が進む中山間地域での植樹祭の実施など、活動のフィールドは広がりを見せている。



アクアソーシャルフェスを終えて

アクアソーシャルフェスでは、学生が運営スタッフの一員としてイベント運営に携わらせていただいた事で、環境意識の高まりに加え、主体性や協調性を育む実践教育の場として有意義な機会となった。参加した学生からも「学生だけで取り組むプログラムとは異なり、企業の方々との協働作業を通じて学ぶ事が多かった」という声が挙がっている。また、昨年を上回る43名の学生が参加するなど、活動の輪は広がりを見せている。

祖母傾山系のエコパーク認定に向けた地域資源の発掘

実施体制：杉浦嘉雄、池畑義人（建築学科）

実施フィールド：豊後大野市緒方町長谷地区

連携機関：長谷川地区振興協議会



概要 現在、大分県では祖母傾山系の原生林や野生生物などの豊かな生態系の維持・保全・利活用のために、宮崎県と協力して、祖母傾山系および周辺地域のユネスコエコパーク登録を目指している。ユネスコエコパークの認定においては、自然保護だけではなく自然と人間社会との共生も重視される。そのため、祖母傾山麓における自然と共生した文化を発掘し、それを域外へ周知することが求められている。そこで建築学科では、2016年度から3年次に開講される『プロジェクト3』で祖母傾山の麓に広がる長谷川地区において、豊かな大自然や自然と共生した文化などの地域資源を発掘する活動を行った。

取組内容 『プロジェクト3』では、8月に一泊二日、9月に日帰りで現地に赴き、以下の3テーマについて調査を行った。

①奥岳渓谷を中心としたトレッキングコースの提案

奥岳渓谷は大野川上流の奥岳川に位置する花崗岩でできた風光明媚な渓谷である。周囲に広がる原生林と奥岳渓谷を巡るコースを踏査し、このコースの魅力や可能性を探った。

②ほしこが荘の活用

ほしこが荘は祖母山登山口付近に位置する、豊後大野市営の宿泊施設である。このほしこが荘に登山シーズン以外も観光客を誘致して稼働率を上げるための提案を検討した。

③上畑（うわはた）地区における文化財の調査

緒方町上畑地区は古い歴史を有する文化財が多数残っている。この文化財について調査し、地域の観光資源として活用する可能性について調査を行った。

これらの調査の結果をまとめ、資源としての活用する提案を地域の方々の前で発表した。

地域での成果 『プロジェクト3』は平成からの開講であるが、調査の過程および発表会での地域住民と学生との交流によって、学生発案の地域資源活用策が生まれる可能性ができた。

学生の学び 受講生の大部分は、1年次から大豊後大野市において体験交流活動に参加している。その経験から、主体的に学修に参加する様子が見られた。また、地域課題の調査および調査結果の取りまとめの過程を通じて、豊後大野市の直面する課題とエコパークへの理解が深められた。

今後の展開 今年度は地域の自然に関連した地域資源の発掘が中心であった。今後は、建築学科における都市計画や建築設計の知識・技術を活用するフィールドとして、CCRC（高齢者居住コミュニティ）の提案や自然エネルギーを活かした地域づくりの提案にも関わることを模索する。また、長谷川地区で地域支援活動を続けている他大学のグループとの交流も実施したい。



トレッキングコースの調査



上畑地区の文化財調査



調査のまとめと発表資料作成



テーマごとの成果発表会



発表会終了後に行われた、学生と地域住民との交流会

地域資源を活用した地域観光プロモーション における需要予測に関する研究

実施体制：今西衛、本村裕之、工藤順一、舛田佳弘、山城興介（経営経済学科）

実施フィールド：豊後大野市

連携機関：ぶんご大野里の旅公社、豊後大野鉄道百年をお祝いする会、大分まちなか倶楽部

概要 本学学生が提案している観光ツアーなどが実現可能であるかを判断するため、2016年度では、アンケートデータに基づいた需要予測分析を行い、グルメを含むコースへの来訪意向が強い一方、支払意思額が低い傾向であることが分かった。本研究では、この問題を踏まえ、地域資源を活用した観光に対する支払意思額を高めるためにどのような付加価値をつけるべきかを分析し、地域資源を用いた観光需要の掘り起こしに貢献することを目的とする。

取組内容 地域マネジメントコースでは、2015年度より『サービスマネジメント』『フィールドスタディ』などの演習形式の講義を通して、豊後大野の観光における地域資源の魅力の発見や現状、課題を議論し、2016年ものごたぎ観光行動学会第6回年次大会九州広域観光シンポジウム「普段使いのローカル線『沿線の日常』が目目される観光の時代」(2016年、大分市)などで学生おすすめツアープランや豊後大野のPR動画、リーフレットを発表した。2016年度は、自然、歴史、ジオパーク、冒険、食をキーとするツアーパッケージに対してどの程度の需要があるのか、需要予測を行った。需要予測では、2016年度の研究における推計の結果、大分市民の58.6%にあたる18,265人が豊後大野市に訪れるとの結果が出た。しかし、これらの結果は、1度訪れるのみなのか、リピータとなってくれるのかまでは分からない。学生からSNSによる情報発信の提案(図1)があったこと、県外との比較も行うべきとの指摘から、2017年度も調査を行い分析を行った。2017年に実施したインターネット調査を利用し、東京都、大阪府、福岡県、大分市に居住する20歳以上79歳までを対象者とした。まず、豊後大野の観光地について各都府県の認知度を調べた。東洋のナイアガラと呼ばれる原尻の滝は、大分県は7割以上認知しているのに対して、福岡県は、3割程度で、東京都、大阪府の認知度は10%未満であった(図2)。行ったことがあるのに対して、雪舟が水墨画で描いた沈壁の滝は、大分県の認知度も低いが、それ以上に他の都府県の認知度が低いこと(図3)が改めて確認できた。次に、全国的に有名と思われる白杵石仏も、原尻の滝よりかは若干認知度がある程度(図4)であった。この結果は、大分の観光が非常に厳しいことを意味し、今後の観光政策を大分県全体で考えるべきであることを示唆している。

今後の展開 今回の研究では、SNSや認知度などから需要予測を紙面の都合上、ここでは掲載していないが、詳しくは、地域志向プロジェクトの報告書を参考されたい。本研究でも学生が提案したSNSによるPR活動をもとに、基本モデルを改良し、需要予測を行った。この需要予測分析に関しても学生にも行ってもらい、経済学やマーケティングの習得や技能を身につけてもらいたいと考えている。

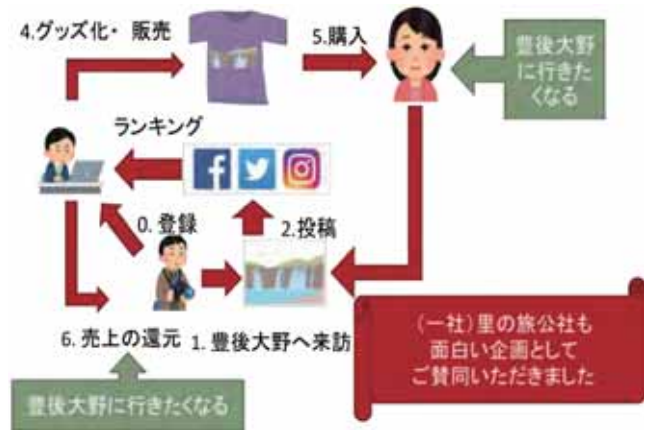


図1 大学生観光まちづくりコンテストでの学生提案のスキーム

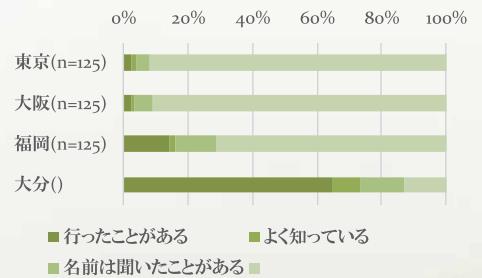


図2 原尻の滝の認知度

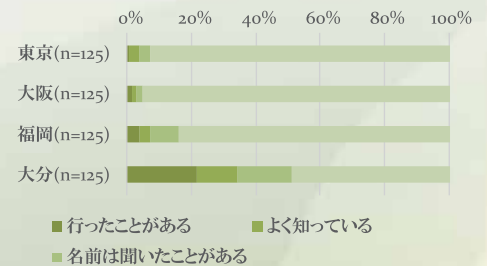


図3 沈壁の滝の認知度

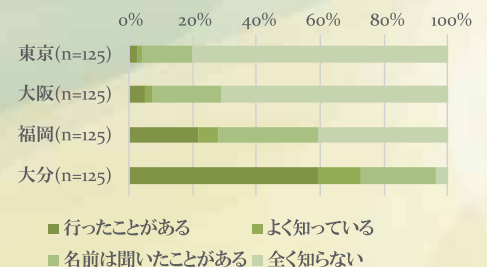


図4 白杵石仏の認知度

豊後大野PR動画プロジェクト



実施体制：『フィールド・スタディIB』受講生（担当教員：今西衛、舛田佳弘）

実施フィールド：豊後大野市

連携機関：(一社)ぶんご大野 里の旅公社

概要 地域マネジメントコースでは、豊後大野市をフィールドとし、『フィールド・スタディ IA、IB』、『サービスマーケティング II、III』などの科目を中心に学生が豊後大野市での魅力を発掘し、PR 動画、ポストカード、リーフレットなどを配布している。より広く知ってもらうためには、学生が豊後大野を紹介する PR 動画を作成し、世界的に普及している動画投稿サイト「YouTube」に投稿することが望ましいと考え、本プロジェクトを実行した。

取組内容 本プロジェクトは、2017 年度教育改革採択事業の一環で、『フィールド・スタディ IB』の受講生を中心に、豊後大野 PR 動画を作成することを目的としている。半数の学生は、『フィールド・スタディ IA』の受講生で、8 月に夏合宿を行い、豊後大野の魅力を探して、本学 COC 事業、JR 九州、ぶんご大野里の旅公社と連携して、ポストカードにする活動を行った。ポストカードは、2017 年 10 月 6 日のあそぼーい 92 号にて配布した。しかし、『フィールド・スタディ IB』では、新たなメンバーが加わり、豊後大野の魅力を昨年から継続している動画プロジェクトを通じて、フィールド活動による専門知識の習得や、人間力の育成を目的とした。まず、YouTube へ投稿することを前提に、著作権や肖像権に注意しながら、講義で課題設定（上）と動画編集作業（下）



魅力ある動画を撮影するために、再び豊後大野市内各所へ取材し、動画編集作業を行った。1つのグループは VR 撮影に臨んだ。



VR で撮影した原尻の滝：ゴーグル着用で 360 度の世界が広がる。

**学生の学び
および
今後の展開**

当初は、YouTube に投稿する動画作成を前提とした写真撮影を行う飲み会であったが、プロジェクトが進むにつれ、豊後大野市の発展のため、世界に発信したいものを見つける写真を撮って、いかにありのままの豊後大野を PR するか、など、様々な意見が出た。情報メディアの基礎知識がない奇想天外な作品を作ろうとしたが、意外に苦戦していたようである。できあがりの動画にはもう少し手を加えた方よい点があるので、いくつかの場所で発表して、修正を加えていきたい。

iPhone,iPad に初期インストールされている iMovie での動画編集。画面は Mac。



『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。日本の未来を担う若者ができることは？ きっと、その答えはひとつではありません。だからこそ、私たちは動き始めます。そのステップは、私たちの大学がある大分県。大分への愛着を勇氣に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。私たちは大分県の未来を拓く『おおいた、つくりびと』になりたい。

豊後大野酒蔵巡りプロジェクト



実施体制：山際樹、渡邊翔吾、難波正和 他2名（経営経済学科・3年）（担当教員：今西衛、山城興介）

実施フィールド：豊後大野市

連携機関：藤居醸造、吉良酒造、浜嶋酒造、牟礼鶴酒造、ぶんご大野 里の旅公社、豊後大野市

概要 豊後大野市は「おんせん県おおいた」の中でも唯一温泉がなく、人口も少ない上、観光産業も乏しい。しかし、豊後大野市には重要文化財や国定公園が多く存在し、ジオパークにも認定されているくらい自然が豊かなまちである。さらに、豊後大野市には、おいしいお酒を造る酒蔵が4つも存在していることから、酒蔵をうまく活用した豊後大野市の活性化プランを提案した。

取組内容 近年、お酒の売り上げが全体的に減少傾向にある。その中でも焼酎は1985年頃からずっと右肩上がりだったが、ここ10年あたり停滞している。それには若者のアルコール離れも大きく影響している。しかし、日本には美味しいお酒がたくさんある。しかも、豊後大野の4つの酒蔵は、それぞれ個性的でとても美味しいお酒を造っている。そこで、おいしいお酒を飲んでもらいお酒の売り上げを向上させると共に、豊後大野に観光に来てもらう人を増やして行こうということで、このプロジェクトが始まった。しかし、お酒を飲んで運転すると飲酒運転になるので、豊肥本線や里の旅タクシーを使った公共交通による酒蔵巡りを提案した。期待される効果としては、2つある。観光客に対しては飲酒運転することなく、お酒を楽しむことができる。同時に観光地を巡ることができる。豊後大野のお酒が全国に知れ渡る。が上げられる。地域に対しては、生活の足となるバスや鉄道のインフラが持続可能となる。お酒や、観光に関連する商品の売り上げが増大する。などが上げられる。



酒蔵でのヒアリング



大学生観光まちづくりコンテストでの発表

**学生の学び
および
今後の展開**

当初、焼酎には、興味がなかったが、「酒蔵の方は温かく」、そのお酒を普及させたいと思った。酒蔵の方から、「どうやったら若者にお酒を飲んでもらえるか」と聞かれ、SNSであるTwitterを使ったほうが訴求力があるなど、アドバイスも行った。こうした地域の方との意見交換をした経験を、今後、活かしていきたい。

チーム名 チームニッキー	大学・学部 日本文理大学	大分ステータ
プロジェクト名 豊後大野酒蔵ツアー	テーマ ※酒蔵巡りツアーを企画して観光地を ① 酒蔵を巡るツアーの企画 ② 酒蔵を巡るツアーの開催 ③ 酒蔵を巡るツアーの宣伝	事務局の人員
リーダー名 山際 樹		
指導教員氏名 今西 衛		
メンバー名 山際 樹、渡邊 翔吾、難波 正和、山際 興介、山際 一也		

豊後大野市とは

豊後大野市は「おんせん県おおいた」の中でも唯一温泉がなく、人口も少ない上、観光産業も乏しい。しかし、豊後大野市には重要文化財や国定公園が多く存在し、ジオパークにも認定されているくらい自然が豊かなまち。そして豊後大野市にはとてもおいしいお酒を造る酒蔵が4つも存在しているから、それらをうまく活用して豊後大野市を盛り上げていきたい。

なぜお酒なのか

近年、お酒の売り上げが全体的に減少傾向にある。その中でも焼酎は昭和60年頃からずっと右肩上がりだったが、ここ10年あたり停滞している。それには若者のアルコール離れも大きく影響している。しかし、日本には美味しいお酒がたくさんある。

しかし、豊後大野の4つの酒蔵は、それぞれ個性的でとても美味しいお酒を造っている。そこで、おいしいお酒を飲んでもらいお酒の売り上げを向上させると共に、豊後大野に観光に来てもらう人を増やして行こう！

藤居酒造 爽快感が素晴らしい

丹誠酒造 日本酒が美味しい

浜嶋酒造 日本酒が美味しい

牟礼鶴酒造 爽快感が素晴らしい

大分といえば、麦焼酎だが、豊後大野の4つの酒蔵はそれぞれとても個性的！

しかし！お酒を飲んで運転すると、**飲酒運転に！！**

豊後大野酒蔵巡りツアー

タクシー バス 鉄道

期待される観光の効果

1. 飲酒運転することなく、お酒を楽しむことができる。
2. 同時に観光地を巡ることができる。
3. 豊後大野のお酒が全国に知れ渡る。

期待される地元の効果

1. 生活の足となるバスや鉄道のインフラが持続可能となる。
2. お酒や、観光に関連する商品の売り上げが増大する。

提案したプラン



coc-nbu.jp



おおいた、つくりびと

『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろうか。日本の未来を担う若者ができることは？ きっと、その答えはひとつではありません。だからこそ、私たちは動き始めます。そのステップは、私たちの大学がある大分県。大分への愛着を勇気に変えて、大分できなことにチャレンジします。地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。私たちは大分県の未来を拓く『おおいた、つくりびと』になりたい。

豊後 DEN 説 2nd Generation



実施体制：平川彰悟、日名子瀬名、相川瑞貴、矢田悠馬、財津太一 他（経営経済学科・3、2年）
（担当教員：今西衛 他）

実施フィールド：豊後大野市

連携機関：豊後大野市、ぶんご大野里の旅公社、ベジカフェ・ミズ、HAB&Co.、豊後大野市

概要 豊後大野市は、大分県が「おんせん県おおいた」を標榜しているにもかかわらず、温泉がない自治体の一つで、観光産業は確立していない。このような現状の中で、少子高齢化が続けば、地域の維持が困難な状況である。一方で、日本ジオパーク、ユネスコエコパークに認定されたり、大分の野菜畑ぶんご大野、大正から昭和のはじめにかけて作られた石橋などの歴史建造物、神楽などの伝統文化など観光資源はたくさんある。そこで、観光プランを提案することで、豊後大野を盛り上げたい。

取組内容 2016年4月の熊本・大分地震により、JR豊肥本線の一部が2017年3月現在も不通となっており、豊後大野市は6つの駅を抱えるが、このままでは、廃線の恐れも惧れられる。我々は、2年前から、JR豊肥本線沿線の魅力を動画、ポスター、リーフレットなどで紹介してきた。豊後大野市は、緑豊かな自然とは対照に、犬飼石仏、地藏群をはじめ、グレーなイメージが強かった。そこで、「豊後 DEN 説」として、魅力の再発見とともに色を探していくことを重ね、竹田、朝地、三重、清川、緒方で色を取り戻し、さらに7町村が合併した豊後大野市にかけて、虹色の橋を渡すことで、観光による地域活性化を表現した。本プロジェクトで制作した動画の予告編を視聴した本学経営経済学部1-3年生のアンケート調査では、予告編を見ることで、20%も訪れたいという結果を得た。しかし、頑張って作った動画・リーフレットがみんなに届かない!!という現状がある。スマートフォンで動画を作ることができる現代、いろんな人に動画や写真をインターネット上に投稿してもらうことができる。これまでのフォトコンテストは、期間限定、経費、審査基準、周知徹底されていないなど、不完全な部分があるが、フェイスブック（Facebook）やインスタグラム（Instagram）などから、大ヒットするものもある。

地域での成果 フォトコンテストから期待される効果としては、「動画投稿数が増える」、「動画を撮影するために豊後大野を訪れる」、「豊後大野の新たな発見が見つかるかも!」、「その中からキラコンテツツが生まれるかも!」等が考えられる。また、投稿者には、地域に貢献するだけでなく、評価などをしてもらうことにより、よりよい投稿を目指そうとするインセンティブも働く。若者が与える地域に対する経済効果を試算すると、
124万人×20%×6,775円
=168億円/年
となる。このことから、是非ともフォトコンテストプログラムを事業化していきたい。



大学生観光まちづくりコンテストでJTBクリエイティブ賞を受賞



チーム名	今西333	所属	大分県 日本文理大学 経営経済学部	大分ステージ
プラン名称	豊後のDEN説 2nd Generationで作るフォトコンテストプログラム in 豊後大野			主催者氏名
リーダー名	今西 衛	アドバイザー	今西 衛	連絡先電話番号
連絡先メールアドレス	今西 衛	連絡先メールアドレス	今西 衛	連絡先メールアドレス
メンバー名	日名子瀬名、相川瑞貴、矢田悠馬、財津太一			

豊後大野市の現状、豊後大野市にはジオパークや、日本1位と2位の石橋などの歴史建造物、神楽といった伝統文化、ユネスコエコパークなどの観光資源があるにもかかわらず、これらについて発信されていない。

動画「豊後DEN説」の制作、豊後大野市は緑豊かな自然とは対照に、犬飼石仏、地藏群をはじめ、グレーなイメージが強かった。魅力の再発見とともに色を探していくことを重ね、竹田、朝地、三重、清川、緒方で色を取り戻し、さらに7町村が合併した豊後大野市にかけて、虹色の橋を渡すことで、観光による地域活性化を表現した。

日本本文理大学経営経済学部1-3年生の豊後大野市への認知度は100%

40% 45% 100%

「豊後のDEN説」を視聴した学生が20%も訪れたいという結果を得た。

頑張って作った動画・リーフレットがみんなに届かない!!という現状がある。

スマートフォンで動画を作ることができる現代、いろんな人に動画や写真をインターネット上に投稿してもらうことができる。

これまでのフォトコンテストは、期間限定、経費、審査基準、周知徹底されていないなど、不完全な部分があるが、フェイスブック（Facebook）やインスタグラム（Instagram）などから、大ヒットするものもある。

みんなで作るフォトコンテストプログラム

YouTube, Facebook, Twitter, InstagramなどのSNSから、イイネ、RTなどを受け付けると同時に、SNSに投稿する。投稿した作品は、スマートフォンアプリを通じて、ポストカード、Tシャツなどのグッズとして販売。グッズの売り上げの一部を、投稿者に還元。

「おいた、つくりびと」をテーマにした動画を制作し、SNSで発信する。

動画を見ていたくなった学生が20%もいる。

頑張って動画などを作ったが、見る人が増えない。

素人の僕たちも、スマホで動画を作ることもできる時代。いろんな人に動画や写真をアップしてもらえればいい。

みんなで作るフォトコンテストは、期間限定、経費、審査基準、周知徹底されていないなど、不完全な部分があるが、フェイスブック（Facebook）やインスタグラム（Instagram）などから、大ヒットするものもある。



『おいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけではかえることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろうか。日本の未来を担う若者ができることは？ きっと、その答えはひとつではありません。だからこそ、私たちは動き始めます。そのステップは、私たちの大学がある大分県。大分への愛着を勇気に変えて、大分できがけないことにチャレンジします。地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。私たちは大分県の未来を担く。『おいた、つくりびと』になりたい。

あそぼーい！ポストカードプロジェクト

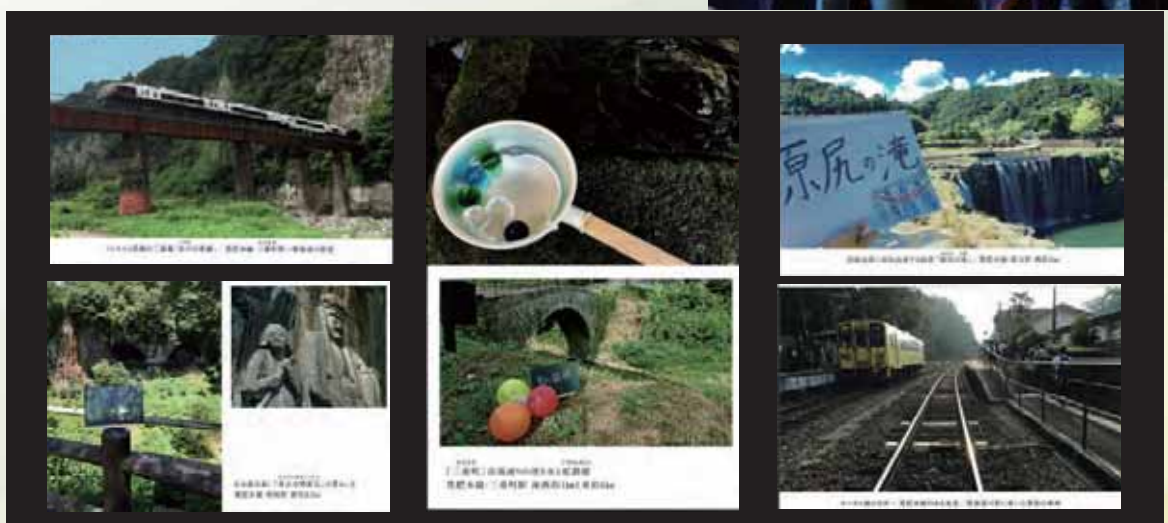
実施体制：八坂龍汰郎、甲斐友耀、前田香穂、樋口明愛、市江佑多（経営経済学科・2年）
（担当教員：今西衛他）

実施フィールド：豊後大野市

連携機関：ぶんご大野里の旅公社、九州旅客鉄道株式会社、豊後大野市

概要 2017年10月7日（土）に、特急「あそぼーい！92号」の車内で、豊後大野市や豊肥本線の列車や風景をモチーフにしたポストカードセットを配布した。これは、本学経営経済学部と（一社）ぶんご大野里の旅公社が連携し、豊後大野市の観光資源を活用した地域観光のあり方について研究・活動するプロジェクトの一環として、今回、JR九州と連携することで、別府駅・大分駅～阿蘇駅を期間限定で結ぶ特急「あそぼーい！」車内で、豊後大野市や豊肥本線の列車や風景をモチーフにしたポストカードセットを列車の乗客にプレゼントするプロジェクトである。

取組内容 プロジェクトの初日には、本学学生5名が「あそぼーい」に乗り、客室乗務員とともに、乗客にポストカードを配布した。2016年4月の熊本・大分地震により、JR豊肥本線の一部が現在（2017年3月）も不通であり、豊後大野市には6つの駅を抱えているが、このまま普通が続けば、廃線の恐れも危惧される。経営経済学科地域マネジメントコースと（一社）ぶんご大野里の旅公社は、2015年より観光アイデンティティが希薄だった豊後大野市において、ローカル線の「沿線の日常」が注目される今日的な観光のあり方にもとづき、豊肥本線沿線の観光価値に対して、学生目線からの掘りおこしを行っている。その一環として、これまでに「ものがたり観光行動学会九州広域シンポジウム」（2016年11月）において、これまでの取り組みを発表するなどすることで、今回のJR九州との連携プロジェクトにつながっている。あそぼーい！ポストカードプロジェクトでは、『フィールド・スタディ』、『サービスラーニング』等の1～3年次開講科目における、豊後大野市での合同合宿形式の授業において、科目受講生40名が、いまだ知られていない豊後大野市の観光価値としての「日常風景のリアル」を抽出し、学生の視点で写真撮影したものを、これまでの成果とともに、ポストカードとしてまとめ、広く発信（配布）することで、地域活性化に貢献するために取り組んだ。



ポストカード内容：あそぼーい！、普光寺、湧水・虹瀧橋、原尻の滝、豊後清川駅

学生の地域資源を活用した観光プロモーション活動におけるコース・学科を横断した教育改革

実施体制：本村裕之・今西衛・舛田佳弘・山城興介・工藤順一・濱田大助・稲川直裕

実施フィールド：豊後大野市

連携機関：（一社）ぶんご大野里の旅公社、三重町市場ストーリー「絵本パレット」実行委員会

概要

地域マネジメントコースでは、豊後大野市をフィールドとし、フィールド・スタディなどフィールド活動科目を中心に学生が豊後大野市での魅力を発掘し、観光PRにつながるような活動を行っている。平成30年度も、COC事業、県委託事業と連携し、豊後大野のPR活動を通じて、学生の人間力の育成などの取り組んでいる。国民文化祭にあわせ、三重町市場の空き店舗でプラレールを使った商店街活性化を行うと取り組んでいる（県委託事業）が、単に、来場者にプラレールを遊ばせるだけでなく、アクティブカメラや、センシング機能で操作させることで、興味関心を持ってもらうと同時に、文系学生にICTやIoTの技術の基礎を学んでもらう。その意図は、2020年に学習指導要領が改訂され、将来の子どもや教員もICT、IoTに強くなる。彼らと現役世代との世代間格差をなくすことが、現在の大学教育に求められている。

取組内容

豊後大野市をフィールドとし、学生が豊後大野市での魅力を発掘し、観光PRにつながるような活動を行っている。しかし、これらの教育活動には「地域」の課題だけでなく、6次化、資金調達（ファイナンス）などを考慮する必要があり、会計ファイナンスやビジネスソリューションなどコースや学科を超えた連携が必要になる。さらに、近年、IoTによる地域づくり人材が必要とされているため、その要求に応えるため、本年度は、文系学生でもICTやIoTの技術を習得してもらい、コースや学科を超えたカリキュラムのあり方について実践的に行う。

2つのテーマを行った。1つは、豊後大野レール館（別途プロジェクトシート参照）にあわせて、教職志望学生を対象として、鉄道模型を、スマートフォンで操作するプログラミング教育を行った。

もう一つは、観光客が迷わないよう、google mapを用いたナビゲーションを開発した。単にルートを紹介するだけでなく、安全に通ることができるルート、回遊してもらえらるルートを作成した。

地域での成果

スマホ操作については、豊後大野に関するクイズ形式にすることで、小学生に豊後大野を知ってもらうきっかけとなった。Google mapについては、豊後大野市全体に広げてほしいと要望があった。

学生の学び

文系学生には難しいと思われがちIoT技術であるが、簡単なネイティブプログラミングで、おもちゃが動くことへの感動を通じて幅広い知識を身に着けた。Google mapについても、操作は難しく感じていたが、アイデアなどはいろいろ出てくるので、文理共同でのチームを作ったらよいのではと改めて感じた。

今後の展開

学習指導要領の改訂を踏まえ、教員もICT、IoTに関する受け入れ態勢を強化しなければならない。ICT、IoTが地域にいかにか必要かということも感じたので、このような事業を通して、地域活性化に役立てたい。



↑学生と共同開発したスマホ操作可能な模型

```

1.  if (currentLine.endsWith("GET
    /?SW=1")) { *「はっしゃ」がタ
    プされたら;
2.  digitalWrite(4, HIGH); *モーター
    起動;
3.  delay(100); *100ミリ秒続ける。
4.  digitalWrite(4, LOW); モーター
    停止;
5.  }
  
```

↑ネイティブプログラム



↑豊後大野レール館に集まる小学生



↑googleマップを使ったナビ



『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを「おおいた、つくりびと」と名付けました。お金やモノだけではかたることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。日本の未来を担う若者ができることは？ きっと、その答えはひとつではありません。だからこそ、私たちは動き始めます。そのステージは、私たちの大学がある大分県。大分への愛着を勇氣に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくりまします。私たちは大分県の未来を拓く『おおいた、つくりびと』になりたい。

最新の研究から見てきた地域の宝物 『中津干潟』の現在と将来

実施体制：池畑義人、杉浦嘉雄（建築学科）、山本義史（経営経済学科）

実施フィールド：中津市

連携機関：NPO法人水辺に遊ぶ会

概要

大分県北部に位置する中津干潟は豊かな漁場であり、そこには希少な生き物が生息している。中津干潟、および干潟に注ぐ山国川の流域の開発によって干潟を取り巻く環境は変化している。この干潟を維持保全するために、多くの研究者が中津干潟を研究フィールドとしているが、相互の交流ははかられておらず、研究の成果も市民には可視化されていない。そこで、この研究成果を地域に還元し、あらためて干潟が地域資源であることへの理解を深めるために本事業で市民向けの研究発表会（中津干潟アカデミア）を実施した。

講座の概要は以下の通りである。

日時：平成30年12月23日（日）

会場：中津市小楠公民館

参加者数：約100名

参加者の構成：行政職員（中津市、大分県等）、建設コンサルタント社員、小学生、高校生、大学生、NPO職員、大学教員等

取組内容

講座は中津市の奥塚市長の挨拶で始まり、第1部では干潟の地形と自然に関する話題として群馬大の鶴崎准教授、九州大の山下助教の発表をはじめ、日本文理大の学生の発表が3件、大分県職員の発表が1件なされた。昼食を挟んで、第2部は干潟の生き物の話題として、水産大の須田教授の基調講演から始まり、水産大の南条助教をはじめ、水産大の学生の発表が5件、東京海洋大の学生の発表が1件、NPO南港ウエットランドグループから1件の発表がなされた。第3部は干潟の文化と利用に関する話題として、大分大の都甲准教授の発表から始まり、日本文理大学の学生の発表1件を挟んでNPO水辺に遊ぶ会の足利理事長がなされた。最後に中津市教育委員会の廣畑教育長から講評をいただき、会を終了した。

以上のように、5大学の教員、学生と行政およびNPOの職員から中津干潟をフィールドとした多様な研究の成果が発表された。発表の質疑においても市民と研究者、研究者同士の活発な交流が行われていた。

地域での成果

講座終了後のアンケートにおいて17名から回答が得られた。満足度について10名(59%)が『満足』、6名(35%)が『どちらかといえば満足』、1名が無回答であった。自由記述の意見として

- 研究成果を直接聞いて興味深かった
 - 地域の環境問題を話すときの参考にした
 - わかりやすい発表が多かった
 - 大分の恵まれた環境について伝えていきたい
 - 内容が専門的すぎる
 - 発表をじっくりと聞きたい
- などがあげられた。

学生の学び

4年生は研究発表を通じて、自分の研究の評価されている点、不足している点を知ることができた。また3年生は中津干潟で多種多様な研究が行われていることを知り、卒業研究を進める上での参考となった。

今後の展開

この発表会を通じて大学にとっては一層の研究の進展を図ることが期待できる。一方で地元は干潟を維持・保全する枠組みを作ることが急務である。そのことから外部資金を獲得して、この取り組みを継続することで干潟の重要性を訴えていきたい。



フィールド・スタディを中心とした学生主体の地域活性化カリキュラム



実施体制：本村裕之・今西衛・山城興介・工藤順一

実施フィールド：大分市中心市街地

連携機関：大分市中心部商店街振興組合連合会、大分市、(株)大分まちなか倶楽部

概要

地域マネジメントコースでは、学生が大分市中心部の魅力を発見し、政策効果を検証と政策提言のためのPDCAサイクルを体験することで、地域マネジメントを理論と実践で学ぶと同時に、企画力・行動力のある人材育成を目指す。

また、学生自身が大分の魅力を発見することで、地域としての大分への愛着・関心を高め、地域内での就職や地域活性化へ取り組みを喚起する事業を目的とする。

取組内容

経営経済学科では7年以上にわたって大分都心部消費者回遊行動調査を行ってきた。2017年からは、フィールド・スタディやフィールド調査として単位認定科目にもなった。調査の中で、大分都心部では、ごく一部のエリアでの回遊が中心であり、商店街への回遊行動が促進されていないことがわかった。原因として、商店街の魅力が消費者に十分に伝わっていないことが考えられる。

本事業は学生が大分中心商店街を見て回り、学生の視点に立った大分の魅力を発掘し、それを一般の消費者や観光客に関心を示してもらうためには、どのような形で情報を提供することが効果的かを学生同士で議論しあい、どの情報が効果的かを検証することで、マーケティングの技能を身につけると同時に、「人間力」の育成と地域に貢献することを目的とする活動を行った。



↑まちなかづくりマーケティング演習ガイダンス



↑中央通り歩行者天国ブース出展

地域での成果

調査については、毎年報告書の形で関係各所に提出している。一部の成果については、学会発表等でも公表している。今年度は、歩行者天国にもブースを出展した。内容は、豊後大野レール館（別途プロジェクトシート参照）のイベントとして、JRおおいたシティと鉄道をペーパークラフトで再現し、展示した。ブースには多くの子どもが訪れ大変賑わった。

これらの活動経験から本年度は、産学交流サロンにも参画し、学生が発表する機会も得た。複数の大学が参加していたが、勘ではなく調査結果という事実に基づいて学生が発表したことは意義深い。



↑大分都心部消費者回遊行動調査
(フィールド調査)

学生の学び

調査の大変さを実感するだけでなく、大分市中心部が抱える課題を理解するようになってきた。また、上級学年が下級学年にいろいろなアドバイスする中で、ノウハウの継承も行うようになってきた。コースとしては4年間で1サイクル回り、学修サイクルがうまく機能し来ていると感じる。

今後の展開

引き続き、大分都心部消費者回遊行動調査を実施するとともに、地域商店街の方とも連携して、地域活性化政策の方策を一緒に考えていきたい。



↑産学交流サロンでの発表

NBU 日本文理大学

〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097 - 592 - 1600(大代表)
Web: <http://www.nbu.ac.jp>

【COC事業担当】
TEL/FAX: 097 - 524 - 2663(直通)
Web: <http://coc-nbu.jp>
E-mail: coc@nbu.ac.jp



coc-nbu.jp



おおいた、つくりびと

『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけではかえることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分ですかにできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくりたい。
私たちは大分県の未来を拓く『おおいた、つくりびと』になりたい。

学企連携による「地域創生人材」の育成に向けた取組



実施体制：橋本堅次郎（副学長）、池畑義人（産学官民連携推進センター）、杉浦嘉雄（建築学科）
 実施フィールド：大分市、国東市、豊後高田市
 連携機関：大分県信用組合

概要

大分県信用組合では、急速に変化する社会に対して柔軟な思考を持って対応できる人材を育成するために、2012年より企業内大学として『けんしん大学』を開設している。その内容は、組織マネジメント、マーケティング手法、IT経営の事例紹介などの実践的なものから、地方社会を取り巻く情勢を紹介する俯瞰的なものまで多岐にわたっている。また、その講座は一般市民に広く開放され、大分県信用組合の職員と顧客が机を並べて学ぶという交流の場の形成が目指されている。けんしん大学の学長は日本文理大学の元学長が就任しており、本学の教職員も講座の企画・運営に協力してきた。これらの協力関係をより強固なものにするため、2015年3月には両方で包括連携協定が締結された。



取組内容

2018年度は観光をメインテーマとして9回の講座を実施し、そのうち3回を本学の教員が担当した。前期と後期に1回ずつ橋本教授が組織マネジメントについて、ワークも交えたセミナーを実施した。

前期の最後の講座である9月には、杉浦教授が国東の地域資源を巡るツアーをコーディネートと講師をつとめた。この講座では文殊仙寺を参拝し、大分県信用組合の国東研修所で昼食と地域資源に関する講座を受講した後に、田染の庄を見学した。

また、けんしん大学の運営委員を池畑教授がつとめている。運営員会では、本学担当の講座を含めた全体の運営について意見を述べている。

地域での成果

受講アンケートの結果から、本学の教員が関わった講座の有益度は5段階中の4を超えていた。この講座を受講した職員の多くが、顧客との地域の魅力を発見して、地域の企業の成長をサポートできる金融人となることが期待されている。

学生の学び

2018年度の講座では本学の学生は参加していないが、本学のOB職員の多くが受講をしていた。

今後の展開

けんしん大学では、本学の教員が多くの職員に対して地方創生に関するセミナーを実施してきた。その一方で、信用組合の職員との交流を通じて、本学の教員も金融機関における現場の感覚を学ぶことができた。

大分県信用組合は国東プロジェクトなどの地方創生に関する先進的な事業を積極的に推進しており、本学にとっても重要な連携機関である。今後も、現代の感覚に適合したセミナーを連携して実施していきたい。

NBU 日本文理大学

〒870-0397 大分県大分市一木1272
 TEL: 097 - 592 - 1600(大代表)
 Web: <http://www.nbu.ac.jp>

【COC事業担当】
 TEL/FAX: 097 - 524 - 2663(直通)
 Web: <http://coc-nbu.jp>
 e-mail: coc@nbu.ac.jp



coc-nbu.jp



あおいた、つくりびと

『あおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『あおいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。日本の未来を担う若者ができることは？
 きっと、その答えはひとつではありません。
 だからこそ今、私たちは動き始めます。
 そのステージは、私たちの大学がある大分県。
 大分への愛着を勇気に変えて、大分しかできないことにチャレンジします。
 地域の皆さんとともに、もっともっと元氣なまちをつくりまします。
 私たちは大分県の未来を拓く『あおいた、つくりびと』になりたい。

「地域創生人材」育成のための 管理能力向上講座



実施体制：池畑義人、山岸利幸、岡崎寛万、梅本光一、吉本圭一郎、橋本堅次郎

実施フィールド：大分市

連携機関：大分市産業活性化プラザ

概要

大分市産業活性化プラザでは、地域産業の活性化や中小企業の技術力向上を図るため、企業経営、職場改善や創業などについて講座を開催している。その一環として、大分大学、立命館アジア太平洋大学と共に本学が産学連携講座を開講している。本学ではCOCが始まるときに、以前の内容を刷新して地域創生人材育成を目的とする講座を実施している。また6回のうち5回は産業活性化プラザ主催であるが、最後の1回は本学との共催となっている。



取組内容

2018年度は管理能力向上を主題として、工学部から3名、経営経済学部から3名の教員が登壇した。概要を以下に示す。

- ① 1月10日 大分の豊かな自然を活用するには…
講師：建築学科 教授 池畑義人
- ② 1月17日 航空産業から見た管理能力
講師：航空宇宙工学科 教授 山岸利幸
- ③ 1月24日 マーケティング マネジメント
講師：経営経済学科 教授 梅本光一
- ④ 1月31日 ボードゲームで楽しく学ぶ簿記・会計の基礎
講師：経営経済学科 助教 吉本圭一郎
- ⑤ 2月7日 大学の工学プロジェクトを通して育成される管理能力 ～システム・エンジニアリングとプロダクト・マネージャー～
講師：航空宇宙工学科 教授 岡崎寛万
- ⑥ 2月14日 マネジメントに必要な伝える技術 ～聴く・訊く・伝えるで職場を活性化～
講師：経営経済学科 教授 橋本堅次郎

2018年度は新たな取り組みとして6回全ての講座に出席した受講生に図に示すような修了証書を授与した。



地域での成果

受講者は各講座とも10～15名であった。毎回の講座終了後に交流会が開催されたが、多くの受講者が好意的な感想を述べていた。

今後の展開

産業活性化プラザにおける産学連携講座は、開始当初大分市が直営で運営しており、そのときから数えて10年以上継続している。その間に講座の内容の見直しを数回実施して、受講者のニーズに応える努力をしてきた。今後も行政との連携の機会である本講座の内容を充実していく。

その一方で、他大学も含めた産学連携講座自体の見直しが求められている。今後はCOC+の産業創出部会や高等教育活性化部会等における議論を通して、大学間連携の利点を活かした講座に発展させていくことも検討する。



NBU 日本文理大学

〒870-0397 大分県大分市一木1272
TEL: 097-592-1600(大代表)
Web: <http://www.nbu.ac.jp>

【COC事業担当】
TEL/FAX: 097-524-2663(直通)
Web: <http://coc-nbu.jp>
E-mail: coc@nbu.ac.jp



coc-nbu.jp



あおいた、つくりびと

『あおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『あおいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけではかえることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分できかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくりまします。
私たちは大分県の未来を拓く『あおいた、つくりびと』になりました。

「シカケ」から見える地域課題 シカケプロジェクト



実施体制：市田秀樹（COC事業担当）、福島学（情報メディア学科）、筑紫彰太（機械電気工学科）
今西衛（経営経済学科）

実施フィールド：大分市

連携機関：パークプレイス大分

概要 シカケプロジェクトは、世の中に溢れている「シカケ」をテーマに、モノが果たす役割について考え、実際にシカケをつくる事を目指す。「シカケ」とは、普段の人の意識や行動をシカケに対応するモノによって変化を促すことであり、シカケプロジェクトでは、「モノのデザイン」を通して、社会課題の解決にアプローチする。つまり、モノが持つ機能によって課題を解決するのではなく、モノによって人の行動変容が誘引されることによって社会課題を解決するというのである。

プロジェクトでは、特に人とモノとのインタラクションに着目し、人の行動によってシカケが働き、シカケが引き起こす変化が人の行動にフィードバックされることによって、人の意識や行動を変化させることをねらっている。つまり、シカケがトリガーになって、人の行動変容が誘発される。シカケの形態としては、様々なものがあるが、そのシカケの中に、センサーや駆動部分、データ解析を含む制御部分などの要素技術を取り込むことで、工学部専門基礎科目『ロボットプロジェクト基礎2』（機械電気工学科、航空宇宙工学科、情報メディア学科の3学科合同での2年次開講科目）のコースとして実施した。

取組内容 2017年度は、2つのシカケ：(1) 図書館の利用が楽しくなるシカケ「ぶろった君」(前期：NBU 図書館)、(2) 大型商業施設における人の回遊性に着目したシカケ「ケンケンパ」「光の落書き」(後期：パークプレイス大分(大分市))を実施した。プロジェクト全体の進行としては、(1) シカケについての基礎知識や情報収集、(2) シカケを製作するための要素技術(3Dプリンタやレーザーカッターなどのデジタルファブリケーションや、マイコンやFPGAなどの組み込み技術)の習得、(3) 現地での課題調査のためのヒアリング、(4) シカケの提案、(5) シカケの製作、(6) 実証実験、(7) データ分析、(8) 結果報告とした。それぞれのシカケの概要を以下に示す。

【ぶろった君(図1)】 図書の返却日を葉に記入してくれるミニロボット。プロッタ君の動きが、ちょっと気になる、見ていて楽しいなどを利用者に感じてもらおう事で、図書館の利用を楽しんでもらうためのシカケ。

【ケンケンパ(図2)、光の落書き(図3)】 踏むとシカケが順に光り、それを追いかけていくことでケンケンパになるシカケと、池の中に設置した大型スクリーンに文字や絵を描くシカケを、施設内の人の動線が弱い(回遊性が低い)場所に設置することで、触れてみたい、試してみたいと感得せ、人を引き込むためのシカケ。

成果と学生の学び 今回シカケを製作するに当たって、アイデアの創出から製作、実証実験とすべてを学生のみで行っている。実証実験のデータ分析においては、本稿執筆時において進行中であるため、別の機会でも報告するが、特に利用された回数が多かった「ケンケンパ」においては、シカケ設置による成果が現れていそうである。学生にとっては、課題の多い内容だったが、自分たちのアイデアをシカケてみたいという気持ちと、おもしろくしたいという遊び心(好奇心)が交わって、最後はかなりのペースで試行錯誤を繰り返しながらの製作が進んだ。この授業で経験した内容は、上位学年へと繋がることを期待する。

今後の展開 モノによって人の意識・行動変化を引き起こすシカケについて、工学的な視点からの「ものづくり」と経済学的な分析・検証、それらを組み合わせることによる科学的な視点から、「シカケ」を今後も取り組んで行く。学生が製作したシカケが、人の行動変容が誘引し、社会課題への取り組みの一例になるようなテーマ(問い)の設定を行いながら、学生の好奇心を引き出すプロジェクトとして実施・展開していく。今回の成果の一部は、地元紙(大分合同新聞2017年3月1日付)にも掲載された。



図1. ぶろった君



図2. ケンケンパ



図3. 光の落書き



『おいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけではかえることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろうか。日本の未来を担う若者ができることは？ きっと、その答えはひとつではありません。だからこそ今、私たちは動き始めます。そのステップは、私たちの大学がある大分県。大分への愛着を勇気に変えて、大分できがけないことにチャレンジします。地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくりまします。私たちは大分県の未来を拓く『おいた、つくりびと』になりたい。

405 商店街の活性化による地域振興

プロジェクト

4

「おおいた地域創生リーダー養成講座 2017
in 三重町」の取り組み

実施体制：吉村充功、島岡成治、池畑義人（建築学科）

実施フィールド：豊後大野市三重町市場通り周辺

連携機関：一般社団法人ぐんご大野里の旅公社

概要

少子高齢化が急速に進む大分県においては、主体的に行動し、課題を解決したり、新たな価値を生み出すこと、さらには多様な人的ネットワークを形成し、人口減少社会でも経済活動を活性化させ、社会を明るくできる人材の育成が急務である。本プロジェクトでは、「まち、ひと、しごと」の観点から地域のリーダーとして活躍できる若手社会人「おおいた地域創生リーダー」を育成するきっかけとして、県内3地区（中津・佐伯・豊後大野）において、大学生・高校生と社会人の混成グループによる講座を開催した。講座は講義+街歩き+ワークショップ+発表を1日完結型で2日に渡って行い、1日目はその地域固有の魅力を考える内容、2日目はその魅力を活かして地域のまちづくり課題の解決策を提案する内容とした。

取組内容

【講座の流れ】 1日目 ①総論/地域講義 ②まち歩き（ガイド） ③ワークショップ ④成果発表



2日目 ⑤まち歩き（ガイド） ⑥ワークショップ ⑦成果発表

【豊後大野市での取り組み】
フィールド：三重町市場通り周辺
開催日：12月17日（日）、23日（土・祝）
会場：豊後大野市商工会館、
里の旅ものがたり館 あっそうか！
参加者：日本文理大学学生13名、
大分県立三重総合高校生徒1名



学生の学び

大学生・高校生のそれぞれの立場で地域創生に対する意識向上や能力の自覚、ならびに、まち歩きやワークショップを通じたその地域固有の魅力の発見、それを踏まえた地域課題解決の重要性を理解することにつながった。

今後の展開

2018年度は10～11月に国民文化祭・おおいた2018が大分県内各地で開催される。本地区においても、（一社）ぐんご大野里の旅公社を中心に企画が計画されており、本講座をキッカケとして、本地区の魅力に気づいた学生達が協働して、イベントを盛り上げる予定である。

地域での成果

●1日目の成果（私たちが見つけた地域の魅力）



●2日目の成果（課題解決策の提案）



NBU 日本文理大学

〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097-592-1600(大代表)Web: <http://www.nbu.ac.jp>

【COC事業担当】

TEL/FAX: 097-524-2663(直通)

Web: <http://coc-nbu.jp>E-mail: coc@nbu.ac.jp

おおいた、つくりびと

『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけではかえることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろうか。日本の未来を担う若者ができることは？

きっと、その答えはひとつではありません。

だからこそ、私たちは動き始めます。

そのステップは、私たちの大学がある大分県。

大分への愛着を勇気に変えて、大分できがけないことにチャレンジします。

地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。

私たちは大分県の未来を拓く『おおいた、つくりびと』になりたい。

大分市佐賀関・関地区における『環境・地域創造演習』の取り組み



実施体制：吉村充功、池畑義人（建築学科）

実施フィールド：大分市佐賀関地区

連携機関：NPO法人さかのせき・彩彩カフェ

概要 大分県内各地では、超高齢化、人口減少により、地域コミュニティを維持することが難しくなっている地区が多い。そこで、建築学科では地域の課題を技術者の視点で解決できる人材を育成する「環境・地域創生コース」を設置している。本コースでは、大分市周辺部にあたる佐賀関校区をフィールドの一つとして、コミュニティの維持策を探り、実践する取り組みを、NPO 法人さかのせき・彩彩カフェや自治体の協力を得て実施している。佐賀関校区の人口減少、高齢化は深刻であり、人口 4,828 人に対し、高齢化率が 55.7%となっており（2015 年国勢調査）。「体験交流活動による動機付け」→「知識の修得・定着」→「課題解決型学修」という学修サイクルを明確化した科目群により、学生は地域でのやりがいを感じるとともに、自分に不足する知識・技能を自覚し、その後の学びを深化できる。上級学年では実際に地域の課題解決に取り組むことで、将来、地域で活躍するために必要な幅広い能力の定着を図ることを目指している。

取組内容 『環境・地域創造演習』は、3 年次の課題解決型学修として、豊後大野市大野町土師地区で行っている。本年度はさらに本地区での学修に取り組む班を編成し、夏休みに集中講義として学生 3 名が取り組んだ。関あじ関さば通りを中心に、関地区中心部を散策し、地区住民へのインタビュー、フィールドワークを行い、専門分野の視点等から地区の魅力と課題の整理、解決策の提案を行った。

地域での成果 取り組みを通じた成果は以下の通りである。

【地区の魅力】

①佐賀関バスターミナル

現在は大分バス単独運行だが、昔は、日本鉱業佐賀関鉄道が通り、バスセンターが国鉄バスの自動車駅でもあった。

②早吸日女神社

拝殿の屋根はこの地方独特の瓦技法を伝える屋根で、浦島太郎や三重塔などのユニークな瓦が載っている。

③徳応寺

1864 年 2 月 15 日には長崎へ向かう坂本龍馬や勝海舟らが宿泊しており、佐賀関は龍馬が九州に初上陸した地とされている。

④まちの駅よらんせえ～

コミュニティ食堂として、地域の高齢者の憩いの場となっている。現在は本学学生の活動拠点にもなっている。

【関地区の良い点】

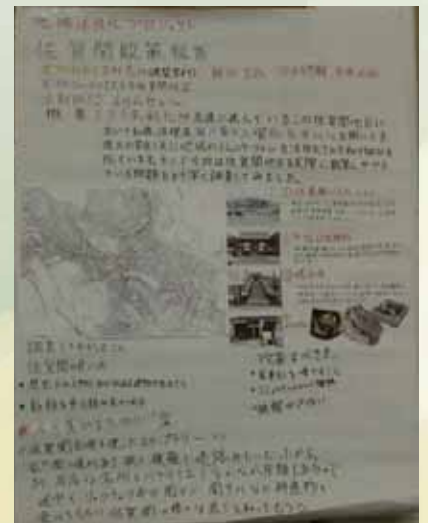
- ・歴史上の人物にゆかりのある建物があること。
- ・新鮮な魚介類が食べられる。

【関地区の課題】

- ・食事処が少ない。地域の特産である魚が手に入らない。
- ・高齢者だらけでコミュニティの維持が難しい。
- ・旅館が少なく、観光客等が立ち寄りにくい。

学生の学び まちを丹念に歩くことで、路地裏などの魅力にも気づくことができ、表面的ではない地域の魅力を発見、発信する重要性に気づいた。

今後の展開 本調査での提案を踏まえ、国道九四フェリーの利用者を主なターゲットにした「まち歩き」の可能性を模索し、交流人口拡大のキックオフ社会実験へと展開することとなった。



『おいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけではかき回すことができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろうか。日本の未来を担う若者ができることは？ きっと、その答えはひとつではありません。だからこそ、私たちは動き始めます。そのステップは、私たちの大学がある大分県。大分への愛着を勇気に変えて、大分できがけないことにチャレンジします。地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくりまします。私たちは大分県の未来を拓く。『おいた、つくりびと』になりたい。

建築学生が創るノントンポイント

～「絵本パレット」ワークショップ連携による市場ストーリーの可能性～



実施体制：吉村充功、池畑義人(建築学科)

実施フィールド：豊後大野市三重町市場通り商店街

連携機関：三重町市場ストーリー「絵本パレット」実行委員会、(一社)ぶんご大野里の旅公社

概要 本授業科目では、豊後大野市三重町市場・三重町駅前周辺において、10月～11月に行われた国民文化祭・おおいた2018応援事業「絵本パレット」企画を盛り上げるための環境整備とイベントのアテンドを行った。環境整備では、三重町の歴史を踏まえつつ、絵本パレットの世界観を拡張し、指定ポイントに来場者がわくわくドキドキするような建築学科ならではの制作物を制作、設置、アテンドした。

取組内容 『プロジェクト2/3』(建築学科2/3年次科目)において、受講生21名が3チームに分かれて取り組んだ。5月から1回の合宿を含め5回の現地研修(5月12日、6月30日～7月1日、9月28日、10月20日、11月17日)を実施し、初めに遊学ボランティアの皆さんのコーディネートのもと、地域の魅力発見を行い、三重町の歴史的価値と現在の課題を理解した上で、市場通りを盛り上げるための、インスタ映えするノントンポイントの制作に取り組んだ。制作物は9月28日に現地に設置し、イベントデー(10月20日、11月17日)には来街者に対して学生たちによるアテンドを行った。



下見の様子



集合写真

地域での成果 「ノントン」をテーマにしたことで小学生が興味をもって商店街に入って来れた。インスタ映えするノントンポイントにより、小学生の感性を豊かにできる可能性を示した。また、イベントデーの雰囲気は住民と学生、出店者、子どもたちとのよい交流、ワクワク感につながり、まさに「絵本パレット」を体現できた。活動期間を通じて、「ノントンポイント」が増殖していくのを見て市場通りの未来に可能性を感じる事ができた。



山頭火湧水

学生の学び 商店街との皆さんとの交流により、地域商店街の魅力を感じることができた。その上で、毎毎に建築学科ならではの創意工夫を凝らし、各地点の特徴を踏まえたノントンポイントを制作できた。制作においては、チーム作業としての苦労を経験するとともに、協働作業によるチームワークを学んだ。



麻生家井戸

今後の展開 2019年度以降も地域と学生の協働により市場通りの活性化に取り組む。



NBU ノントンハウス

NBU 日本文理大学

〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097-592-1600(大代表)
Web: <http://www.nbu.ac.jp>

【COC事業担当】
TEL/FAX: 097-524-2663(直通)
Web: <http://coc-nbu.jp>
E-mail: coc@nbu.ac.jp



coc-nbu.jp



おおいた、つくりびと

『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。お金のモノだけではかえることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分ではかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくりまします。
私たちは大分県の未来を拓く『おおいた、つくりびと』になりました。

中津市中心部における 地域の魅力発掘と課題解決プロジェクト



実施体制： 吉村充功、池畑義人、杉浦嘉雄、島岡成治(建築学科)

実施フィールド： 大分県、大分市、豊後大野市など。

連携機関： 中津市 企画観光部 総合政策課 総合政策係・まちづくり推進室

概要

本プロジェクトでは本年度は 城下町として優れた歴史的まちなみ・景観と文化を持つ一方で「空き家問題」「観光客の滞在時間の短さ」「観光客や子育て世代の商店街への誘導策の欠如」などの課題がある中津市中心部(諸町・寺町・中津駅・中津城周辺)をフィールドとして 課題意識のある地域住民などの現地ステークホルダーを巻き込み、一緒になって具体的な地域課題の解決に向けた取り組みが促進できるように展開した。

プロジェクトでは、まず学生が研修最終回に行う地域課題解決型の地域住民との交流ワークショップの企画運営が出来るように 通年のプロジェクト活動を通じて 地域の魅力発掘と課題解決をできる地域創生人としての能力育成を行った。これらの活動を通じて 最終のワークショップに向けて必要な情報収集・整理も行い、「観光まちづくり」をキーに住民らが正しい情報により議論ができる下地を作り上げた。

最終のワークショップでは 広く社会人 地域住民が参加し、学生がファシリテートしながら、上記で挙げた地域課題に対して具体的な課題解決策を練り、今後の課題解決策の実践的展開につながる結果をもたらした。

以上を通じて 若者の地域創生リーダーとしての能力を育成するとともに、当該地域の課題解決に向けた地域住民のムーブメントを作り出すことを目的とした。

取組内容

【プロジェクト参加学生】

建築学科2年:20名	経営経済学科2年:2名
建築学科3年:3名	航空宇宙工学科3年:1名
経営経済学科3年:2名	合計:28名

【ワークショップ参加学外者(最終日のみ)】 社会人:19名

【実施日程】

第1回合宿(2018年6月9日~10日)

- ・会場:新博多町交流センター(初日) 南部まちなみ交流館(2日目)
- ・内容:7チームに分かれ 学生たちでフィールドワーク(FW)し、中津城下町 中津中心部ならではの魅力をまとめ(初日) 初日を踏まえ 解決すべき課題をFWを通じてまとめ(2日目)

第2回合宿(2018年11月3日~4日)

- ・会場:新博多町交流センター(初日) 南部公民館(2日目)
- ・内容:3チームに再編し 課題を掘り下げるFWを実施。最終ワークショップ(WS)のための素材・情報収集として、城下町や中心部でヒアリング調査(住民・観光客等) 一部 比較対象として 三光コスモス祭でもヒアリング(2日目)

第3回合宿(2018年12月8日~9日)

- ・会場:新博多町交流センター
- ・内容:これまでの結果を踏まえ 学生の考えるテーマについて 解決策を学生と住民と一緒に考える公開WSを開催(2日目)



まち歩き・ヒアリング



公開ワークショップ

地域での成果

学生たちのフィールド調査結果を踏まえ 公開ワークショップでは「中津中心部の観光回遊性を高める方法」「使いやすい観光マップの検討」「空き家活用」などをテーマに住民らと有意義な議論ができ 具体的な課題解決策の提案を行うことができた。

学生の学び

最終の公開ワークショップでは 学生と社会人・地域住民と一緒に学ぶことで人的ネットワークができ 学生に対しては将来の県内就職のきっかけを作ることができた。また 本プロジェクトで養成する能力はルーブリック表として作成しており 学生は合宿毎にこれらを自己評価することにより 自身の成長を可視化することができた(観念・課題発見・解決力 実践力 チームで活動するためのコミュニケーション力 主体的に行動し学び続ける姿勢 地域志向への態度)。

今後の展開

今後は実現に向けた検討を行う。



公開ワークショップの取りまとめ成果

どのようにして地域を活性化させるか？ 豊後大野レール館を通して



実施体制：甲斐友耀・八坂龍汰郎・財津太一・朝来桃子・小原南海・谷川由希
保明郁香・熊懐悠介・塩月駿太・高橋航太・高橋翼・宮本重紀・安田亮哉

実施フィールド：豊後大野市

連携機関：(一社)ぶんご大野里の旅公社・三重町市場ストーリー「絵本パレット」実行委員会

概要

豊肥本線を活性化して、豊後大野市を明るくするために、「豊後大野レール館」を企画した。国民文化祭応援事業である絵本パレットと連携し、あっそうかに訪れる子ども連れの来訪者を対象として、子どもが楽しめる空間を作ることとし、鉄道模型を展示した。展示場所は、三重町市場の空き店舗を活用し、さらに、三重町駅周辺を再現し、豊後大野市・豊肥本線の良さをPR活動を行った。地域の方々や子ども達に見てもらふことにより、豊肥本線がいかに大事な役割を担っているかという事を再認識してもらふことを目的とする。

取組内容

豊後大野市三重町市場の空き店舗を活用し、三重町駅とその周辺を再現し鉄道模型を展示する。

実際に、鉄道のおもちゃを走らせることにより、子供たちにも楽しんでもらう。

名称を「豊後大野レール館」として開館した。右図の通り、8日間開館した。

レイアウトとして、三重町を再現するエリア、岩戸の景観を再現するエリア、閉館時にも楽しんでもらえるようにするディスプレイエリア、子供たちに喜んでもらえるように、レールタワーエリアと隣の部屋に、自由に遊んでもらえるエリアを設定した。

苦労した点として、岩戸の景観を作る際に実際の雰囲気を出すのが難しかった。また三重町駅を取り入れつつ派手なレイアウトづくりは時間と手間がかかりとても苦労した。

鉄道模型は、JR九州が保有する鉄道で、市販されているものは購入し、市販されていないものは、自作のペーパークラフトを作成した。

地域での成果

全6日開館の内、来館者数は、大人88名、中学生以下78名合計166名が訪れた。非常に多くの来場者で賑わい、特に子どもたちは、会場から離れたくないようだった。

このイベントが、「豊後大野市・豊肥本線」の活性化に繋がるのかを検証するためのアンケートを実施し、「子どもがすごく楽しめました」、「家にないプラレールがたくさんあって良かったです」など感想も頂いた。

学生の学び

学生からは、10月24日、11月17日のブルーマーケットがある日は、親子連れや敬老歩こうの会の方々など様々な人がこの店舗を訪れにぎわっていたが、その他の日の来館者は少なかった。

情報発信が上手くできていないと感じたので、今後は上手な発信方法を考えたいとの意見が出された。また、これを事業ベースで考えたときに、黒字か赤字かも考えてもらい、イベントを行う大変さも実感したようである。

今後の展開

鉄道模型は、残っているので、地域からの要望があれば、各地域で鉄道模型展示を行い、豊肥本線をはじめとする鉄道の大切さなどを地域の方と共有したい。イベントの効果検証については、卒業論文や学術研究で行いたい。

開館日

10月20日(土) 10月24日(水)
10月28日(日) 11月 3日(土)
11月 4日(日) 11月17日(土)



↑設営風景 ↓ディスプレイエリア



↑自作ペーパークラフト



↑絵本パレットの連携



↑豊後大野レール館外観

大学で楽しく学ぼう!! 小学生対象NBU体験教室2017



実施体制：河村裕次、鍋田耕作、栗延孟、坂口昌宏（経営経済学科）

実施フィールド：大分市

連携機関：

概要 大分市内の小学生を対象に、「みんなでコミュニケーションを取りながら楽しく学ぼう!!」をテーマとした様々な体験活動を準備し、自由研究等のヒントになる活動や他校の児童等とのコミュニケーションの場を提供した。今回の教室は、こども・福祉マネジメントコース2年生が、全体進行、環境整備、体験コース担当に分かれ、企画から運営まで、学生主体で取り組んだ。この教室を通して、学生は、自ら“PDCAサイクル”を経験することにより、社会人基礎力(特に「計画力」、「実行力」、「課題発見力」、「プレゼンテーション力」)を養うことを目的とした。

取組内容 この教室は、2017年7月29日(土)に実施した。具体的な体験活動は、以下のとおりである。

【体験活動】

- ・オリジナルけん玉をつくろう
- ・ふうせんゲームランド
- ・世界で一つだけのスライムをつくろう
- ・真夏のペットボトルボウリング大会

体験活動ごとに、「大学で楽しく学ぶ」ことができるよう、学生が中心となって体験型の学習教室を行った。

地域での成果 参加していただいた保護者から、次のような意見をいただいた。「他のこどもたちと楽しそうにしている姿が印象に残りました。来年も参加したいと思いました」、「学生のみなさんが笑顔でこどもたちと接してくれたので、とても嬉しかったです」、「学生の皆さんがこどもたちのことをしっかりと見てくれたので、安心して参加できました」などがあった。

学生の学び このイベントを通して、学生の振り返りからは、「企画から運営までの流れを考えながら、参加者に合わせた内容にしていくことが大切だと感じました」、「参加したこどもたちの作業スピードを計算しながら、全体的な流れ(スケジュール、進行の合わせた対応)を考えていくことが重要」などの気づきがあった。

今後の展開 今後は、イベント開催前に、どのような企画を地域の小学生・保護者が望んでいるのか調査し、より参加者のニーズに応じた内容にできればと考えている。また、これまで大学内で実施してきたが、今後は地域に出て、このような取組を実施していきたい。



体験活動準備



体験ブース(けん玉をつくろう)



体験ブース(ペットボトルボウリング)

地域づくり支援

～市民交流の場・楽らく広場「ひょうたん」(千歳町)の活動サポートを通して～



実施体制：鍋田耕作、河村裕次、坂口昌宏（経営経済学科）

実施フィールド：豊後大野市千歳町

連携機関：豊後大野市高齢者福祉課、市民交流の場・楽らく広場「ひょうたん」

概要 豊後大野市千歳町で実施されている市民交流の場・楽らく広場「ひょうたん」は、「ちょっと寄り道・・・ところとからだが軽くなる場所」を目的として、週1回（月曜日の午前中・2時間30分程度）千歳町の住民が集まり（現在の利用者は、後期高齢者が中心）、一緒に体操をしたり、お茶を飲んだり、レクリエーション等を行っている。この活動の中でもレクリエーションは週替わりで行われており、この内容をどのようにするかが課題となっていた。そこで、本学学生が参加者のニーズを把握した上で、企画を立案し、提案・実践することで、活動の幅を広げてもらうことにした。またレクリエーションを機能訓練や認知症予防等に効果的につなげる企画に加え、参加者の生きがいづくりや地域貢献・役割の創出につなげていくことにも着目し、取り組んだ。また、地域課題解決に向けた取組に対して学年ごとの役割を設定し、将来、「子ども」「高齢者」「障がい者」、そして「ビジネス」など様々な視点から、つながりある地域社会の実現に貢献できる人材を育成することを目指した。

取組内容 本学の学修サイクルである①体験交流活動（ひょうたんの活動見学・参加、スタッフとの打ち合わせ、レクリエーションを考える上での参加者の状況把握など）、②住民のニーズに応じた課題解決に必要な知識の習得（レクリエーションの内容を参加者同士のコミュニケーションの図れるもの、多世代で楽しめるものなど、参加者の特徴に合わせた効果的な技法、企画書作成などを検討）、③ステークホルダーとの協働による課題解決型学修（実際に企画立案した内容をスタッフとともに実践、振り返りを行うなど）の一連の過程を実践した。



体験交流活動

地域での成果（参加者への効果・影響）若い世代がこの活動に参加することによって、利用者が孫に接するような温かい雰囲気の中で活動ができるようになった。スタッフからは、学生の新しい発想や取組から、今後の活動の参考になったなどの意見があった。（活動全体の活性化）新しい事に挑戦したことで利用者の生きがいが生まれた。利用者がこれまでにやったことのない新しいゲームなどを楽しみにしていることなど、この活動サポートにより、より活動が活性化したという評価を受けた。



事前打ち合わせ

学生の学び 体験交流活動では、自分から参加者とコミュニケーションが取れるようになったなど、主体性が身についたと考えられる。必要な知識の修得では、これまでの福祉関係の学修を活かしたレクリエーション等の計画立案を行った。そして、課題解決型学修の中では、まず企画をした内容を正確に実行することができる能力（計画力・実行力）が養われ、人前での説明、他の人を動かすことができるようになった（発信力・働きかけ力）などの学生の意見が出されている。

今後の展開 この活動サポートを継続しながら、これまで学生・スタッフとともにやってきたレクリエーション等の取組を地域の人々に引き継いでいきたい。また、今後は地域内での活動等にも参加し、地域内での互助や交流にも貢献できればと考えている。



クリスマス会での交流

佐賀関地区での市内小学生とその保護者を対象とした地域交流教室

実施体制：鍋田耕作、河村裕次、坂口昌宏（経営経済学科）

実施フィールド：大分市佐賀関地区

連携機関：大分市、大分市教育委員会



概要 佐賀関地区は、少子高齢化にともない小学生人口が減少し小学校の統廃合が進んでいる地区である。小学校の統廃合がおこると通学時間などの差から、小学生同士の交流や、またその保護者同士の交流も減るなど、学校運営にとっても問題が生じる。そこで、こども・福祉マネジメントコースとスポーツマネジメントコースでは、これまでに「大在子どもルームでの体験」「夏休みの小学生対象の体験型自由研究教室の企画運営」を行い、小学生同士や保護者同士の交流をしたいというニーズ（地域課題）に対して、本学学生が中心となり、体験型の交流活動を行った。ここでは、H27年12月20日（日）に実施した佐賀関地区での地域交流教室「クリスマス直前!! 妖怪たちもビックリ!! 小学生コミュニティセンター」について報告する。

この教室では、①多くの人と触れ合うことでコミュニケーション能力の向上を図る、②誰でも気軽に楽しめることで、身体能力の向上を図る、③親子、親同士、子ども同士の交流の場を作る、④世代を超え大学生との交流を行う、⑤グループワークを行うことで団結力（他人との協力）を学ぶ、の5つのテーマについて小学生が体験できるような企画内容とすることで、小学生同士だけでなく、保護者や企画運営に携わる大学生との交流を通して、普段の小学校生活では経験出来ない、多世代間交流をを目指した。

取組内容 この企画を実施するまでに、佐賀関地区の地域の状況把握、地域課題の選定、企画書・チラシの作成、学生による佐賀関地区の小学校・こども園・幼稚園などでの広報活動を行い、当日に向けて必要な資料等（スケジュール、役割分担、看板等）の作成、当日の流れに沿ったロールプレイなどを行った。イベント当日は、会場の飾りつけ、事前打ち合わせ、受付・駐車場整備・案内、開会式、アイスブレイキング、4種類のゲーム（釣りっこ・RDチャレンジ・プラズマカー・オーバルボール）、親子での交流企画を実施し、閉会式ではメダルの授与、表彰、記念撮影を行った。また、この取組に当たって、オリジナルのスタンプカード、賞状、メダル、クリスマスカードを用意した。このように、これまでの企画立案から運営の経験と知識・技術を活かして、地域課題の解決に向けて企画を検討し、学生主体での交流活動の運営を行った。



事前打ち合わせ

地域での成果 今回の企画の目的でもあった、子どもどうしの交流、子どもと学生との交流を十分に果たすことができた。また、参加した保護者の声として「遊びを通して、他校のお友達とも仲良くでき、よかった」や「子供たちが楽しそうだった」、「兄弟がバラバラに行動でき、よかった」などの意見があった。



釣りっこの様子

学生の学び 実際に、企画を立ち上げから当日の運営までを経験したことで、コミュニケーション能力や企画を立てる能力、どんなケースでも臨機応変に対応できる能力が必要であり、今後、さらに向上させていく必要があることを学んだ。学生からは、「実際に、子供たちの笑顔、保護者の笑顔、そして運営している学生スタッフの笑顔をたくさん見ることができた」などの感想があり、自分たちで考えた企画運営についての達成感を感じているようであった。

今後の展開 今後の企画を検討するに当たって、地域の子どもと高齢者が触れ合うような機会が必要ではないかと考えている。そこで、佐賀関地区内での世代を超えた交流をもっと増やし、幅広い世代で楽しめるイベントを行っていきたい。



全員で記念撮影

豊後大野市内の小中学生における社会的スキルの学校規模による比較と予防的心理教育プログラムの展開



実施体制：高橋淳一郎（経営経済学科）

実施フィールド：豊後大野市

連携機関：豊後大野市立朝地中学校・小学校、豊後大野市内全小中学校

概要 豊後大野市内の多くの学校では学年に 1 クラスしかない小規模校となっている。それらの学校においては、文部科学省 (2015) で次の点が指摘されている。①人数が少ないため社会性を学ぶ機会が限定される。②クラス替えがないため人間関係が固定化される。この結果、不適応に陥りやすくなるとされているが、この点についてのエビデンスは明確ではないそこで、市内の小中学生について小規模校と中規模校を比較し、小規模校の児童生徒は社会性が低いのか明らかにした。また、小規模校であっても児童生徒が社会性を身につけ、適応力を上げていくための支援として、小中学校すべての学年を対象とした予防的心理教育プログラムを朝地小中学校において実施している。本報告では調査研究の結果と朝地小中学校での 2 年目の結果と 3 年目の取り組みについて紹介する。

取組内容 豊後大野市の特徴として小規模校が小中学校ともに多いこと、そして一部の学校に児童生徒が集中していることを受けて、小規模校と大規模校のそれぞれについての課題を洗い出す重要なデータが得られた。今後、これらを各学校にフィードバックして、今後の学校運営に活用してもらいたい。また、朝地小中学校では予防的心理教育プログラムの効果が徐々に表れ始めている。2 年目の段階で中学生でもコミュニケーションスキルの向上が見られる。3 年目の高加速的はこれからであるが、3 年間を通じての効果を検証していきたい。

中学生の社会的スキルの比較		
仲間関係の開始	1年男子 3年女子	大規模 > 小規模
仲間関係の維持	2年男女 3年男女	大規模 > 小規模
仲間への援助	2年女子 3年男子	大規模 > 小規模

小学生の社会的スキルの比較		
関係維持行動	2年男子 3年女子	大規模 > 小規模
関係向上行動	2年男女 5年女子 6年男女	大規模 > 小規模
	3年女子 4年男子	大規模 < 小規模
関係参加行動	6年女子	大規模 > 小規模

地域での成果と今後の展開 調査研究の結果、小学生は高学年になるほど大規模校の児童の方が社会的スキルが高いことが明らかになった。また、中学校でも全体的に大規模校の生徒の社会的スキルが高いことが明らかになった。この調査でも明らかのように、小規模校では社会的スキルが育ちにくいことが想定される。朝地小中学校においてもそのような懸念から、2015 年度より児童生徒の社会性育成と適応力向上を目的に「対人関係ゲーム」を用いた予防的心理教育プログラムを実施している。2017 年度で 3 年目となり、その効果について検証をおこなっている。

学生の学び 予防的心理教育プログラムの運営は、2 年目より学生が主体となることが増えている。その中で、子どもたちをまとめ、子どもたちにわかりやすく説明するためにはどうしたらいいか、また、子どもたちの様子を見ながら子どもたちが効果的な体験を積み重ねていくためにはどのような援助が必要か、といったことを、学生も体験的に学ぶことができています。さらに、今回は規模の大きなデータを取らせてもらった。そのデータから何が読み取れるのか、学生自らが、これまで大学で学んだことを振り返りながら解析していくことで論理的な思考を磨くことにもつながっている。



スポーツイベント実践を通じた 地域創生人材の育成



実施体制：堀 仁史、竹田隆行、鈴木照夫、永松 昌樹、武田正芳、堀ゼミナール
 実施フィールド：大分県大分市大在地区
 連携機関：OZAI元気クラブ

概要

大在地区は新興住宅地として急速に発展しており、人口が著しく増加している地区である。同地区の総合型地域スポーツクラブ（以下、OZAI元気クラブ）は設立から8年目を迎えるが、会員数が人口の0.1%未満と伸び悩んでおり、その活動が活発であるとは言い難い状況である。そこでマーケティング戦略の4P（Promotion, Product, Place, Price）を軸にOZAI元気クラブの会員数増加の糸口を探る活動として、2015～16年度はProductに着目し、「認知度を高めるイベント」を実施したが、2016年度に実施したアンケート調査ではクラブの認知度は81%と高く、認知度が会員数に及ぼす影響は少ないことが示唆された。一方でクラブの活動内容を知らないとの回答が54%にもものぼり、活動内容を知ってもらいクラブをより深く理解してもらうことが重要であることが改めて示唆された。

また2017年度はPlaceに着目し、クラブの活動拠点が会員数に及ぼす影響について検証を行い、その結果、「活動拠点」が地域住民のクラブ参加意向に影響を及ぼしていることが示唆され、今後は各自治区公民館の活用が重要であること、またその管理を行うとともに地域住民のニーズを熟知する各自治区区長に総合型地域スポーツクラブの理念の深い理解を求め、活動に協力を得ることが重要であることを提案した。

2018年度は上記を踏まえ、クラブ総会に自治区区長を招待してプレゼンテーションを行うとともに、新規の会員獲得のプログラムとして「初心者のための筋トレ講座」を実施した。またPromotionとしてこれまで閉鎖となっていたクラブのホームページを作成・リニューアルした。

取組内容

NBU50周年記念式典 ポスター発表（2018.4.21）
 第4回 かけっこ教室（2018.8.19）
 初心者のための筋トレ講座（2018.9.1～9.29 毎土曜日）
 大在西小学校 サンサンカーニバルスタッフ参加（2018.11.3）
 OZAI元気クラブ 元気祭り スタッフ参加（2018.12.2）
 わくわくウォーク&レクリエーション（2019.3.10 予定）



研究発表：総合型地域スポーツクラブの会員獲得を目的としたホームページ作成

地域での成果

参加する教室やイベントにおいて、学生の活動は非常に高く評価されており、またイベント等の満足度においても非常に高い。またクラブ会員数も微増傾向ではあるが、これまでのCOCでの活動が会員数増加に効果的であったとは言い難い。イベントおよび教室展開については、クラブスタッフとの戦略的な取り組みが必要である。一方で筋トレ講座の活動に対して県や市の教育委員会が興味を示し、今後、別の形態での地域貢献が考えられる。



学生の学び

NSCA認定校カリキュラム（スポーツトレーナー）で資格取得を目指す学生にとっては「かけっこ教室」や「筋トレ講座」は運動指導の実習の場として非常に効果があり、学生の資格取得や学習に対するモチベーションを高める効果があった。またチームとして学生がまとまることで資格試験の合格率を高めることにつながったと考えられる。

今後の展開

「会員獲得のためのPR効果」を狙ってイベントを行ってきたが、参加者の少ないイベントの見直しや、イベントに参加した方が継続的に「教室」として参加できる教室展開が必要であるといえる。そのためには「施設」や「指導者」といった課題があるため、OZAI元気クラブスタッフを含めた戦略的な取り組みが必要であると言える。また今回、ホームページを作成したが、活用方法を吟味することで、より多くの人に「総合型地域スポーツクラブの理念」を理解してもらい、協力者や参画者を増やしていくことも長期的な戦略として必要な視点となる。



地域住民を主体とした地域づくりによる 介護予防に関する域学協働研究



実施体制：鍋田耕作、河村裕次、坂口昌宏、美濃祐子（経営経済学科）

実施フィールド：豊後大野市

連携機関：豊後大野市高齢者福祉課、千歳町市民交流の場「楽しく広場ひょうたん」

概要 豊後大野市の実施する住民主体の介護予防に向けた地域づくりは、地域全体に一定の効果を与えているが、地域での実践を通して、新たなニーズの充足や課題解決に向けた取り組みへと展開できる可能性がある。そこで、本研究では、「地域づくりによる介護予防」を「地域における住民間での互助や交流を通して、高齢者が地域の中で生きがいや役割をもって生活できるようにすることで、介護を予防する効果をあげる取組」と位置付けた。このような取り組みを実践するために、まず、これまでの地域づくりを基盤に、域学協働で、①住民間での互助（助け合い、支え合い）や交流ができるように下地を作る、②参加者が地域の中での生きがいや役割を持つために、何ができるのかを考える機会を提供することにした。具体的には、大学から新たなニーズに対応した介護予防活動の提案・実践を行い、地域の有機的な連携の関係づくり（住民間のよりよいつながりを促し、地域内の互助関係の構築）ができるよう地域住民とともに実践し、今後の住民主体の地域づくりによる介護予防の方向性を模索する。それから、この取り組みが及ぼす地域への効果を検証するとともに、この活動を本学の教育プログラムの一環として実施することで、社会福祉専門職育成の視点から本学学生に対する効果についても検証を行う。

取組内容 2017 年度は、前年度に引き続き「域学共創」（地域住民と大学が共に地域（地域づくり）を創造していくこと）を目指し、参加者とともに活動を行ってきた。また、これに加えて、地域住民主体の活動を支える社会福祉専門職育成の視点から、この活動を運営、企画するだけではなく、地域住民の方々が、より活動を効果的・効率的に実践するための「支援（サポート）」をどのようにしていくべきかなど、専門職に求められる知識や技術について検討を行った。

地域での成果 このような取り組みを通して、地域住民の方々と学生が地域の課題を他人事とするのではなく、自分事として捉えるようになった。また、この活動も 3 年目を迎え、どのように継続していくのかということが課題となり、この視点から、地域住民と学生が検討した。そこで、まず、スタッフに出来るだけ負担がかからないようにすることが必要ではないかと考えられた。そのために、具体的には、これまでの活動を振り返りながら、季節のイベントなどは、これまでの反省点を活かし、無理のない範囲で変更していくこと、イベント以外の活動日については、健康体操、振り込め詐欺の対策などの参加者に関わる身近なことに関する外部講師を招待するなどが考案された。

学生の学び この活動を通して、学生は大学の講義で学んだ「地域」を拠点とする社会福祉専門職の視点や役割を、地域活動の実践を通して、その必要性を理解することができた。また、その視点から、地域の実情に合わせて、どのような活動が必要なのか、専門職としてどのような支援が必要なのかを考える機会にもなった。

今後の展開 これからは、これまでの学びを活かして、地域のニーズに合わせた地域活動を、地域住民の方々と実践し、将来的には、このような活動の支援者（支援関係機関の社会福祉専門職）としての視点で活動に関わっていく必要がある。



時代カルタ（一昨年行った内容を改善）



七夕会（昨年の活動にプラスアルファの取組み）



世代間交流
（地域を拠点とする社会福祉専門職の視点）

『おいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステップは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分できがけないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を担く。
『おいた、つくりびと』になりたい。



総合型地域スポーツクラブの 教室・イベントを通じた教育実践活動



実施体制：堀仁史、竹田隆行、鈴木照夫、本村裕之、武田正芳（経営経済学科）

実施フィールド：大分市 大在地区

連携機関：OZAI元気クラブ（総合型地域スポーツクラブ）

概要 2015年度より、大分市大在地区にある総合型地域スポーツクラブ（以下、OZAI 元気クラブ）で身体活動を通じた地域コミュニティの構築と、子どもたちの運動への関心を高めるためのイベント事業を、学生自らが企画し、広報活動や運動指導・支援を実践することを通して、スポーツビジネスコースやNSCA 認定校カリキュラムで学習した専門知識や技能を活用し、それらを高めるとともに学生のコミュニケーション能力の向上を目指し、将来の地域創生に貢献できる人材の育成を目的とした。

また今年度はこれまで実施したイベントや広報活動、また総合型地域スポーツクラブの認知度をアンケート調査により検証し、これまでの活動を評価するとともに、今後の本ゼミナールの活動の方向性について検証した。

取組内容 指導等の実践活動は、『ゼミナールⅢ』（3年生）が中心となっており、『ゼミナールⅣ』（4年生）はアンケート調査による活動の検証と卒業論文の作成・発表、『ゼミナールⅡ』（2年生）は次年度に向けて、イベントの参加者として「活動内容を知ること」とした。

実践活動として行った取り組みは次の通りである。

- 2016年8月29日（土）かけっこ教室 ※指導協力：NBU 陸上競技部 爪丸コーチおよび選手9名
- 2016年10月29日（土）大在西小学校 PTA 主催 サンサンカーニバル（ドッチビーコーナー指導担当）
- 2016年12月4日（日）OZAI 元気祭り（レクリエーション担当）
- 2017年2月19日（日）わくわくレクリエーション

なお「わくわくレクリエーション」では隣接する坂ノ市地区の3小学校（坂ノ市、小佐井、丹生）にもチラシを配布して参加募集を行った。

また、活動の検証として、アンケート調査を実施し、卒業論文発表会と2017年2月28日（金）「NBUチャレンジ OITA 地域創生活動報告会 2017 in 佐賀関」にて報告を行った。

地域での成果 「かけっこ教室」は小学生と未就学児童を含む21名の子どもたちと、その保護者の参加があり、昨年に引き続き非常に好評であった。また「わくわくレクリエーション」は昨年度までの「チャレンジ・ザ・ゲーム」の名称が「分かりにくく、難しそうなイメージがある」との反省から、名称を変更して実施した。その結果、小学生と未就学児童を含む23名の子どもたちと、その保護者6名と参加人数が大幅に増加した。ちなみに坂ノ市地区からの参加者は1名であった。これらの活動は昨年より引き続き行われており、地域で本学学生の活動が認知されてきた可能性がある。またアンケート調査を通して小学校関係者へもこの活動の認知が深まったと考えられる。



学生の学び 2015年度はすべてが初めてのためプログラムや企画は教員があらかじめ作成したが、今年度はプロモーションからプログラムの内容、指導、運営すべてを学生に自ら行わせた。学生が自らリハーサルを計画して、体育館の使用願いを申し出るなど、非常に積極的に活動を行うことができた。また当日のプログラムの進行も綿密に行われたために非常にスムーズで参加者からも学生の活動に対して非常に高い評価を受けた。

今後の展開 アンケート調査の結果から、これまでの活動が地域のニーズに合致していたこと、保護者の年代によってニーズに相違があるが、児童は低学年や高学年でニーズの違いがないことなどが明らかとなった。また OZAI 元気クラブの活動に対する地域住民のニーズはあるが、それらを受け入れる施設や指導者の不足、また認知度を高めるためのこれまでの学生のイベント活動と、それらに結びつく教室展開がなされていないことなどから、これらの新たな課題解決が今後のCOC活動における課題になると考えられる。



地域住民主体の地域づくり支援

サービスラーニングⅢ・フィールドスタディⅠ・Ⅱを通して



実施体制：鍋田 耕作、河村 裕次、坂口 昌宏（経営経済学部）

実施フィールド：豊後大野市

連携機関：豊後大野市高齢者福祉課、楽しく広場ひょうたん参加者

概要

こども・福祉マネジメントコースでは、豊後大野市千歳町で行われている市民交流の場「楽しく広場ひょうたん」の活動サポートを平成27年度から実施している。この取組を通して、本学学生は、本学の学修サイクルである①体験交流活動、②住民のニーズに応じた課題解決に必要な知識の習得、③ステークホルダーとの協働による課題解決型学習を実施している。また参加者には、地域での「居場所づくり」として活動が展開できるよう、域学協働で機能訓練や認知症予防等の取組とともに、参加者の生きがいづくりや地域貢献・役割の創出につながるような取組を検討しながら実践している。



いちご籠づくり (JA協賛)

取組内容

この活動の目的は「ちょっと寄り道…こことからだが軽くなる場所」であり、主な内容は、週1回（月曜日の午前中・2時間30分程度）千歳町の住民が集まり（現在の参加者は、高齢者が中心）、体操をしたり、お茶を飲んだり、レクリエーション等を行っている。

この活動を中心に、今年度は、楽しく広場ひょうたん参加者の地域貢献や社会貢献につながる支援（例えば、いちご籠づくり（JA協賛の活動）、しめ縄づくりなど）とともに活動の中で世代間交流、千歳町の他の地域活動（例えば、千歳っ子クラブ、世代間交流イベントなど）への活動サポートなどを行い、千歳町で実施されている地域住民主体の活動の世代間のつながりや地域間のつながりを意識した取組みを行ってきた。



しめ縄づくり

地域での成果

（地域内での他の活動への参加） 他世代等との交流を通して「顔の見える関係づくり」を行い、それぞれの活動への関心やつながりが生まれるきっかけづくりを行ってきた。また実際に、幼小中学校合同の体育祭や中学校の文化祭に参加したなどの声が上がっていた。

（出番（役割）作り） この活動を通して参加者が、一方的に支援を受けるだけでなく、自分たちで出し物を披露したり、体操の手本になったり、いちご籠作りなどの指導者になったりとそれぞれの出番（役割）が準備されるようになった。



千歳っ子クラブとの合同企画

学生の学び

（体験交流を通して考えたこと） 世代間交流を通して地域の方々とは普段関わりの少ない子どもたちとの交流を通して、元気を分けてもらえて良かったと言っていました。子どもたちは劇を発表するなど努力してきたことを実際に披露し、喜んでもらえるというのは成果を認めてもらったという嬉しさにも繋がっているのではないかと感じた。また、このような場は学びの場所・機会の提供にもなるので必要だと考えました。（経営経済学部・1年生）



千歳町世代間交流会での活動サポート（主催：千歳地区社会福祉協議会）

今後の展開

これまで行ってきた活動を継続し、今後、地域内での活動等にも活かしていき、地域内での互助や交流を深め、生活支援へとつなげることができればと考えている。

NBU 日本文理大学

〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097 - 592 - 1600(大代表)
Web: <http://www.nbu.ac.jp>【COC事業担当】
TEL/FAX: 097 - 524 - 2663(直通)
Web: <http://coc-nbu.jp>
e-mail: coc@nbu.ac.jp

coc-nbu.jp



あおいた、つくりびと

『あおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『あおいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけではかえることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ、今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分できかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくりたい。
私たちは大分県の未来を拓く『あおいた、つくりびと』になりたい。

住民主体の地域活動について



実施体制：岡崎光里（経営経済学科・4年）

実施フィールド：豊後大野市

連携機関：千歳町楽らく広場ひょうたん参加者

概要 わが国の地域福祉は、これまでの近隣同士が助け合う互助では成り立たなくなっている。これは、1960年代から起こった高度経済成長に伴い、雇用形態の変化、核家族化の増加などから、中山間地域などでは過疎化がすすみ、一方、晩婚化・女性の社会進出・医療の発達が原因により、少子高齢化が進行が影響していると考えられる。このような中、住民同士のつながりが減少していることが地域福祉における課題としてあげられる。

本研究では、住民主体の地域活動がどのように運営されているのか、そして今後どのような活動していけば「地域コミュニティ」を作ることにつながっていくのかについて検討していく。そこで、本研究では、住民主体の地域活動とは何かを明らかにするため、このような活動ができた背景、歴史について述べる。それから、住民主体の地域活動と地域福祉のコミュニティとの関係を整理し、2つの地域にある活動に限定してアンケート調査を行い、地域活動の現状について若干の考察を行う。最後に、現在の地域活動の課題を整理し、これからの住民主体の地域活動をより効果的にするための提案を行う。

課題・提案 1. 活動の担い手について

【課題】

60代の参加率が低い、仲の良い人の集まりになりやすい、狭い空間、私的空間に陥りがちである。

【提案】

活動を継続するためには、社会資源でもある**ボランティア**の利用が有効なのではないかと考える。ボランティアを育成し、講座や登録、定期的に活動スタッフ同士の情報交換をすることで活動の相乗効果が臨めると思われる。ボランティアはあくまでお手伝いではあるが、同じ地域住民として**みんなで地域活動を作り上げる**という意識が大切になってくるのではないかと考える。



2. 健康寿命を延ばすことが目的となっていること

【課題】

このような地域活動は他の目的についても**様々な効果が期待**できる。例えば、生きがいを見つける場・多世代交流の場、高齢者だけではなく障がい者・子育て家庭・地域住民の交流の場などが考えられる。

【提案】

この改善策として、まず、活動の効果を**運営側が理解**することがあげられる。確かに、健康寿命を延ばすことは大前提として必要ではあるが、それに加えて、**高齢者の孤立防止**や地域で生きていくうえでの**居場所作り**、**ボランティアの活躍の場**として活用できることも効果として運営する側が理解をし、活動を行う上でプログラム等をより計画的に作成し、**一人一人が主役**になれるように考えていかなければならないと考える。

3. 活動を持続可能なものにする

【課題】

活動は地域のより所でもあるため、今だけの限定的なものではなく、**継続していくことが必要**である。スタッフの役割や地域住民への広報の見直し、活動自体の形態もこれから変容していかなければならないことが課題にも挙がってくると思う。

【提案】

これには、**ネットワーク**や**連携**が必要である。このような活動は独自で行うこともあるが、多様な視点を入れることも、活動を維持していくには必要になってくる。活動運営者やボランティアとの**連携**を結び、地域活動を支援していくことで、全体の意欲も湧き、積極的に活動ができるようになっていく。**ネットワーク**を構築することで、これからの**社会の中で人と人とが繋がる場所**の提供としてこれからの大きな役割が期待されると考えている。



大在地区の子育て支援に関する地域課題 解決に向けた取り組みの提案



実施体制：伊藤 光・野々下 優・平原 実歩・廣岡 真衣(経営経済学部・2年)

実施フィールド：大分市大在地区

連携機関：

概要

こども福祉マネジメントコースのコース必修科目である家族援助論では、コース所属の学生のそれぞれの出口(社会福祉専門職・福祉ビジネス・教職など)に合わせて地域の現状分析(地域アセスメント)から地域課題の抽出を行い、その後、先進事例を参考にしながら、その解決方法の提案(社会的効果も含め)までを行っている。そこで、発表チームは、将来、幼稚園教諭や保育士、社会福祉士を目指す者として、大在地区の地域課題として学童保育の問題(特に学童待機児童を減少させること)に着目し、その解決に向けた取り組みについて、大阪市中央区・天王寺区の取組み(AIKI Kids Academy(アイクルキッズアカデミー))を参考に、この地域でも実現可能性の高い取組みとその社会的効果について提案する。

取組内容

【地域課題】

大在地区には、大在小学校、大在西小学校の2つの小学校があり、それらの合計の児童数は1951人である(2017年)。その中には、共働き家庭の児童も多く存在していると考えられる。しかし、それに対しての大在地区において学童保育を行なっているのは、児童クラブが2ヶ所、放課後クラブが1ヶ所、学童クラブが1ヶ所と計4ヶ所となっている。これらのことから、この地区では、児童数に対しての学童保育を行なう施設の数が少ないということがわかる。それに伴い、学童待機児童の問題も考えられる。そのため、より多くの子どもたちが放課後の時間帯を安心して過ごすことのできる場を、今ある4ヶ所だけではなく、その他にも提供する場が必要になってくると考える。

また、さらに大在地区について調べていくと、大在地区には空き家が多く存在しているということがわかった。その数は21ヶ所あり、その中には、そのまま入所可能な状態のものもある。そこで、私たちはそれらの空き家を活用しながら、放課後の子どもたちの居場所をつくりたいと考えた。

【解決策】

大阪市中央区・天王寺区の学童保育に関する取組を参考に、この取り組みを大在地区で実現するためには、支援者の確保、運営場所の確保、人口規模の違いといった問題点が挙げられる。それらを解決するためには、まず、支援者の確保として、ボランティアの方々を集い、協力してもらう。次に、運営場所の確保として、空き家を利用する。そして、人口規模の違いに関してはマイナーチェンジという発想法を使い、対象を児童のみにし、習い事の先生を、地域の方々に委託することで、地域住民同士の関わりを持ってもらう。また、保護者の方々が安全・安心して利用できるように、ボランティアや地域の方々の研修会を実施する。

このように大在地区での実現を可能にするために、問題点を探し解決策を見つけ、マイナーチェンジをすることを考えている。

【社会的効果】

共働き家庭にとって、放課後の時間帯に子どもをどこで過ごさせるかということは大きな問題である。特に現在の問題として、子どもの小学校入学時、親が仕事の制限を受けるという小1の壁がある。その中で、このような学童保育の活動を行うことで、親は子どもを安心して預けることができ、放課後に子どもを孤立させないことに繋がる。また、地域の方々の協力を得ることで、子どもは多くの人とコミュニケーションをとることができ、地域交流の場を創ることができる。さらに、お互いが顔見知りになることで、子どもの安全確保が可能となり、地域での子どもの見守りの強化にもつながると考える。

学童保育に関する 大阪市中央区・天王寺区の取組み

AIKI Kids Academy (アイクルキッズアカデミー)

対象	小学生及び一部の幼児
支援者	保育士の資格保持者、地域の方々
目的	家や学校とは違った「もう一つの場所」を作ること
活動内容	宿題サポート、制作活動、観察・研究活動 遊び・運動、習い事

〇取り上げ理由

- 〇施設環境が充実
例)習い事、送迎など
- 〇スマートフォンでの情報提供
例)子どもの入退室時

先進事例を参考に、大在地区で実現するためには・・・

〇問題点

支援者の確保、運営場所の確保、人口規模の違い

〇解決策

- ・支援者の確保⇒ボランティアの方々の協力
- ・運営場所の確保⇒空き家活用

〇一部変更【マイナーチェンジ】※人口規模の違い

- ・対象者を児童のみ
- ・習い事の先生を地域の方々に委託する
- ・ボランティアや地域の方々の研修会を開催する

今後の展開

私たちはこれらの活動を通して、大在の現状を知ることができた。子どもの時期の教育や学校生活、社会生活は、子どもたちが大人になったときに大きな影響を与える。私たちが子どもたちに良い影響を与えるような教育や安心して過ごせる居場所を作ることが必要であると考えます。今回提案したような活動を大在で行っていきたい。

NBU 日本文理大学

〒870-0397 大分県大分市一木1272
TEL: 097 - 592 - 1600(大代表)
Web: <http://www.nbu.ac.jp>

【COC事業担当】
TEL/FAX: 097 - 524 - 2663(直通)
Web: <http://coc-nbu.jp>
E-mail: coc@nbu.ac.jp



おおいた、つくりびと

『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけではかえることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろうか。日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分ですでかできないことにチャレンジします。
地域の人々とともに、もっともっと元気なまちをつくりたい。
私たちは大分県の未来を拓く『おおいた、つくりびと』になりたい。

地域活性化プロジェクト 「楽・楽マルシェ」での取り組み報告



実施体制：吉村充功（建築学科）、吉本圭一郎（経営経済学科）

実施フィールド：大分市佐賀関地区

連携機関：NPO法人さがのせき・彩彩カフェ、NPO 法人おいた NPO デザインセンター、佐賀関げんきがり、大分県立津久見高校「つくみ蔵」

概要 少子高齢化が急速に進んでいる大分市佐賀関地区（4,443 世帯、人口 8,789 人、65 歳以上の割合を示す高齢化率 53.2%（2018 年 1 月末現在））。2040 年の人口は、0.6 万人まで減少する見込みもあり、地域コミュニティの維持がおおきな課題となっている。現在、佐賀関地区の NPO 法人さがのせき・彩彩カフェは、地域住民の生活支援活動や住民のふれあいの場を設け、地元の食材を使った料理や小規模多機能施設を運営するなど、地域コミュニティの維持を目的とした活動に精力的に取り組んでいる。本活動では、当該 NPO 法人と協働して地域の課題を考え、その解決を目指して取り組んでいく。学生は、地域の課題を考えるとともに NPO 法人や地域住民の人々との交流を通じて、チームで働く力や考え抜く力、前に踏み出す力を養う。またこの活動が、理論と実践の融合をはかる場や機会のひとつとなることも期待している。

取組内容 毎月第 4 土曜日実施されている地域交流イベント「楽・楽マルシェ」に参加し、学生主体で模擬店を運営した。模擬店では地元野菜の販売をおこなったり、学生自身で考案した商品を販売したりした。

地域での成果 高齢者が多いこの地区の交流イベントに域外の若い学生達が参加し活動することは、地域に活気をもたらし、にぎわい創出の一助にもなっている。今年の 7 月で満 6 周年を迎え、近年は津久見高校「つくみ蔵」の店も不定期でなされ、高校生の参画によるあらたな活気ももたらされている。

学生の学び 「楽・楽マルシェ」では現金管理を複式簿記で記帳しておこない、事後、NPO 法人の代表者に報告している。模擬店運営をするにあたり、事前にマーケティングの 4P 分析や予算設定、損益分岐点計算などの原価計算をおこなったうえで臨んだ。そして事後、結果分析をおこなった。学生からは「授業で学んだことを実際に使うことで意味がよくわかった」、「利益をあげることの大変さがわかった」などの意見がきかれた。

今後の展開 今後は引き続き「楽・楽マルシェ」の活動を継続し、さらに NPO 法人の経営分析や決算支援業務などの活動にも取り組んでいく予定である。



7 月は夜市も開催



地元子どもたちのマーチングバンド



12 月は津久見高校も参加しクリスマスマルシェ実施



道の駅「原尻の滝」インターンシップ



実施体制：イサンミョン（経営経済学科）

実施フィールド：豊後大野市

連携機関：道の駅「原尻の滝」、全国「道の駅」連絡会

概要 韓国人留学生が豊後大野市の道の駅「原尻の滝」においてインターンシップを行った。本活動は、昨年度から継続的に行われたもので、インターンシップ活動を行うことにより、馴染みがなかった原尻の滝において地域住民との親睦や国際交流を深めることができ、原尻の滝を韓国人観光客にアピールすることができた。インターン先の道の駅「原尻の滝」から、留学生が行った外国人客向けの広報活動や地域の祭りの手伝いに対して感謝とともに高い評価をいただき、本活動は地域ケーブルテレビにおいても紹介された。これらの活動を通して、韓国人留学生と地域住民との交流を促進し、地域を活性化する新たな可能性を見出した。

韓国人留学生が2016年8月12日～8月26日までの14日間、道の駅「原尻の滝」のいて次のような活動を行った。

- (1) 現実販売実習
販売実習や学生視線による販売活動への改善、助言
- (2) 外国人客向けサービス
韓国語でのパフレッド、案内等の改善
- (3) 新規顧客、リピーター向け提案
インターネット広告等を活用したリピーター向け提案
- (4) お祭りイベントの準備支援
地元の小松明火祭りの準備、手伝い

これらの活動に対し、道の駅「原尻の滝」の吉野駅長から、韓国人学生らが自ら積極的に提案を行い、問題を見つけ改善を行ったとの高い評価をいただいた。

取組内容



地域ケーブルテレビの取材



現地販売実習の様子



改善活動（メニューの見直し）

学生の学び 実習を通して、学生が以下のような点を学び感じた。

- ・地域を良さを韓国人観光客に知ってもらい、国際交流に貢献できることを実感した。
- ・緒方町の文化に触れ、地域住民との絆ができ、貴重な体験をすることができた。
- ・仕事の大変さと地域住民との交流の難しさを理解できた。
- ・原尻の滝について調査し、歴史と文化を知ることができた。

地域での成果 2015年度に引き継いで、道の駅「原尻の滝」で韓国人観光客に対しての案内や説明等の改善活動を行ったことにより、原尻の滝を韓国人観光客にもアピールするができた。また、学生の視点で製品やサービスのアドバイス等を積極的に行ったことにより、新たな顧客開拓にも貢献した。

今後の展開 今後も継続的に道の駅においてインターン活動を行うことで、学生らが、地域創生にどのような貢献ができるかを検討しつつ、実践的な人間教育を行う場としたい。



販売の提案活動



駅長との記念写真

6次化商品開発に取り組む企業との連携



実施体制： 工藤順一(経営経済学科)

実施フィールド： 大分県、大分市

連携機関： 県内中小企業等

概要

中小企業全体がそうであるように、6次化商品開発に取り組む企業も若手人材不足に悩んでいます。こうした問題を解決するため、工藤ゼミにおいては、大分県や大分市の各種活動と歩調を合わせ、6次化商品開発およびその企業との連携に取り組んでいます。参加した学生は、大分県や大分市の関係者と意見交換する中で、行政が抱える問題を知るとともに、企業の経営者と直接話すことで企業を身近に感じ、就職を実感できるようになります。

取組内容

【背景】

工藤研究室では、かつて4年間にわたり宇佐市安心院町松本の「純米酒イモリ谷」の活動に参加してました。2016年度は、大分市中戸次にある後藤農園の栗・芋に6次化商品開発にも参加した。活動を通して学生は田舎の現状を知ることができ、参加した多くの企業と一緒に農作業を行うことで、コミュニケーション能力を高めることができました。

2018年度は、食品産業を中心に6次化に携わっている企業との連携(見学会等)を行いました。1つが、大分県中小企業団体中央会等主催の企業見学会ツアーであり、1つが大分市のものづくりガイドブック掲載企業訪問です。

【内容】

1 大分県中小企業団体中央会主催の企業見学会への参加

大分県及び大分県中小企業団体中央会主催の2回の「企業見学会ツアー」に経営経済学部と工学部建築学科の学生延べ10名が参加しました。この見学会は、大分県内の企業の若手人材不足解消のため、大分県内の高校生(保護者も参加可能)、大学生、専門学校生の方を対象に、貸し借りバスにより、県内の企業見学を行うものです。10月6日に南日本造船(株)と(株)日建総合建設、12月15日に大成工業(株)、大分醤油協業組合です。見学した工学部の学生は、2019年4月から見学した企業に就職することになりました。

2 大分市の「ものづくり企業ガイドブック」内の企業見学

大分市(商工労政課)は、各分野において「キラリと光るものづくり企業」と、市外・県外の企業とのマッチングを促進するために「大分ものづくり中小企業おおいものづくり企業ガイドブック」を作成しました。工藤ゼミとしては、ガイドブックの中の食品製造会社を見学させていただくとともに、出上がったガイドブックについても、学内の起業学の授業の中で、学生約130人に、大分市の職員さんから直接解説をいただきました。また、大分市主催の経済講演会が10月24日と1月25日の2回開催され、経営経済学部の学生延べ10人が講演会に参加させていただき、講演者と直接質疑応答させていただきました。

今後の展開

2018年度の活動で感じたことは、大分県内には素晴らしい企業がたくさんあること、どの企業も人手不足に悩んでいることです。また、若手人材と接する機会もほとんどないことを知りました。このように、中小企業の人材不足は深刻な状況にきていますので、私たちは今後も2018年度同様に、県内の中小企業と学生とのマッチングの機会を増やし、学生の企業訪問活動や企業の学内での活動(講義や意見交換等)を引き続き実施していきたいと考えています。そうすることで、6次化商品開発企業との連携を深めていきたいと考えています。

企業見学会ツアー
参加者募集

大分醤油協業組合

60分



食品製造業 「日本一よい醤油をめぐる」の精神のもと26社の組合員により醸成された醤油工場



大分市

食品製造

① 前古山乳業	45
② 蕎ざびえる本舗	46
③ 龍シーアール	47
④ 御菓子司 高橋水月堂	48
⑤ ユフキヤ醤油類	49
⑥ 吉野食品類	50



『おおいものづくり』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいものづくり』と名付けました。お金やモノだけではかえることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分ですしかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくりたい。
私たちは大分県の未来を拓く『おおいものづくり』になりたい。

動画ニュース制作

「地域の芽、学生が目 NBUビデオ通信」

実施体制： 小島康史、星芝貴行（情報メディア学科）

実施フィールド： 大分県内各地

連携機関： 大分合同新聞社、大分市

概要

情報メディア学科のデザインコースにおける動画コンテンツの発表の場として、大分合同新聞社と連携し、Webサイト「ゲートチャンネル」内に「地域の芽、学生が目 NBUビデオ通信」を設け、学生が月に1度程度のペースで、動画ニュースを制作し配信。学生の目線で、地域の課題や取り組みについて取材を行い、地域の活動を広報する役割を担う。

取組内容

1. 『「西野達 i n 別府」 別府舞台に“芸術めぐり”』 “地獄めぐり”ならぬ“芸術めぐり”。周辺の路上や屋内には、国際的に活躍する西野達氏のアートが点在する。西野氏は「アートは人間の想像力の拡張につながっている。それこそがアートの存在理由」と考える。
2. 『「府内南蛮ライティング」 みんなの夢、かないますように…』 若草公園で「府内南蛮ライティング」が開催された。この日のために設置された9千個の紙灯籠には、大分市内の幼稚園や小・中学校などの子どもたちが将来の夢を描いていた。
3. 『「春到来、四浦半島の河津桜」 ピンクと青のマッチング』 十数年前から地域住民が中心となり植樹してきた四浦半島の河津桜。河津桜は他の桜と比べて開花時期が早く、見頃が長いのが特徴だ。花びらは鮮やかなピンク色で、四浦半島の海や空の青色によく映える。
4. 『「中津干潟フェスティバル」 自然環境の大切さ感じる』 中津市で干潟フェスティバルがあり、多くの家族連れでにぎわった。中津干潟は国内でも最大規模の干潟。生きた化石といわれるカブトガニや絶滅が心配されるアオギスなど、希少種が多く生息している。
5. 『「父の日になにを贈る？」感謝の気持ち込めた力作』 年長組の園児たちが、父の日のプレゼント作りをした。園児たちは当初張り切っていたものの、細かい作業に悪戦苦戦。先生から「お父さんが喜ぶよー」などと励まされながら取り組んだ。
6. 『「障がい者と地域住民の納涼祭」 心温まる交流、続いてほしい』 由布市庄内町の庄内厚生館で、30回目となる納涼祭があった。障がいのある人や生活介護が必要な人に楽しんでもらおうという意図で開かれている。障がい者と地域住民の心温まる交流を描く。
7. 『「大分GAME PARTYしらしん拳」 性別、世代超え 交流のツールに』 大分県では初となるeスポーツ大会が大分市であった。試合後には対戦相手であった大人と子どもが試合について語り合うなど、eスポーツが世代や性別を超えたコミュニケーションツールとなっている。

学生の学び

最初の企画から構成案、撮影、インタビュー、編集など1つの動画ニュースを制作する過程を全て学習することができ、企画力・発想力・コミュニケーション能力など様々な力が身に付いた。さらには、地域に対する興味や関心などが深まり、郷土における就職意欲も高まった。

今後の展開

2016年度から開始し、3年目となった。2019年度以降についても、大分合同新聞と連携し、より多くの学生による地域広報の役割を担う動画ニュースの制作に期待したい。



大分合同新聞のWebページ



撮影現場の様子



編集作業の様子



大分合同新聞の掲載記事

国道九四フェリー-四国側利用者の交通行動特性と佐賀関観光志向に関する研究



実施体制：青山信児(建築学科・4年) 吉村充功(建築学科)

実施フィールド：大分市佐賀関地区

連携機関：NPO法人さかのせき・彩彩カフェ、国道九四フェリー(株)他

概要

現在、大分市佐賀関地区では、少子高齢化に伴う人口減少に悩まされており、この先、過疎化がさらに進行することが予想されているため、佐賀関地区を維持・活性化する一つの方策として、交流人口の拡大が模索されている。そこで、大分県の港で唯一利用者が増加している国道九四フェリーに着目した。石橋(2018)は、佐賀関港から四国に渡るフェリー利用者にアンケート調査を行い、分析した結果、佐賀関港でのフェリー待ち時間を佐賀関観光に活用してもらえる可能性や、佐賀関への訪問意向が充分にあることを、明らかにした。このような先行研究の結果がある中で、今後の佐賀関半島の観光活性化の可能性をさらに広げていくためには、反対方向である四国・三崎港から九州に渡るフェリー利用者の観光志向や交通行動特性を把握する必要がある。そこで本研究では、四国側のフェリー利用者に注目し、交通時間の使い方を始めとする交通行動特性を明らかにするとともに、それを踏まえた佐賀関に対する観光志向があるターゲット層を明らかにする。

取組内容

国道九四フェリーの概要

国道九四フェリーとは、佐賀関港と、四国の愛媛県三崎港を結ぶフェリーで、片道約70分、1日16便(往復32便)運行している。現在の佐賀関港の乗降客数は、年間50万人にのぼり、2014年を除いて増加傾向にある。また、県内の旅客取り扱い港の中で1位を誇る。

調査方法

調査は2018年4月28日(土)29日(日)に三崎港にて、9時30分から15時30分まで1時間ごとに出発する計6便に乗船する方を対象に、アンケートを行った。質問紙はA3用紙2枚であり、質問項目は、利用者の属性や当日の旅程、フェリー利用の目的、大分や佐賀関の地域資源についての認知度と訪問意向などである。フェリー利用については、目的のほか、三崎港までの交通手段や、出発地と出発時刻、三崎港の予定到着時刻と実際に到着時刻、寄り道の有無などについて問うた。

研究成果

調査の結果、2日間で合計105件の回答を得た。うち、回答漏れがあったものを除いた60件を有効回答とした。

図1に示す出発地については、三崎港がある愛媛県(41%)が最も多く、次いで香川県(17%)という結果であった。

出発地から三崎港までの移動所要時間の結果を図2に示す。三崎港までの所要時間は、100～200分未満が24件と一番多く、次いで200～300分未満が多い。また、三崎港までの最短所要時間は30分であった。

利用予定便の出発時刻と実際に到着時刻の差(到着余裕時刻)を図3に示す。到着余裕時間は、30分以上60分未満が30件と一番多かった。

到着余裕時間と三崎港までの所要時間の相関について調べた。分析にあたって、三崎港までの途中でどこかに寄り道したかどうかで分けて分析した。寄り道なしのグループ群には相関が見られなかったが、寄り道ありと回答した28名については、相関係数 $r=0.4031$ となり、弱い正の相関が見られた。つまり、寄り道を行う層は、遠方から来る人ほど、結果的に余裕を持って三崎港に到着していることから、これらの層に適切な情報提供を行う事で、さらなる寄り道を誘発出来る。

港までの道中、寄り道をした28名と寄り道をしていない132名を比較すると、佐賀関半島の観光意向について差があることが分かった。寄り道をしていないグループで、「是非観光したい」機会があれば観光したい」と回答しているのは72%に対し、寄り道をしたグループは89%であった。つまり、遠くから来ている人程、港へ時間の余裕をもって来ており、尚且つ、佐賀関観光への意向も高いことが分かった。

今後の展開

遠くから来ている人ほど港へ時間の余裕をもって来ていること、港までの道中で寄り道をしている人の方が佐賀関への観光意向も高いことが示された。今後、四国側のフェリー利用者を佐賀関に引き込むための具体的な方策の検討が必要である。本調査にご協力いただいた国道九四フェリー(株)様に謝意を表します。

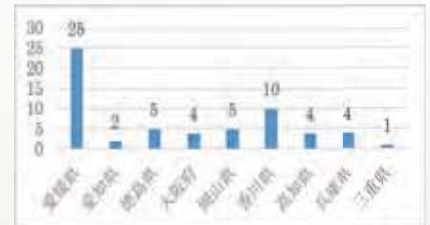


図1 出発地

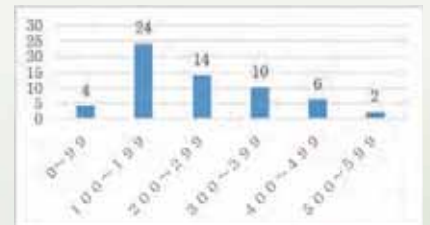


図2 三崎港までの所要時間

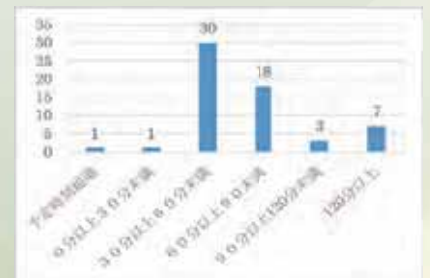


図3 到着余裕時間(分)

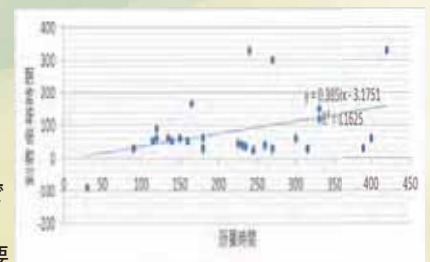


図4 到着余裕時間と所要時間の相関



『あおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『あおいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけではかえることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。日本の未来を担う若者ができることは？ きっと、その答えはひとつではありません。だからこそ今、私たちは動き始めます。そのステージは、私たちの大学がある大分県。大分への愛着を勇気に変えて、大分できできないことにチャレンジします。地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくりたい。私たちは大分県の未来を拓く『あおいた、つくりびと』になりたい。

大分市佐賀関・関地区の地域課題解決を目指す「さかのせきローカルデザイン会議」の取り組み

実施体制：吉村充功（建築学科）、吉本圭一郎（経営経済学科）

実施フィールド：大分市佐賀関地区

連携機関：NPO法人さかのせき・彩彩カフェ、大分県建築士会佐賀関支部 他

概要 比較的人口が多く、人口減少がまだ深刻化していない大分市にあって、周辺部にあたる佐賀関地区の人口減少、高齢化は深刻であり、中でも旧佐賀関町の中心部であった佐賀関校区は人口 4,828 人に対し、高齢化率が 55.7%となっている（2015 年国勢調査）。そのため、経済活動も活気をなくし、かつて栄えた商店街はシャッター街になっており、今の佐賀関は「まち」としての元気がない。しかしながら、佐賀関にはたくさんの魅力がある。別府湾を望む港町であり、漁業が盛んである。「関あじ・関さば」は、全国的なブランドとして有名である。他にも坂本龍馬らが九州初上陸した際に立ち寄った徳応寺といった歴史的建造物や、関崎海星館・関崎灯台周辺の佐賀関半島の自然といった地域資源がある。そこで、関地区の地域課題解決を目指すための、学生と地域の NPO や団体との協働コミュニティである「さかのせきローカルデザイン会議 (LDM)」を 2011 年に結成し、様々な活動を続けている。2017 年度からは取り組みを拡大し、人口減少・高齢化問題への対処、経済活動衰退の悪循環からの脱却、地域コミュニティの維持への取り組みのキッカケにつなげる佐賀関半島の地域資源を活かした交流人口拡大への取り組みを開始した。



取組内容 さかのせき LDM には、本学から建築学科 吉村研究室を中心とした環境・地域創生コースの学生、経営経済学科 吉本ゼミの学生が参加している。主な活動は以下の通りである。

- ・地域交流市場「楽・楽マルシェ」の開催（毎月第 4 土曜日に旧佐賀関町役場跡地広場を会場に関あじ関さば通りの活性化、住民との交流を促す定期イベント。年により 7 月に夜市、11 月に商店街大運動会、12 月にクリスマス会を併催）
- ・LDM の会合の定期開催（毎月第 3 火曜日 18 時半より「まちの駅よらんせえ〜」にて開催。各種団体・個人が参加し課題解決に向けた議論を行う。）
- ・建築学科 1 年『プロジェクト 1』での佐賀関半島の環境整備・維持活動のプロデュース
- ・国道九四フェリーの利用者を主なターゲットにした交流人口拡大社会実験の調査・企画



地域での成果 「楽・楽マルシェ」の取り組みは 2012 年 7 月の開始から欠かさず実施し、2017 年度で 5 周年を迎えた。地区の高齢者らにとって、若者との交流の場としての認知が進み、楽しみにされている住民が増えている。また、LDM の毎月の会合を 2017 年度より本格的に開始し、参画団体が回を重ねる毎に増加しており、国道九四フェリーの利用者を対象に地域資源を知ってもらい、観光促進、地産地消の推進を行う交流人口拡大に向けた社会実験開催に向けた取り組みが進んでいる。



学生の学び 佐賀関半島の観光活性化や交流人口の拡大について協議を重ねていくなかで、普段、何気なく触れているモノや、目にしていないモノが地域資源になるということの経験ができた。また、関地区での活動を行っていくうえで、地域の現状について再認識させられた。様々なイベントやプロジェクトを企画・実施していくなかで、発想力や行動力なども養われた。



今後の展開 国道九四フェリーの利用者を主なターゲットにした交流人口拡大のキックオフ社会実験を、ゴールデンウィーク前半の 3 連休を活用して実施する予定で、各方面との調整を行っていく。

佐賀関半島・観光VR体験 - 「さかのせきローカルデザイン会議」による観光活性化の取り組み -

実施体制： 下地奈結花・川端理沙・金城光季・野上諒之(建築学科・3年) 吉村充功(建築学科)

実施フィールド： 大分市佐賀関地区

連携機関： NPO法人さかのせき・彩彩カフェ、大分県建築士会佐賀関支部、国道九四フェリー(株)他

概要

大分市佐賀関地区の人口減少、高齢化は深刻であり、中でも旧佐賀関町の中心部であった佐賀関校区は人口 4,828 人に対し、高齢化率が 55.7%となっている(2015 年国勢調査)。そのため、経済活動も活気をなくし、かつて栄えた商店街はシャッター街になっており、今の佐賀関は「まち」としての元気がない。しかしながら、佐賀関にはたくさんの魅力がある。別府湾を望む港町であり、漁業が盛んである。「関あじ・関さば」は、全国的なブランドとして有名である。他にも坂本龍馬らが九州初上陸した際に立ち寄った徳応寺といった歴史的建造物や、関崎海星館・関崎灯台周辺の佐賀関半島の自然といった地域資源がある。そこで、関地区の地域課題解決を目指すための、学生と地域の NPO や団体との協働コミュニティである「さかのせきローカルデザイン会議(LDM)」を 2011 年に結成し、様々な活動を続けている。2017 年度からは取り組みを拡大し、人口減少・高齢化問題への対処、経済活動衰退の悪循環からの脱却、地域コミュニティの維持への取り組みのキッカケにつなげる佐賀関半島の地域資源を活かした交流人口拡大への取り組みを行っている。その一環として、本年度は佐賀関半島の魅力を紹介する観光 VR 動画を作成した。

取組内容

さかのせき LDM には、本学から建築学科 吉村研究室を中心とした環境・地域創生コースの学生、経営経済学科 吉本ゼミの学生が参加している。

- ・地域交流市場「楽・楽マルシェ」の開催(毎月第 4 土曜日に旧佐賀関町役場跡地広場を会場に関あじ関さば通りの活性化、住民との交流を促す定期イベント。年により 7 月に夜市、11 月に商店街大運動会、12 月にクリスマス会を併催)
- ・LDM の会合の定期開催(毎月第 3 火曜日 18 時半より「まちの駅よらんせえ〜」にて開催。各種団体・個人が参加し課題解決に向けた議論を行う。)
- ・国道九四フェリーの利用者を主なターゲットにした交流人口拡大社会実験「みなとまるしえ〜」の調査・企画。
- ・観光 VR(Virtual Reality: 仮想現実)動画を作成し、年末の「みなとまるしえ〜」において公開した。VR の作成には 360 度カメラ(RICOH THETA V)と 3D マイクロフォンを使用し、半島内の名所や絶景ポイント 8 カ所を収録した。動画は VR ゴーグルを使用し、その場にいるようリアルな体験が可能である。また YouTube サイト(<https://www.youtube.com/playlist?list=PL0IjXQiWUqBPmalhVVMYIUodbfJrgJTsb>)にも公開している。



地域での成果

「楽・楽マルシェ」は地区の高齢者らにとって、若者との交流の場としての認知が進み、楽しみにされている住民が多い。また、LDM の毎月の会合を 2017 年度より本格的に開始し、参画団体が増加している。今年度は国道九四フェリーの利用者を対象に地域資源を知ってもらう機会を設け、観光促進、地産地消の推進を行う交流人口拡大に向けた素地を整えることができた。

学生の学び

佐賀関半島の観光活性化や交流人口の拡大について協議を重ねていくなかで、普段、何気なく触れているモノや、目にしているモノが地域資源になるということの経験ができた。

今後の展開

観光 VR 動画を増やし、次回の「みなとまるしえ〜」(2019 年 4 月 28 日実施予定)で PR する。今後も、改善を図りながら観光活性化、交流人口拡大につなげる。

VR体験 In佐賀関

1.動画を選んでください(複数可)
※すべて約30秒程度です。
2.VR用のマスクを着用してください。
3.VRカメラを専用
4.お楽しみください!
5.アンケートへの記入にご協力をお願いします。
※お問い合わせは、ご質問ください! 専用メールと対象となります。
さかのせきローカルデザイン会議
日本文理大学 工学部 建築学科 吉村研究室

地域資源を活用した地域観光プロモーション における需要予測に関する研究

実施体制：経営経済学科 今西衛・本村裕之・工藤順一・山城興介・舛田佳弘
建築学科 杉浦嘉雄・池畑義人

実施フィールド：大分県・大分県豊後大野市

連携機関：(一社)ぶんご大野里の旅公社・大分県自然保護推進室
(NPO)おくぶんごツーリズム研究所

概要

豊後大野市に存在する地域観光資源に対してどの程度需要があるのか、アンケートデータに基づいた調査を行い、これまで、認知度や主にJRを使った需要予測分析を行った。本年度は、祖母・傾・大崩ユネスコエコパークについても需要分析を行った。7割の被験者が大分県に自動車で来訪することには、抵抗がないと感じているが、エコパークの地域について限定すると、3割ほど減ってしまうことなどが明らかになった。

取組内容

大分県は観光地として有名であるが、豊後大野市は第1次産業が中心で、高齢化率も県内4位と高い。一方で、豊後大野市には、エコパークやジオパークなどの地域資源が数多く存在するが、有効な地域観光資源となっていない。

経営経済学科では、平成27年度よりフィールド・スタディなどのフィールド活動を通じて、豊後大野の観光における地域資源の魅力の発見や現状、課題を議論し、報告会や学会シンポジウムなどで学生おすすめのツアープランを提案等を行ってきた。学生の提案内容が実現可能かを検証することが本研究の背景である。具体的には、学生が**大学生観光まちづくりコンテスト (JTBCリエティブ賞受賞)**で提案した内容について、需要予測などを行った。学生提案のプログラムによる来訪意向が高いことも分かった。また**支払意思額も東京都は交通費を除いても2万円と高額**であることが分かった。

依然として課題も残されている。まずは、現状把握の集計結果と、簡単な推計のみであるため、行動経済学に基づいた統計手法を用いた研究に発展できていない点である。また、本研究事業により、**祖母・傾・大崩ユネスコエコパーク**についての**需要分析の要望**もあり、ユネスコエコパークについても需要やPRについて分析を行う。

地域での成果

これまでの研究から豊後大野市や、**祖母・傾・大崩エコパーク**の認知度が非常に低いことが分かっている。福岡都市圏にマーケットを限定して需要分析をおこなった。

九州各県の旅行に行く際の交通手段は、大分県へは車の移動が81.9%と非常に高かった。また、大分県へは68.1%が車で行くことに抵抗はないと回答した。

次に、ユネスコエコパークである「祖母・傾・大崩」山系へ訪れてみたいかたずねたところ、約5割がそれぞれの地域に訪れたいと回答した。しかし、これらの地域には公共交通機関がないので、これらの地域に車で行くことに抵抗はないかとたずねたところ、4割弱が抵抗はないと回答した。大分県自体は7割が抵抗はないと回答していたので、何らかの方策が必要であることが改めて浮き彫りとなった。

特急ソニックを利用した来訪意向については、別府市に訪れたい人は4割弱で、竹田市・豊後大野市を訪れたい人も4割弱と、別府市とほぼ変わらない。言い換えると、**別府市程度の観光の魅力があると言える。これは大きな期待である。**

今後の展開

地域との協働が動き出したので、本研究事業の成果をスタートとして、地域活性化につなげていきたい。そのためには、学生は、地域活性化の発案、研究者は、学生の発案が実現可能であるか、実現可能であるならばどのくらいの経済効果が見込まれるか試算することを引き続き継続的に行っていく。



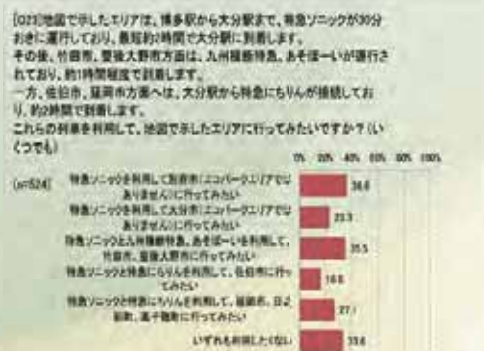
原尻の滝の認知度



九州各県へ車で行くことへの抵抗感



エコパークへ車で行くことへの抵抗感



特急ソニックなどを使っての来訪意向



教養基礎教育における地域志向科目の全学必修化～『大分学・大分楽』『産学一致の勧め』ほか～



実施体制：各科目担当教員、人間力育成センター

実施フィールド：大分県

連携機関：大分県、大分市、豊後大野市、国東市、大分商工会議所、大分合同新聞社、大分県中小企業家同友会、県内NPO法人、一般社団法人大分青年会議所、県内企業各社

概要 「地域創生人材」育成のための学部・学科によらず根幹となる科目の全学必修化により、すべての学生が地域に関する科目を卒業までに12単位以上履修することとした。地域学の導入科目である1年前期『大分学・大分楽』（2単位）を2015年度入学生より全学必修としている。また、全学共通の教養基礎科目の必修科目のうち、6科目10単位の教育内容を見直し、地域志向科目として設定している。



取組内容 2017年度開講の教養基礎教育（全学共通）における「地域志向科目」の開設状況は、下表の通りである。

学年	1		2	
	前期	後期	前期	後期
教養基礎科目				
大分を知り、地域に貢献できる素養を身につける	【必】大分学・大分楽（2）	森里海運環学と地球的課題（2）		
人間力コア科目/コア科目	【必】社会参画入門（2）	【必】社会参画実習1（1）	【必】社会参画応用（2）	【必】社会参画実習2（1）
自分を取り囲む世界と交流するための知識とスキルを身につける	【必】人間力概論（2）	現代社会要論（2）	【必】産学一致の勧め（2）	起業学（2）
汎用力科目	ジェネリック養成1（1）	ジェネリック養成2（1）	第二外国語1（中国語）（2）	
特別科目	提携講座（ボランティア概論）（2）	大分の地域ブランド創造体験（2）	第二外国語2（中国語）（2）	

【必】は必修科目。それ以外は選択科目。科目名の後ろの（ ）は、単位数。

【大分学・大分楽】（学部毎に開講）

多様な講師陣より講話を受け、大分の魅力を多面的に学び、楽しみ、魅力的に育む（獲）導入とした。学内教員の他、大分商工会議所 姫野清高会頭、大分合同新聞社 編集局次長（報道統括）佐々木稔氏に講演していただいた。

【産学一致の勧め】（学部毎に開講）

大学と産業界、社会、地域をつなぐことを意識し、良き社会人として活躍するキッカケとする。

① 大分県中小企業家同友会の講演（学部毎3名）：(株)大有設計、(株)中津レンタリース、(株)光建エンジニアリング、(株)美装管理、AIDA LINK (株)、アークホーム(株)

② 青年指導者講演：(一社)大分青年会議所

③ 県内で活躍する NPO 等の講演（学部毎2名）：NPO おおいたの水と生活を考える会、ハートフルウェーブ、チーム2℃おおいた協議会、NPO 法人おおいた子ども支援ネット

【社会参画入門】（担任毎に開講）

アカデミックス学習の他、早期に社会との関わり方を体感するため、県内企業等の取材を行う。

[取材先] (株)デンツウ、大分県、(株)I・J・I インターティムワークス、大分航空ターミナル(株)、菅原工業(株)、(株)オーシー、EPA イルクリイト(株)、(株)豊和銀行、大分県信用組合、フットーわ醤油(株)、(株)菊家、大分県農業協同組合、(株)山忠、鶴崎海陸運輸(株)、杉乃井邦ル&リゾート(株)、(株)ナカ、(株)キハタダストロ、(株)デンゾウ 伊東亜

【社会参画実習2】（学科クラス毎に開講）

キャリア開発プログラムとして、業界研究等を行う。大企業と中小企業、全国企業と地域企業の違いを理解する。

[取材先例] 佐伯重工業(株)、河野電気(株)、梅林建設(株)、西日本高速道路インフラ九州(株)、(株)江藤製作所、(株)三浦造船所、九州電力(株)、(株)オガス、オガスアリア(株)、西日本電信電話(株)、NTTビジネスソリューションズ(株)、(株)豊和銀行、大分信用金庫、大分日産自動車(株)、大分トヨ自動車(株)、(株)カスパー、カスパー NAS (株)、(株)ナカ、生活協同組合コープおおいた、(株)九州ケーズデン



地域での成果

本地域志向科目で「おおいた」に関する知識を習得し、関心を持った多くの学生が、専門教育科目や正課外活動において地域で実践活動を行うことにつながった。

学生の学び

県内各団体の指導者等から大分の地域や企業の魅力を講話いただいたり、企業取材で実際に会社を訪問させていただくことで、県内地域や企業について正しく理解するきっかけとなった。

今後の展開

各種団体、企業、地域等との連携を強化しながら、学生の地域への興味、関心、理解の向上を図っていく。



『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろうか。日本の未来を担う若者ができることは？ さっと、その答えはひとつではありません。だからこそ、私たちは動き始めます。そのステップは、私たちの大学がある大分県。大分への愛着を勇気に変えて、大分だからこそできないことにチャレンジします。地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。私たちは大分県の未来を拓く『おおいた、つくりびと』になりたい。

身近な政策課題を題材とした課題解決型学修 ～『社会参画実習1』における学部混成ワークショップ



実施体制：人間力育成センター（統括）、各学科1年担任

実施フィールド：大分県、大分市

連携機関：大分県、大分県警察本部、大分市

概要 1年教養基礎科目『社会参画実習1』（必修）では、学科の異なる学生でチーム活動を行い、社会で必要な人間力、社会人基礎力（特にチームで働く力の基礎）＝ジェネリックスキルの向上を図った。授業では、大分県・大分市の身近な政策課題に対して、チームで課題の整理や根拠のある提案を行う活動を行い、成果を企画書としてまとめ、プレゼンテーションを行った。また、代表チームは、自治体担当課へ直接発表を行った。



取組内容 原則として工学部と経営経済学部からなる14クラスを編成し（担当教員はそれぞれの学科の担任がチームティーチングで行う）、全109チーム、663名の学生が下記の6つのテーマのうち、いずれか1つを選択し、下表の授業スケジュールで活動を行った。

【設定したテーマ（大分県・大分市が進める施策）】

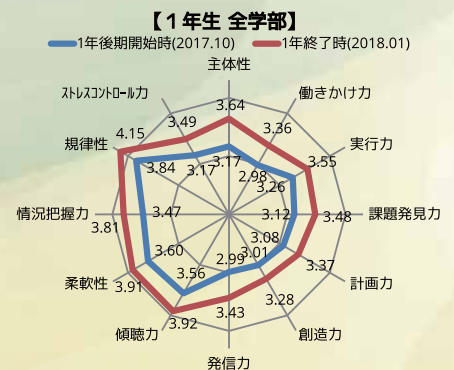
- ① ゴミ捨てに関するマナーと減量・リサイクル（大分市 環境部 清掃管理課）
- ② 自転車のルール・マナー（大分市 都市計画部 都市交通対策課）
- ③ 子育て支援（学童保育問題）（大分市 子どもすこやか部 子育て支援課）
- ④ 若年者の就業問題－地域への就職（大分県 商工労働部 雇用労働政策課）
- ⑤ 薬物犯罪の防止・撲滅（大分県警察本部 刑事部 組織犯罪対策課）
- ⑥ 地域消防力の維持強化（消防応援隊等）（大分県 生活環境部 防災局 消防保安室）

主な授業日時	授業内容
10月30日～	ワークショップクラスで活動を開始
11月6日	①②担当者 出張教室
11月13日	③⑤⑥担当者 出張教室
11月27日	④担当者 出張教室
～12月11日	混成チームによるWS(情報収集・分析・課題発 ・アイデア整理・企画書作成・プレゼン準備)
12月18日	全チームの成果発表会 ⇒ 各教室で優秀チームを選出
1月15日	優秀11チームによる県・市への成果発表会 (県・市の担当者が来学)

地域での成果 全109チームが、政策テーマに対して、より促進したり、若者が参画する具体的な取り組み提案を企画書としてまとめた。また、代表11チームは提案内容を自治体担当者に対して直接発表し、政策推進の参考にしていただくことができた。

学生の学び 1年生の全学生が基礎となる学修サイクルを経験できたことから、2年次以降の専門教育科目で各学科の特徴に応じた地域志向科目の受講に展開していく。

今後の展開 本科目内で学修サイクルを回した結果、チーム活動を通じて、学生の社会人基礎力の自己評価が全体的に向上した。右図は事前と事後の学生自己評価の全体平均値である（5段階評価）。社会人基礎力の12の要素すべて統計的に有意な自己評価の伸びが確認できた。特に「主体性」「発信力」「働きかけ力」「課題発見力」「傾聴力」の伸びが大きく、本科目の目的を達成できた。なお、「傾聴力」～「規律性」が要素に含まれる「チームで働く力」のスコアが全体的に高くなっている。



地方創生のための学生目線による 地域企業リクルートビデオ制作プロジェクト



実施体制：小島康史、星芝貴行（情報メディア学科）

実施フィールド：大分市、由布市、別府市

連携機関：株式会社 地域経済情報センター（求人ナビおおいた）

概要

現在、少子高齢化を乗り越え、東京一極集中を是正する地方創生政策において、大学進学時及び就職時の若者の県外流出を食い止める必要がある。そのためには、地域の中小企業の雇用問題である「**地域企業の魅力発信、雇用のミスマッチ、地元企業への地元大学からの就職率向上、若者定着率向上**」の解決が重要となってくる。本プロジェクトでは、学生達が「**学生目線**」で地域中小企業の「**リクルートビデオ**」を制作し、各企業の魅力を伝えることを目的としている。



取組内容

本プロジェクトの取り組み体制は右上の図の通りである。今年度も昨年度と同様に前後期2社ずつ、計4社の「**リクルートビデオ**」の制作を行う。昨年度制作を行った4社について聞き取り調査を行ったところ、各社での公式サイトでの動画再生回数は多いところでは200回以上を超え、また会社説明会での使用回数も多いところでは、50回以上という、「**学生目線**」での演出が各社に好評であることを確認した。以上を踏まえ、今年度制作した各社の「**学生目線**」の演出を以下に示す。スタッフ・チーム編成については、1～4年生の混同チームとし、昨年度の経験者が、今年度に参加した学生の制作サポートを行う体制とした。企業毎に演出・撮影・音声・音楽・編集等の役割を決め、企業取材・ロケハン～撮影・編集、納品までを行う。

本プロジェクトの取り組み体制



『仲道トーヨー 株式会社』



『社会福祉法人 庄内厚生館』



『三光建設工業 株式会社』



『株式会社 大谷商会』

- 『**仲道トーヨー 株式会社**』
 - ・資格取得とそれに伴う手当の詳細な情報公開
 - ・手当の情報公開が応相談ではないことを強調
 - ・取得を推奨する資格と応じた手当を一覧化
- 『**社会福祉法人 庄内厚生館**』
 - ・会社の教育指導体制についての情報強化
 - ・その会社独自の指導体制を紹介
 - ・一年間のチューター制度での人材教育を提示
- 『**三光建設工業 株式会社**』
 - ・既存の会社案内リーフレットとの相乗効果
 - ・リアリティな映像により説得力が増す
 - ・各スペシャリストやアットホームを描く
- 『**株式会社 大谷商会**』
 - ・登場人物は偉い方より身近な先輩社員を登用
 - ・入社後の自分が投影できる若い社員像を描く
 - ・2年目、3年目社員のステップアップを提示

学生の学び

昨年度までの動画の制作経験を持つ高学年が、低学年に、「**動画制作スキル**」、「**ビジネススキル**」、「**ビジネスマナー**」を継承していくという成果が期待される。学内の授業内での課題制作では経験できない、実際の企業をクライアントとした、制作作業に携わるといふ、大変貴重な経験となり、就職活動にも大いに役立つと期待される。携わった学生及び視聴した学生の、対象とした地元企業への就職率の向上も期待される。

今後の展開

このリクルートビデオ制作プロジェクトにより、各企業は「**若者が求める企業情報**」を得ることができ、新たな企業風土を模索・構築が可能になるのではないかと考えられる。今後、各企業の入社理由等に本プロジェクトがどのように影響したか、「**地域の中小企業の雇用問題**」がどの程度解決できたかを、調査を継続する予定である。

NBU 日本文理大学

〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097 - 592 - 1600(大代表)
Web: <http://www.nbu.ac.jp>

【COC事業担当】
TEL/FAX: 097 - 524 - 2663(直通)
Web: <http://coc-nbu.jp>
e-mail: coc@nbu.ac.jp



coc-nbu.jp



おおいた、つくりびと

『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけではかえることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。だからこそ今、私たちは動き始めます。そのステージは、私たちの大学がある大分県。大分への愛着を勇気に変えて、大分ですかにできないことにチャレンジします。地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。私たちは大分県の未来を拓く『おおいた、つくりびと』になりたい。

大分チャレンジアワード 青少年体験活動奨励制度



実施体制：人間力育成センター

実施フィールド：大分県内各地

連携機関：香々地青少年の家、公益財団法人森林ネットおおいた、ウミネコの会

概要 正課外活動として、文部科学省「青少年体験活動奨励制度（チャレンジアワード）」大分県版の活動に取り組んでいる。2016 年度は 12 名の学生が挑戦し、11 名が終了した。「青少年体験活動奨励制度」は、14 歳から 25 歳の青少年が様々な体験活動を行うことを推奨する制度で、本学では大分の豊かな自然フィールドとして実施している。「自然」「運動」「ボランティア」「教養」の 4 領域の体験活動を一定期間継続した実績に応じて、修了証（アワード）が文部科学省から授与される。



取組内容 【自然体験】

- 「豊後大野市で自然を体験する」（SUP ボード、ビーチコーミング）2016 年 9 月 6 日～7 日実施
- 「大分川の源流を探す、きのこについて学ぶ」2016 年 9 月 21 日～22 日



【ボランティア体験】

- 大分市中心部の活性化を目指したクリスマスイベントの実施
- 佐賀関地区の子供たちに体験教室を実施



学生の学び アドバイザーの指導のもと活動することで、2016 年度は 11 名の学生が継続的に体験活動する習慣を身につけた。自然体験活動やボランティア活動を通じて、大分県内の自然について魅力を感じ取る事が出来た。

今後の展開 2017 年度も実施し、年間 25 名の終了者輩出を目指す。



『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。日本の未来を担う若者ができることは？ きっと、その答えはひとつではありません。だからこそ今、私たちは動き始めます。そのステップは、私たちの大学がある大分県。大分への愛着を勇気に変えて、大分できがけないことにチャレンジします。地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。私たちは大分県の未来を拓く。『おおいた、つくりびと』になりたい。

小学生のお仕事発見ランドin佐賀関



実施体制：人間力育成センター、各学科教職員

実施フィールド：佐賀関市民センター（大分市）

連携機関：大分信用金庫、ノットファクトリー（後援）大分市、大分市教育委員会

概要 大分市佐賀関地区において、小学生にリアルなお仕事体験を通して「お仕事とはなんだろう?」「はたらくことの大切さ」など、楽しみながら社会の仕組みが学べる機会を提供するために、2018年2月17日に「小学生のお仕事発見ランド」を佐賀関市民センターにおいて開催した。当日は、本学の学科構成に関係する職業や、地元企業である大分信用金庫やノットファクトリーの協力を得て、地域の職業についての体験企画を催した。本学の教職員だけでなく、学生が運営に関わることで、地域住民に本学の活動に対する理解を深めていただく機会とした。

取組内容 小学生述べ80名を受入対象とし、下記7つのお仕事ブースを開設・運営した。1回30分を基本として各ブースを同時進行し、2クール60分、1人あたり最大2回のお仕事を体験できるようにした。13:00～と15:00～の2クールを事前申込みで受け付け、実施した。

- ① ロボットを動かすしごと：機械電気工学科（研修室1,2）
- ② 情報技術のしごと：情報メディア学科（研修室1,2）
- ③ 飛行機のしごと：航空宇宙工学科（研修室1,2）
- ④ インテリアのしごと：建築学科（研修室1,2）
- ⑤ スポーツトレーナーのしごと：経営経済学科（技術工作室）
- ⑥ 信用金庫のしごと：大分信用金庫（研修室1,2）
- ⑦ イベント企画のしごと：ノットファクトリー（技術工作室）



地域での成果 本企画に対し、定員80名を超える応募があった。当日は、市内の小学生が1部に37名、2部に31名参加した。保護者のアンケート結果より、全体評価として「大変よかった」71%、「良かった」29%となった。また、本学の地域貢献度として、51%が「とても貢献している」32%が「やや貢献している」と回答した。

学生の学び 32名の本学教職員・学生スタッフが7つの体験ブースにわかれて運営を行った。学生は小学生への説明、指導を通じて習った専門の知識を分かりやすく説明するコミュニケーション力の向上につながった。

今後の展開 地域のニーズを確認しながら、今後も県内での定期開催を検討する。



豊後大野市における正課外活動

「豊後大野プロジェクト」の取組み



実施体制：人間力育成センター

実施フィールド：豊後大野市犬飼町

連携機関：豊後大野市商工会犬飼支所、豊後大野市商工会青年部犬飼支部、犬飼ふれあい児童館
豊後大野市商工観光課、手づくりの店ホープ

概要

本プロジェクトは、人間力育成センターにおける正課外活動「NBUチャレンジプログラム」の一環であり、豊後大野市犬飼町を拠点に、スタッフの減少や高齢化によって運営が困難となっている地域行事への人的支援や、地域コミュニティの活性化を目的とした学生企画を実施している。犬飼町では、少子高齢化に加え、若者の都市部への流出や地域の大人と子どもたちの繋がり希薄化等の課題を抱えているが、地元商工会や青年部の方々を中心に魅力ある地域資源を活用した取組みが行われている。学生たちは、地域の方との協働作業に取り組む中で、地域の現状やニーズを調査し、地域コミュニティの活性化に向けた学生企画の立案・実施へと繋げている。豊後大野市は学生にとってリアルな地域諸課題を実感することの出来る“学びの場”となっている。

取組内容

プロジェクトの活動目的である地域コミュニティの活性化を目指し、地域のニーズに則した取組みを実施している。犬飼町での取組みは4年目を迎えようとしており、多くの地域住民の方々にご協力いただきながら活動を展開している。

【地域を知るための取組み】



- 活動の導入として、歴史・文化に関する勉強会や地域の魅力を体験するプログラムを実施。

【地域行事への人的支援】



- 「犬飼名物どんご釣り大会」や「豊後犬飼大野川フェスティバル」等の地域行事に運営スタッフの一員として参画。地域の方との協働作業を通じて、犬飼町に対する熱い想いに触れる。

【豊後大野市PR活動】



- 地元菓子店と協働で商品ラベルのデザインを作成。今後実際に店頭に並び販売される予定。

【地域コミュニティ促進に向けた学生企画の立案・実施】



- 地元小学生を対象に犬飼町の歴史や魅力を再発見してもらう企画や地域の大人との繋がりを再構築させることを意識した学生企画を実施。

学生の学び

活動に取り組む学生からは、「初めはどこか他人事だった地域の課題が、活動を重ねていくうちに自分事へと変換してきた」という声があがり、地域・社会貢献意識の向上が見られた。また、プロジェクトを通じて、初年次における仲間づくりやチーム形成を行うことにも繋がっている。

今後の展開

今後も継続的に地域行事への人的支援を行い、さらに地域と密着し、地域住民を巻き込みながら地域コミュニティの活性化に向けた企画の立案・実施を行っていく。また、新たに豊後大野市三重町での活動も展開していく予定となっている。

Kids Smile Project



実施体制： 人間力育成センター
 実施フィールド： 大分市佐賀関地区
 連携機関： ウミネコの会

概要

佐賀関地区で子どもたちの健全育成を目的に設立されたウミネコの会は様々な自然体験や農業体験を提供・運営しているボランティア団体である。長きにわたり地域で活動しているウミネコの会だが、スタッフの高齢化が深刻な課題となっていた。そんな時、日本文理大学に協力依頼があり、話し合いを重ねた結果、豊富な知識や経験、豊かなフィールドを持つウミネコの会と体力や行動力に長けた大学生のポテンシャルを融合させることでウミネコの会が抱える課題を解消するだけでなく、より充実した活動内容を子供たちに提供できるのでないかと考え協働するはこびとなった。子供たちに笑顔になってほしいという想いからKids Smile Projectという名称の元、本格的に活動をスタートすることになった。



取組内容

大きく3つのカテゴリーに分けた活動になっており、お米作りや野菜作りなどの【自然体験】夏のキャンプやアサギマダラの観察会などの【生活文化体験】Kids Smile Projectメンバーによる【学生企画】など佐賀関の自然を活かした活動を行っている。

自然体験では地域の名人と野菜作りやお米作りを行っている。一過性の体験活動ではなく生産から消費まで行うことで第一次産業の大変さや尊さ学ぶ。

生活文化体験では佐賀関の自然を活かした活動を行っており5月に飛来するアサギマダラの観察会や3泊4日の夏キャンプで野外炊飯やドラム缶風呂、佐賀関半島一周のナイトウォーキングなど特徴のあるプログラムを行っている。

学生企画では実験モノづくり教室を行い大学生が考える学びの要素を入れたプログラムを実施。プロジェクトメンバーの特徴を活かしたプログラムが最大の魅力である。今年度は沖縄県出身者が多く在籍しており、沖縄文化であるエイサー体験を提案。手作りした小太鼓や演舞は反響が大きく佐賀関にある老人ホームより演舞依頼があるなど地域での活動の幅を広げている。

自然体験



生活文化体験



学生企画



学生の学び

ウミネコの会のスタッフと子どもたちをつなぐパイプ役から企画を任せられるようになり、自分たちにしか出来ない企画を考え、何度も話し合った。次第に主体的に活動できるようになり、少しずつやりがいを感じるようになった。ウミネコの会のお手伝いをしているという気持ちから自分たちもスタッフの一員なんだという自覚が芽生えた。また、スタッフのみなさんは子供たちの成長はもちろん、大学生の成長のためにいつも温かく見守り支えて下さっており、学生たちは世代ごとに地域での役割があることや地域コミュニティの重要性を実感した。



今後の展開

それぞれの得意分野を活かした一人ひとりが活躍できるプロジェクトにしていくと共に、Kids Smile Projectメンバーにしかできないカタチで子どもたちを笑顔にしていきたい。

NBU 日本文理大学

〒870-0397 大分県大分市一木1272
 TEL: 097 - 592 - 1600(大代表)
 Web: <http://www.nbu.ac.jp>

【COC事業担当】
 TEL/FAX: 097 - 524 - 2663(直通)
 Web: <http://coc-nbu.jp>
 e-mail: coc@nbu.ac.jp



おおいた、つくりびと

『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけではかえることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。日本の未来を担う若者ができることは？
 きっと、その答えはひとつではありません。
 だからこそ今、私たちは動き始めます。
 そのステージは、私たちの大学がある大分県。
 大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。
 地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくりまします。
 私たちは大分県の未来を拓く『おおいた、つくりびと』になりたい。

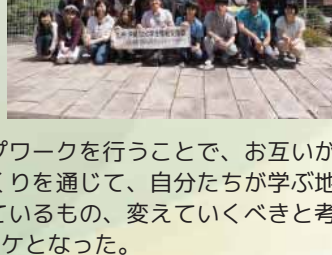
九州・沖縄COC 学生情報交換会 in 湯布院
～九州・沖縄COC インカレキャンプ～

実施体制：吉村充功（建築学科）、市田秀樹（COC事業担当）、鈴木照夫（経営経済学科）

実施フィールド：由布市

連携機関：宮崎大学みやだいCOC 推進機構、一般社団法人由布院温泉観光協会、由布院温泉旅館組合

概要 九州・沖縄地域では、大学COC事業に11大学が採択され、それぞれの地域での人材育成、地域のための大学づくりを行っている。COC事業として地域志向教育が進められる中、各大学では学生がCOCの教育プログラムを受講し、プログラムを通じて地域への関心や将来に向けたキャリア意識が醸成されてきている。そこで、今回、関係のある大学間で学生を中心とした情報交換会を実施し、九州の大学間のより一層の連携強化と学生の意識向上を図ることを目的に、本学湯布院研修所を会場に1泊2日の合宿研修を実施した。



取組内容 「帰りたくなる町ノ（もう一度）訪れたい町」をテーマに複数大学の学生がチームを組んで由布院のまちなかを歩き、ワークショップを通じて体験に基づいた内容をチームで発表した。由布院温泉観光協会常務理事の太田慎太郎氏には、導入として、「湯布院の現状とこれから」をテーマにご講演いただくとともに、学生成果発表にもご出席いただき講評をいただいた。また、熊本・大分地震から復興を目指して九州の学生による対外的な情報発信も行った。他県、他大学、他分野の学生と接することで各地域の共通点や相違点を理解し、自身の地域への志向性を顕在化することを目的とした。

【実施場所・日程・会場】

由布市湯布院町 由布院温泉地域、
9月8日（木）～9日（金）、本学湯布院研修所

【参加者】

学生20名（大学混成で5人×4チーム）、教職員18名
（日本文理大学、宮崎大学、鹿児島大学、佐賀大学、
熊本県立大学、西九州大学、大分大学(教職員のみ)）

【スケジュール】

1日目 13:00～ 開会式、太田氏講演
14:00～ アイスブレイク、まち歩き説明
14:40～ まち歩き（観察&ヒアリング）(由布院中心部 18:00まで)
19:30～ グループワーク①
22:00～ ショートプレゼン
2日目 9:00～ グループワーク② ※一部チームは早朝にまち歩き
10:30～ 学生成果発表
11:30～ ふり回り
13:00～ 閉会式



地域での成果 まちづくりの成功事例として全国的にも有名な由布院について、学生目線でその魅力をまとめることで、地域にとってもその価値を見つめ直すよい機会となった。

学生の学び 九州各地で学ぶ学生が、国公立の大学、学部の枠を越え、協働でまち歩き、グループワークを行うことで、お互いが刺激しあい、自分たちの長所と短所を知るよい機会となった。また、由布院のまちづくりを通じて、自分たちが学ぶ地域との共通点や相違点についても考える機会となった。特に由布院の人々が大切にしているもの、変えていくべきと考えているものに気づき、共感した学生が多くいたことは地域志向性を高める良いキッカケとなった。

今後の展開 参加した教職員による協議の結果、大学COC事業の終了後やCOC+事業への展開を見据え、県域を越えた九州ブロックの連携強化、学生交流は今後も重要との認識に至った。次年度以降の継続的な実施の可能性、実施場所の選定を進めていく。



『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけではかえることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろうか。日本の未来を担う若者ができることは？ きっと、その答えはひとつではありません。だからこそ今、私たちは動き始めます。そのステップは、私たちの大学がある大分県。大分への愛着を勇気に変えて、大分できないうちにチャレンジします。地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくりまします。私たちは大分県の未来を担う。私たちは『おおいた、つくりびと』になりたい。

ジェネリックスキル養成研修 ～COC+事業における汎用力の向上～



実施体制：吉村充功（建築学科）、鈴木照夫（経営経済学科）、市田秀樹（COC事業担当）

実施フィールド：杵築市、由布市

連携機関：NPO法人ABC野外教育センター、国立大学法人大分大学

概要 大分県における文科省 COC+ 事業（地（知）の拠点大学による地方創生推進事業）では、大分県内の大学・自治体・経済団体・企業等が連携して地域の雇用創出及び学卒者の地元定着の向上等を図ることを目的に人材育成・就職支援等の取り組みを行っている。人材育成においては、「大分を創る人材を育成する科目」を大学間の単位互換科目として実施しており、社会人として活躍するために必要なジェネリックスキル（汎用的技能）を高めることを目的に、本学主幹で2つの合宿を実施した。



『ジェネリックスキル養成1』の様子

取組内容 『ジェネリックスキル養成1』（教養基礎科目、1年前期、選択、1単位）

【目的・内容】本科目では、1泊2日の野外活動研修を通じて、経験から学ぶ力であるコンピテンシーを養成することを目的に実施した。県内大学の学生が合同で合宿研修を行い、野外活動研修であるプロジェクトアドベンチャーをベースとした体系的な活動を通じて、自己の理解と挑戦、他者の理解や役割、さらにはチームとして課題に立ち向かうことの重要性を理解し、ふり返りを通じてコンピテンシー能力を高めていった。

【実施場所/日程】 杵築市 住吉浜リゾートパーク / 9月12日（火）～13日（水）

【主なスケジュール】

- 1日目 11:00～ オリエンテーション、チーム編成、アイスブレイク
13:00～ ABCプログラム（ローエレメント3プログラム）
19:30～ 今日のふり返り（フリップトーク・ビーイング）
2日目 9:00～ ABCプログラム（ローエレメント3プログラム）
13:45～ ふり返り（フリップトーク・ビーイング等）

【参加者数】 NBU14名、大分大12名、芸短大1名（1年生、男20名、女7名）
合計27名（9人×3チームで活動）

【指導協力】 NPO法人ABC野外教育センター

『ジェネリックスキル養成2』（教養基礎科目、1年後期、選択、1単位）

【目的・内容】本科目では、1泊2日のワークショップ研修を通じて、知識を活用して問題解決する力であるリテラシーを養成することを主目的として実施した。提供された大分・福岡・東京についての資料をもとに、メンバーが異なる資料を読み解き、それを統合して地方創生についての課題を発見し、そのような状況の中で、今後自分たちがどのように生きていくかをプレゼンテーションにまとめた。

【実施場所/日程】 由布市 NBU 湯布院研修所 / 2月18日（日）～19日（月）

【主なスケジュール】

- 1日目 10:30～ オリエンテーション、チーム編成、アイスブレイク
12:30～ ジグソー学習による資料の読解、共有、議論
19:00～ プレゼンテーション準備
2日目 9:30～ プレゼンテーション
13:00～ ふり返り（結果発表、講評、フリップトーク、自己評価）

【参加者数】 NBU44名、大分大7名（全員1年生、男39名、女12名）
合計51名（5or6人×10チームで活動）



『ジェネリックスキル養成2』の様子

学生の学び それぞれの合宿での大学を超えた主体的な活動によりジェネリックスキルを伸ばすことができた。適切なふり返りの実施により、自己評価スキルも身につけることができた。

おおいた地域創生リーダー養成講座 ～地方創生時代に活躍できる社会人を目指そう～



実施体制：吉村充功、島岡成治、近藤正一、池畑義人（建築学科）、
橋本堅次郎、鈴木照夫（経営経済学科）、市田秀樹（COC事業担当）

実施フィールド：中津市、大分市、佐伯市、日田市

連携機関：大分県、中津市、大分県信用組合、大分信用金庫、日本文理大学附属高等学校

概要 少子高齢化が急速に進む大分県においては、主体的に行動し、課題を解決したり、新たな価値を生み出すこと、さらには多様な人的ネットワークを形成し、人口減少社会でも経済活動を活発化させ、社会を明るくできる人材の育成が急務である。そこで、本プロジェクトでは、COC+関連事業「学生による地域ブラッシュアップ」プログラム2016（地方創生大学等連携プロジェクト支援事業A）」の一環として、地域のリーダーとして活躍できる若手社会人『おおいた地域創生リーダー』を育成するきっかけ作りとして、県内4地区において、学生と若手社会人（佐伯は高校生含む）の混成グループを対象とした講座を展開した。



取組内容 講座は講義+街歩き+ワークショップを1日完結型で行い、その地域固有の魅力を考える内容とした。講座の指導は文理大の教員があたり、ワークショップでは経験のある文理大学生がグループファシリテーターを務めた。参加した学生、若手社会人それぞれがその地域固有の魅力を発見する重要性を理解し、地域で主体的かつその地域にふさわしい課題解決を目指すための力を養うことを目的とした。

【実施場所・日程・会場】

- ①中津市（諸町・寺町周辺）・12月11日（日）・南部まちなみ交流館
- ②大分市（府内町）・12月17日（土）・日本文理大学イノベーションセンター
- ③佐伯市（城山周辺）・12月18日（日）・三余館
- ④日田市（豆田町）・12月23日（金・祝）・豆田まちづくり歴史交流館（旧船津歯科）

【当日のスケジュール】

- 10:00～ 趣旨説明、総論講義「地方創生社会で活躍できる人材になろう」（吉村）
10:40～ 各論テーマ導入講義「地域の魅力を発見しよう」（中津：島岡、大分：吉村、佐伯：近藤、日田：橋本）
11:30～ まち歩き趣旨説明、まち歩き方針決め（グループ）
11:45～ まち歩き/昼食（グループ） ※iPad貸出。気に入ったところ等を撮影
14:00～ 各論テーマワークショップ
16:00～ 各グループ成果発表 ※各グループ5分程度
16:20～ 総括・振り返り（吉村）

【参加者数】

大学生:41名(のべ46名)、高校生:5名、社会人:18名 ◎合計:64名(のべ69名) (17.25人/回)

地域での成果 まちを歩いた結果に基づいて、若者の目線でその地域固有の魅力を発見し、それをポスターにまとめて発表することで、地域にとっての魅力を再確認することにつながった（各地区のステークホルダーに成果発表に出席いただいたり、報告書を提供した）。また、県内金融機関等と連携し、県内4地区で実施することで、県内全体での人材育成の底上げの可能性を示すことができた。

学生の学び 学生と若手社会人、双方の地域創生に対する意識向上ならびにまち歩きやワークショップを通じたその地域固有の魅力の発見につながった。また、各地区で学生と若手社会人が一緒に学ぶことで人的ネットワークができ、学生に対しては、将来の地域での就職に対する魅力向上につながった。

今後の展開 今回はその地域の魅力をしっかりと発見することを重視しているため、2017年度以降は、複数日開催にして実際の課題解決への取組に展開させる必要がある。また、本事業の目的の一つとして、県内各地での実施を想定していることから、今後は県内他市町村での開催も検討する必要がある。



『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろうか。日本の未来を担う若者ができることは？ きっと、その答えはひとつではありません。だからこそ、私たちは動き始めます。そのステップは、私たちの大学がある大分県。大分への愛着を勇気に変えて、大分できないうちにチャレンジします。地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくりまします。私たちは大分県の未来を拓く。『おおいた、つくりびと』になりたい。

総合型地域スポーツクラブの認知度を高めるための イベント運営を通じた地域参画と教育実践活動 ～OZAI 元気クラブとの連携プロジェクト～



堀 仁史（経営経済）、学生代表：玉城 和志

受講生：ゼミナールⅣ(14名)、Ⅲ(16名)、Ⅱ(14名)、2016年度卒業ゼミナール生（13名）

（プロジェクト実施期間：2015年度～継続中）



大分市大在地区は新興住宅地として発展し、少子高齢化社会において珍しく人口の急激な増加とともに児童数も増加している地区である。このような急激な環境の変化に伴う地域コミュニティの希薄化が懸念される。また児童・生徒の身体活動は、心身の健全な発育のために重要であり、それらを通じて社会性の発達が期待できるとともに、小児期は健康のために良い運動習慣を定着させる重要な時期でもある。しかし、各種調査報告では、テレビゲームなどの非活動的余暇時間の増加などにより、生徒・児童の身体活動量は低下傾向にあり、また運動を実施する児童・生徒と、しない児童・生徒の二極化も問題点として挙げられている。このような社会環境の中で、総合型地域スポーツクラブは、運動や文化的な活動を通じた地域コミュニティの構築や、地域活性化への貢献が期待されており、地域住民が主体的に地域のスポーツ環境を形成する「新しい公共」環境の構築を目指している。

本学が位置する大在地区には、総合型地域スポーツクラブとしてのOZAI 元気クラブが存在している。本プロジェクトでは、OZAI 元気クラブの運営・企画に参画・協力することで地域活性化に一助し、参画する学生が将来の地域創生に貢献できる人材と成長することを目的に実施している。



総合型地域スポーツクラブとは、人々が身近な地域でスポーツに親しむことのできる新しいタイプのスポーツクラブで、

(1) 多世代：子どもから高齢者まで、(2) 多種目：様々なスポーツを愛好する人々が、

(3) 多志向：初心者からトップレベルまで、それぞれの志向・レベルに合わせて参加できる

という特徴をもっている。その1つであるOZAI 元気クラブ（大分市大在地区）は、普段非活動的な人（子どもから高齢者まで）に、運動や文化的活動を行う場面（時間・空間・仲間）を提供することを目的に、2011年3月設立（会員数197名）され、健康体操やサッカーなど、様々な教室が地域内で実施されている。

大在地区の特徴としては、他の大分市地域と比べて、新興住宅地として発展しているため年少人口の割合が高いことから、スポーツクラブへの年少人口の会員数の増加を目標に、小学生を対象とした特徴のある教室の企画・運営について、スポーツビジネスの観点から、またNSCA認定校カリキュラムの特徴をいかした協力を行っている。

【2016年度の企画・運営協力】

2016年 8月29日（土） かけっこ教室（※指導協力：NBU陸上競技部）

2016年 10月29日（土） 大在西小学校PTA主催 サンサンカーニバル
ドッチビーコーナー指導担当

2016年 12月 4日（日） OZAI 元気祭り レクリエーション担当

2017年 2月19日（日） わくわくレクリエーション

※「わくわくレクリエーション」では隣接する坂ノ市地区の3小学校（坂ノ市、小佐井、丹生）にもチラシを配布して参加募集を行った。



NBU
日本文理大学



「かけっこ教室」

小学生と未就学児童を含む21名の子どもたちと、その保護者の参加があり、昨年に引き続き非常に好評であった。



「わくわくレクリエーション」
（2015年度は「チャレンジ・ザ・ゲーム」）

小学生と未就学児童を含む23名の子どもたちと、その保護者6名と、2015年度に比べて参加人数が大幅に増加した。

※ちなみに坂ノ市地区からの参加者は1名であった。



「OZAI 元気まつり」

サポートスタッフとして参加し、「わなげ・RDチャレンジ・ヒューストン・スカットボール」の4種類のレクリエーションを実施。参加した児童からは「4つ全部、楽しかった」との声も。餅つき、抽選会など、参加者全員で楽しんだ。



昨年度、本活動の検証として大在地区小学校の保護者を対象にアンケート調査を行った（回答者数：1082名）。「総合型地域スポーツクラブ」の認知度（知っている、聞いたことがある）が28%であったのに対して、「OZAI 元気クラブ」の認知度は81%であった。しかし「OZAI 元気クラブの活動内容」についての認知度は47%であり、新規クラブ会員の獲得には至っていない。次に教室・イベント活動内容に対する「保護者の参加意向」の傾向として、「家族で取り組める内容」が最も人気が高く、年齢が高くなるに従って「健康増進」型の教室に関心が高まることが明らかとなった。一方で児童は学年による差はなく「運動技能・能力を高める内容」と「レクリエーションや楽しめる内容」に関心が高かった。今後、本活動は「クラブの認知度」を高める目的から、「クラブへの理解」を深めることや「会員獲得」につながる活動（イベントやプロモーション）への進化する必要があり、学生の若くて斬新な発想が求められる。





学生の視点で捉えた豊後大野の魅力

～豊後大野市の地域資源を活用したサービスラーニング科目への展開～

今西 衛（経営経済学科）、舩田 佳弘（経営経済学科）、市田 秀樹（COC 事業担当）
 受講生：経営経済学科 2 年生 19 名、経営経済学科 1 年 27 名
 （プロジェクト実施期間：2015 年度～継続中）



大分県は「日本一のおんせん県おおいた」を標榜するなど、日本でも有数の温泉地であり観光資源には恵まれている。しかし、豊後大野市は県内で温泉がない数少ない自治体の一つであり、産業も第 1 次産業が中心で、高齢化率が非常に高い。一方で、豊後大野市には、原尻の滝をはじめとするジオパークなどの地域資源が数多く存在するが、これらが顕在化されておらず有効な地域観光資源となっていない。ジオパークを中心とした地域資源を活用し、継続的な事業を行える地域観光サービス人材の育成が求められている。

日本文理大学経営経済学科では、平成 27 年度より地域マネジメントコースを新設した。本コースは、地域資源観光に経営の概念を取り入れ、地域が顕在的・潜在的にもつ魅力を観光資源として発掘・利活用し、まちづくりマーケティングによって観光サービスを持続可能な事業へとプロデュースし実践する能力を備えた人材の育成を目指している。

そこで、2015 年度よりサービスラーニング IA、IB（1 年次開講科目）および、平成 28 年度よりサービスラーニング II（2 年次開講科目）を通じて、豊後大野市を視察したり、ヒアリングを行うことで豊後大野の観光における地域資源の魅力の発見や現状、課題を議論するなどし、学生おすすめのツアープランを提案したり、食と豊肥本線を軸とした豊後大野の魅力伝えるプロモーション活動を行ってきた。



2015 年度は学生 14 名が 8 月豊後大野市の観光地や道の駅などを訪問・取材し、地域が顕在的・潜在的にもつ魅力に触れ、観光資源として活用できるかをグループワークによるポスター制作やディベートなどを行った。この活動を踏まえ、学生自身でツアープランを立て、実際にそのプランを体験し、プランの課題を挙げ、再度、ツアープランを練り直し、プランを体験するという反復活動を行うことで、ツアーの評価と課題解決の能力を身につけてもらった。

学生らはツアープランを組み立てていく中で、豊後大野市の道路は狭く、カーナビも対応していない箇所が多いため、JR 豊肥本線で豊後大野まで訪れ、コミュニティバスなど公共交通機関を併用することで、公共交通の維持、活性化につながるなどのアイデアも出された。

そんな矢先、2016 年 4 月に発生した熊本（大分）地震により、JR 豊肥本線は大打撃を受けた。このような背景から、本プロジェクトは、地震の復旧、復興の過程で、顕在化されていない JR 豊肥本線沿線の観光価値について再検証し、再認識することで、豊後大野市の地域活性化、JR 豊肥本線の活性化につなげていく方針へと進むこととなった。豊肥本線に乗りながら豊後大野の魅力を探し、さらに、学生の視点で面白いと思った場所を iPad やスマートフォンで写真や動画に収め、最終的に豊後大野のプロモーションビデオ、ポスター、パンフレットを作成した。

以上の内容は、2016 年 11 月 19 日のもがたり観光行動学会（日本文理大学他主催）にて学生による研究発表を行った。その他、大分市にある「ぶんど大野 bureau 大地の物語」で、映像、ポスターの展示も行っている。さらに、大学生観光まちづくりコンテスト 2016 の予選を通過し、成果発表を行った。

議論だけでなく、写真や動画撮影といった活動から、映画の一場面を再現したり、地元の方から歴史について聞いて、実際にその場所へ行ってみたり、鉄道写真家のような写真を撮ってみたい、徒歩や自転車でないといふ気付かないものを発見したり車窓の風景の変化を動画に撮ったりして、新たな気づきが見られた。



当初は控えめであった学生も豊後大野を何度も行き来するうち積極的に関わるようになり、豊後大野に対する意識やプロジェクトに対する責任感、豊後大野が抱える顕在的・潜在的な問題に対してどのように解決すべきかを真剣に考え、動画などの成果物として現れたことは大きな成果である。学生はツアープラン、PR 動画、ポスター、パンフレットなどの作成や実施、地域の魅力を引き出すことの難しさを実感してもらった。同時に、成果報告会などを通して、豊後大野の方々に「豊後大野には潜在的な観光資源がある」という強烈なメッセージを伝えることができた。駅を降りて駅周辺を散策することで、その地域の滞在時間を増やし、地域の人とふれあうことこそが、豊肥本線が開通して 100 年という節目にふさわしい地域活性化における既存のローカル線を使った観光であり、これからの地域活性や鉄道旅客の確保といった課題解決のあり方であろう。これからの学生の活躍にご期待ください。





防災用小型無人水中観測システムの研究開発

稲川 直裕 (機械電気工学科)

参加学生：鶴野 瑞穂 (機械電気工学科) 他 4 名

(プロジェクト実施期間：2014 年度～継続中)



災害時等には、無人で緊急を要する水中観測が求められる場合があり、当研究室では高い機動性を備えた無人水中観測ロボットの研究開発を行っている。「実用性、運搬性、操縦性、低コスト」に特化した独自の機体を自作し、保有していることから、普段は環境観測やダム等のインフラ点検の為に試験運用を実施している。

本ロボットは、水中機本体、地上(船上)基地局、操縦桿、発電機から構成され、普通自動車 1 台で運搬が可能です。操縦者は、1-2 名体制で運用でき、強力な LED 照明を搭載している事から夜間や暗い場所での運用も可能である。耐用水深は 50-100m を想定しており、操縦者は基地局のモニタ画面を見ながら、片手で操縦桿を持つ事により、水中で前後移動・左右水平移動・左右旋回・潜水浮上の自由な制御動作を実現できると同時に、高画質動画撮影を実施する事が出来る機能を有している。平成 26 年度および平成 27 年度は国土交通省次世代社会インフラロボット「現場検証対象技術(水中維持管理部門)」に採択され、ダムに於けるインフラ点検の為に実証実験を実施しました。その他、大在埠頭の護岸・水底観測実験や大分県内ダムでの試験的な観測実験を重ねており、自治体へ観測データの提供を行っています。また、学生の教育研究の視点から沖縄海洋ロボットコンテストへ出場し、平成 28 年度「沖縄海洋ロボットコンテスト」では「最優秀賞」を獲得した。



東日本大震災では、津波による膨大ながれきが、海底に沈み、環境にも深刻な影響を与えています。災害時等には、高い機動性を備えた無人水中観測システムが求められており、本研究では「実用性、運搬性、操縦性、低コスト」に特化した小型無人水中観測システムに関する研究開発に取り組んでいる。



「小型無人水中観測システムの構成」
重量約 3kg、水深 50-100m まで観測可能。



◀大在埠頭での沈没船の観測
(水中カメラからの映像)。

▼豊後大野市「稲積水中鍾乳洞」での水中観測の様子。
水中観測システムにより「底なしの淵」の底を観測。



研究の背景と目的

災害発生時、迅速に活動可能な無人水中観測システムが求められている

■目的
・津波等に於ける迅速な調査・状況把握
・運用が、簡便、安価、高信頼性を備えた水中観測システム(ROV)の開発

本研究の目的と背景

新型簡易ROV開発コンセプト

★特徴★ 「実用性」「運搬性」「操縦性」「コスト」に特化

- 水深30m以内
- 強力なLED照明搭載
- 軽量
- 外部電源による駆動
- 遠隔実証システム搭載
- カメラ・GPS・浮力調整システム搭載
- 地上基地局による水中モニタリング

水中観測システムの開発コンセプト

「ウキと重りの原理」による独自構造

「ウキ」構造

「重り」構造

構造の特徴

ハードウェアの製作

水中観測システムの構成要素



防災用途を目的として始まった本ロボットの開発技術は、数々の実証実験の蓄積により、地元自治体からのニーズを受けて環境観測やインフラ点検にも用途が広がってきた。これらは既存品や既存技術をそのまま購入する事無く、独自の手作り技術に一貫して拘ってきたからこそ、応用の転換が円滑にできた事の証である。普段は環境観測やインフラ点検等に活用し、有事の際には機動性の高い防災観測をも実施する事が出来るこの技術は、必要不可欠である。

「大分協同ものづくり展・大分市工業展」で好評の「府内城中探検イベント」や地元小学校での水中ロボット操縦体験授業を通じて本物の「ものづくり」の大切さを伝える技術啓蒙も重要な教育研究の一つとして今後も展開する。

【謝辞】本研究は、2014、2015 年度 国土交通省次世代インフラ用ロボット「現場検証技術」のもと、長崎大学・北九州市立大学・ニッスイマリン工業株式会社との共同で実施されたものである。





～工学部専門基礎科目『ロボットプロジェクト』～

「地域に生きるものづくり」 ～地域を感じることから始まるものづくり～

川崎 敏之、稲川 直裕、筑紫 彰太（機械電気工学科）、岡崎 覚万、室園 昌彦（航空宇宙工学科）、
福島 学（情報メディア学科）、市田 秀樹（COC 事業担当）

受講生：2015年度 74名、2016年度 38名（プロジェクト活動期間：2015年度～継続中）



日本の現状を取り巻く社会において、働き方の変化や人口減少に伴う少子高齢化など、さまざまな社会問題が、日々、取り上げられている。これらの問題に向き合いながら、将来の社会が持続的に豊かになっていくためには、社会構造の変化だけをみるのではなく、暮らしそのものの変化を考える事も必要である。そのなかでも、特に、高齢化ともなる医療福祉問題、労働人口の減少による産業構造の変化や生産の効率化などの分野においては、それらを支えていくための「もの」が必要となってくる。そこで、「ひと」と「もの」の関係性をきちんと捉え、自由な発想をもって創造的に問題解決に取り組める人材を育成するためのプロジェクト型の教育プログラム作りを目指す。

このプロジェクトでは、「地域に生きるものづくり」をテーマとして、学生自らが地域（大分市木佐上地区）に出て、現地の現状を自分たちの目で見て、肌で感じ、そこからさまざまな社会問題と関連する課題を発見する事からはじめる。その後、課題解決に必要なだと考える「もの」について、自由な発想をもって考え、それをカタチにすること（プロトタイピング）を実践していく。このプロセスを通して、「ものづくり」と社会との接続について考えることで、将来の社会を支えるための「ものづくり」について考える力を養うことを目指す。



現代の社会

において、潜在化している課題を発見し、

それを創造力をもって解決する力が求められている。潜在的な課題を発見する1つの方法は、課題を共有している人々や周囲の状況に共感することである。専門基礎科目『ロボットプロジェクト入門2』（1年生後期科目、工学部 機械電気工学科、航空宇宙工学科、情報メディア学科）では、課題を発見する力を身に



地域を感じる

地域を訪れ、その状況を感じることで、地域の魅力や、問題点について自ら考えてみる。



『ロボットプロジェクト』科目を通して、主体的に学ぶ力や、専門教育において必要な素養を身に付けるとともに、創造的に問題解決する力を養う。



地域の声を聞く

地域の住人の方に、地域の文化・伝統・歴史や、現在の状況についての話を聞く事で、地域への理解を深める。



専門課程

1 年次

2 年次

※『シカケプロジェクト』は、『ロボットプロジェクト』基礎2の1コースとして実施。



問題定義・課題設定

「ひと」と「もの」の関係性をきちんと捉え、様々な社会問題と関連する課題を発見する。



地域を知る

地域の状況を観察することで、新たな発見や疑問点を見つけ、地域の特徴と地域特有の課題を考える。



プロトタイピング

課題解決のための「もの」について自由な発想をもって創造し、そのアイデアをカタチにする。



2016年度は、最終報告会を木佐上コミュニティセンターにて行い、全7チームが、自ら考えたアイデアについて報告を行い、獣害対策や高齢者向けの見守りや安全・安心のためのデバイスなど、IoT（Internet of Things）や ICT などを取り入れた学生目線でのアイデアが多く出た（本コースは、2015年度から開始しており、初年度は12チームが参加している）。地域住民からは、若者が地域課題に取り組む事への期待、活動の継続性、一部のアイデアに対しては実際に使えるモノにして欲しいなど、具体的なアイデアに対する期待する声が多かった。今後は、実際に地域で使ってもらえるモノを創り出せるように、さまざまな工夫を取り入れながら、「ロボットプロジェクト」全体として、社会と連携しながら、「ひと」と「もの」の関係性をきちんと捉え、将来の社会を支えるための「ものづくり」について考える力を養うことを目指していく。



3 . 地域志向プロジェクト研究 卒業研究・論文・設計 地域志向関連リスト



に、継続的な外部評価（これまで本人の主観的な評価であったものが、客観的な評価・指標からの視点）を受けることによる学生の変化、ステークホルダーとの協働活動による学化への影響を検証していく。（河村）

○大学の立ち位置の検証…大学が地域における第三者として新たな取組の提案・実践をどのように進めていくのか、また、それを地域住民へどのように引き継いでいくのかを検証する。※これまでの地域づくりの研究では、大学の取組を地域住民に引き継ぐという取組みはほとんど見られない。また、アクションリサーチによる研究においても、このような具体的な方法などを検証したものは、ほとんど見られなかった。（坂口）

3. 研究の成果

本年の研究成果として、①実際に行った取組の効果を検証、②域学協働のあり方（大学と地域との関係等）の検討、③地域志向の教育プログラムの構築、学生の社会人基礎力の検証が挙げられる。

①実際に行った取組の効果を検証
まず、この研究に当たったの基盤づくりとして行った千歳町市民交流の場「楽らど広場 ひょうたん」での活動サポートによる効果を利用者数・参加者（利用者・スタッフ）数より検証する。ここでは、活動の立ち上げから平成28年3月7日現在までの月平均の利用者数と参加者数を示している（図表1）。この結果から、活動サポート（平成27年8月より）を行うことで、参加者の増加という面では、一定の成果はあったのではないかと考えられるが、来年度以降は、活動に参加したことによる効果についても、実証研究（質的調査、量的調査）を行っていく必要がある。

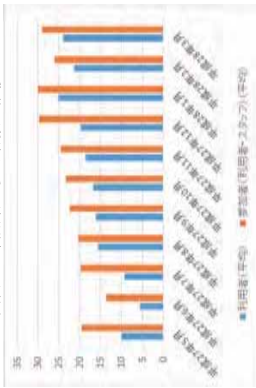
次に、活動サポートの内容については、活動スタッフとの反省会等を通して、対象者の生きがいや地域内で活用すること、地域内の役割や貢献を見出し、住民間での世代間交流の必要性が認められた。

②域学協働のあり方
域学協働のあり方を検討するにあたり、住民主体の地域づくりで大学が地域にどこまで貢献できるのか、どのような方向性で大学が地域住民と協働して、その取り組みを行っていくのかを考えていく必要がある。

そこで、域学協働でI.住民間での互助や交流ができるように下地を作ること（図表2）、II.地域の中で生きがいや役割を持つために、地域内でできるのかを考える機会を提供すること（図表3）を目的として、その方向性

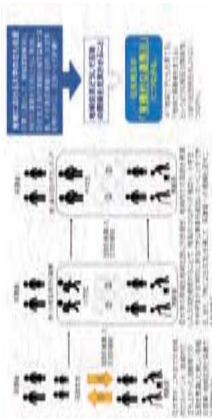
を模索した。

図表1 利用者・参加者数の推移



Iでは、地域内での人と人とのつながりを構築していくために、住民どうしの「見えない関係づくり」（住民どうしが地域の人々を知る、関係を持つこと）を図っていくことが必要である。しかし、人と人との交流が困難な場合もある中で、「物による交流」（物を通じた他世代の交流）を図ることで、他世代の互助の関係を形成することができるとはいえないかと考えた。また、物による交流を図る長所として、地域の子どもと高齢者の交流でも、その物を介して保護者にもこのような活動の理解を促すことができる。保護者の理解が深まれば、「地域で子どもを育てる」、「地域で高齢者を支える」、というような相互の関係性ができ、「住民相互の有機的な連携」つまり、住民相互のよりよいつながりが図れると考える。

図表2 住民間の互助や交流の下地づくりの仕組み

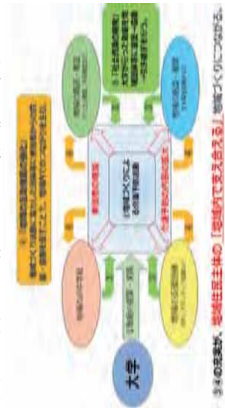


IIでは、住民主体の地域づくりにおいて、最終的には地域内で互いに支え合える関係が形成することが必要である。

そこで、まず大学としては、対象者を支えられる側として捉えるのではなく、支える側として活動ができるように、新しい事に挑戦するといった試みを行った。これには、自分の可能性を広げ、新たな「生きがい」を見つけてもらうというねらいがある。そして、自分が出来る範囲・無理のない範囲で、「他者への貢献」を行ってもらうよう大学側からの新しい取組の提案・実践を行い、それを地域住民・組織での実践できるように引き継ぐ。そして、地域づくりの参加者にも地域の学校・施設・機関等と関わってもらうことで「地域の

互助機能が強化」され、地域内で支え合う地域づくりが展開できると考えている。

図表3 取組への提案・実施から引き継ぎの仕組み



③地域志向の教育プログラムの構築、学生の社会人基礎力の検証
ここでは、本年度の取組から各学年での活動における役割、社会人基礎力の向上等を示した教育プログラムを検証した（図表4）。

図表4 本研究を活用した教育プログラムの概要

学年	1年生	2年生	3年生	4年生
地域志向の教育プログラム	地域探訪活動	地域探訪活動	地域探訪活動	地域探訪活動
社会人基礎力の検証	社会人基礎力向上プログラム	社会人基礎力向上プログラム	社会人基礎力向上プログラム	社会人基礎力向上プログラム

本年度の学生の社会人基礎力の検証に当たっては、活動サポートの参加者・不参加者の比較を試みた（図表5）。

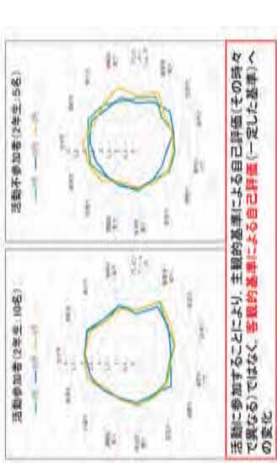
また今後は、社会人基礎力の育成をより実効性のあるもの、客観的な視点・指標で検証ができるように4つの視点での研究を考えている（図表6）。

4. 今後の展開

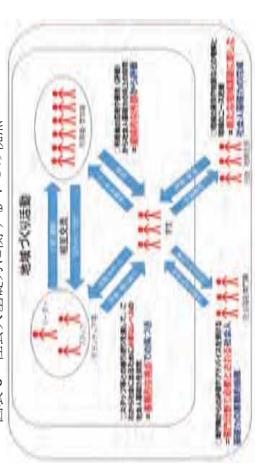
これまで、研究の成果で示した図表2・3の取組を教育プログラムに沿って、実践しながら、その効果を検証していく。今後の研究計画については、図表7に示す。

- ①地域への波及効果（他世代間の互助と交流、地域内で支え合う地域づくりの実現の仕組みづくり、参加者への健康の影響、地域の子どもへの影響（効果の検証））
- ②地域志向教育への波及効果（第三者（地域外）として地域課題の分析とその解決策の実践、活動参加による社会人基礎力の向上、客観的な検証とその評価方法の検討）

図表5 活動参加者・不参加者の社会人基礎力の比較



図表6 社会人基礎力に関する4つの視点



図表7 今後の研究計画（平成27年度～30年度）

年度	27年度	28年度	29年度	30年度
地域志向の教育プログラム	実施	実施	実施	実施
社会人基礎力の検証	実施	実施	実施	実施
地域探訪活動	実施	実施	実施	実施
地域づくり活動	実施	実施	実施	実施

5. 主な発表論文等

- 綿田耕作
〔雑誌論文〕(計 10件)
〔学会発表〕(計 5件)
〔図書〕(計 2件)
- 河村裕次
〔雑誌論文〕(計 9件)
〔学会発表〕(計 9件)
〔図書〕(計 3件)
- 坂口昌宏
〔雑誌論文〕(計 9件)
〔学会発表〕(計 5件)
〔図書〕(計 1件)

の協力が課題となる。しかし、徘徊対象の高年齢者の立場からは、身に付けるものを強要（強制）しないため、まったく制約がないこととなる。

本研究では、徘徊高齢者への制約がない、ノン・ウェアラブルな位置検出を採用することにしている。

3. ノン・ウェアラブルな画像認識

本研究が想定しているノン・ウェアラブルな位置検出では、①カメラで撮影された映像を自動解析して人物を特定する処理ソフトを開発する、②高齢者の歩行時の画像を取り、それから人物の特定に必要なバックデータを作成する、③カメラで撮影された映像の処理データを保存し、徘徊の途中の位置を記録することが可能であるかどうか、空白地域ごとの間隔でモニターを設置するか、設置場所をどこにするかなどを検討する、といった作業が必要となる。本研究の目的は徘徊老人の位置検出システムのための画像処理ソフトの開発であるため、①の人物特定に必要な画像処理ソフトの開発について検討を行う。

4. 昨年度の実験内容

昨年度は、人物特定に必要な画像処理ソフトの開発のための実験として、屋内と屋外に固定カメラを設置し、その中を歩行する被験者の歩行画像と顔画像をもとに個人の識別が可能であるかどうかを確認する実験を行った。図2に昨年度の顔と人物の検出結果を示す。



図2 顔と人物の検出結果

図2に示す黄色枠の部分が検出領域であり、ここで検出された顔領域と人物領域を抽出した。顔認識では、歩行中に抽出した顔画像（複数枚）を用いて、事前に登録されている顔画像群と比較することで個人の特定を行った（図3）結果、実験環境における識別精

度が48%となった。

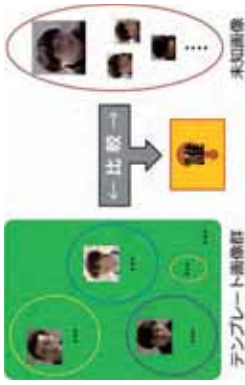


図3 テンプレート画像群との比較

また、歩容認証では、図2に示す処理で抽出した人物領域を機械学習によって学習することで歩行に固有の特徴を特定することを試みた（図4）。



図4 機械学習による識別（昨年度）

図5は機械学習により獲得した特徴を用いて個人の識別を行った結果である。この結果は人物に対応した色で人物領域が囲われていれば正確に識別できたことを示しており、左の画像は成功例、中央と右の画像は失敗例である。

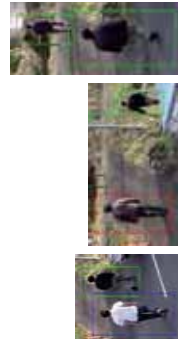


図5 歩容認証を用いた個人識別結果

昨年度の実験を通して、歩容認証を用いた識別では、歩行の特徴を歩行シルエット（静止画像）として捉えて特徴を抽出することはできた。実験の結果から、歩行シルエットのみでも歩行に関する特徴の抽出が可能であることは確認できたが、精度の高い識別のためには抽出できた特徴のみでは不十分であるこ

徘徊老人の位置検出システムのための画像処理ソフトの開発

吉森聖貴 鈴木秀男 福島学
情報メディア学科

研究成果の概要：高齢化社会に伴い、認知症などに伴う高齢者の徘徊が社会問題となっている。本研究では、徘徊高齢者の捜索に役立つ、位置検出システム向けの画像処理ソフトの開発を目的としている。このシステムでは、徘徊高齢者の位置を検出するために、防犯カメラ等のカメラ映像から人物の特定を行う。昨年度の研究では、屋内外で撮影したカメラ映像から人物検出を行い、歩容認証と顔認識を用いて人物識別を行ったが、精度に問題が残る結果であった。本年度の研究では、昨年度の歩容認証の問題点を考察し、その解決に向けて取り組んだ。本報告では、今年度行った歩容認証の取り組みについて成果をまとめる。

1. はじめに

近年、防犯カメラの普及により事件捜査におけるカメラ映像の使用率が高まっており、事件の早期解決にも役立てられている。しかし、これら捜査において防犯カメラの録画映像から個人を特定する作業は自動化が難しく、多くの人的、時間的コストが必要となることが問題となっている。

また、街中に防犯用途でのカメラの設置が進みつつある一方で、老人の徘徊が依然として多発しており、その捜索に多くの人的コストが必要となっている。図1に示すグラフは、平成24年度～平成27年度における認知症またはその疑いによる行方不明者の推移である。平成27年度には、1,200人以上の行方不明者が発生しており、このような認知症などによる行方不明者は、今後ますます増加することが予想される。さらに、これら行方不明者を発見できずに事件や事故に巻き込まれ、監督者の責任を問われるケースも多くなっている。

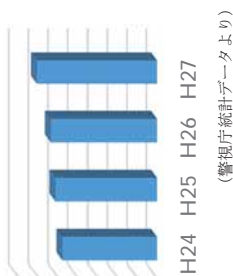


図1 行方不明者の推移
(観視庁統計データより)

2. ノン・ウェアラブルな位置検出
一方、ノン・ウェアラブルな位置検出とは、特別な機器を身に付ける必要がない方式のことである。例えば、街中カメラである防犯カメラや監視カメラの映像、周りの人たちが運携して探見する隊などが、この場合、カメラ等の機器インフラ、周囲の人たち

今年度の研究では、歩行に関わる一連の動き（動画画像）として捉えて特徴の抽出を行うことが目的となるため、次に、追跡した人物領域を1枚の画像にまとめ歩行画像の作成を行った。図7に処理の概要を示す。



図7 歩行画像の作成

図7の処理により作成した歩行画像を機械学習により学習することで、歩行に伴う動きの特徴を抽出することを試みた。図8に機械学習と識別処理の概要を示す。



図8 機械学習による識別（今年度）

今年度の実験では、図8に示す機械学習を用いて、被験者数、入力画像（カラーとグレースケール）、機械学習におけるネットワークの構成などを変更しながら識別精度とその変化を確認した。まず、被験者数の違いによる識別率の違いでは、被験者数3名の場合が59%、被験者数7名の場合が23%となり、被験者数が増えるにつれて識別率が低下する結果となった。なお、被験者3名を別の3名に変えた場合でも同程度の識別結果が得られたことから、人物に依存した識別ではないことを確認している。次に、入力画像の違いによる識別率の違いでは、カラー画像（3名分）の場合が59%、グレースケール画像（3名分）の場合が58%とほとんど違いが見られなかった。このため、服の色の違いによる識別への影響は少ないものと考えられた。機械学習におけるネットワークの構成については、層の深さや特徴を抽出するフィルタの形状などを変化させて識別率の変化を確認した。この結果、これらを変化させることで多少の識別率の変化が見られたものの、大きく識別率が改善する組み合わせは見つからなかった。最後に、今回行った機械学習によってどのような特徴が抽出されたかを検証するために、特徴の可視化を行った。図9にその結果を示す。

とも実験を通して判明した。そこで今年度は歩行の特徴を個々の歩行シルエット（静止画像）として捉えるのではなく、歩行に関わる一連の動き（動画画像）として捉えて特徴の抽出を行うことで認識精度の向上を試みた。また昨年度の実験では、図5の中央の画像において人物以外の領域が緑色の四角で囲われているように、人物検出処理における人物以外の領域の誤検出も多岐にわたったため、この点についても改善を検討した。なお、今年度は、歩容認証の改善について重点的に取り組んだため、顔認証は実施していない。

5. 今年度の実験内容

昨年度の人物検出手法では、人物領域が見つかった時点で人物領域を抽出（静止画像として抽出）し、識別に利用して今年度取り扱った歩行に関わる一連の動き（動画画像）を特徴として利用するためには、新たに検出した人物に対して追跡処理が必要となる。そこで今年度の研究ではまず、動画画像から人物を検出する処理を見直した。人物追跡結果を図6に示す。



図6 人物追跡結果

昨年度の人物検出結果（図2）と同様に、黄色枠の部分が検出領域であり、人物領域がフレームをまたいで検出（追跡）できることが確認できる。なお、この追跡過程において10回以上の検出がない領域が発見された際にはその領域の追跡を中止することで、昨年度問題となった人物領域検出の際の誤検出を減らすことを試みた。

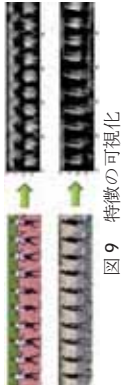


図9 特徴の可視化

図9の左側の画像が入力画像であり、右側の画像はその画像から抽出した特徴を示している。特徴は明るい（白に近い）領域ほど重要度が高いことを表している。上の被験者は、上半身が白い衣服であり、下半身は黒に近い色の衣服を着用している。一方、下の被験者は全体的に黒に近い衣服を着用している。これら被験者の特徴を抽出したところ、上の被験者は足元や頭部付近が明るくなる結果となり、下の被験者は体全身が明るくなる結果となった。この結果と前述した入力画像の違いによる識別率の違いにより、入力画像における衣服の色の違いによる識別率への影響は少ないものの、明るさの違いによる影響は大きいことが確認された。

6. おわりに

今年度の実験では、昨年度の問題であると考えられた歩容認証における入力画像の見直しを行った。この中で、カメラ映像からの人物領域抽出・追跡と歩行画像作成については自動化を行った。また、昨年度の実験で問題点であった人物領域の誤検出についても人物の追跡を行うことで改善ができた。機械学習を用いた個人間の識別については、服の色の違いが識別に与える影響は少ないこと、明るさの情報が識別に比べて特徴の可視化によって実験の結果ならびに特徴の可視化によって見えてきた。識別率は3名で59%、7名で23%と改善する点は多く、実用化に向けては時間を要すると考えられるが、今回の実験で

見えてきた問題点を改善していくことで識別率の向上が期待できると考えている。

今後の展開としてはまず、入力画像の見直しが挙げられる。今回の実験で明らかとなった明瞭な情報に依存しない入力画像の作成が必要となる。この点については、画像から明るさの情報を除き入力画像を作成する方法や、画像から人物領域のシルエットのみを抽出して使用する方法などが考えられる。また、機械学習に用いる入力画像の枚数を増やすことでも識別精度の改善が期待できると考えられる。次に必要となる作業は、機械学習に用いる入力画像のパターン（被験者の人数）を増やすことである。パターン数を増やすことで、より重要な特徴の抽出と正確な識別が可能になると考えている。もう1点重要なことは、学習モデルの再検討である。今年度の研究でも機械学習におけるネットワークの構成については試行錯誤的に調整を行ったが、適切な構成は見えていなかった。特徴の可視化を行いつながり、歩行に伴う特徴が抽出できると考えられている。

7. 主な発表論文等

[学会発表] (計 1件)

1. 吉森聖真, 鈴木秀男, 福高学, 有田真美, 津留悠佳里, "徘徊老人の位置検出システムのための画像処理ソフトの開発", チャレンジ OITA 地域創生活動報告会 in 豊後大野市, 3月 (2017)

(謝辞) 本研究を進めるにあたり、情報メディア学科4年の有田真美さん並びに津留悠佳里さんには、多大な協力をいただきました。この場を借りて感謝を申し上げます。

大分県農業のブランド化と関連産業活性化を目的とした 自然エネルギー利用型プラズマ農業に関する研究開発

川崎敏之¹、池畑義人²、坂井美穂³、岡崎寛⁴
¹ 日本理工大学工学部機械電気工学科, ² 同建築学科,
³ 同情報メディア工学科, ⁴ 同航空宇宙工学科

研究成果の概要：地域創生を目的としたプラズマ農業に関する基礎研究を行った。プラズマを用いた活性酸素（ROS）供給による植物の生長促進について調べ、農業に応用しようとするものである。これが近年注目されているプラズマ農業の生長促進である。生長促進だけでなく、収穫時期調整、収量増加、栄養価向上、病気への耐性向上等の効果が期待されている。最終的には大分県農業のブランド化へとつなげることを目的としている。今回、カイワレの種子にプラズマを直接照射し、照射時間が生長に与える影響を調べた。プラズマは最大で5分照射した。今回の実験条件下においては、照射時間が長いほど根が長く生長することが明らかとなった。プラズマの照射時間がカイワレ種子の成長に影響を与えることが実験で明確に示された。

1. 研究の目的

安全安心な食糧供給は世界的な課題であり、農業に関わる食料・環境問題の克服を飛躍的に進める新鋭科学技術が強く求められている。そのような中、大分県は農林水産業が盛んで、食料のブランド化が大分県主導で推進されている。農林水産業関連の研究開発が大分県では精力的に進められている。本研究はこれらの中で特に農業の活性化に対してプラズマ技術で貢献することを目的とする。

大分県は豊かな自然と大地のおかげで農業が盛んに行われている。しかしながら、図1に示すように、大分県における農家数は減少傾向にある。また、図2には大分県の年齢別農業就業人口の推移を示す。40歳未満の若者が特に少ないのが現状で、高齢化、後継ぎ不足という状況が加速傾向にある。図3には九州各県の主業農業率を示す（主業農家：農家所得の50%以上が農業所得で、1年間に60日以上自営農業に従事している65歳未満の世帯員がいる農家）。九州7県の中で最も主業農家率は低く、早急な解決が求められている。このような状況を改善することを目的に大分県では、ホームページ等において「新しく農業を始めたい方」という就職相談に関する取り組みも行われている。

近年、農業への新しいアプローチとしてプラズマ技術が現在注目されている（プラズマ農業）。プラズマを用いた殺菌、ウイルス不活性化による害虫駆除⁽¹⁾、水中放電を利用した生長促進⁽²⁾、種子へのプラズマ照射⁽³⁾などが報告されている。プラズマ農業はまだ新しい研



図1 大分県における農家数の推移 (1)

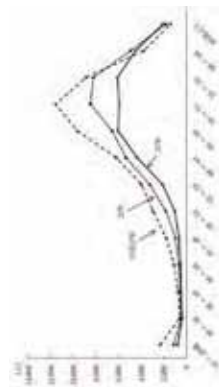


図2 大分県の年齢別農業就業人口の推移 (1)



図3 九州各県の主業農業率 (2)

究分野であるため、解決すべき課題が多く残されているのが現状で実用化はされていない。このプラズマ農業による大分県農業の活性化は非常に有効であると考えられる。大分県発農業技術としてのプラズマド化が可能である。本研究ではプラズマ農業によって大分県農業が抱える課題を解決することを主な目的とする。今までは農業に關係のなかった大分県企業の農業の参入も期待される。まず今回は大分県内の農業関連事業・産業との連携への足掛かりを構築するための基礎実験を行った。プラズマ照射時間と植物生長との興味深い関係が得られたので報告する。

2. 研究の方法

図4に実験装置の概略図と種子へのプラズマ照射の様子を示す。プラズマ発生装置本体は、外径8mm、内径2.5mmのガラス管に、図に示すようなサイズ、位置に電極2枚を巻き付けたシンプルな構造となっている。ガラス管出口側の電極に高電圧（20kV_{pp}、3kHz）を印加し、もう一方の電極は接地している。ヘリウムガスに酸素を1%添加した混合ガスをガラス管に流量3l/minで供給した。プラズマ管の中で種子（カイワレ、乾燥）に照射した。種子へのプラズマ照射の様子を図中の距離10mmで種子（カイワレ、乾燥）に照射した。照射時間は1、3、5分間とし、写真に示す。照射時間が種子の生長に及ぼす影響を調べた。

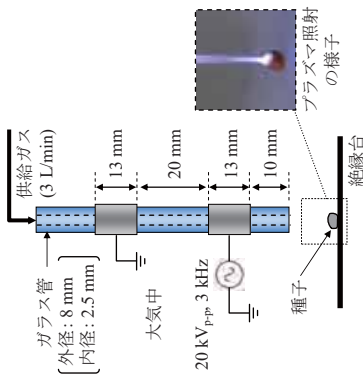


図4 実験装置概略図とプラズマ照射の様子

3. 研究成果

図5にプラズマ照射時間と時間経過の関係について代表的な結果を示す。照射直後、種子表面を目視で良く観察したが、プラズマ照射の痕跡は観察されなかった。2、3日後より種子の発芽が始まった。4日後の様子をみると、照射時間が長いほど発芽率が高くなる。観察により明らかとなった。7日後になると、発芽がさらに進むが、照射時間が長いほど生長は早いようである。ここで、根の様子をみるとその成長の差が明確に示されている。根

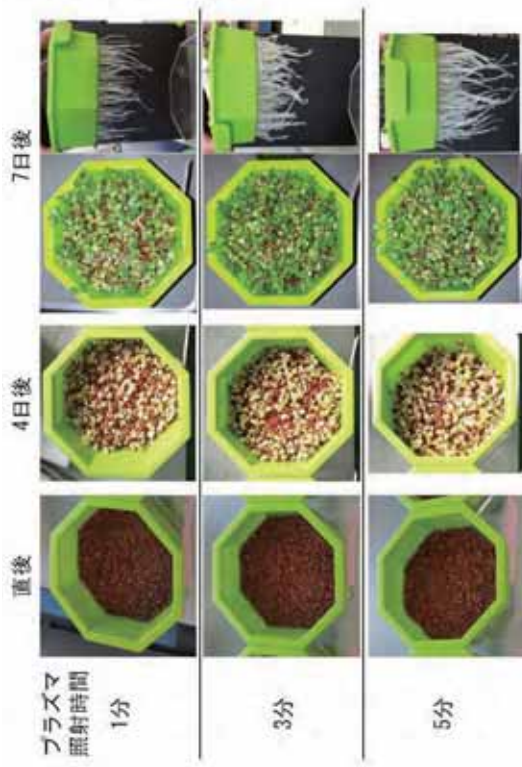


図5 プラズマ照射時間と貝割れ草丈の関係

の長さ、太さともに照射時間が長いほど生長が促進されている。平成 27 年度の結果から、照射時間が 3 分を超えると生長は抑制されるのではないかと予想していたが、異なる結果が得られた。さらに実験を繰り返し、プラズマ照射と植物生長の関係を確認することにしたい。

4. 今後の展開

今回は比較的生長が早いカイワレの種子をターゲットにしたが、今回は全ゲノムが解読されているシロイロイヌナズナを用いることにより、プラズマの影響を遺伝子レベルで評価しなければならぬ。また、プラズマの影響は植物の種類によっても効果異なると思われるので、様々な植物を対象に議論しなければならぬ。

本研究では自然エネルギーによりプラズマを発生させることも重要項目の 1 つである。今回、自然エネルギーの利用まで進めることができなかったことが悔やまれる。今後早急に進めていきたい。

本研究では同時に種子に供給される ROS 分布の可視化や定量化を進めている。これらの実験によって、照射時間ではなく ROS 供給量と生長との関係も明らかになっていく。また、本研究と地域とのネットワークもまだ構築されていない。今後、本研究結果を明確に示すことができるデータをより多く蓄積した後に先に進めていきたい。

謝辞

本研究は次の学生らの協力と熱意により実施された (図 6)。

2 年生： 間結夏

3 年生： 足立拓也、武井彰汰、別宮竜乃介、山ノ内翔太、伊東巧

4 年生： 黒枝剛哉、清竜平、山口真央、吉永怜史、山下莉穂、田崎光

ここに感謝の意を表す。

参考文献

(1) 2015 年農林業センサス、大分県企画振興部統計調査課資料 (平成 27 年 11 月 27 日公表) より抜粋。
 (2) 大分県 HP より (<http://www.pref.ofta.jp/sit/e/syuraku/genjyou.html>) .
 (3) 林信哉ら、日本 AEM 学会誌、22 (2014) 447.
 (4) J. Takahata ら、Jpn. J. Appl. Phys. 54 (2015) 01AG07.
 (5) 小野大希ら、電学論 A、135 (2015) 347.



図 6 学生による実験の様子

5. 主な発表論文等

【雑誌論文】(計 7 件)

1. T. Kawasaki, A. Sato, S. Kusumegi, A. Kudo, T. Sakanoshita, T. Tsurumaru, G. Uchida, K. Koga, M. Shiratani, "Two-dimensional concentration distribution of reactive oxygen species transported through a tissue phantom by atmospheric-pressure plasma-jet irradiation", *Applied Physics Express*, Vol. 9, 076202 (4 pages), 2016. 査読有。
 2. T. Kawasaki, S. Kusumegi, A. Kudo, T. Sakanoshita, T. Tsurumaru, A. Sato, G. Uchida, K. Koga, M. Shiratani, "Effects of Irradiation Distance on Supply of Reactive Oxygen Species to the Bottom of a Petri Dish Filled with Liquid by an Atmospheric O₂/He Plasma Jet", *Journal of Applied Physics*, Vol. 119, 173301 (8 pages), 2016. 査読有。
 3. T. Kawasaki, S. Kusumegi, A. Kudo, T. Sakanoshita, T. Tsurumaru, A. Sato, "Effects of Gas Flow Rate on Supply of Reactive Oxygen Species into a Target Through Liquid Layer in Cold Plasma Jet", *IEEE Transactions on Plasma Science*, Vol. 44, 3223-3229, 2016. 査読有。
 4. T. Kawasaki, K. Kawano, H. Mizoguchi, Y. Yano, Y. Yamashita, and M. Sakai, "Visualization of the Two-dimensional Distribution of ROS Supplied to a Water-containing Target by a Non-thermal Plasma Jet", *International Journal of Plasma Environmental Science & Technology*, Vol. 10, 41-46, 2016. 査読有。
 5. F. Mitsugi, S. Kusumegi, T. Kawasaki, T. Nakamiya, Y. Sonoda, "Detection of Pressure Waves Emitted From Plasma Jets With Fibered Optical Wave Microphone in Gas and Liquid Phases", *IEEE Transactions on Plasma Science*, Vol. 44, 3077-3082, 2016. 査読有。
 6. G. Uchida, A. Nakajima, T. Ito, K. Takenaka, T. Kawasaki, K. Koga, M. Shiratani, Y. Setsuhara, "Effects of nonthermal plasma jet

irradiation on the selective production of H₂O₂ and NO₂⁻ in liquid water", *Journal of Applied Physics*, Vol. 120, 203302 (9 pages), 2016. 査読有。

7. F. Mitsugi, T. Nakamiya, Y. Sonoda, T. Kawasaki, "Time-Resolved Observation of Plasma Jets Synchronized with Fibered Optical Wave Microphone Measurement", *IEEE Transactions on Plasma Science*, Vol. 44, 2759-2765, 2016. 査読有。

【受賞】(計 1 件)

1. 川崎敏之, "KI-プラズマ試験を用いた大気圧非熱平衡プラズマジェット照射による酸化反応の可視化研究", 大阪大学接合科学研究所「平成 28 年度接合科学共同利用・共同研究賞」.

【学会発表】

○本人の招待講演 (計 1 件)

1. 川崎敏之, "液体へのプラズマ照射による誘起流と活性酸素種の液中輸送", プラズマ・核融合学会第 33 回年会シンポジウムにて講演, 2016 年 12 月 1 日, 東北大学.

○本人による学会発表 (計 5 件)

1. T. Kawasaki, G. Kuroeda, R. Sei, M. Yamaguchi, R. Yoshinaga, R. Yamashita, H. Tasaki, K. Koga, M. Shiratani, "Transportation of reactive oxygen species through a tissue phantom by plasma jet irradiation", 国際学会 ISPlasma2017, 2017 年 3 月 3 日, 中部大学.
 2. 川崎敏之, 古閑一憲, 白谷正治, "プラズマジェット照射による液状ターゲット深さ方向への ROS 輸送", 第 32 回九州・山口プラズマ研究会, 2016 年 11 月 19 日, 佐賀.
 3. 川崎敏之, 内田儀一朗, 古閑一憲, 白谷正治, "大気圧プラズマジェット照射によって有機体体内を輸送された ROS の二次元濃度分布", 第 40 回静電気学会全国

大会, 2016 年 9 月 29 日, 群馬大学.
 4. T. Kawasaki, S. Kusumegi, A. Kudo, T. Sakanoshita, T. Tsurumaru, A. Sato, "Detection of reactive oxygen species transported into liquid bottom by atmospheric non-thermal plasma jet", 国際学会 ISNTP-10, 2016 年 8 月 3 日, ブラジル.
 5. 川崎敏之, 坂井美穂, 池畑義人, 岡崎寛方, "大分県農業のブランド化と関連産業型プラズマ農業に関する研究開発", NBU チャレンジ OITA 地域創生活動報告 2017, 2017 年 2 月 28 日, 佐賀県.

○日本文理大学学生による学会発表 (計 1 件)

1. 黒枝剛哉, 清竜平, 山口真央, 吉永怜史, 山下莉穂, 田崎光, 川崎敏之, 内田儀一郎, 古閑一憲, 白谷正治, "大気圧プラズマジェット照射による有機体体内への ROS の供給", 平成 28 年度応用物理学学会九州支部学術講演会, 2016 年 12 月 3 日, 対馬

○共著による学会発表 (計 2 件)

1. 古閑一憲, Thapanut Sarinont, 白谷正治, 田中昭代, 川崎敏之, 節原裕一, 内田儀一郎, "乱流制御による活性酸素種の液相輸送制御", 「プラズマ医療」新学術領域, 2016 年 4 月 25 日, 名古屋大学.
 2. S. Kusumegi, F. Mitsugi, T. Kawasaki, T. Nakamiya, and Y. Sonoda, "Detection of plasma-jet-generated pressure waves in gas and liquid phases using fibered optical wave microphone measurement", 国際学会 HAKONE2016, 2016 年 9 月 13 日, チェコ.

【図書】(計 0 件)

【産業財産権】

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

要介護者のコミュニケーション支援システムの開発

— 共通プラットフォームによる効率良い ICT 技術の活用 —

福島学, 坪倉篤志, 濱田大助, 松永多苗子, 市田秀樹

日本文理大学・工学部

研究成果の概要：高齢者を含む要介護者の居るコミュニティでは、コミュニケーションがスムーズでないがゆえに意志の疎通が困難となり孤立する場合がある。特に地域コミュニティでは、孤立者の存在は豊かな日常生活を送ることに障りが出るだけでなくコミュニティの減退につながるが、この問題への取り組みや研究成果は多く報告されているが、それらを統合することで解決可能な問題があるにもかかわらず使用言語や開発環境の違いにより統合が難しいのが現状である。そこで、要介護者の相互コミュニケーション支援技術の開発と、研究成果を統合する「基盤」について検討した。その結果、コミュニケーション支援に不可欠な1) 認証技術, 2) 空間把握技術, を確立し、それらを統合することで、3) 外出検知システム, 4) 転倒検知システム, を共通基盤で構築することで有用性を確認した。

1. 研究の目的

コミュニケーションがスムーズでないがゆえに意志の疎通が困難となり孤立する場合がある。特に地域コミュニティでは、孤立者の存在は豊かな日常生活を送ることに障りが出るだけでなくコミュニティの減退につながるが、この問題への取り組みや研究成果は多く報告されているが、それらを統合することで解決可能な問題があるにもかかわらず使用言語や開発環境の違いにより統合が難しいのが現状である。そこで、要介護者の相互コミュニケーション支援技術の開発と、研究成果を統合する「基盤」について検討した。その結果、コミュニケーション支援に不可欠な1) 認証技術, 2) 空間把握技術, を確立し、それらを統合することで、3) 外出検知システム, 4) 転倒検知システム, を共通基盤で構築することで有用性を確認した。

本取組みは、要介護者の相互コミュニケーション支援を目的とする。その中で研究成果を統合し課題解決につながる「成果を持ち寄れる基盤」の確立を目指す。

2. 研究の方法

支援システムの各部分は図1の役割分担で行う。各部の成果はオープンキャンパス等で活用することで「地域ニーズ」を確認する。また成果のうち、学術的な内容は学会で、実用的な内容は地域行事等での展示を行う。また、「研究成果を柔軟に統合した地域課題解決活動」の基盤として図2の共通基盤の有用性検討を目指す。

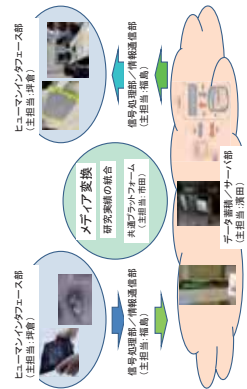


図1 プロジェクトの役割分担

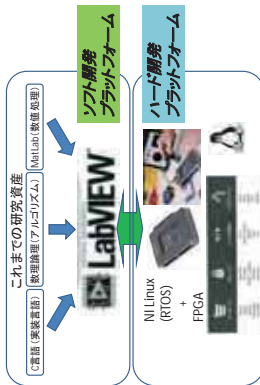


図2 研究成果を柔軟に統合する共通基盤

3. 研究成果

取組み成果として、前年度開発した顔抽出技術と本人認証技術を、同様に前年度開発した空間計測技術の融合を図った。空間計測技術は、図3に示すように2カメラで生じる視野差を使用した計測技術である。図は2枚のカメラ画像を重ねて示しており、枠が視野差が特徴的な箇所である。



図3 空間計測に使用する画像視野差の例

2 画像の対応関係を調べ、対応点のピクセル

上のズレから距離データとする。計測した空間情報にカメラ画像を割り当てると図4の通りとなる。



図4 空間計測で得られた距離位置にカメラ画像した画像を割り当てた例

図4は、室内で扉を背に一人の人物が室中央に着席していることを示している。正面設置のカメラによる空間計測であるため、カメラの死角となる領域において距離計測値が存在せず図では「白い領域」が発生していることがわかる。

一方、通常のカメラ画像では背景と人物の切り分けが必要となるが、例えば服と同系色の服装であっても、空間計測では空間で注目領域を切り出すことで背景との切り分けが必要ないことを示している。

図4に示した空間計測データを考え、座標データの横(X軸)、高さ(Y軸)、奥行(Z軸)のヒストグラムから空間の注目領域として壁面ではない室内にある一定容量の物体を抽出できると考えられる。

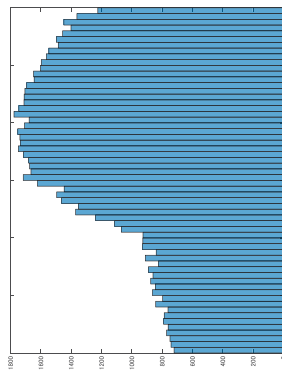
そこで、各軸のヒストグラムを図5に示す。図は横軸に各軸の距離をmmで示し、縦軸に座標データとして何個計測値が存在するかを示している。

図5(a)は、横軸左が左方向、右が右方向を示しており、図から人物がカメラ正面よりも右が体の中心となっていることと、最も横方向の空間計測値が大きくなるのが頭部位置であることが予想される。このヒストグラムでピークを図4で確認すると、図5(a)が示す通りであることが確認できる。

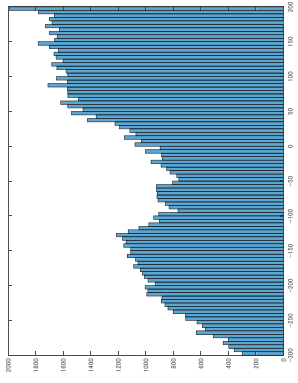
図5(b)は、横軸左が上を示し、右が下を示している。図から、頭部から首さらには動体の概形がヒストグラムに現れていることが確認できる。

図5(c)は、横軸左が手前（カメラ近傍）、右が遠方を示している。奥行き方向は画面に入る物体の全ての座標データがあるが、この空間では人よりも容量が大きき物体がないこと

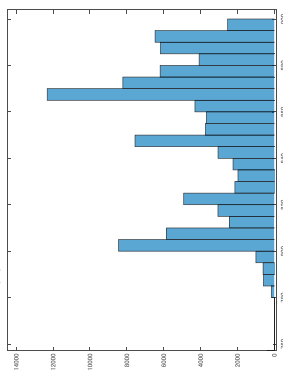
から、ヒストグラムのピーク位置が着席位置となっている。



(a) X軸のヒストグラム



(b) Y軸のヒストグラム



(c) Z軸のヒストグラム
図5 空間計測で得られた横(X軸)、高さ(Y軸)、奥行(Z軸)のヒストグラム

図5のヒストグラムから空間内の最も容量が大きき物体が存在する領域をヒストグラム間領域を図6に示す。なお、その座標と対応するカメラ画像を図7に示す。図6は中心空間領域に人物が収まっていることを示しており、図7はこの手法で抜き出した画像には背景が含まれないことがわかる。

と認証されることで、外出検知および転倒検知で通知先を選ぶのに必要な「誰が」を得ることができている。

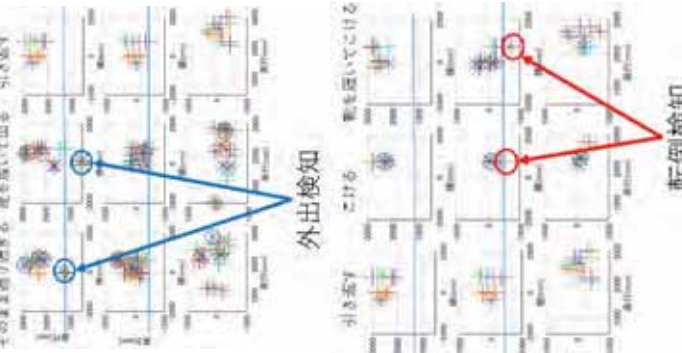


図9 空間計測と顔検知・本人認証システムの統合による外出および転倒検知システムの実行例

4. 今後の展開
本年度は前年度の研究成果を実用化を視野に入れた技術統合に取り組んだ。その結果、顔検知システム、本人認証システム、空間計測システムの統合が行え、外出検知および転倒検知を行うシステムとすることができた。従来、ライブラリ等による成果の共有が行われていたが、使用する言語や用途さらにはシステム性能等に柔軟に対応しきれなかった。本研究で提案する枠組みは取組み成果および学部1年生・2年生のロボットプロジェクト科目において学生も使用すると評価できていることから有用であると評価する。

謝辞
本研究に協力してくれた工学部・情報メディア学科・4年生・清水真大氏、3年生・長瀬

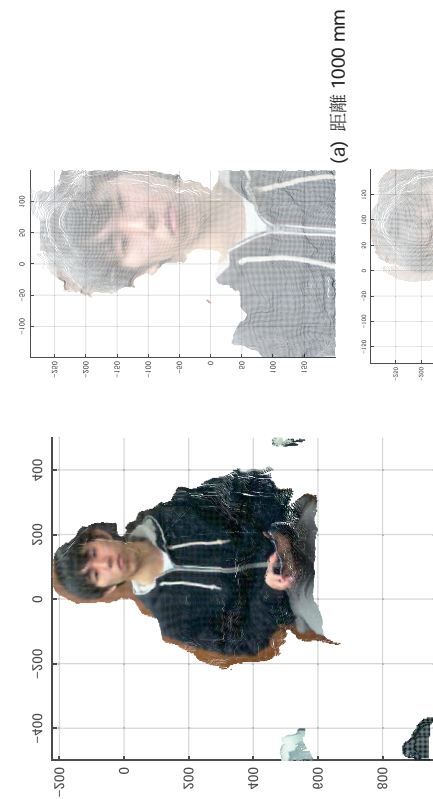


図6 空間内の最大容積の物体領域を抜き出した例

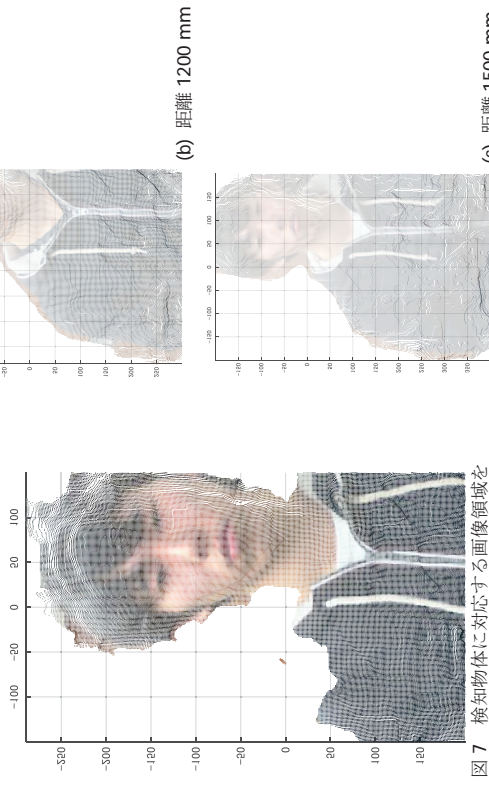


図7 検知物体に対応する画像領域を抜き出した例

本手法では、空間計測データに基づいた抜き出しのため、図8に示す通りカメラからの距離が1000mm、1200mm、1500mmとしても人物領域のみが切り出される。ここでは着座椅子を所定の距離に移動して計測したものである。
図8はカメラから距離が離れることでカメラ撮像画像上のピクセル数が減るため図の解像度が粗く見えるが、本人認証に必要な顔情報および外出検知時に重要な服装が撮像されていることを示している。

翔斗氏、ロボットプロジェクト基礎2・シカケ班の諸氏、ロボットプロジェクト入門2・佐賀開発表した諸氏に感謝する。

5. 主な発表論文等
〔学会発表〕(計 13件)
1.福島学, 柳阿拓也, 近藤善隆, 手島祐二, "現場機材による回転機械振動診断で用いるタッチメントの簡易特性調査", 日本文理大学, 第44巻, 第2号, pp.45-54, 2016

- 2.福島学, 柳阿拓也, 島袋倫, 米川修平, 牧祐樹, 養輪祐樹, 清水真大, 伊藤拓哉, 梶原百香, 田中大真, 市田秀樹, "LabVIEWを用いた研究成果統合と利活用の試み", 日本文理大学紀要, 第44巻, 第2号, pp.99-108, 2016
3.福島学, 柳阿拓也, 鎌田悠平, 島袋倫, 米川修平, 丸尾梨紗, 河納圭一, 近藤善隆, 窪田泰也, "ワイヤレス脳波計測機を用いた音響刺激に対する脳活動と調音材の関係調査", 日本文理大学, 第44巻, 第1号, pp.35-42, 2016

- 4.福島学, 柳阿拓也, 河納圭一, 近藤善隆, "電磁波を用いた見守りシステム構築のための距離と減衰量の関係調査", 日本文理大学紀要, 第44巻, 第1号, pp.83-90, 2016

- 5.福島学, 長瀬翔斗, 柳阿拓也, 舟橋宏樹, 河合修平, 上原正志, 近藤善隆, 松本光雄, 窪田泰也, 柳川博文, "調音材(オーラルソニック)の脳波計測による評価の一検討", 日本音響学会日本音響学会2017年春季研究発表会講演論文集, 1-P-17, 2017

- 6.柳阿拓也, 長瀬翔斗, 近藤善隆, 福島学, 松本光雄, 柳川博文, "ALT-W"による周波数変動を伴う信号解析に関する一検討", 日本音響学会, 日本音響学会2017年春季研究発表会講演論文集, 1-P-15, 2017

- 7.福島学, 柳阿拓也, 近藤善隆, 松本光雄, 手島祐二, 柳川博文, "回転機械振動診断におけるタッチメントにより生じる計測値の差異改善に関する一検討", 電子情報通信学会応用音響研究会, EA2015-80, pp.81-86, 2016

- 8.柳阿拓也, 福島学, 松本光雄, 柳川博文, "時間的周波数変化を伴う音響研究, EA2015-79, pp.75-80, 2016

- 9.舟橋宏樹, 及川幸, 柳阿拓也, 福島学, 松本光雄, 柳川博文, "モノラル雑音信号の周波数帯域あるいは持続時間と音響の幅の関係", 日本音響学会2016年秋季研究発表会講演論文集, 1-P-6, 2016

- 10.柳阿拓也, 清水真大, 舟橋宏樹, 福島学, 松本光雄, 柳川博文, "空間位置計測による聴取位置把握", 日本音響学会2016年秋季研究発表会講演論文集, 1-P-10, 2016

- 11.福島学, 柳阿拓也, 近藤善隆, 松本光雄, 柳川博文, "回転機械振動診断における計測精度改善に関する一検討", 日本音響学会2016年秋季研究発表会講演論文集, 1-P-11, 2016

- 12.上原正志, 河合修平, 大川茂樹, 福島学, "ロボットイクスをを用いた調音材の最適配置の決定手法", 日本音響学会2016年秋季研究発表会講演論文集, 2-9-12, 2016

- 13.河合修平, 上原正志, 大川茂樹, 福島学, "会話に適した音響環境を作る自律移動ロボット", 日本音響学会2016年秋季研究発表会講演論文集, 2-9-13, 2016

地域経済を考慮した地域課題取り組みに向けた プラットフォーム構築

福島学, 松永多苗子 (工学部・情報メディア), 筑紫彰太 (工学部・機械電気),
市田秀樹 (工学部), 今西衛, 本村裕之, 山城興介 (経営経済学部)

研究成果の概要: 工学的研究成果 (工学的「知」) を統合するプラットフォーム開発を進展させるため「地域経済」を視野に入れた取り組みを行った。課題解決を「シカケ」という概念を用いて、工学的な観点と経済的な観点を組み合わせ、地域経済を含む活性化に向けて進めるための「知」のプラットフォームに昇華することを目標とした。地域課題への取り組みとして、1) 木佐上地区での活動、2) 大分地域での活動、3) 生活の質 (QoL) 向上、に取り組み、それぞれの成果から、地域課題の解決は「1つの技術」だけでは無理であることと維持継続には「ビジネス的視点」が重要であることを再認識すると共に継続的取り組みに向けた課題が明らかとなった。

1. 研究の目的

地域課題を技術課題と捉え課題解決を図ることは、技術力向上および品質向上というだけでなく、課題の本質を明らかにするために重要である。このため、平成27年度28年度に工学部で取り組まれている研究成果 (工学的「知」) を統合するためのプラットフォーム開発を進めてきた。

しかし、優れた技術であっても実際の地域活性化に向けた導入を考えると、場面に応じてローカルにされた技術の導入には費用対効果等から困難な場合が多い。また研究レベルでの完成と、地域課題解決での継続的利活用に向けた工学的「知」のプラットフォームの検証が必要である。

そこで本研究では、これまでの異分野間の研究・開発成果をプラットフォームにより融合可能とし、それによる地域課題解決により地域活性化を目指す。課題解決を「シカケ」という概念を用いて、工学的な観点と経済的な観点を組み合わせ、地域経済を含む活性化に向けて進めるための「知」のプラットフォームとラビッドプラットフォーム開発環境構築を目的とする。

2. 研究の方法

地域課題への取り組みとして、次の項目を通してプラットフォームの検証と経済的観点の導入を行う。

- 1) 木佐上地区での活動
 - a) まなび庵: LINE による地域コミュニケーション (2017年10月から12月)
装置の使い方を学ぶだけでなく、地域コミュニティ活性化を視野に入れた学びとして、地域防災への利活用への導入としての学びを実践する。
 - b) ロボットプロジェクト入門2 (1年生科目・

2017年10月から2018年2月)

地域の方々と交流から地域課題を発見し解決策を考えプロトタイプとしてアイデアをカタチにし、地域の方々からの評価を頂く。
c) ロボメカデザインコンペ (課外活動・2017年5月から2018年3月)
ロボットプロジェクト入門2 受入講生が、ロボットプロジェクト基礎2およびHallow (Happiness Long Life Open-innovation Workshop: 生きがいのあるくらしを創るオープンイノベーションワークショップ) を通して工学的知を修得しつつある学生有志が改めて「木佐上地区を念頭に入れた地域課題」に挑戦し、そのプロトタイプ (機能試作モデル) をコンペティションという形で挑戦する。

2) 大分地域での活動
d) JOISA (大分情報産業協会・2017年9月から2018年2月)
サウンズコンテストは OISA (大分県情報サービス産業協会) 主催のイベントの1つで、26年間続いている音楽系コンテストとして歴史がある。このイベントをインターネット配信する。

e) ロボットプロジェクト基礎2 (2年生科目・2017年10月から2018年2月)
商業スペースにシカケ (人の行動に働きかける取り組み) を行い、回遊性改善に挑戦する。

3) 生活の質 (QoL) 向上

f) 睡眠の質改善に向けた計測実験と結果の評価 (2017年4月から2018年3月)
活気ある地域の源である個々人の健康を維持向上することを目的とし、健康を保つために不可欠な睡眠の質を改善する素材に取り組んでおり、本年度は医学的エビデンス取得に取り組む。

3. 研究成果

- 3.1 木佐上地区での活動
 - 3.1.1 まなび庵
2016年度2017年度に「IT講習会」としてタブレットの使い方を講習会を行った。しかし「地域コミュニティ活性化」という観点からもっと役立つ実施方法がないかを考え、単なるIT講習会から「目的を持った学び」に取り組んだ。また、会場で使用した木佐上コミュニティセンターにおいて、「3.3 活の質 (QoL) 向上」の取組み成果をフィードバックする取組みも行った。ここでは講習会における「疲労感」を軽減することを目的とし、響きのある部屋における脳内処理軽減に効果がある調音材の設置を行った。設置位置決定のための計測の様子を図1に、効果計測結果を図2と3に、設置位置を図4に示す。



図1 疲労感軽減のための調音材設置位置決定のために実施した計測の様子

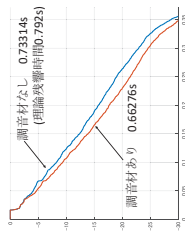


図2 調音材設置による残響時間の変化

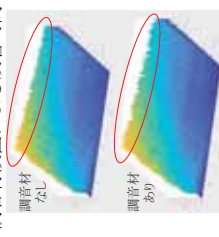


図3 調音材設置による時間・周波数の変化



図4 決定した調音材設置位置

- 3.1.2 ロボットプロジェクト入門2
ロボットプロジェクト入門2 (1年生・後期科目) は木佐上地区をフィールドとして、地域散策やお話をお伺いしながら地域課題を発見し、解決に向けてプロジェクトで取り組む科目である。地域の方々に協力いただいたき、地域のお話を伺い、さらに地域を散策しながら課題を発見し、チームでどう解決すればいいのかを考え、それをカタチにして地域の方々へ提案した。成果報告の様子を図5に示す。またカタチにしたプロトタイプを使ったデモンストラーションの様子を図6に示す。さらに、11チームの中から選ばれたメンバーがさらにブラッシュアップして佐賀県公民館で発表した。その様子を図7に示す。



図5 木佐上コミュニティセンターでの成果報告の様子



図6 デモンストラーションの様子



図7 佐賀県公民館での成果報告の様子

- 3.1.3 ロボメカデザインコンペ
「フューチャードリム! ロボメカ・デザインコンペ2017」は日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス部門主催のコンペティション

で、福岡県、北九州市、久留米市、福岡県産業
デザイン協議会、福岡県ロボット・システム産
業振興会議、北九州ロボットフォーラム、一般
社団法人九州経済連合会、が後援、福岡市科学
館、が共催、メカトラックス株式会社、株式会
社三軟、が協賛で開催された。

地域活性化の要が、高齢者、労働現役世代、
未就業世代の相互を必要としあうことである
と考え、図8に示す「互いを尊重し感謝を交わ
せる地域コミュニティの創生」をスローダウン
としてウェルネスを考案した。システム
は単独では動作せず、主に高齢者が実行補助
具として使用する。補助具として機能するよ
うに、地域情報収集し、例えば図9に示すよ
うに木佐上地区のどこをどう移動しているか、
またその地域の現在の様子などが記録す
ることで、日常においては子供の登下校の見
守りやお祭りの見守り、災害時には避難計画
や避難指示を出すための基礎データを取集し、
杖同士がメッセンジャーネットワークを構成すこ
とに特徴がある。結果としてコンベンション
ンにおいて図10に示す2つの賞を受賞した。

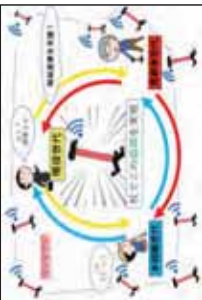


図8 地域活性化のコンセプト



図9 地域情報収集例



図10 受賞した賞状

3. 2 大分地域での活動
3. 2. 1 OISA (大分情報産業協会)
サウンドコンテストは OISA(大分県情報サ
ービス産業協会)主催のコンテストであり、第
26回サウンドコンテストが2018年1月27日
にhichiko総合文化センターで開催された。この
公開審査の様子を図11に示す配信環境で
Ustreamを用いて情報発信した。ライブ配信
中の視聴時間数の変化を図12に示す。また、
劣化を調べるための画像解析例として、ロー
カル録画サーバーに記録された画像と、
Ustream録画(Web内の録画サーバ)に記録
された画像を用いた解析例を図13に示す。



図11 Web動画配信のシステム構成



図12 ライブ配信中の視聴時間数の変化

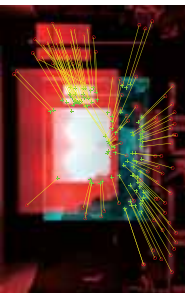


図13 ローカル録画とWeb録画のフレーム間士の対応点解析例

3. 2. 2 ロボットプロジェクト基礎2
ロボットプロジェクト入門に続いて開講さ
れるロボットプロジェクト基礎2において、
商業スペースの1つであるパークプレイスの
課題解決に挑戦した。担当者から現在の課題
をお伺いしたところ、回遊性が指摘された。そ
こで回遊性を改善するためのシカケを考案し、
それにより課題解決に繋がるかの検証を行っ
た。回遊性評価のため図14のようにビデオア
ダクターから、人数および移動軌跡さらには滞在
時間を得るためのシステムを開発した。



図14 回遊性評価のためにビデオアダクターから移動情報を自動抽出するシステムの動作例

3. 3 生活の質 (QoL) 向上
人は響きのある環境でも目的の音を聞き分
けることが可能である。これは、脳内で目的音
の選択と補完を行うことで可能としている。
しかし脳内では限られたエネルギーしか使
うことが出来ないため、響く部屋で話してい
たり、多くの人が話す環境で話していると疲
労感を感じる。これを防ぐために調音材が開
発されており、これまでに脳波計測によりそ
の効果を検証してきた。今回この調音材を睡
眠時に適用することで睡眠の質改善になるか
について調査した。ここでは睡眠中に分泌さ
れるメラトニンに着目した。メラトニンは体
内時計のリズムを司り、免疫系を刺激し感染
症にかかりやすくなる。また、抗酸化作用、血中コ
レステロール濃度を低下させる効果がある。
また、睡眠時にしか分泌されない特徴がある。
睡眠実験に製作した装置を図15に、改善効果
例を図16に示す。



図15 睡眠環境計測用装置

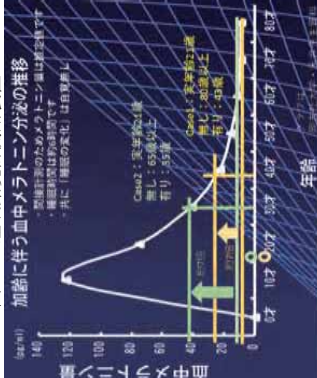


図16 調音材使用による改善効果例

4. 今後の展開
地域課題の解決は「1つの技術」だけではな
く、それが維持継続できるための「ビジネスの視
点」が重要である。効果を評価するための継続
的取組みが必要である。また成果の地域へ
のフィードバックが必要だと考えている。

5. 主な発表論文等

(雑誌論文) (計 1 件)

- 1. 福島学, 松永多苗子, 川崎敏之, 稲川直裕, 筑紫彰法, 室園晶彦, 藤田浩輝, 岡崎寛方, 市田秀樹, 長瀬翔斗, 高橋瑞希, 多賀理理, 大塚一矢, 大塚悠, "ものづくり"を通して持続可能で豊かな地域実現への取り組み", 日本文科大学紀要, 第46巻, pp.181-190, 第1号, 2018年, 査読無
- 2. 福島学, 長瀬翔斗, 河納俊一, 近藤善隆, "サイバー空間共有を旨とした音場空間情報のモデル化とパラメトリック表現の一検討", 日本文科大学紀要, 第46巻, 第1号, pp.101-110, 2018年, 査読無

(学会発表) (計 5 件)

- 1. 長瀬翔斗, 大塚悠, 大塚一矢, 高橋瑞希, 舟橋宏樹, 河納俊一, 近藤善隆, 福島学, 松永多苗子, 手島祐二, 柳川博文, "位相情報に着目した高解像度周波数分析法 (PLATE) の提案", 日本音響学会, 日本音響学会 2018 年春季研究発表会講演論文集, 1-P-40, 2018 (埼玉)
- 2. 長瀬翔斗, 船橋宏樹, 河納俊一, 近藤善隆, 福島学, 松永多苗子, 柳川博文, "ALT-Wを用いた周波数スペクトル分析精度向上と時間追従性に関する一検討", 日本音響学会, 日本音響学会 2017 年秋季研究発表会講演論文集, 1-P-33, 2017, 愛媛
- 3. 船橋宏樹, 長瀬翔斗, 福島学, 松永多苗子, 柳川博文, "残響音場における白色雑音の持続時間と音像幅の関係", 日本音響学会, 日本音響学会 2017 年秋季研究発表会講演論文集, 1-P-34, 2017, 愛媛
- 4. 長瀬翔斗, 福島学, 近藤善隆, 松永多苗子, 柳川博文, "音源特性と両耳差に着目した音場情報のパラメトリック表現", 音学シンポジウム, 情報処理学会研究報告, Vol.2017-AMUS-115 No.29, 2017, 東京
- 5. 福島学, 松永多苗子, 筑紫彰法, 市田秀樹, 今西徹, 木村裕之, 山城真介, "地域経済を考慮した地域課題取組みに向けたブラットフォーム構築", チャレンジ OITA 地域創生活動報告会, 2018, 佐賀県

地域資源を活用した地域観光プロモーションにおける

需要予測に関する研究

今西 衛 (経営経済学科)・本村 裕之 (経営経済学科)
 工藤 順一 (経営経済学科)・山城 興介 (経営経済学科)
 舛田 佳弘 (経営経済学科)・杉浦 嘉雄 (建築学科)
 池畑 義人 (建築学科)

研究成果の概要：豊後大野市に存在する地域観光資源に対してどの程度需要があるのか、アンケートデータに基づいた調査を行い、これまで、認知度やJRを使った需要予測分析を行った。本年度は、祖母・傾・大崩ユネスコエコパークについても需要分析を行った。7割の被験者が大分県に自動車で行くことには、抵抗がないと感じているが、エコパークの地域について限定すると、3割ほど減ってしまうことなどが明らかになった。

1. 研究の目的

大分県は「日本一のおんせん県おんた」を標榜するなど、日本でも有数の温泉地であり観光資源には恵まれている。しかし、豊後大野市は県内で温泉がない自治体の一つである。産業も第1次産業が中心で、高齢化率も県内4位と高い。一方で、豊後大野市には、ジオパークなどの地域資源が数多く存在するが、これらが顕在化されおらず有効な地域観光資源となっていない。

経営経済学科では、平成27年度よりサードピスラーニング・ワールドスタディなどのフィールド活動を通じて、豊後大野の観光における地域資源の魅力や現状、課題を議論し、NBUチャレンジOITA地域創生活動報告会in豊後大野(豊後大野市2016年・2017年・2018年)やものがたり観光行動学会年次大会シンポジウム(2016年、2018年)において、学生おすすめのツアープランを提案や、豊後大野のPR動画、ポスターなどを製作した。

平成28年の地域志向研究では、学生のおすすめのツアープランの課題としてあげられた、「交通手段」と「食」のうち、グルメが重要であることが裏打ちされた格好となった。平成29年は、学生が、大学生観光まちづくりコンテスト(JTBクリエイティブ賞受賞)で提案した、フォトコンテストプログラムをもとに、このコンテストによって、どのくらい訪れるか推計した。需要予測を行うため、アンケートでは、プログラムを行う

ことでの来訪意向、支払意思額、返礼品などについてたずねた。この結果、プログラムによる来訪意向が高いことが分かった。また支払意思額は東京都は交通費を除いても2万円と高額であることが分かった。学生が考えた返礼品は、Tシャツを想定していたが、アンケートによくと、「ふるさと」の食材」が圧倒的であった。

このように、2年連続で、一定の成果を上げているが、依然として課題が残されている。まずは、現状把握の集計結果と、簡単な推計のみであるため、行動経済学に基づいた、統計手法を用いた研究に発展できたい点である。また、本研究事業により、祖母・傾・大崩ユネスコエコパークについての需要分析の要望もあり、本年度はこれら課題に加えて、ユネスコエコパークについて需要やPRについて分析を行う。

2. 研究の方法

学生の地域志向科目「サービスラーニング」「ワールドスタディ」と連携し、受講生とともに、豊後大野市のPR活動について議論する。本年度は、豊後大野市三重町市場で、豊肥本線をイメージした鉄道模型を展示した。また、祖母・傾・大崩山系は、JRを利用して移動することが困難であり、乗用車の利用を想定した。これまでの研究から全国的に豊後大野市の観光資源や、祖母・傾・大崩エコパークの認知度が非常に低いことが分かっている。そこで、アンケート対象者を福岡市都市圏に限定し、インターネットでのア

ンケート調査を実施した。アンケート結果から、需要予測と観光客のニーズの分析を行う。

3. 研究成果

アンケート調査は、調査会社を通じて2019年2月15日(金)~2019年2月18日(月)に実施した。通勤通学で福岡市に訪れる人が5%以上の自治体の39市町村を調査対象とし524名から回答を得た。

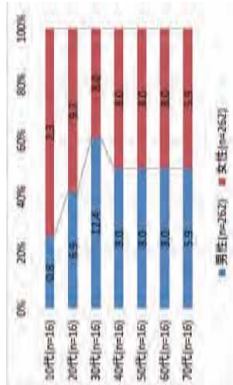


図1 サンプルプロフィール

アンケート調査は、調査会社を通じて2019年2月15日(金)~2019年2月18日(月)に実施した。通勤通学で福岡市に訪れる人が5%以上の自治体の39市町村を調査対象とし524名から回答を得た。

次図は、被験者が車・バイクを持っているかどうかたずねたものである。52%が自身で乗用車・バイクを移動することが可能である。

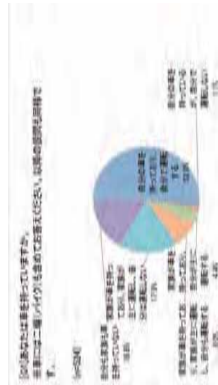


図2 車・バイクの所有

次図は、国内旅行で普段使う交通手段をたずねたものである。旅行では、車の利用が日帰りでは76.4%、宿泊をともなう旅行では51.1%が車を使うことが分かる。



図3 国内旅行での交通手段

次図は、九州各県の旅行に行く際の交通手段をたずねたものである。大分県へは81.9%、鹿児島県でも51.0%が車で旅行すると回答している。このように、福岡都市圏居住者は、車での旅行のニーズが高いと思われる。

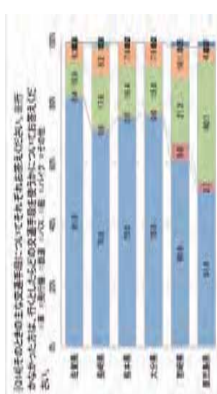


図4 九州各県への旅行の交通手段

次図は、九州各県へ車で行くことに抵抗があるかどうかたずねたものである。大分県へは68.1%が抵抗はないと回答した。このように、旅行での車の移動は抵抗がないと思われる。

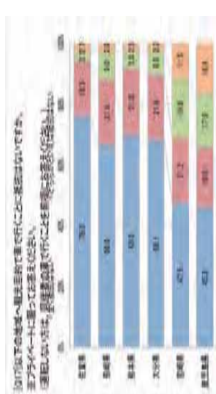


図5 九州各県への車での移動の抵抗感

次に、ユネスコエコパークである「祖母・傾・大崩」山系へ訪れてみたいかたずねたところ、約5割がそれぞれの地域を訪れたいと回答した。特に高千穂町は7割以上が訪れてみたいと回答した。

期待するもの

本研究事業では、豊肥本線を活用した地域活性化をテーマとして、このように車のニーズが高い中、JRの利用は低いのではないかと危惧される。一方で、少子高齢社会を迎え、高齢者ドライバーの問題、若者の車離れ、外国人観光客を考えると、JRを利用した観光のニーズはあると思われる。そこで、Q23では、日豊本線、豊肥本線を掲げ、どれだけの来訪意向があるかたずねてみた。

特急ソニックを利用して別府市に訪れたい人は、4割弱であったのに対して、大分市に訪れたい人は、2割強程度であった。このように、別府市は観光地として認知されているので、来訪意向が高いが、大分市への来訪意向は低いことがうかがえる。これをベンチマークとして、祖母・傾・大崩エココエコパークエリアの来訪意向をたずねた。

特急ソニックとあそぼーいを使って、竹田市、豊後大野市に訪れたい人は、4割弱と、別府市程度とほぼ変わらない。言い換えると、別府市程度の観光の魅力があると言え、これは大きな期待である。

一方、特急ソニックとにちりんを利用して、佐伯市、延岡市、日之影町、高千穂町へ行きたい人は3割弱である。移動時間に4時間以上かかるのは、抵抗があるようである。また、佐伯市への来訪意向が低いことは、観光としての認知度は低いことがうかがえる。

JRを利用したくないと回答した人も、3割強いるので、車のニーズが高い人から見れば、JRの利用は抵抗があることがうかがえる。

今回のアンケートでは、福岡都市圏から各エリアまでの時間距離に関する理論と実証を合わせた需要予測が可能な設問設計になっているが、プロジェクトの遂行上、年度内に分析が終わらなかつたので、次年度に学会、論文発表等で分析結果を公表したい。

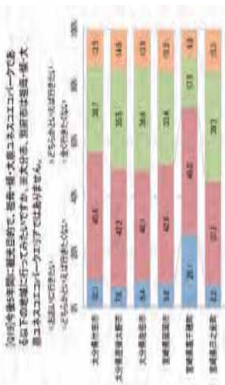


図6 祖母・傾・大崩エココエコエコパークへの来訪意向

祖母・傾・大崩山系へは、JR、バスなどの公共交通機関がない。そこで、それぞれのエリアに車で行くことに抵抗はないかとたずねたところ、4割弱が抵抗はないと回答した。大分県自体は7割が抵抗はないと回答していたので、何らかの方策が必要であることが改めて浮き彫りとなった。

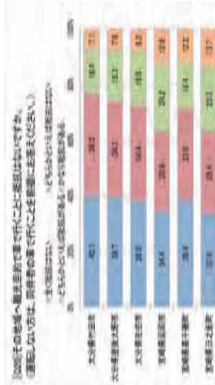


図7 祖母・傾・大崩エココエコエコパークへ車で行くことへの抵抗感

祖母・傾・大崩エココエコエコパークに期待するものとしては以下の結果が得られた。最も高いのが、動植物などの自然で、次に田園風景などの里山が挙げられる。料理などの生活文化は、2番目、3番目に挙げられている人が多いので、ウエイトをつけずに合計すると、3番目に多い。

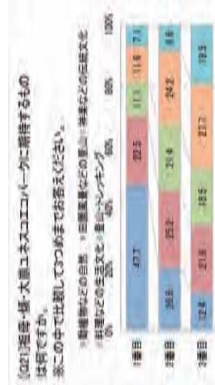


図8 祖母・傾・大崩エココエコエコパークへの期待するもの

Q23 地図で示したエリアは、博多駅から大分駅まで、特急ソニックが30分おきに運行しており、最長約2時間で大分駅に到着します。

その後、竹田市、豊後大野市方面は、九州横断特急、あそぼーい号が運行されており、約1時間程度で到着します。

一方、佐伯市、延岡市方面へは、大分駅から特急ににちりんが接続しており、約2時間で到着します。

これらの列車を利用して、地図で示したエリアに行ってみてみたいですか？(いくつでも)

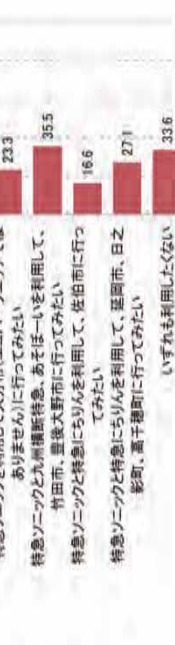


図9 JR 日豊本線、豊肥本線を活用した旅行の来訪意向

4. 今後の展開

引き続き、フィールドスタディなどをはじめとする演習科目と連携し、教育と研究の融合を図る。ようやく、地域との協働が動き出したので、本研究事業の成果をスタートとした、地域活性化につなげていきたい。そのためには、学生は、地域活性化の発案、研究者には、学生の発案が実現可能であるか、実現可能であるならばどのくらいの経済効果が見込めるかを試算することを引き続き継続的に行っていく。

JR九州の減便が社会問題となっているが、本研究、プロジェクトでは一貫してローカル線を活用した観光まちづくりを提案している。今回、福岡都市圏に限って言えば、車での利用が非常に大きいことが分かった。ターゲティングをどこに絞るかで、JRを利用したマーケティングを行うのか、車を利用したマーケティングを行うのか、これらの課題も引き続き研究していきたい。

また、本学と連携協定を結んでいる一般社団法人ぶんどおの里の旅公社とも引き続き活動していくと同時に、地域の有志のみなさんと連携し、COC事業終了後、エネコスエココエコエコパークをはじめとする地域資源とローカル線を活用した教育、研究活動を通じて、地域の活性化とローカル線の維持などにつながる政策の提言につなげたい。

より学術的な研究については、日本文理大学紀要、地域学会など学会発表や査読付論文への投稿を行っていききたい。

5. 主な発表論文等

(雑誌論文) (計1件)

- 今西衛・本村裕之・工藤順一・舛田佳弘・山城興介、"SNSを活用した地域観光プロモーションの効果予測"、日本文理大学紀要第47巻第1号、2019年3月発行予定、査読無。

(学会等発表) (計2件)

- 波澤博幸・今西衛・打田千弘、"熊本・大分地震の観光被害の空間経済効果"、2018年度日本応用経済学会春季大会、2018年6月23日、久留米大学。
- 今西衛、本村裕之、山城興介、"地域資源を活用した観光需要の予測"、日本地域学会第55回(2018年)年次大会、2018年10月6日、北海学園大学。
- 今西衛・本村裕之・工藤順一・山城興介・舛田佳弘・杉浦嘉雄・池田義人、"地域資源を活用した地域観光プロモーションにおける需要予測に関する研究"、チャレンジャー OITA 地域創生活動報告会2019、2019年3月19日、豊後大野市。

(図書) (計0件)

(産業財産権)

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

高齢者向けものづくり教材の開発

鈴木秀男^{*1} 足立元^{*1} 松永多苗子^{*1} 星芝行^{*1}
 稲川直裕^{*2} 平居孝之^{*3}

^{*1}情報メディア学科 ^{*2}機械電気工学科 ^{*3}建築学科

研究成果の概要：平成28年度より高齢者向けのものづくり教材の開発に取り組んでいる。平成28年度では、実施に関する方向性の検討、平成29年度は、実際にものづくり教室を実施する中で、多くの有意義な意見を頂くとともに、実施者としても多くの気づきがあり、教材の改良と新規開発に取り組み教材自体の多様化を実現した。本年度は、昨年度から引き続き、教材の改良と開発に取り組み、従来実施できなかったグループでのものづくり教材の開発を検討し、実際に教材を開発し実施してきた。本報告では、これまでの成果をまとめるとともに、本年度の開発教材についてまとめる。

1. はじめに

平成28年度より高齢者向けのものづくり教材の開発に取り組んでいる。平成28年度では、既存の教材を使い、実施の可否に関する方向性を検討した。その結果、高齢者の方が教材を工夫すれば、十分対応できることが確認された。平成29年度は、平成28年度の際に適用可能な教材を開発した。平成28年度と平成29年度の実施を通して、高齢者や施設の方々から多くの有意義な意見を頂くとともに、実施者としても多くの気づきがあり、教材の改良と新規開発にフィードバックさせ、教材自体の多様化を実現してきた。本年度は、引き続き、教材の改良と開発に関するものづくり教材の開発を検討し、実際に教材を開発し実施してきた。

高齢者を対象とするものづくり教室だけでなく、高齢者と子供たちとの合同ものづくり教室を実施するなかで、地域との連携を通して、ものづくり教室が高齢者支援に有効であるという手ごたえを感じている。ものづくりを通して、健全な高齢者を維持でき、子供たちと高齢者との懸け橋となり、地域の活性化に貢献できればと考えている。本報告では、これまでの成果と、本年度実施してきた教材の改良と新規教材の開発について紹介する。

2. 研究の目的

本研究では、ものづくりを通して健全な高齢者を維持することを目的としている。ものづくりは、指先を動かし、形や色を判断する作業であり、高齢者を対象とした場合、作業

を通して、脳の活性化が期待できるとともに、コミュニケーションの促進や生きがいの認識につながることを期待できる。ものづくりを通して、高齢者の機能回復あるいは機能維持につながり、認知症の予防に効果があれば、徘徊高齢者自体を減少できるものと考えている。

教育への還元では、どのような教材開発、どのような改良が最適なのかを考えると、地域の抱えている問題を認識し、自ら手で開発した教材が地域に役立つことととも、実施者としても多くの気づきがあり、教材の改良と新規開発にフィードバックさせ、教材自体の多様化を実現してきた。本年度は、引き続き、教材の改良と開発に関するものづくり教材の開発を検討し、実際に教材を開発し実施してきた。

3. 研究の方法

本研究では、マイコンを用いた電子工作を中心に扱う。通常、電子工作では、プリント基板上に部品を実装するために、はんだ付け等の作業が必要となる。しかし、高齢者を対象とするため、やけど等のリスクを避け、安全で安心、時短で修正も容易なブレッドボードを使用する。ブレッドボードの使用においては、高齢者を意識して、以下の点を工夫している。

- ・認識しやすいうようにジャンパ線は平面配線のパターンとし、立体交差や斜め線は使用しない
 - ・取り扱いが容易になるように部品は事前加工を施し、ジャストフィットさせる
- これら2点の詳細と実装パターン、平成29年度までに開発した教材の動作については、文献(1)から(5)を参照されたい。本年度は、以下の2点について検討してきた。

1. 開発済み教材の改良
これまでに、多くの種類、多くのパターンでの実装を実現した教材を開発している。細かい点での改良の余地があり、さらなる改良を実施している。

II. 新規教材の開発

これまで実現できなかったグループで取り組むことができた教材を開発した。従来のものづくりは、一人1セットで制作し、個人で使用することを前提としていた。また、組み立ても一回の講座で2時間程度で完成することを想定している。従来からのイルミネーションの要望を頂いていたものの、一人で作るには難しいことと、一人分の教材費が高つくことが、実施へのハードルを高めていた。個人のものではなく、施設で使用する場合、施設に飾るものという認識で、グループで1セットを組み立てるという方向で検討した。その結果、工夫をすることで、安価にイルミネーションを制作できる教材の開発に成功した。

4. 改良及び新規開発の教材

4. 1 脳トレゲームの改良
平成29年度に完成した脳トレゲームは、図1のようなものであった。LEDは5mmの大きさのものを3個直列に配置している。スイッチもその下側に3個直列に配置している。

3色版でも十分に楽しめるゲームであるが、より楽しさや難しさを追求したいとの要望で4色版を考えた。5mmのLEDをブレッドボードの大きさは変えずに、パターンに適用される制約もそのまま4色版で設計すると、5mmのLEDでは配置に無理が生じ実現できない。3mmのLEDを使うことで実現が可能であるが、大きさが若干小さくなり、組み立て時に扱い難くなり、組み立ての難易度が上がってしまう。

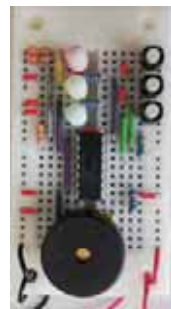


図1 脳トレゲーム (H29年度版)

配線パターンを詳細に検討することで、ブレッドボードのホールがもう一つあれば実現できることが分かった。しかし、物理的に現

状では、ホールを一つ追加することは出来ない。そこで、ICソケットを使い、未使用のマイコンのピンに対応するソケットのピンを使用できないように加工することとした。マイコンの価格に比べICソケットの価格は安価なので、必要に応じてマイコンは置き換えができる利点がある。このように独自の加工を実施し、5mmのLEDで4色版を実現した。制作者は、マイコンをICソケットを経由してブレッドボードに挿すだけで良いので、難易度が上がることはない。このようにして実現した4色版の脳トレゲームが図2である。



図2 脳トレゲーム (H30年度版)

図2では、有色のLEDを使っている。有色の場合、ゲームを始める前から色の配置が分かってしまうため、図3左のような消灯時は見た目がすべて透明なLEDを使うこともできる。実際には、白色のキャップを付けるが、点灯するまで色が分からなくなり、ゲームの面白さが薄す。一方で、組み立て時には、どの色が分からないため、発色は完成後の楽しみとして面白さが薄す。図3右のように有色のキャップもあるため、すべてのLEDを透明な色の同一製品で組み立て、キャップだけ有色とすることもできる。LED自体のコストは、このパターンが最も安価となる。



図3 透明LED (左) と有色キャップ (右)

4. 2 電子サイコロ (デジタル版) の改良
すでに図4のような電子サイコロのデジタル表示版を開発している。今回の改良では、未使用ピンの活用とデバッグ作業の簡易化を考慮している。

7セグメントLEDを使って、いくつかの隠しコマンドを取り入れているが、スイッチが一つのため、複雑なゲームなどを実行させることが難しい。そこで、未使用ピンを使い、スイッチを複数個にした。スイッチの組

み合わせで、より複雑なゲーム性に富んだプログラムの開発が可能となっている。

図4のパターンでものづくり教室を開催した際に、うまく動作しない場合、実装のパターンをチェックする必要がある。この際、図4では、7セグメントLEDの下側にジャンパ線が隠れており、一旦7セグメントLEDを外さないことこの部分のパターンの確認と再構成ができない。これは、あくまでも実装者側の問題であるが、ものづくり教室などでは、少人数で多くのボードのチェックが必要になることもある。そこで、7セグメントLEDの下側に隠れないようなパターンに変更した。図5で分かるように7セグメントLEDの下側のジャンパ線は、すべて7セグメントLEDを横切るように設計されており、7セグメントLEDを取り外さなくてもパターンのデバッグが可能であり、少人数でも効率的にボードのチェックが可能となっている。



図4 電子サイコロ (H29 年度版)

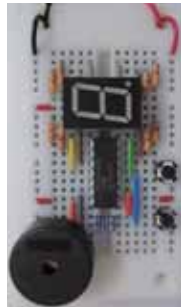


図5 電子サイコロ (H30 年度版)

4. 3 クリスマスマイルミネーション (新編教材)
新たに、クリスマス用のイルミネーションに関する教材を開発した。従来の教材は、個人で1セットの部品を使い、自分用の完成品を目指すものであった。クリスマスイルミネーションは以前から要望があったが、個人で制作するには時間がかかることと、コスト面でも高価になってしまいうことから実施してこなかった。

想定している高齢者向けのものづくり教室は、休憩をはさんで1回2時間程度で、1回で完結するよう教材を想定している。イルミネーションでは、電飾部分とオブジェ部分

があるため、個人で制作するには1回での完結が難しくなる。

高齢者向けのものづくり教室では、なるべし汎用性のある部品を使い、金銭的な負担が少なくなるように部品のコストも意識している。イルミネーションでは、個人で制作するには、コスト面でも不利となることが考えられるため実施していなかった。

今回、これらの問題を解決するために、オブジェ班と電飾班に分かれてものづくりを実施し、各班での完成品を一体化させることでイルミネーションを制作することとした。グループで制作するため、完成品は個人の所有ではなく、施設や施設内を装飾するイルミネーションとして活用することを想定している。

オブジェ班は、イルミネーションの元となるクリスマスツリーとクリスマスリース、行燈の制作を担当する。ツリーとリースは、図6のようなものを使用する。これ自体は市販されているもので、安価に手に入る。

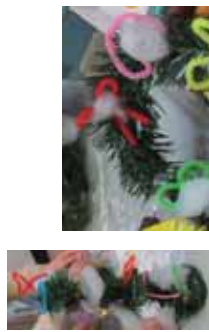


図6 クリスマスツリーとリース

行燈は、厚紙にあらかじめ線を引いたものを用意し、この線に沿ってはさみで切り、丸めて糊付けして図7のような形にする。この行燈は、もともとデザイン系の学生用に考えられた演習課題であるが、高齢者でも対応できるよりに改良している。



図7 行燈形のオブジェ

電飾班では、図8のようなストロリングLEDを使う。このLEDには、電池ボックス

が接続されており、スイッチを入れるとストロリング上に配置されたLEDが点灯するものである。このLEDをツリーやリースに巻き付けてイルミネーションを制作しても良いが、点灯のみなので、見た目のインパクトが弱い。そこで、マイコンを使って、LEDをランダムに点滅させるように改良した。



図8 ストリングLED

まず電池ボックスの中の仕切り板とスイッチを取り除き、電極へ接続されているリード線を切断する。リード線は、単線にはんだ付けし、熱収縮チューブで回りを保護しておく。次に小型のブレッドボードに穴をあけて、その穴から新たに接続する電池ボックスのリードを通すことにした。ボードは、仕切り板を取り除いた電池ボックスの電池抑えのばねにより、程よく固定される。完成形は図9のようになる。



図9 ストリングLED用のLED制御部

図9の半透明のケースはもともと電池ボックスであったため、上蓋も付いており、上蓋を閉じて、周りをシールドすることで日常的には防水の機能を備え、直接雨水等に当たらないようにすれば、屋外でも使用可能である。

行燈には、図10のようなLEDを内部に配置し、内部から光を当てる。この光は、ランダムに色が変わり、周期も変化するものである。周期はゆっくりのパターンと速いパターンを用意している。配置では、LEDを3個使用しているが、製品のばらつきのため、周期が若干異なり、逆にこの光の乱れが行燈により美しく照らしている。

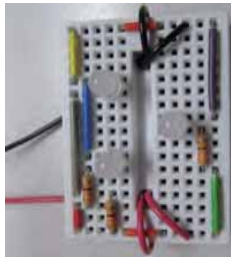


図10 行燈用LED部

5. 今後の展開
本年度は新規教材として、グループでの活動を取り入れている。従来の個人とは異なり、新しい試みのものづくりとしてさらに発展させたいと考えている。
本プロジェクトで開発した教材が健全な高齢者の維持、地域の活性化へと発展するように、開発した教材を使用した、ものづくり教室を積極的に展開したいと考えている。

(謝辞) 養護老人ホーム常楽荘の皆様、おがた子供チャレンジに参加された皆様、その他協力いただいた関係各位に心より感謝申し上げます。

参考文献

1. 鈴木秀男 他、高齢者向けものづくり教材の開発、平成28年度COC年次報告書
2. 鈴木秀男 他、高齢者向けものづくり教材の開発、平成29年度COC年次報告書
3. 鈴木秀男 他、高齢者向けものづくり教材の開発、日本文理大学紀要、Vol.45 No.2 pp.41-46
4. 鈴木秀男 他、高齢者向けものづくり教材の開発、チャレンジ OITA 地域創生活動報告会、平成29年3月3日、豊後大野市
5. 鈴木秀男 他、高齢者向けものづくり教材の開発、チャレンジ OITA 地域創生活動報告会、平成30年2月21日、豊後大野市
6. 鈴木秀男 他、高齢者向けものづくり教材の開発、チャレンジ OITA 地域創生活動報告会、平成31年3月19日、豊後大野市

日本文理大学 大学COC事業 地域志向プロジェクト研究 採択テーマ一覧

No.	期間	代表者	プロジェクト参加者	申請分野	対象自治体名	プロジェクト研究テーマ
1	平成27年度	坂口 昌宏 経営経済学科	・鍋田 耕作 (経営経済学科) ・河村 裕次 (経営経済学科)	⑤健康増進・生活支援によるコミュニティの維持	③ 豊後大野市	地域住民を主体とした地域づくりによる介護予防に関する域学協働プロジェクト研究
2	平成27～28年度	吉森 聖貴 情報メディア学科	・鈴木 秀男 (情報メディア学科) ・福島 学 (情報メディア学科) ・稲川 直裕 (機械電気工学科)	①小規模・高齢化が深刻な集落・地域コミュニティの維持・活性化	③ 豊後大野市	徘徊老人の位置検出システムのための画像処理ソフトの開発
3	平成27～28年度	川崎 敏之 機械電気工学科	・坂井 美穂 (情報メディア学科) ・池畑 義人 (建築学科) ・岡崎 寛万 (航空宇宙工学科) ・小幡 章 (航空宇宙工学科)	⑦地域ブランドの発掘による交流人口の増加・産業の活性化(6次化)	①大分県	大分県農業のブランド化と関連産業活性化を目的とした自然エネルギー利用型プラズマ農業に関する研究開発
4	平成27～28年度	福島 学 情報メディア学科	・坪倉 篤志 (情報メディア学科) ・濱田 大助 (情報メディア学科) ・松永 多苗子 (情報メディア学科) ・市田 秀樹 (大学COC事業担当)	①小規模・高齢化が深刻な集落・地域コミュニティの維持・活性化	②大分市	要介護者のコミュニケーション支援システムの開発 ー共通プラットフォームによる効率良いICT技術の利活用ー
5	平成29年度	福島 学 情報メディア学科	・松永 多苗子 (情報メディア学科) ・筑紫 彰太 (機械電気工学科) ・今西 衛 (経営経済学科) ・本村 裕之 (経営経済学科) ・山城 興介 (経営経済学科) ・市田 秀樹 (大学COC事業担当)	④地域商店・商店街の活性化による地域振興	②大分市	地域経済を考慮した地域課題取り組みに向けたプラットフォーム構築
6	平成28～30年度	今西 衛 経営経済学科	・本村 裕之 (経営経済学科) ・工藤 順一 (経営経済学科) ・山城 興介 (経営経済学科) ・舩田 佳弘 (経営経済学科) ・杉浦 嘉雄 (建築学科) ・池畑 義人 (建築学科)	⑦地域ブランドの発掘による交流人口の増加・産業の活性化(6次化)	①大分県	地域資源を活用した地域観光プロモーションにおける需要予測に関する研究
7	平成28～30年度	鈴木 秀男 情報メディア学科	・足立 元 (情報メディア学科) ・星芝 貴行 (情報メディア学科) ・松永 多苗子 (情報メディア学科) ・稲川 直裕 (機械電気工学科) ・平居 孝之 (建築学科) ・濱永 康仁 (建築学科) ・濱田 大助 (情報メディア学科)	①小規模・高齢化が深刻な集落・地域コミュニティの維持・活性化	③ 豊後大野市	高齢者向けものづくり教材の開発

平成26年度 日本文理大学 卒業研究・論文・設計 地域志向関連リスト

No	学籍番号	卒業研究・論文・設計テーマ	共同研究
1	機械電気工学科	トマト収穫に向けたブラットフォームの設計と開発	
2	機械電気工学科	熱水発電装置の基礎研究 -単モジュール特性-	
3	機械電気工学科	熱水発電装置の基礎研究 -多モジュール化特性-	2名
4	建築学科	佐賀県地区の少子高齢化の現状と地域づくり方策に関する研究	2名
5	建築学科	河川プールに着目した豊後大野市ふるさと体験村の魅力向上に関する研究	
6	建築学科	河川シミュレーションを用いた豊後大野市における流域環境の調査	
7	建築学科	カエルを指標とした里山(竹田市岡本地区)における生物多様性の現状	
8	建築学科	南海トラフ巨大地震を想定した津波避難に関する研究	
9	建築学科	コンクリート骨材に利用される川砂および海砂に関する調査	
10	建築学科	中判田駅を中心とするまちづくりプロジェクト その1～駅の利用状況について～	
11	建築学科	中判田駅を中心とするまちづくりプロジェクト その2～施設改善について～	
12	建築学科	中判田駅を中心とするまちづくりプロジェクト その3～ココロカコウ～保存と再生を繰り返す人々の暮らしをよびかえる提案～(卒業設計)	
13	建築学科	中判田駅を中心とするまちづくりプロジェクト その4～rising town～四季を感じる願いの場～(卒業設計)	2名
14	建築学科	Circle of people 【卒業設計:大分市佐賀岡地区】	
15	建築学科	Pricelss Space ～人生にちよとした贅沢を～【卒業設計:大分市かんたん公園】	2名
16	建築学科	海からまちへ、まちから海へ【卒業設計:大分市住吉泊地】	
17	建築学科	分かつら合。～本音と建前の仮面の世界へ～【卒業設計:大分市府内町病院】	
18	建築学科	人隣～ひとり～【卒業設計:大分市菅葉川団地】	
19	建築学科	三つの道が交錯する駅【卒業設計:臼杵駅】	
20	建築学科	precious time of mind【卒業設計:大分空港】	
21	建築学科	station for the people 梓葉(卒業設計)	
22	建築学科	"SANBOU SUNSHINE" ～今後の日本の地熱発電所のあるべき姿の提案～(卒業設計)	
23	航空宇宙工学科	温泉熱を利用したスターリングエンジン ～設計、製作、稼働～	
24	情報メディア工学科	「おおい」豊後大野市ジオパークの地域活性化を促進させる映像制作	
25	情報メディア工学科	映像制作「おおい」姫島ジオパーク	
26	情報メディア工学科	映像制作「国東半島 世界農業遺産認定としたいだけ栽培」	
27	情報メディア工学科	【OITA DESIGN POWER 2014】Design Caf 2 -プロアマ同テーマ作品制作への参加-	
28	経営経済学科	ジオパークの現状と課題～豊後大野市の地域活性化に向けた私見～	
29	経営経済学科	大分駅再開発と九州内の主要駅再開発の検証	6名
30	経営経済学科	大分県地域経済の分析	
31	経営経済学科	九州における鉄道観光の必要性	
32	経営経済学科	九州自動車道が大分・宮崎にもたすもの	2名
33	経営経済学科	トヨタ自動車の経営戦略と大分におけるトヨタディーラーの販売戦略	
34	経営経済学科	別府温泉の歴史と現状	
35	経営経済学科	宇佐神宮の歴史と経済の進展について	
36	経営経済学科	大分トリニータが大分県にもたらす地域貢献に関する一考察	
37	経営経済学科	地方都市におけるUクラブの経営に関する一考察-サガン鳥栖、大分トリニータを事例として-	
38	経営経済学科	日本文理大学学生のアルバイトにおける労働環境に関する研究	

平成27年度 日本文理大学 卒業研究・論文・設計 地域志向関連リスト

No.	学科	内容	共同研究
1	機械電気工学科	ブラズマジェットによる水底への活性酸素輸送について(照射距離の影響)	
2	機械電気工学科	ブラズマジェットによる水底への活性酸素輸送について(水質の影響)	
3	機械電気工学科	ブラズマジェットによる水底への活性酸素輸送について(ガス流量の影響)	
4	機械電気工学科	ブラズマジェットによる水底への活性酸素輸送について(ブラズマ発生条件の影響)	
5	機械電気工学科	ブラズマジェットによる活性酸素のゲル膜透過について	
6	機械電気工学科	トマト収穫に向けたトマト収穫ロボットの開発	
7	建築学科	Global Communication Centre	
8	建築学科	snew of nature 自然の筋	
9	建築学科	ふるさと体験村におけるホテルの生息環境の評価に関する研究	
10	建築学科	山国川における出水時の流量と土砂輸送に関する研究	
11	建築学科	大分県における最新測量業務に関する研究	2名
12	建築学科	大分県における最新測量業務に関する研究 -業界アンケート調査と現状-	2名
13	建築学科	日差しの街	
14	建築学科	明治以降の那須湯田における風景の広がり近代化についての研究	
15	建築学科	1号館 PROJECT	
16	建築学科	大分県市町村別空き家バンク制度に関する現状調査について	2名
17	建築学科	ふるさと体験村における出水時の土砂動態に関する研究	
18	建築学科	大分市・別府市におけるラーメン店の出店条件に関する研究	
19	建築学科	竹田市岡本地区における生物多様性に配慮した園場整備の計画～カエルを「生物指標」にして～	
20	建築学科	ミンナノイェ ～再生する町と街～	
21	建築学科	Packet Home - 商店街におけるSNS 的建築の提案-	
22	建築学科	ICTを用いたまちづくりに関する研究～梓葉市城下町地区におけるケーススタディ～	
23	建築学科	縁 ～未来への片道切符～	
24	建築学科	つながりの門	
25	航空宇宙工学科	顕微鏡を用いた顕微鏡運動軌形に基づいた構子選択基準に関する研究	
26	情報メディア工学科	小出力電磁波レーダを用いた位置測定による独居宅見守りシステムの一検討	
27	情報メディア工学科	ニューロマーケティングに向けた脳波計測による心的効果分析の実験的検討	
28	情報メディア工学科	基本アルゴリズムの理解と実装コードレビューでの問題についての一検討	
29	情報メディア工学科	メニュー表が対象者に与える印象と最も効果的な配置方法の提案	
30	情報メディア工学科	SoCを含むIoTネットワーク環境でのシステム開発における基本設計に関する基礎的検討	
31	情報メディア工学科	表現研究「大学CMにおける有効な表現方法の研究」	
32	情報メディア工学科	映像制作「SPATIO」ミュージックビデオ ドラマ構成を取り入れたMV	
33	情報メディア工学科	湯布院地区・別府地区・長湯地区の観光ホテルおよび旅館のwebサイトに関する調査	
34	情報メディア工学科	モバイルフレンドリー対応WEB サイトの現状と対策	
35	情報メディア工学科	「人とペットの共存」をテーマとした作品の制作-	
36	情報メディア工学科	通信ネットワークにおける不具合原因の効率的特定に必要な基礎データの実際の検出収集	2名
37	情報メディア工学科	防犯カメラの録画映像を対象とした個人識別のための特徴抽出に関する研究	
38	情報メディア工学科	SNS 記事の作成～蒲江の現在～	
39	経営経済学科	駅ビル再開発と消費者行動	20名
40	経営経済学科	大分県のNPO法人の現状と課題	2名
41	経営経済学科	高齢者に対する地域福祉の在り方	4名
42	経営経済学科	宇佐市安心寮のグリーンツーリズムについて	
43	経営経済学科	大分県の一村一品活動の現状と課題	2名
44	経営経済学科	住民同士の関心を育てる地域づくりのための一考察～ソーシャルーカーの視点から～	5名
45	経営経済学科	大分県トヨタグループの財務分析	2名
46	経営経済学科	観光における訪日外国人の満足度と目的の現状	
47	経営経済学科	ふるさと納税の現状と課題～制度がもたらす地域発展の展望～	
48	経営経済学科	マラソン大会がもたらす経済効果	
49	経営経済学科	国際観光温泉文化都市の経済効果分析～別府市の事例分析を中心として～	
50	経営経済学科	わが国の地方公共団体の比較分析-宮崎県と大分県の財務書類を中心として-	

No.	学科	研究題目	共同研究
1	機械電気工学科	大分市内域天守閣の3D設計について	
2	農林工学部 農工学科	農業振興対策用IoT検知システムの開発	
3	建築学科	UMIによる写真測量システム構築に関する調査・研究～大分県におけるUMIに関する取り組みについて～	
4	建築学科	国道4号フェリー四国側利用者の交通行動特性と佐賀関観光志向に関する調査	
5	建築学科	大分市におけるシェアサイクル利用拡大のための一考察	
6	建築学科	無人化駅の短所を補完するための駅のリニューアル	
7	建築学科	空き家ストックに関する調査 ～竹田の民家再生プロジェクト～	
8	建築学科	第二の人生でまちづくりをしますか? ～豊後大野市0300～	
9	建築学科	理髪店業の閉鎖の要因の調査に関する調査	
10	建築学科	南都トラフ巨大地震を想定した津波避難に関する調査～米水津北部地区の避難時間と距離について～	2名
11	建築学科	大分地区の土地利用の変化に関する調査～2016年における大分地区(0年間)での変化について～	2名
12	建築学科	大分市立中田小中一貫校における教師ステーションの利用実態から見た勤務空間について	
13	建築学科	教員コミュニティによる中津干渉の流れの研究	
14	建築学科	大新田海岸におけるカブトガニの調査調査	
15	建築学科	中津干渉における環境教育が児童の情操に及ぼす影響	
16	建築学科	木佐上地区における子期川反乱浸シミュレーション	
17	建築学科	臼杵市旧城下の景観形成に関する調査	
18	建築学科	大分市旧中心市街地における既存コンクリートブロック塀の構造安全性に関する調査研究	
19	建築学科	佐賀県におけるブロック塀の耐震性に関する調査研究～地域住民への危険ブロック塀の普及のために～	
20	建築学科	大分市の東60年を経過したRC構造物の現存強度に関する調査	
21	建築学科	電気線分析による中津干渉を構成する土砂の由来に関する調査	
22	建築学科	大分県内の再生資材を使用したコンクリートの強度特性に関する長期的研究	
23	情報メディア学科	大分県メディア学科 大分県メディア学科 大分県メディア学科	
24	情報メディア学科	大分県メディア学科 大分県メディア学科 大分県メディア学科	
25	情報メディア学科	森林管理に向けたドローン搭載型元計測カメラによる樹木直径計測	
26	情報メディア学科	環境メディア学科 環境メディア学科 環境メディア学科	
27	情報メディア学科	環境メディア学科 環境メディア学科 環境メディア学科	
28	情報メディア学科	環境メディア学科 環境メディア学科 環境メディア学科	
29	経営経済学科	ファミリーストラン業務の財務分析	
30	経営経済学科	リリーの財務分析～鹿児島県ユナイテッドFCと大分トリニータの比較～	
31	経営経済学科	竹田市の歴史を踏まえて～今後どうしていくか	
32	経営経済学科	由布院の歴史と温泉地・観光地における課題	
33	経営経済学科	竹田市の活性化	
34	経営経済学科	佐賀市の現状を把握し、何が必要か考える	
35	経営経済学科	日本の農業における問題点と改善策	
36	経営経済学科	臼杵が行う移住定住性の課題と効果	
37	経営経済学科	ラグビーワールドカップが大分県にもたらす経済効果	2名
38	経営経済学科	チアリーディングにおける地域活性化とその役割	2名
39	経営経済学科	プロ野球が地域に与える経済効果	2名
40	経営経済学科	県民の勤労者に対する労働者の労働力と地域活性化の経済効果	2名
41	経営経済学科	ラグビーワールドカップの大分県への経済効果	2名
42	経営経済学科	どうすれば若者が豊後大野市に定住できるのか	
43	経営経済学科	県民の勤労者に対する労働者の労働力と地域活性化の経済効果	4名
44	経営経済学科	大分県心部(足利)の現状を踏まえて～今後どうしていくか	4名
45	経営経済学科	フォトコンテストプログラムが豊後大野市にもたらす経済効果と観光客の集客効果について	2名
46	経営経済学科	ローカル線と食・自然を活かした観光振興の取組み～豊後大野市をフィールドとして～	3名
47	経営経済学科	お酒で豊後大野市を活性化させる～豊後大野市酒造ソニアプログラムの提案	3名
48	経営経済学科	佐賀市の現状を把握し、何が必要か考える	3名
49	経営経済学科	地域課題の解決に向けたクラウドファンディングの成功要因～大分県における事例分析から～	
50	経営経済学科	企業と社会的責任～福祉と地域の繋がりに関する調査	
51	経営経済学科	温泉を活かした大分県の観光と地域活性化	
52	経営経済学科	社会資本の整備と地域経済の発展 ～大分県の道徳について～	5名
53	経営経済学科	空き家対策における民泊ビジネスの活用	
54	経営経済学科	身近な税金	
55	経営経済学科	日本の地震災害について	
56	経営経済学科	ラグビーワールドカップ2019に関する考察～大分県を事例として～	2名
57	経営経済学科	総合型地域スポーツクラブの会員獲得を目的としたホームページ作成	4名
58	経営経済学科	アムエフララお泊りした開業前の大分県心部の利用実態調査	7名
59	経営経済学科	宮崎県からパークプレイス大分への利用者調査	
60	経営経済学科	VRで豊後～最新技術と観光の融合～	2名

4 . 大学COC事業 活動報告会



「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」キックオフシンポジウム
チャレンジOITA人材育成フォーラム 2014

地方の高校・大学で求められるアクティブラーニング
～地域で活躍できる若者を育てるために必要な教育改革～

2014

日時 11/11(火)
13:00 ▶ 16:40

会場 ホルトホール大分
大分市金地町1丁目5番1号
TEL.097-576-7655 3階 大会議室

入場 無料

少子高齢化やグローバル化の中で
地方に求められる教育改革を考える!

開催趣旨

少子高齢化に伴う社会の活力低下や地域コミュニティの衰退、都市と地方の格差拡大、さらにはグローバル化による産業構造の変化や自然災害の脅威など様々な取り巻く情勢は刻々と変化しています。その中で、日本文理大学は、文部科学省「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」に選定され、様々な地域課題を乗り切るために必要な新たな心と専門的課題解決力を兼ね備える「地域創生人材」の育成を地場での実践活動により目指しています。大学COC事業プロジェクトを先取りし、地方創生」を先取りし、地方の課題が顕著する中、若者を育てるために、高校・大学・社会が連携して取り組むための教育政策の立案の現場で、教育を再理解し、その教育を要するするための取組みや教育手法を議論することで、高校・大学・社会が連携して取り組むための教育政策の立案を共有することを目的とします。

NBUは地(知)の拠点として

「豊かな心と専門的課題解決力を持つおおいだ地域創生人材の育成」
に取り組みます

文部科学省が自治体を中心に地域社会と連携し、全国的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を進める大学等を支援する「平成26年度 地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」に、本学が申請した取り組みがこれまでに人間力育成の成果とともに評価を受け認定されました。今年度の本事業には、国公私立大学等から237件の申請があり、25件のみが選定されたという狭き門でした。

連携自治体：大分県・大分市・豊後大野市

プログラム

主催者挨拶 13:00
平居 孝之(日本文理大学 学長)

基調講演 13:10

教育に求められる変容：
若者を育てるアクティブラーニング
瀧上 慎一氏
(京都大学高等教育研究開発推進センター 教授)

基調報告 14:25

熊本における地域と協働した高校生教育の可能性
八木 浩光氏
(一般財団法人熊本国際交流振興事業団 事務局長)

パネルディスカッション 15:05

これからの地方の人材に必要な中等・高等教育と
社会の接続をどう実現するか？
コーディネーター
成田 秀太郎氏(学校法人河合塾 教育研究開発本部 開発研究員)

パネルディスカッション 15:05

大分の未来をまもり、つくる人材育成の可能性
コーディネーター
栗田 充治氏(豊後大学 学長)

閉会挨拶 16:40

村嶋 幸代(大分県立看護科学大学 学長)

「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」

平成27年度 成果発表会&合同シンポジウム
～地域をまもり、地域をつくる、大学の取り組み～

2016
日時 2/11(木)
13:00 ▶ 16:30

会場 ホルトホール大分
大分市金地町1丁目5番1号
TEL.097-576-7555 3階 大会議室

地方創生へ向けて、COC探択大学がスクラム!
それぞれの大学の強みを活かした取り組みで、大分県の地域課題の解決へ

開催趣旨

NBU日本文理大学と大分県立看護科学大学は、文部科学省「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」に選定され、それぞれの強みを活かして大分県の地域課題である少子高齢化に有効な取り組みや教育政策を精力的に行っています。大学COC事業は、大学が自治体を中心に地域社会と連携し、全国的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を進めることで、地域コミュニティの中枢的存在としての大学の機能強化を図ることを目的としており、その成果を地域に向けて発信することは重要で、両大学のこれまでの取り組みについて学生成果発表を行うとともに、「大分の未来をまもり、つくる」のために我々はどうすべきかを地域住民や、自治体を含めた関係者と議論を深めることを目的に、成果発表会&合同シンポジウムを開催いたします。

プログラム

主催者代表挨拶 13:00

平居 孝之(NBU日本文理大学 学長)

各大学取組説明 13:05

豊かな心と専門的課題解決力を持つ
おおいだ地域創生人材の育成
吉村 充功(NBU日本文理大学 学長室長)

看護学生による予防的家族訪問実習を通じた
地域のまちづくり事業
佐藤 玉枝(大分県立看護科学大学 看護学部 教授)

学生取り組み成果発表 14:00

NBU日本文理大学
『アクアアライメントによる地域コミュニティの活性化
プロジェクト』
吉高大亮(工学部・機械電気工学科・2年)、
森太郎(工学部・航空宇宙工学科・2年)

NBU日本文理大学

小規模集落交流
～豊後大野市大野町土師地区の取り組み～
安部正吾、工藤茂、鈴木大樹(工学部・建築学科・3年)

大分県立看護科学大学

高齢者の健康の維持・増進に向けた予防的看護の関わり
について～野津原地区の取り組み～
宮本孝彦(看護学部・看護学科・1年)、本多裕花(看護学部・看護学科・2年)、
萩本明日香(看護学部・看護学科・3年)

大分県立看護科学大学

一人暮らしの高齢者が生きがいをもって若々しく過ごすために
～富士見が丘団地の取り組み～
倉光真由(看護学部・看護学科・1年)、岩本美穂(看護学部・看護学科・3年)

パネルディスカッション 15:00

大分の未来をまもり、つくる人材育成の可能性

コーディネーター

栗田 充治氏(豊後大学 学長)

パネリスト

松尾 和行氏(大分合同新聞社 上野瀬行街島 編集委員委員長)
渡邊 信司氏(大分市 市民部 野津原支所 支所長)
若原 栄次氏(大分市 医師会 副会長)
高見 大介(日本文理大学 人間力育成センター 副センター長)
影山 隆之(大分県立看護科学大学 看護研究交流センター センター長)

閉会挨拶 16:25

村嶋 幸代(大分県立看護科学大学 学長)

主催 / NBU 日本文理大学
大分県立看護科学大学

後援 / 大分県・大分県教育委員会・大分市・大分市教育委員会・豊後大野市・
豊後大野市教育委員会・(一財)日本初創学生ボランティアセンター・
(公社)大分県看護協会・大分合同新聞社・西日本新聞社・NHK大分放送局・
OBS大分放送・TOSテレビ大分・OAB大分放送・OCT大分ケーブルテレビコム

日本文理大学・大分県立看護科学大学
平成 28 年度 成果発表会 & 合同シンポジウム

地域をまもり、
地域をつくる、
大学の取り組み。

日本文理大学と大分県立看護科学大学は、文部科学省「地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）」に選定され、それぞれの強みを活かして大分県の地域課題に対応した取組や教育・研究を行っています。

このフォーラムでは両大学のこれまでの取組及び学生成果発表を行うとともに、「大分の未来をまもり、つくる」ために我々が何をすべきかを、皆様とともに議論を深めることを目的に、成果発表会 & 合同シンポジウムを開催いたします。

- プログラム**
- 13:00 開会の辞 日本文理大学 学長 平居 孝之
 - 13:05 基調講演：地学一体で取り組む人材育成の成果と課題
共愛学園前橋国際大学 学長 大森 昭生 氏
 - 14:05 大学COC事業の各大学取組・成果発表
○大分県立看護科学大学の取組
 - ・事業紹介「看護学生による予防的家庭訪問実習を通じた地域のまちづくり事業」
 - ・学生成果発表「予防的家庭訪問実習を経験して」
 - 日本文理大学の取組
 - ・事業紹介「豊かな心と専門的課題解決力を持つおおいの地域創生人材の育成」
 - ・学生成果発表「Kids Smile Project ～佐賀県自然体験活動支援～」
 - ・学生成果発表「理学協働での地域づくり」
 - 15:45 パネルディスカッション
テーマ『COCの成果をどう考えるか』
～大分の未来をまもり、つくる人材育成と地方創生～
コーディネーター：佐賀大学 全学教育機構 教授 五十嵐 勉 氏
パネリスト：大分信用金庫 事業先サポート室 課長代理 三重野 幸一 氏
大分県 企画振興部 政策企画課 課長 磯田 健 氏
日本文理大学 経営経済学部 副学部長 彌田 耕作 氏
大分県立看護科学大学 看護研究交流センター センター長 影山 隆之 氏
コメンテーター：共愛学園前橋国際大学 学長 大森 昭生 氏
 - 16:55 閉会の辞 大分県立看護科学大学 学長 村嶋 幸代 氏

参加申込書 事前登録締め切り 2/16 (木)

FAX 097-524-2663 電話 097-524-2663 Web http://coc-nbu.jp
(受付時間 9:00～17:00 土・日・祝日除く) (下記 QRコードをご利用下さい)

参加者ご氏名	ふりがな	年齢 (お選び下さい) 10代 20代 30代 40代 50代 60代 70代 その他
ご所属 ※会社・団体・学校名など		
ご連絡先	電話番号	FAX
	メールアドレス	

【個人情報の取り扱いについて】
お申込みの際にご記入いただいた情報は、本シンポジウムに関する連絡や、本学情報のご案内のために利用いたします。但し、個人を特定しない集計処理等を行う場合があります。



問合せ
NBU 日本文理大学 大学COC事業担当 (市田、一丸)
TEL: 097-524-2663 (土・日・祝日除く)
Email: coc@nbu.ac.jp
大分県立看護科学大学 看護研究交流センター (影山、岩崎)
TEL: 097-586-4346 (土・日・祝日除く)
Email: kc-center@oita-nns.ac.jp



日本文理大学・大分県立看護科学大学
平成 28 年度 成果発表会 & 合同シンポジウム

地域をまもり、
地域をつくる、
大学の取り組み。

2017 2/18 (土) 開始 13:00 終了 17:00

ホルトホール大分 3 階 大会議室

参加費：無料 (事前登録をお願いします。)

主催：NBU 日本文理大学・大分県立看護科学大学
後援：大分県・大分県教育委員会・大分市・大分市教育委員会・豊後大野市・豊後大野市教育委員会
(公社) 大分県看護協会・(一財) 日本財団学生ボランティアセンター・大分合同新聞社・西日本新聞社
NHK 大分放送局・OBS 大分放送・TOS テレビ大分・OAB 大分朝日放送・OCT 大分ケーブルテレビコム

日本文理学「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」佐賀関地区キックオフ講座

チャレンジOITA地域創生人材講座2015 in 佐賀関

【開催趣旨】

日本文理学(NBU)では、文部科学省「地(知)の拠点整備事業」に選定され、地域課題である少子高齢社会を豊かに乗り切るために必要となる豊かな心と専門的課題解決力を兼ね備える「地域創生人材」を大分市佐賀関地区、豊後大野市での地域実践を通して育成すると同時に、地域課題解決による地域力の向上を目指した事業展開をしています。

佐賀関地区でのCOC事業のキックオフに位置づける今回の地域創生人材講座は、地域と学生の協働によるこの地区からの地域づくりをテーマに、チームの重要性をゲームを通じて理解するワークショップとそれを踏まえてこれからの佐賀関地区の地域づくりを学生との協働を通じて考えるワークショップを実施します。

今回の講座をきっかけに、新年度から本格化するNBUの佐賀関での学生活動、住民協働の地域づくりを実りのあるものにしていきたいと思います。

【日時】平成27年2月14日(土) 13:00～16:00

【会場】佐賀関公民館 2階 研修室1・2
(大分市大字佐賀関1407番地の27 佐賀関市民センター内 Tel:097-575-2557)

【主催】日本文理学

【テーマ】**地域創生人材の育成で佐賀関地区を元気に!**

【当日スケジュール】

- 主催者挨拶・開催趣旨:13:00～13:05
- レクチャー＆ワークショップ① (13:05～14:15 70分)
テーマ:『ゲームで学ぶマネジメント入門』～地域を元気にする組織づくり～
講師:日本文理学 経営経済学部 学部長・教授 橋本 堅次郎
- 休憩:14:15～14:30 (15分)
- ワークショップ② (14:30～15:50 80分)
テーマ:『これからの佐賀関地区の活性化を考えよう』～住民と学生協働の地域づくり～
ファシリテーター:日本文理学 工学部 建築学科 教授 吉村 充功 ほか
- まとめ:15:50～16:00

【申込方法】

FAXまたはEメールに氏名、住所、所属(お勤めの方or学生)、電話番号をご記入の上、2月12日(木)までに下記までお申し込み下さい。
FAX:097-593-3400 Eメール:kyoumu@nbu.ac.jp
座席に余裕がある場合は当日参加も受け付けます。(裏面FAX申込用紙)

日本文理学「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」豊後大野キックオフ講座

チャレンジOITA地域創生活動報告会2015 in 豊後大野

【開催趣旨】

日本文理学は、平成26年度文部科学省「地(知)の拠点整備事業」に選定され、大分県の「地(知)の拠点」の確立を目指して、「豊かな心と専門的課題解決力を持つおおい地域創生人材の育成」をテーマに地域での教育・研究・社会貢献活動を展開しています。

本報告会では、日本文理学が取り組む地域創生人材育成に向けた「教育・研究・社会貢献(学生正課外)活動」について、今年度の成果を学生、教員から地域の皆さまに報告します。地域の皆さまに活動へのご理解を頂くとともに、地域創生人材育成の活動重点地域である豊後大野市の現状と今後の発展性について意見交換し、新たな学生活動の可能性を模索することを目的に実施します。

【日時】平成27年2月21日(土) 13:00～15:40 ※参加費無料

【会場】豊後大野市役所本庁舎 1階 保健センター (豊後大野市三重町市場1200番地)

【主催】日本文理学

【後援】豊後大野市

【テーマ】**豊後大野市での学生教育・研究活動の成果を地域住民と共有し地域の発展性を探ろう!**

【当日スケジュール】

※進行状況により発表時間は若干前後する場合があります。

- 13:00～13:05 主催者あいさつ
- 13:05～13:15 基調報告 日本文理学 大学COC事業推進責任者 吉村 充功
「NBU日本文理学の今後の地域での教育方針
～豊かな心と専門的課題解決力を持つおおい地域創生人材育成の展望～」
- 13:15～13:30 学生研究報告 建築学科 学生
「河川プールに着目したふさと体験村の魅力向上策の検討」
- 13:30～13:40 学生研究報告 建築学科 学生
「河川シミュレーションを用いた柴北川におけるふさと体験村周辺の流域環境調査」
- 13:40～13:55 学生研究報告 経営経済学科 学生
「大分から始まる地域活性化への道～豊後大野・佐賀関の“祭り”に着目して～」
- 13:55～14:10 教員研究報告 経営経済学部 高橋 淳一郎
「小規模小中学校における予防的心理教育の導入について」
- 14:10～14:20 休憩
- 14:20～14:35 教員教育報告 工学部 近藤 正一
「インテリアデザイン科目での取り組みとその周辺」
- 14:35～14:50 教員研究報告 工学部 平居 孝之
「プライバシーに配慮した高齢者の見守り技術」
- 14:50～15:05 教員研究報告 工学部 福川 直裕
「水中観測ロボットの開発と稲穂水中鍾乳洞の水中観測」
- 15:05～15:20 正課外学生活動報告 人間力育成センター 高見 大介
「大野大寒地区における民泊・農業体験活動報告」
- 15:20～15:30 講評(豊後大野市)
「おおいチャレンジアワードにおける豊後大野プロジェクトを巡る旅の実践」
- 15:30～15:40 主催者総括・お礼の言葉

【申込方法】

FAXまたはEメールに氏名、住所、所属(お勤めの方or学生)、電話番号をご記入の上、2月19日(木)までに下記までお申し込み下さい。
FAX:097-524-2663 Eメール:coc@nbu.ac.jp
座席に余裕がある場合は当日参加も受け付けます。(裏面FAX申込用紙)



日本文理大学 COC 事業
おあいだつくりびと
体験・感動・感謝

文部科学省「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」

NBU チャレンジ OITA 地域創生活動報告会 2016

in 佐賀県

・日時：平成 28 年 2 月 20 日(土) 10:00 ~ 12:30
・会場：佐賀県市民センター 2 階 研修室 (大分市佐賀間 1407 番地 27)

2/20
入場無料・申込不要

プログラム (9:30 受付開始, 11:10~11:25 休憩)

10:00 ~ 10:05 あいさつ・趣旨説明
「日本文理大学 COC 事業『おあいだつくりびと』での取り組み」学長室 室長 吉村充功

10:05 ~ 12:00 学生取り組み発表 (発表 10分 / 質疑応答 3分)

1. 佐賀県半島触れる観光プロジェクト～若者を惹きつける島の提案～ (建築学科・3年生)
2. 佐賀県地区での市内小学生とその保護者対象とした地域交流教室～これまでの実践教育プログラムを踏まえて～ (経営経済学科・3年生)
3. 地域活性化プロジェクト「楽・楽マルシェ」での取組報告 (経営経済学科・3年生)
4. 韓国料理教室による佐賀県住民との交流会 (経営経済学科・4年生、機械電気工学科・1年生)
5. 「地域活性化を目的とした総合型地域スポーツクラブへのイベント参画」～ナラジによるプロモーションの実践活動報告～ (経営経済学科・3年生)
6. 「水中観測ロボットで見る佐賀間の海」および「関崎海星館との共同企画「3Dで見る佐賀県半島」 (機械電気工学科・3年生、大学院環境情報専攻・2年生)
7. ロボットプロジェクト『地域にいきものつくり』～学生のアイデアをカタチに『T.A.I.K.』『らくらく郵便』～ (機械電気工学科、航空宇宙工学科、情報メディア学科・1年生)
8. プライバシー問題を生じない見守りシステム実現に向けた電磁波レーダの利活用 (情報メディア学科・4年生)

12:00 ~ 12:20 地域志向プロジェクト研究発表 (発表 15分 / 質疑応答 5分)

1. 要介護者のコミュニケーション支援システム開発～共通プラットフォームによる効率良い ICT 技術の利活用～ (福岡電気工学科、航空宇宙工学科、情報メディア学科、市田秀樹 (COC 事業担当))

12:20 ~ 12:25 講評
12:25 ~ 12:30 おわりに (主催者お礼の言葉)

NBU 日本文理大学

〒870-0397 大分県大分市一本木 1727
TEL: 097-592-1600(大代表)
Web: http://www.nbu.ac.jp
e-mail: coc@nbu.ac.jp

【趣旨】

地域創生活動報告会は、地域と学生協働によるこれからの地域づくりをテーマに、「教育・研究・社会貢献(学生正課外)」活動について今年度の成果を学生、教員から地域の皆さまに報告するとともに、今後の発展性について意見交換し、新たな学生活動の可能性を探ります。

日本文理大学 COC 事業
おあいだつくりびと
体験・感動・感謝



文部科学省「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」

NBU チャレンジ OITA 地域創生活動報告会 2016

in 豊後大野

・日時：平成 28 年 2 月 13 日(土) 13:30 ~ 16:30
・会場：豊後大野市役所本庁舎 2 階 視聴覚室 (豊後大野市三重町市場 1200 番地)

2/13
入場無料・申込不要

プログラム (13:00 受付開始, 15:10~15:20 休憩)

13:30 ~ 13:35 あいさつ・趣旨説明
「日本文理大学 COC 事業『おあいだつくりびと』での取り組み」学長室 室長 吉村充功

13:35 ~ 15:10 学生取り組み発表 (発表 10分 / 質疑応答 3分)

1. 地域づくり支援～市民交流の場、楽らく広場「ひょうたん」(千歳町)の活動サポートを通して～ (経営経済学科・3年生)
2. 朝小中学校における継続的な予防的心理健康教育プログラムの実践 (経営経済学科・2年生)
3. 2015 年度サービスマーケティング活動報告 - 豊後大野市をフィールドとして - (経営経済学科・1年生)
4. 地域と世界を結び 地域創生・豊後大野まるごと インターネット、エリアピアビジネス (経営経済学科・3年生)
5. 大野町土師地区における農林業体験を通じた小規模集落支援活動 (建築学科・1年生)
6. 大学生による企業魅力発信・求人動画制作 ～(株)リアファイン大分編～ (情報メディア学科、経営経済学科・2年生)
7. 大野町ふるさと体験村における河川整備に関する研究 (建築学科・4年生)

15:20 ~ 16:20 地域志向プロジェクト研究発表 (発表 15分 / 質疑応答 5分)

1. 地域住民を主体とした地域づくりによる介護予防に関する域学協働プロジェクト研究
網田耕作、河村裕次、坂口昌法 (経営経済学科)
2. 徘徊老人の位置検出システムのための画像処理ソフトの開発
鈴木秀男、吉森豊貴、福島宇 (情報メディア学科、稲川直裕 (機械電気工学科))
3. 地域創生を目的とした自然エネルギー利用型プラズマ農業に関する基礎研究
川崎敏之 (機械電気工学科)、坂井美穂 (情報メディア学科)、池畑義人 (建築学科)、小椋章 (航空宇宙工学科)

16:20 ~ 16:25 講評 (豊後大野市副市長)
16:25 ~ 16:30 おわりに (主催者お礼の言葉)

NBU 日本文理大学

〒870-0397 大分県大分市一本木 1727
TEL: 097-592-1600(大代表)
Web: http://www.nbu.ac.jp
e-mail: coc@nbu.ac.jp

【趣旨】

地域創生活動報告会は、地域と学生協働によるこれからの地域づくりをテーマに、「教育・研究・社会貢献(学生正課外)」活動について今年度の成果を学生、教員から地域の皆さまに報告するとともに、今後の発展性について意見交換し、新たな学生活動の可能性を探ります。

日本文理大学 COC 事業

おおいた、つくりびと
体験・感動・感謝



文部科学省
地(知)の拠点

文部科学省「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」

NBU チャレンジ OITA

地域創生活動報告会 2017

in 佐賀県



- ・日時：平成29年2月28日(火) 13:00～15:20
- ・会場：佐賀県市民センター 2階 研修室 (大分市佐賀園 1407番地 27)

後援：大分市、大分市教育委員会

プログラム (12:30 受付開始, 14:15-14:30 休憩)

13:00～13:10 あいさつ・趣旨説明

「日本文理大学 COC 事業『おおいたつくりびと』での取り組み」学長室 室長 吉村充功

13:10～14:15 学生取り組み発表 (発表 10分 / 質疑応答 3分)

1. 佐賀県自然体験活動支援 Kids Smile Project (航空宇宙工学科・2年生)

2. 木佐上コミュニケーションセンター開所記念講座「郷土愛を育む～大分について学ぼう～」の運営を通して (経営経済学科・3年生)

3. 「地域活性化を目的とした総合型地域スポーツクラブへのイベント参画」～アンケート調査によるイベント活動の検証と今後の展望～ (経営経済学科・4年生)

4. 小中一貫校に統合される小学校3校に関する研究 (建築学科・4年生)

5. 「地域にいきるものづくり」ロボットプロジェクト入門 2 木佐上地区での活動成果報告 (学生取り組み 3 件合同発表)

(1) 「センサーマーケットでの安否確認」(機械電気工学科・情報メディア学科・1年生)

(2) 「安心を届けるポスト」(情報メディア学科・1年生)

(3) 「イノシシ絶対許さないマン」(情報メディア学科・1年生)

14:30～15:10 地域志向プロジェクト研究発表

(発表 15分 / 質疑応答 5分)

1. 大分県農業のブランド化と関連産業活性化を目的とした自然工ネルギー利用型プラズマ農業に関する研究開発

川崎敏之 (機械電気工学科)、坂井美穂 (情報メディア学科)、池畑義人 (建築学科)、岡崎寛乃 (航空宇宙工学科)

2. 要介護者のコミュニケーション支援システム開発

～共通プラットフォームによる効率良いICT技術の活用～

福島学、坪倉健志、濱田大助 (情報メディア学科)、市田秀樹 (COC 事業担当)

15:10～15:15 講評

15:15～15:20 おわりに (主催者お礼の言葉)

NBU 日本文理大学

〒870-0397 大分県大分市一本1727

TEL: 097-592-1600 (大代表)

Web: http://www.nbu.ac.jp

【COC事業担当】

TEL/FAX: 097-524-2663 (直通)

Web: http://coc-nbu.jp

e-mail: coc@nbu.ac.jp



『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを「おおいた、つくりびと」と名付けました。おまやも/だけでははかるところがない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。日本の未来を担う若者ができることは？ ずっと、その答えはひとつではありません。その答えは、私たち大分県立文理大学が、大分への愛を胸に、大分での学び合いによりつくりだします。地域の若人とともに、もっととっとうる未来を築く。私たちは大分県の未来を拓く。『おおいた、つくりびと』になりたい。



日本文理大学 COC 事業

おおいた、つくりびと
体験・感動・感謝



文部科学省
地(知)の拠点

文部科学省「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」

NBU チャレンジ OITA

地域創生活動報告会 2017

in 豊後大野



- ・日時：平成29年3月3日(金) 13:30～16:10
- ・会場：豊後大野市役所本庁舎 4階 正庁ホール (豊後大野市三重町市場 1200番地)

後援：豊後大野市、豊後大野市教育委員会

プログラム (13:00 受付開始, 14:45-15:00 休憩)

13:30～13:45 あいさつ・趣旨説明

「日本文理大学 COC 事業『おおいたつくりびと』での取り組み」学長室 室長 吉村充功

13:45～14:45 学生・教員取り組み発表 (発表 7分 / 質疑応答 3分)

1. 国際交流による地域活性化 (地域住民との韓国料理教室) (経営経済学科・機械電気工学科・2年生)

2. 豊後 DEN 説 - 鉄道沿線から見えてくる豊後大野の魅力 - (経営経済学科・1,2年生)

3. 豊後大野市における正課外活動の紹介と経過報告 (建築学科・1年生)

4. 豊後大野市土師地区の生活道路に関する調査及びドローン撮影写真について (建築学科・4年生)

5. 豊後大野市の取り組み「楽らく広場ひょうたん」における人々の変化と相互作用について (経営経済学科・4年生)

6. 朝地小中学校における継続的な予防的心理健康教育の実践 その2 (経営経済学科・2年生)、高橋淳一郎 (経営経済学科)

15:00～16:00 地域志向プロジェクト研究発表

(発表 15分 / 質疑応答 5分)

1. 地域資源を活用した地域観光プロモーションにおける需要予測に関する研究

今西衛、本村裕之、工藤順一、外田佳弘 (経営経済学科)

2. 高齢者向けものづくり教材の開発

鈴木秀男、松永多苗子、足立元、濱田大助 (情報メディア学科)

3. 徘徊老人の位置検出システムのための画像処理ソフトの開発

吉森聖真、鈴木秀男、福島学 (情報メディア学科)

16:00～16:05 講評

16:05～16:10 おわりに (主催者お礼の言葉)

NBU 日本文理大学

〒870-0397 大分県大分市一本1727

TEL: 097-592-1600 (大代表)

Web: http://www.nbu.ac.jp

【COC事業担当】

TEL/FAX: 097-524-2663 (直通)

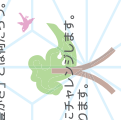
Web: http://coc-nbu.jp

e-mail: coc@nbu.ac.jp



『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを「おおいた、つくりびと」と名付けました。おまやも/だけでははかるところがない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。日本の未来を担う若者ができることは？ ずっと、その答えはひとつではありません。その答えは、私たち大分県立文理大学が、大分への愛を胸に、大分での学び合いによりつくりだします。地域の若人とともに、もっととっとうる未来を築く。私たちは大分県の未来を拓く。『おおいた、つくりびと』になりたい。





文部科学省
地(知)の拠点
日本文理大学 COC 事業
「おおいた、つくりびと」
体験・感動・感謝



文部科学省「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」
NBUNU チャレンジ OITA
地域創生活動報告会 2018
in 佐賀県

後援：大分市、大分市教育委員会

・日時：平成30年2月25日(日) 13:00～15:30
・会場：佐賀市民センター1階 集會室 (大分市佐賀関 1407番地 27)

プログラム (12:30 受付開始, 14:10-14:20 休憩)

13:00～13:13 あいだつ・趣旨説明
「日本文理大学 大学COC事業『おおいた、つくりびと』での取り組み」学長室長 吉村亮功

13:13～13:50 学生取り組み発表 (発表7分/質疑応答3分)

- 1. 交流人口拡大による佐賀関半島の活性化に関する研究 (建築学科・4年)
- 2. 留学生料理教室による佐賀関の交流 (経営経済学科・3年生、大学院環境情報学専攻・2年生)
- 3. "地域に生きるものづくり" ～ロボットプロジェクト入門 2. 活動報告～「見守りスイッチ」 (機械電気工学科、航空宇宙工学科、情報メディア学、1年生)
- 4. 「フューチャードリーム! ロボメカデザインコンペ2017」への取り組みを通して地域課題への挑戦 (情報メディア学、3年生)

13:50～14:10 地域志向プロジェクト研究発表 (発表15分/質疑応答5分)

- 1. 地域経済を考慮した地域課題取組に向けたプラットフォーム構築 (福島 学、松永多苗子 (情報メディア学)、筑紫彩太 (機械電気工学科)、今西 徹、本村治之、山城剛介 (経営経済学科)、市田秀樹 (大学COC事業担当))

14:20～15:10 ポスターセッション

- 1. 大分市佐賀関・関地区における「環境・地域創造演習」の取組 (建築学科・3年生)
- 2. 佐賀関半島における地域体験交流活動研修「プロジェクト1」の取り組み (経営経済学科・1年生)
- 3. 大分市佐賀関・関地区の地域課題解決を目指す「さかのせきローカルデザイン会議」の取り組み (建築学科・3、4年生)
- 4. 地域活性化プロジェクト「葉・葉マルシェ」での取り組み (経営経済学科・2年生)
- 5. 地域住民主体の地域活動サポートについて (経営経済学科・2年生)

15:20～15:25 講評

15:25～15:30 おわりに (主催者お礼の言葉)



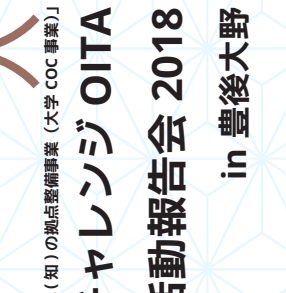
NBU 日本文理大学
〒870-0397 大分県大分市一本1727
TEL: 097-592-1600 (大代表)
Web: http://www.nbu.ac.jp

【COC事業担当】
TEL/FAX: 097-524-2663 (直通)
Web: http://coc-nbu.jp
e-mail: coc@nbu.ac.jp

『おおいた、つくりびと』について。
私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。おまやも/ただけでははかるとかできない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。日本の未来を担う者からできることは？
さつと、その答えはひとつではありません。
その答えは、私たちの生活の中にある。大分への愛を胸に受けて、大分のできることにチャレンジします。地域の皆さんとともに、もっともっと五感のままをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く『おおいた、つくりびと』になります。



文部科学省
地(知)の拠点
日本文理大学 COC 事業
「おおいた、つくりびと」
体験・感動・感謝



文部科学省「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」
NBUNU チャレンジ OITA
地域創生活動報告会 2018
in 豊後大野

後援：豊後大野市、豊後大野市教育委員会

・日時：平成30年2月21日(水) 13:30～16:30
・会場：豊後大野市役所本庁舎2階 中央公民館 視聴覚室・第1会議室 (豊後大野市三重町市場 1200番地)

プログラム (13:00 受付開始, 15:15-15:25 休憩)

13:30～13:40 あいだつ・趣旨説明
「日本文理大学 大学COC事業『おおいた、つくりびと』での取り組み」学長室長 吉村亮功

13:40～14:30 学生取り組み発表 (発表7分/質疑応答3分)

- 1. 豊後大野市ふるさと体験村における建設マネジメント実習の取り組み (建築学科・3年生)
- 2. 豊後 DEN 2nd Generation (経営経済学科・3年生)
- 3. あそびロボットカードプロジェクト (経営経済学科・2年生)
- 4. 住民主体の地域活動について (経営経済学科・4年生)
- 5. 豊後大野市内の小中学生における社会的スキル(SEL)の学校規模による比較と予防的心理学教育プログラムの展開 (経営経済学科・2,3,4年生)

14:30～15:15 地域志向プロジェクト研究/教員取り組み発表 (発表12分/質疑応答3分)

- 1. 地域資源を活用した地域観光プロモーションにおける需要予測に関する研究 (今西 徹、本村治之、工藤順一、羽田佳弘、山城剛介 (経営経済学科))
- 2. 学生の地域資源を活用した観光プロモーション活動におけるコースを断続した教育改革 (本村治之、今西 徹、山城剛介、羽田佳弘、工藤順一 (経営経済学科))
- 3. 高齢者向けものづくり教材の開発 (鈴木秀明、松永多苗子、足立 元、星芝貴行 (情報メディア学)、稲川直治 (機械電気工学科)、平居孝之、瀧永康仁 (建築学科))

15:25～16:15 ポスターセッション

- 1. 地域と学生の協働による豊後大野市ふるさと体験村「閉村式」の運営 (建築学科・3年生)
- 2. 豊後大野市大野町土師地区における「環境・地域創造演習」の取り組み (建築学科・3年生)
- 3. 豊後大野市大野町土師地区における住民と学生による地域コミュニケーション活動 (建築学科・1年生)
- 4. 「おおいた、つくりびと」養成講座 2017 in 三重町」の取り組み (建築学科・1、3年)
- 5. 豊後大野 PR 動画プロジェクト (経営経済学科・1年生)
- 6. 酒蔵巡りプロジェクト (経営経済学科・3年生)
- 7. 住民主体の地域活動の活動サポート ～豊後大野市築つく広場ようたんを中心に～ (経営経済学科・2年生)

16:20～16:25 講評

16:25～16:30 おわりに (主催者お礼の言葉)



NBU 日本文理大学
〒870-0397 大分県大分市一本1727
TEL: 097-592-1600 (大代表)
Web: http://www.nbu.ac.jp

【COC事業担当】
TEL/FAX: 097-524-2663 (直通)
Web: http://coc-nbu.jp
e-mail: coc@nbu.ac.jp

『おおいた、つくりびと』について。
私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。おまやも/ただけでははかるとかできない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。日本の未来を担う者からできることは？
さつと、その答えはひとつではありません。
その答えは、私たちの生活の中にある。大分への愛を胸に受けて、大分のできることにチャレンジします。地域の皆さんとともに、もっともっと五感のままをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く『おおいた、つくりびと』になります。



文部科学省
地(知)の拠点

文部科学省「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」
NBU チャレンジ OITA
地域創生活動報告会 2019
in 豊後大野



入場無料・申込不要

日時: 平成 31 年 3 月 19 日 (火) 13:30 ~ 16:30
会場: 豊後大野市役所本庁舎 2 階 視聴覚室 (豊後大野市三重町市場 1200 番地)

【趣旨】
日本文理大学は、平成26年度文部科学省「地(知)の拠点整備事業」に選定され、大分県の「地(知)の拠点」の確立を目指して、「豊かな心と専門的課題解決力を持つおおいた地域創生人材の育成」をテーマに地域での教育・研究・社会貢献活動を展開してきました。
本報告会では、日本文理大学が取り組んできた地域創生人材育成に向けた豊後大野市等での「教育・研究・社会貢献活動」について、事業最終年度を迎えた今年度の成果を学生、担当教員から地域の皆さまに報告します。地域の皆さまに活動へのご理解を深めていただくとともに、事業終了後の展開について模索することを目的に実施します。
【主な参加対象者】 地区住民、地区高齢者、NPO、企業、地方公共団体関係者、地域創生に関心のある方等、定員80名。

プログラム (13:00 受付開始)

- 13:30 ~ 13:45 あいさつ・事業成果の概要説明
「日本文理大学 大学COC事業『おおいたづくりひと』」での取組成果 学長室長 吉村充功
- 13:45 ~ 15:20 学生/教員による口頭発表
 - 1. 地域づくり支援 菜菜ら広場「ひょうたん」、千歳町世代間交流のサポートを通して - 上林旭平、平原陽菜 (経営経済学科・3年)
 - 2. 豊後大野市三重町をどのようにして活性化させるか? 豊後大野レール館とノンタンAPを通して 朝来桃子、小原南海 (経営経済学科・2年)
 - 3. 大野町土師地区における「環境・地域創造演習」と「建設マネジメント実習」の取組 先崎聖恒 (建築学科・3年)
 - 4. 第二の人生でもまづくりをしませんか? - 豊後大野市 CGRC - 渡邊麟 (建築学科・4年)
 - 5. 高齢者向けものづくり教材の開発 鈴木秀男 (情報メディア学科教授)、足立元・松永多苗子・星芝貴行・稲川直裕・平居孝之
 - 6. 地域資源を活用した地域観光プログラム開発 今西衛 (経営経済学科准教授)、本村裕之、工藤順一、山城典一、丹田佳弘、杉浦義雄、池畑薫
- 15:20 ~ 15:50 学生/教員によるポスター発表 (会場: 第2会議室)
 - 1. 豊後大野プロジェクト 小野真輝 (情報メディア学科・2年)、高橋和也 (経営経済学科・2年)、人間力育成センター
 - 2. 地域と学生の協働による豊後大野市ふるさと体験村「開村式」の運営 建築学科 環境・地域創生コース
 - 3. 大野町土師地区における地域体験交流活動研修「プロジェクト1」の取り組み 建築学科・1年
 - 4. 建築学生が創るノンタンポイント - 「絵本パレット」ワークショップ連携による市場ストーリーの可能性 - 建築学科・2年
- 15:50 ~ 16:25 トークセッション『COC活動の意義とこれから』 司会: 吉村充功 (学長室長)
登壇者: 赤澤信武氏 (ぶんご大野里の旅公社理事)、田尻高二氏 (土師振興協議会事務局長)、坂口昌宏 (経営経済学科准教授)
- 16:25 ~ 16:30 おわりに 講師 豊後大野市 副市長 石掛忠男氏
主催者お礼の言葉 副学長 島岡成治



【後援】
豊後大野市、豊後大野市教育委員会

【COC事業担当】
〒870-0397 大分県大分市一本1727
TEL/FAX: 097-524-2663(直通)
Web: http://coc-nbu.jp
e-mail: coc@nbu.ac.jp

【COC事業担当】
〒870-0397 大分県大分市一本1727
TEL/FAX: 097-524-2663(直通)
Web: http://coc-nbu.jp
e-mail: coc@nbu.ac.jp



文部科学省
地(知)の拠点

文部科学省「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」
NBU チャレンジ OITA
地域創生活動報告会 2019
in 佐賀関



入場無料・申込不要

日時: 平成 31 年 3 月 1 日 (金) 14:00 ~ 16:30
会場: 佐賀関市民センター 2 階 研修室 1・2 (大分市佐賀関 1407 番地 27)

【趣旨】
日本文理大学は、平成26年度文部科学省「地(知)の拠点整備事業」に選定され、大分県の「地(知)の拠点」の確立を目指して、「豊かな心と専門的課題解決力を持つおおいた地域創生人材の育成」をテーマに地域での教育・研究・社会貢献活動を展開してきました。
本報告会では、日本文理大学が取り組んできた地域創生人材育成に向けた佐賀関地区等での「教育・研究・社会貢献活動」について、事業最終年度を迎えた今年度の成果を学生、担当教員から地域の皆さまに報告します。地域の皆さまに活動へのご理解を深めていただくとともに、事業終了後の展開について模索することを目的に実施します。奮ってご参加下さい。
【主な参加対象者】 地区住民、地区高齢者、NPO、企業、地方公共団体関係者、地域創生に関心のある方等、定員80名。

プログラム (13:30 受付開始)

- 14:00 ~ 14:15 あいさつ・事業成果の概要説明
「日本文理大学 大学COC事業『おおいたづくりひと』」での取組成果 学長室長 吉村充功
- 14:15 ~ 15:35 学生/教員による口頭発表
 - 1. 佐賀関におけるブロック塀の耐震性に関する調査研究 - 地域住民への危険ブロック塀の啓蒙のために - 上田亮 (建築学科・4年生)
 - 2. 国道九四フェリー-四国剛用者の交通行動特性と佐賀関観光志向に関する研究 青山信児 (建築学科・4年生)
 - 3. 大在地区の子育てに関する地域課題解決に向けた取り組みの提案 伊藤光、野々下優、廣岡真衣、平原実歩 (経営経済学科・2年生)
- 4. 地域に根差したものでづくりに情報システム分野ができること - パイタルモニタに必要な筋活動の計測・分析手法の提案 - 大里一矢、高橋瑞希、山下涼介 (情報メディア学科・4年)
- 5. 地域に生きるものでづくりの取組み 2018 - ロボットプロジェクト関連科目での取組み - 福岡学、松永多苗子 (情報メディア学科教授)、稲川直裕 (機械電気工学科教授)、藤田浩輝 (航空宇宙工学科准教授)
- 15:40 ~ 16:15 学生/教員によるポスター発表 ^{5・6は展示のみ}
 - 1. 設計製図3第1課題「超高齢社会に希望をもたらし二世代住宅」 有富魁 (建築学科・3年生)
 - 2. 佐賀関半島・観光VR体験「さのせきローカルデザイン会議」による観光活性化の取り組み - 下地奈結花、川端理沙、金城光季、野上諒之 (建築学科・3年生)
 - 3. 地域活性化プロジェクト「菜・楽マルシェ」での取り組み報告 神代和正、中満友規 (経営経済学科・3年生)
 - 4. Kids Smile Project - 佐賀関子ども健全育成実践活動 - 小松雄斗 (情報メディア学科・2年生)、人間力育成センター KSP
 - 5. 佐賀関半島における地域体験交流活動研修「プロジェクト1」の取り組み 建築学科・1年生受講生
 - 6. スポーツイベント実践を通して地域創生人材の育成 堀ゼミ (経営経済学科)
- 16:20 ~ 16:30 おわりに 講師 大分市 市民部 佐賀関支所 参事補 中島恭介氏
主催者お礼の言葉 副学長 橋本堅次郎



【COC事業担当】
〒870-0397 大分県大分市一本1727
TEL/FAX: 097-524-2663(直通)
Web: http://coc-nbu.jp
e-mail: coc@nbu.ac.jp

【COC事業担当】
〒870-0397 大分県大分市一本1727
TEL/FAX: 097-524-2663(直通)
Web: http://coc-nbu.jp
e-mail: coc@nbu.ac.jp

～西九州大学の事例から～
 大学COC事業における西九州大学の取り組みを中心に

地域を活かす大学

西九州大学 副学長	地域連携センター長 井本 浩之
-----------	--------------------

本日のアジェンダ

はじめに・・・「自己紹介」「地域を活かす大学」

I. はじまりは就業力育成

- 1)人口減少社会と大学教育改革
- 2)就業力育成

II. 平成25年度「地（知）の拠点整備事業」

「コミュニティ・キャンパス佐賀アクティベーション・プロジェクト」

III. 明らかになってきた課題・・・「見える成果」と「見えない成果」

おわりに

ルーブリックによる学修評価とディプロマ・ポリシーの顕化

- ◆日時：2016年3月23日（水） 13:00～16:10
- ◆会場：日本文理大学・プレゼンテーションルーム
- ◆対象：日本文理大学の全教員および職員（第1部）

本学ではCOCを中核に据えた人間力教育，地域創生人の育成を推進しており，そのための教育・カリキュラム改革，教育内容の改善に取り組んでいます。これらの取り組みの課題の一つとして，どのように学修評価を行うかといった点が挙げられ，その方法の一つとしてルーブリック（パフォーマンスの質を量的に評価）という手法が注目されています。

そこで，COC事業の取り組みの一環として，ルーブリックの意義や作成方法を学び，本学のディプロマ・ポリシーをルーブリック化するワークショップFD研修会を企画しました。ルーブリックは科目の成績評価やプレゼンなどのパフォーマンスを測る際にも有用であると言われている手法です。この機会に是非ルーブリックによる学修評価への理解を深めましょう。

◆プログラム

第1部 13:00～14:20

◎開会あいさつ・研修趣意

◎基調講演：「今求められている学修評価に関する基礎知識」・・・ ppt 資料

講師：青山学院大学 教育人間科学部 教育学科 教授 杉谷 祐美子 氏

第2部 14:30～16:10

◎ワークショップ：

「ディプロマ・ポリシーをルーブリック化してみよう」資料2・3・4

※第1部の基調講演を受けて，4～5名を1チームとする教員グループを編成し，本学のディプロマ・ポリシーをもとに学修評価するための
 コモンルーブリックの作成を試みます。

・手順説明 → ワーク → 検討内容の発表

◎まとめ

・個別フォローアップ（自由参加）

大学COC事業 平成28年度FD/SD研修会

○日 時：平成29年3月22日(水) 10:00～12:00

○場 所：プレゼンテーションルーム (情報センター7階)

○対 象：本学全教職員

○プログラム：

- ・10:00～10:10 開会あいさつ
- ・10:10～11:30 講演「学生が主体の富山県立大学COC事業

「工学心」で地域とつながる「地域協働型大学」の構築

講師：富山県立大学 地域協働支援室 統括コーディネーター 奥田 貴 氏

- ・11:30～12:00 質疑応答・意見交換

- ・12:00 閉会

趣旨：本学COC事業のFD/SD研修では、COCの実際の取り組み例を知る機会として西九州大学 井本副学長の講演(26年度)、ループリックによる学修評価とディプロマ・ポリシーの実質化をテーマとした青山学院大学 杉谷教授の講演・ワークショップ(27年度)を行ってきました。また、COCシンポジウムでは、アクティブラーニングの本質について知る機会として京都大学 溝上教授の基調講演(26年度)を行い、本年2月18日には地学一体で取り組む人材育成の成果と課題について共愛学園前橋国際大学 大森学長の基調講演が予定されています。

以上のように、これまで、COCに関する文系大学の取り組みや、アクティブラーニング等の学修方法・評価方法について、研修機会を設けてきましたが、工学系における他大学のCOCの取り組みを知る機会がありませんでした。

そこで、今回のFD/SD研修では、COC事業に平成25年度に採択された富山県立大学の実質責任者である奥田貴先生をお迎えし、同大学のCOC事業の取り組みについてご紹介させていただきます。

富山県立大学は、学生数1,000名強、教員数100名強の工学部単科大学であり、学科構成は本学工学部と類似しています。COC事業では、地域に役立つ技術者マインド「工学心」を持ち、地域課題を解決できる学生の育成を推進しており、本学の事業方針とも重なる部分が多くあります。また、学生の主体的な活動を行う場としての「アクティブラーニング協働スペース」を開設し、COCOSと呼ばれる地域課題解決活動を行う学生団体の設立や、活動支援を行っています。

本研修会は、工学系のCOCの取り組みを知る機会とするだけでなく、COC活動における学生支援のあり方など、今後の本学COC事業の取り組みを発展・展開するための機会と位置づけ実施します。

以上

大学COC事業 平成29年度FD/SD研修会

○日 時：平成30年3月22日(木) 13:00～14:30

○場 所：18A41教室(18号館4階)

○対 象：本学全教職員、COC+関係者

○プログラム：

- ・13:00～13:05 開会あいさつ・講師紹介
- ・13:05～14:05 講演

「地域社会人材育成に向けた教育プログラム開発

～コーディネータと学習評価指標の役割～」

講師：島根大学 教育・学生支援機構 教育推進センター 准教授 岩瀬 峰代 氏

- ・14:05～14:30 質疑応答・意見交換

- ・14:30 閉会

○共催：大学等による「おおいた創生」推進協議会 高等教育活性化部会

○趣旨：本学COC事業では、COCの実際の取り組み例を知る機会として、採択年度の平成26年度より毎年度末にFD/SD研修会を行ってきました。

今回のFD/SD研修会では、文部科学省 平成24年度「大学間連携共同教育推進事業」に選定され、平成24～28年度に島根大学を中心とする山陰地域の5大学・短大で実施された「大学と地域社会を結ぶ大学間連携ソーシャルラーニング」について、その実施担当者である島根大学の岩瀬先生をお迎えし、取組内容についてご紹介いただきます。

本事業は、COC事業の先駆けと位置づけることができ、地域社会の人材ニーズに応えるために、地域全体をフィールドにした「ソーシャルラーニング」(＝学生が早期から山陰地域の自然・歴史・文化・産業等の現場に向き、地域の人々と交流する中で、地域発展の鍵となる課題を発見し、未知の解を追究しようとする力を伸ばす教育)の教育プログラムを構築、実践されています。また、地域のステークホルダーが大学教育に直接関与する仕組み、地域リソースの教育的再開発、パフォーマンス評価による質保証・向上などにも取り組まれており、来年度に最終年度を迎える本学COC事業にとって、学ぶことが多いと思われま。

本研修会は、他大学の取り組みを知るとともに、地域学習のプログラム設計方法や地域学習に取り組んだ学生の成長をどのように評価するかなどについて知る機会と位置づけて実施します。

以上

大学COC事業 平成30年度FD/SD研修会

○日 時：平成31年3月18日(月) 13:00～15:00

○場 所：プレゼンテーションルーム(情報センター7階)

○対 象：本学全教職員、COC+関係者

○プログラム：

・13:00～13:05 開会あいさつ・講師紹介

・13:05～14:20 講演

「東北公益文科大学におけるCOC事業の成果とその後の展開

～地域力結集による人材育成と複合型課題の解決に向けて～」

講師：東北公益文科大学 教授/地域共創センター長 武田 真理子 氏

・14:20～14:30 質疑応答・意見交換

・14:30～15:00 報告「本学COC事業の取り組み成果」学長室長 吉村 充功

・15:00 閉会

○趣旨：本学COC事業では、COCの実際の取り組み例を知る機会として、採択年度の平成26年度より毎年度末にFD/SD研修会を行ってきました。

単独でのCOC事業最終年度となる今年度は、事業終了後のCOC活動の継続のあり方を模索するため、本学より1年早くCOC事業初年度(平成25年度)に北海道・東北地方の私立大学で唯一採択された「東北公益文科大学」(山形県)の事業担当者をお迎えし、COCの取り組みとその後についてご紹介いただきます。

本研修会を通じて、COC活動に対するさらなる理解を深める機会にします。

以上

5 . 事業検討・評価委員会 連携推進会議



日本文理大学 地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）
事業検討・評価委員会の目的

日本文理大学は、文部科学省 平成26年度「地（知）の拠点整備事業」に採択された（事業名：豊かな心と専門的課題解決力を持つおおいの地域創生人材の育成、事業期間：5年）。

本大学COC事業の趣旨は、大学が自治体を中心に地域社会と連携し、全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を進める「地域のための大学」として全学的な教育カリキュラム・教育組織の改革を行いながら、地域の課題（ニーズ）と大学の資源（シーズ）の効果的なマッチングによる地域の課題解決等の取組を進めることである。これにより、大学での学びを通して地域の課題等の認識を深め、解決に向けて主体的に行動できる人材（地域創生人材）を育成することにも、大学のガバナンス改革を推進し、地域再生・活性化の拠点となる大学を形成することを目的としている。

本学の事業では、これまで実績を上げてきた産業界・地域社会を意識した実践活動を主体とした全学での人間力教育をベースとして、地域課題である少子高齢社会を豊かに乗り切るために必要な専門的課題解決力を兼ね備える「地域創生人材」育成へと発展させ、これを地域との実践的協働活動により実現する。すなわち、地域を志向した教育カリキュラム体系への全学的な再編と社会貢献活動との有機的な接続、それに基づく研究プロジェクト活動の推進を実現する地（知）の拠点改革を実現し、地域力の向上につなげることを目的としている。

本事業の推進にあたっては、文部科学省の補助事業であること、また、地域の期待に応える社会的使命の大きな事業であるとの観点から、事業プログラムの実施状況や成果、年次計画等について定期的に全体的な検討・評価を行い、事業の効果的な実施と改善を図り、事業最終年度には設定した目標を達成する必要がある。そこで、上記目的を達成するため、外部委員を含めた本「事業検討・評価委員会」を設置し、毎年度末に委員会を開催することで、適切なPDCAサイクルの機能を担保することとする。

日本文理大学 地（知）の拠点整備事業 事業検討・評価委員会 運営ガイドライン

（趣旨）

1 このガイドラインは、日本文理大学（以下、「本学」という。）地（知）の拠点整備事業（以下、「COC事業」という。）の推進にあたり、外部委員を含めた「本学COC事業 事業検討・評価委員会（以下「本委員会」という。）」の運営に関し、基本的なルールを定めるものである。

（目的）

2 本委員会は、事業プログラムの実施状況や成果、年次計画等について、定期的に全体的な検討・評価を行い、事業の効果的な実施の確認と必要に応じた改善指示を行い、もって事業の適切な推進に寄与することを目的とする。

（議事進行）

3 本委員会の議事進行にあたる議長は、本学学長とする。

（開催時期）

4 本委員会は年間1回の開催とし、開催時期は毎年度末とする。

（委員）

5 委員は連携自治体委員、外部民間委員を含むものとし、当初委員は以下のとおりとする。ただし、代理出席を認めるものとする。

【外部委員】

- 大分県 企画振興部 部長 ○大分市 商工農政部 部長 ○豊後大野市 副市長
- 一般財団法人日本財団学生ボランティアセンター センター長
- 日本政策投資銀行 大分事務所 所長
- 一般財団法人セブン・イン・ア・プレンプ記念財団 九重ふるさと自然学校 代表
- 大分県中小企業家同友会 代表理事

【日本文理大学】

- 学長（事業推進代表者） ○学長室長/人間力育成センター長（事業推進責任者）
- 工学部長 ○経営経済学部長 ○大学院工学研究科長 ○大学教育長
- 産学官民連携推進センター長 ○進路開発センター長

2 事業推進にあたり、取り組みに変更、追加が発生した場合や、より適切な検討・評価を行うために必要と認められた場合には、適宜、委員の変更および追加を認めるものとする。

（事務局）

6 本委員会の事務を処理するため、本学学長室に事務局を置く。

（その他）

7 このガイドラインに定めるもののほか、本委員会への運営に関し必要な事項が発生した場合は、その都度、各連携自治体と協議の上、決定する。

【平成27年度追記】

5 【外部委員】に特定非営利活動法人おおいNPOデザインセンター 代表理事を追加する。

【平成28年度追記】

- 5 【外部委員】の大分市 商工農政部 部長を大分市 農林水産部 部長に変更する。（組織変更）
- 5 【外部委員】の一般財団法人日本財団学生ボランティアセンター センター長を削除する。（利益相反関係にあたるため）

【平成29年度追記】

- 5 【日本文理大学】の学長室長/人間力育成センター長（事業推進責任者）を学長室長（事業推進責任者）と人間力育成センター長に分離する。（役職者変更）
- 5 【日本文理大学】に副学長を追加する。（役職者着任）
- 5 【日本文理大学】の大学教育長を削除する。（組織変更に伴う役職廃止）

【平成30年度追記】

5 【外部委員】に独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立阿蘇青少年交流の家 次長を追加する。以上

日本文理大学 地（知）の拠点整備事業
平成26年度 事業検討・評価委員会

平成27年3月23日

<委員名簿>

○ 外部委員

所属	職名	氏名
大分県 企画振興部	部長	日高 雅近
大分市 商工農政部	部長	吉田 茂樹 (代理：参事 村上 博士)
豊後大野市	副市長	赤嶺 謙二
日本財団学生ボランティアセンター	センター長	西尾 雄志
一般財団法人セブンイレブン記念財団 九重ふるさと自然学校	代表	川野 智美
日本政策投資銀行 大分事務所	所長	武田 浩
大分県中小企業家同友会	代表理事	佐藤 貞一

(敬称略・順不同)

○ 学内委員

所属	職名	氏名
【事業推進代表者】日本文理大学	学長	平居 孝之
【事業推進責任者】日本文理大学 学長室/人間力育成センター	室長/ センター長	吉村 充功
日本文理大学 工学部	学部長	安田 幸夫
日本文理大学 経営経済学部	学部長	橋本 堅次郎
日本文理大学 大学院 工学研究科	研究科長	河邊 博康
日本文理大学 産学官民連携推進センター	センター長	後藤 幹雄 (代理：副センター長 池畑 義人)
日本文理大学	大学教育長	島岡 成治 (次席)
日本文理大学 進路開発センター	センター長	林田 和隆 (代理：経営経済学部 就職委員長 板倉 理友)

<事業担当者>

所属・役割	氏名
学長室WG担当(全体)	釘宮 啓
学長室WG担当(教育)	鍋田 耕作
学長室WG担当(社会貢献)	高見 大介

所属・役割	氏名
COO事業特任教員	市田 秀樹
経営経済学部・准教授	舩田 佳弘
事務局	一丸由紀子

日本文理大学 地（知）の拠点整備事業（大学COO事業）
平成26年度 事業検討・評価委員会 次第

日時：平成27年3月23日（月）14:00～16:00

場所：日本文理大学 情報センター7階 第3会議室

1. 開会
開会あいさつ（学長 平居 孝之）
2. 出席者紹介
3. 日本文理大学 地（知）の拠点整備事業 事業検討・評価委員会の
目的及び運営ガイドラインについて **資料1**
4. 議事
 - I. 本学大学COO事業の概要説明 **資料2**
 - II. 本年度の事業成果について **資料3**
 - III. 来年度の事業計画について **資料4**
5. その他
6. 閉会

事務局：日本文理大学 学長室

日本文理大学 地（知）の拠点整備事業
平成27年度 事業検討・評価委員会

平成28年3月28日

<委員名簿>

○ 外部委員

所 属	職 名	氏 名
大分県 企画振興部	部 長	廣瀬 祐宏 (代理：審議監 中島 英司)
大分市 商工農政部	部 長	吉田 茂樹 (代理：次長 玉野井 雄二)
豊後大野市	副市長	赤嶺 謙二
一般財団法人 日本財団学生ボランティアセンター	代表理事	西尾 雄志
一般財団法人セブンイレブン記念財団 九重ふるさと自然学校	代 表	川野 智美
日本政策投資銀行 大分事務所	所 長	武田 浩
大分県中小企業家同友会	代表理事	佐藤 貞一
特定非営利活動法人 おおいだNPOデザインセンター	代表理事	山下 莖三

(敬称略・順不同)

○ 学内委員

所 属	職 名	氏 名
【事業推進代表者】日本文理大学	学 長	平居 孝之
【事業推進責任者】日本文理大学 学長室/人間力育成センター	室長/ センター長	吉村 充功
日本文理大学 工学部	学部長	安田 幸夫
日本文理大学 経営経済学部	学部長	橋本 堅次郎
日本文理大学 大学院 工学研究科	研究科長	河邊 博康
日本文理大学 産学官民連携推進センター	センター長	池畑 義人
日本文理大学	大学教育長	島岡 成治
日本文理大学 進路開発センター	センター長	林田 和隆 (代理：経営経済学部 就職委員長 坂倉 理友)

<事業担当者>

所 属 ・ 役 割	氏 名
学長室WG担当 (全体)	釘宮 啓
学長室WG担当 (教育)	鍋田 耕作
学長室WG担当 (社会貢献)	高見 大介

所 属 ・ 役 割	氏 名
COO事業特任教員	市田 秀樹
工学部・教授	鈴木 秀男
経営経済学部・准教授	舛田 佳弘

事務局：日本文理大学 学長室

日本文理大学 地（知）の拠点整備事業（大学COO事業）
平成27年度 事業検討・評価委員会 次第

日 時：平成28年3月28日（月）14:00～16:00

場 所：日本文理大学 情報センター7階 第3会議室

1. 開会

開会あいさつ（学長 平居 孝之）

[資料1](#)

2. 事業検討・評価委員会 運営ガイドラインについて

3. 出席者紹介

4. 議事

I. 本年度の取り組み状況報告

（教育・研究・社会貢献、全体取組）

[年次報告書](#)

II. 本年度の成果に対する評価・意見交換

III. 来年度の事業計画について

[資料2](#)

5. その他

6. 閉会

日本文理大学 地（知）の拠点整備事業
平成28年度 事業検討・評価委員会

平成29年3月30日

<委員名簿>

○ 外部委員

所属	職名	氏名
大分県 企画振興部	部長	廣瀬 祐宏 (代理：課長 磯田 健)
大分市 農林水産部	部長	森本 享 (代理：次長 直野 宏昭)
豊後大野市	副市長	赤嶺 謙二
一般財団法人セブン-イレブン記念財団 九重ふるさと自然学校	代表	川野 智美
日本政策投資銀行 大分事務所	所長	和田 康宏
大分県中小企業家同友会	代表理事	佐藤 貞一
特定非営利活動法人 おおいたNPOデザインセンター	代表理事	山下 基三

(敬称略・順不同)

○ 学内委員

所属	職名	氏名
【事業推進代表者】日本文理大学	学長	平居 孝之
【事業推進責任者】日本文理大学 学長室/人間力育成センター	室長/ センター長	吉村 充功
日本文理大学 工学部	学部長	安田 幸夫
日本文理大学 経営経済学部	学部長	松下 乾次
日本文理大学 大学院 工学研究科	研究科長	室園 昌彦
日本文理大学 産学官民連携推進センター	センター長	池畑 義人
日本文理大学	大学教育長	河邊 博康 (次席)
日本文理大学 進路開発センター	センター長	稲富 丈夫

(事業担当者)

所属・役割	氏名
学長室WG担当 (全体)	釘宮 啓
学長室WG担当 (教育)	鍋田 耕作
学長室WG担当 (社会貢献)	高見 大介

所属・役割	氏名
COO担当・特任准教授	市田 秀樹
工学部・教授	鈴木 秀男
経営経済学部・教授	泉 内完
経営経済学部・准教授	舛田 佳弘

事務局：日本文理大学 学長室

日本文理大学 地（知）の拠点整備事業（大学COO事業）
平成28年度 事業検討・評価委員会 次第

日時：平成29年3月30日（木）14:00～16:00

場所：日本文理大学 情報センター7階 第3会議室

1. 開会

開会あいさつ (学長 平居 孝之)

2. 事業検討・評価委員会 運営ガイドラインについて [資料1](#)

3. 出席者紹介

4. 議事

I. 本年度の取り組み状況報告

(教育・研究・社会貢献、全体取組) [資料2](#)

II. 本年度の成果に対する評価・意見交換

III. 来年度の事業計画について [資料3](#)

5. その他

6. 閉会

日本文理大学 地（知）の拠点整備事業
平成29年度 事業検討・評価委員会

<委員名簿>

平成30年3月29日

○ 外部委員

所属	職名	氏名
大分県 企画振興部	部長	廣瀬 祐宏 (代理：政策企画課長 磯田 健)
大分市 農林水産部	部長	森本 亨 (欠席)
豊後大野市	副市長	石掛 忠男
日本政策投資銀行 大分事務所	所長	和田 康宏 (欠席)
一般財団法人セブン・イレブン記念財団 九重ふるさと自然学校	代表	川野 智美
大分県中小企業家同友会	代表理事	塚崎 伸一
特定非営利活動法人 おおいだNPOデザインセンター	代表理事	山下 壘三

(敬称略・順不同)

○ 学内委員

所属	職名	氏名
【事業推進代表者】日本文理大学	学長	菅 貞淑
【事業推進責任者】日本文理大学 学長室	室長	吉村 充功
日本文理大学	副学長	島岡 成治
日本文理大学	副学長	橋本 堅次郎
日本文理大学 工学部/大学院 工学研究科	学部長/研究科長	室園 昌彦
日本文理大学 経営経済学部	学部長	松下 乾次
日本文理大学 産学官民連携推進センター	センター長	池畑 義人
日本文理大学 進路開発センター	センター長	稲富 丈夫
日本文理大学 人間力育成センター	センター長	高見 大介

(事業担当者)

所属・役割	氏名
学長室WG担当 (全体)	釘宮 啓
学長室WG担当 (教育)	鍋田 耕作
COO担当・特任准教授	市田 秀樹

所属・役割	氏名
工学部・教授	鈴木 秀男
経営経済学部・准教授	舛田 佳弘

日本文理大学 地（知）の拠点整備事業（大学COO事業）
平成29年度 事業検討・評価委員会 次第

日時：平成30年3月29日（木）15:00～17:00

場所：日本文理大学 情報センター7階 第3会議室

1. 開会

開会あいさつ（学長 菅 貞淑）

2. 事業検討・評価委員会 運営ガイドラインについて [資料1](#)

3. 出席者紹介

4. 議事

I. 本年年度の取り組み状況報告（教育・研究・社会貢献、全体取組）

[年次報告書](#) [資料2-1](#)～[資料2-4](#)

II. 本年年度の成果に対する評価・意見交換

III. 来年度の事業計画について [資料3](#)

5. その他

6. 閉会

事務局：日本文理大学 学長室

日本文理大学 地（知）の拠点整備事業
平成30年度 事業検討・評価委員会

<委員名簿>

平成31年3月26日

○ 外部委員

所 属	職 名	氏 名
大分県 企画振興部	部 長	岡本 天津男
大分市 農林水産部	部 長	森本 亨
豊後大野市	副市長	石掛 忠男
日本政策投資銀行 大分事務所	所 長	福山 公博
一般財団法人セブン・イレブン記念財団 九重ふるさと自然学校	代 表	川野 智美
大分県中小企業家同友会	代表理事	塚崎 伸一
特定非営利活動法人 おおいたNPOデザインセンター	代表理事	山下 壘三
独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立阿蘇青少年交流の家	次 長	北見 靖直

(敬称略・順不同)

○ 学内委員

所 属	職 名	氏 名
【事業推進代表者】日本文理大学	学 長	菅 貞淑
【事業推進責任者】日本文理大学 学長室	室 長	吉村 充功
日本文理大学	副学長	島岡 成治
日本文理大学	副学長	橋本 堅次郎
日本文理大学 工学部/大学院 工学研究科	学部長/研究科長	室園 昌彦
日本文理大学 経営経済学部	学部長	松下 乾次
日本文理大学 産学官民連携推進センター	センター長	池畑 義人
日本文理大学 進路開発センター	センター長	稲富 丈夫
日本文理大学 人間力育成センター	センター長	高見 大介

日本文理大学 地（知）の拠点整備事業（大学COO事業）
平成30年度 事業検討・評価委員会 次第

日 時：平成31年3月26日（火）15:00～17:00

場 所：日本文理大学 情報センター7階 第1会議室

1. 開会

開会あいさつ（学長 菅 貞淑）

2. 事業検討・評価委員会 運営ガイドラインについて 資料1

3. 出席者紹介

4. 議事

I. 本年度の取り組み状況報告（教育・研究・社会貢献、全体取組）

資料2-1～資料2-3 成果報告書 成果リーフレット

II. 本年度及び事業期間全体の成果に対する評価・意見交換

III. 次年度以降の事業推進について 資料3

5. その他

6. 閉会

事務局：日本文理大学 学長室

日本文理大学 地（知）の拠点整備事業 連携推進会議 運営ガイドライン

（趣旨）

1 このガイドラインは、日本文理大学（以下、「本学」という。）地（知）の拠点整備事業（以下、「COC事業」という。）の推進にあたり、本学と連携自治体とで構成する「連携推進会議（以下「本会議」という。）」の運営に関し、基本的なルールを定めるものである。

（目的）

2 本会議は、COC事業の円滑な推進のため、本学と連携自治体各部署とが本事業にかかる地域課題を共有し、人材育成と政策課題に対応した地域振興のための具体的な取組とその進捗状況を把握・共有、改善を図ることを目的とする。

（議事進行）

3 本会議の議事進行にあたる議長は、本学学長とする。

（開催時期）

4 本会議は年間2回の開催とし、開催時期は4月および10月とする。ただし、平成26年度は10月のみの開催とする。

（構成員）

5 当初構成員は以下のとおりとし、各自治体担当部署の課長または室長または支所長の参加を求めるものとする。ただし、代理出席を認めるものとする。

【日本文理大学】

- 学長（事業推進代表者） ○学長室長（事業推進責任者） ○副学長
- 工学部長 ○経営経済学部長 ○大学院工学研究科長 ○産学官民連携推進センター長
- FD委員長 ○人間力育成センター長 ○学長室WG担当 ○COC事業担当特任教員

【大分県】

- 企画振興部 政策企画課 ○企画振興部 観光・地域局 地域活力応援室
- 商工労働部 商業・サービス業振興課 ○商工労働部 経営創造・金融課
- 生活環境部 自然保護推進室 ○農林水産部 おおいブランド推進課
- 消費生活・男女共同参画プラザ 県民活動支援室
- 教育庁 体育保健課

【大分市】

- 企画部 企画課 ○市民部 佐賀岡支所 ○農林水産部 農政課
- 企画部 スポーツ振興課

【豊後大野市】

- 総務課 ○まちづくり推進課 ○商工観光課 ○高齢者福祉課

2 事業推進にあたり、取り組みに変更、追加が発生した場合、適宜、部局の変更および追加を認めるものとする。

（事務局）

6 本会議の事務を処理するため、本学学長室に事務局を置く。

（その他）

7 このガイドラインに定めるもののほか、本会議の運営に関し必要な事項が発生した場合は、その都度、各自治体担当部署と協議の上、決定する。

平成26年10月29日作成

平成27年6月26日一部修正

平成28年6月27日一部修正

平成29年7月5日一部修正

日本文理大学 地（知）の拠点整備事業（大学ＣＯＣ事業）
平成26年度 第1回 連携推進会議 次第

日時：平成26年10月29日（水）10:00～12:00

場所：日本文理大学 情報センター7階 プレゼンテーションショールーム

1. 開会

開会あいさつ（学長 平居 孝之）

2. 出席者紹介

3. 連携推進会議の目的及び運営ガイドラインについて [資料1](#)

4. 議事

I. 本学大学ＣＯＣ事業の概要説明 [資料2](#)

現状と目的、

対象とする地域課題と具体的な取組、教育カリキュラム改革方針、

年次計画、連携推進方法 等

II. 意見交換等

III. 今後の進め方及びスケジュールについて [資料3](#)

5. その他

I. 本学大学ＣＯＣ事業キックオフシンポジウムについて

6. 閉会

事務局：日本文理大学 学長室

日本文理大学 地（知）の拠点整備事業 平成26年度 第1回 連携推進会議

平成26年10月29日

<出席者名簿>

○大分県

所 属	職 名	氏 名	主な連携取組内容
企画振興部 政策企画課	主幹(総括) 研修生	渡辺 康志 布施 寛弘	本学との連携・調整窓口
企画振興部 芸術文化スポーツ局	課長	高橋 基典	ユネスコエコパーク認定推進活動
芸術文化スポーツ振興課	室長	高屋 博	過疎地域の集落維持・活性化活動
企画振興部 観光・地域局	副主幹	武藤 祐治	
集落応援室			
生活環境部			
消費生活・男女共同参画プラザ	室長	河野 雅弘	NPO法人との協働・経営支援活動
県民活動支援室			
商工労働部 経営金融支援室	室長	工藤 典幸	学生起業家マインド育成活動
商工労働部			
商業・サービス業振興課	主査	木付 佳代	商店街と連携した地域活性化活動
農林水産部			
おおいたブランド推進課	主幹	那須 祐介	地域ブランド発掘による6次化活動
教育庁 体育保健課	指導主事	塚崎 一孝	総合型地域スポーツクラブ支援活動

(敬称略)

○大分市

所 属	職 名	氏 名	主な連携取組内容
企画部 市長室	参事	平松 禎行	
	主査	足立 威士	本学との連携・調整窓口
市民部 佐賀関支所	支所長	太田 宏	地域と連携した地域活性化活動
商工農政部 産業振興課	課長	滝口 裕朗	地域ブランドを活かした6次化活動
教育部 スポーツ・健康教育課	課長	有馬 徹	健康で活力に満ちた生活支援活動

(敬称略)

○豊後大野市

所 属	職 名	氏 名	主な連携取組内容
総務課	課長	佐保 正幸	
	参事	堀 克則	本学との連携・調整窓口
まちづくり推進課	課長	藤元 篤夫	集落維持・活性化活動
商工観光課	課長	大野 真寛	エコパーク認定推進活動

(敬称略)

○日本文理大学

所 属・役 職	氏 名
学長	平居 孝之
学長室長/人間力育成センター長	吉村 充功
工学部長	安田 幸夫
経営経済学部長	橋本 堅次郎
大学教育長	島岡 成治
産学官民連携推進センター長	後藤 幹雄
F D委員長	近藤 正一

所 属・役 割	氏 名
学長室WG担当(全体)	釘宮 啓
学長室WG担当(教育)	鍋田 耕作
学長室WG担当(研究)	池畑 義人
学長室WG担当(社会貢献)	高見 大介

日本文理大学 地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）
平成27年度 第1回 連携推進会議 次第

日 時：平成27年6月26日（金）15:00～16:30
場 所：日本文理大学 情報センター7階 プレゼンテーションルーム

1. 開会
開会あいさつ（学長 平居 孝之）
2. 議事
 - (1) 連携推進会議 運営ガイドラインについて 資料1
 - (2) 本学大学COC事業の概要と平成26年度事業報告 資料2-1 2-2
 - (3) 平成27年度事業計画 資料3-1 3-2
 - (4) 教育カリキュラム改革の状況（地域志向科目の設定） 資料4
 - (5) 平成27年度地域志向プロジェクト研究採択結果 資料5
 - (6) 対象とする地域課題と平成27年度の具体的な取組予定 資料6-1 6-2
 - (7) 今後の進め方及びスケジュールについて
3. その他
4. 閉会

事務局：日本文理大学 学長室

日本文理大学 地（知）の拠点整備事業 平成27年度 第1回 連携推進会議

平成27年6月26日

<出席者名簿>

○大分県

所 属	職 名	氏 名	主な連携取組内容
企画振興部 政策企画課	研修生	布施 寛弘	本学との連携・調整窓口
企画振興部 芸術文化スポーツ局	主査	師藤 京子	ユネスコエコパーク認定推進活動
企画振興部 観光・地域局	副主幹	武藤 祐治	過疎地域の集落維持・活性化活動
生活環境部 消費生活・男女共同参画プラザ	室長	河野 雅弘	NPO法人との協働・経営支援活動
県民活動支援室	主任	大河原 大策	学生起業家マイナード育成活動
商工労働部 経営金融支援室	課長	武藤 康彦	商店街と連携した地域活性化活動
商工労働部 商業・サービス業振興課	課長補佐 (総務)	上田 顕秀	地域ブランド発掘による6次化活動
農林水産部 おおいたブランド推進課	指導主事	島畑 欣史	総合型地域スポーツクラブ支援活動
教育部 体育保健課			(敬称略)

○大分市

所 属	職 名	氏 名	主な連携取組内容
企画部 市長室	参事	高田 隆秀	本学との連携・調整窓口
	主査	足立 威士	
市民部 佐賀関支所	参事補	中家 一	地域と連携した地域活性化活動
商工農政部 産業振興課	参事	滋野 慶造	地域ブランドを活かした6次化活動
教育部 スポーツ・健康教育課	教育部次長 兼 課長	有馬 徹	健康で活気に満ちた生活支援活動
			(敬称略)

○豊後大野市

所 属	職 名	氏 名	主な連携取組内容
総務課 秘書広報係	係長	板井 孝文	本学との連携・調整窓口
まちづくり推進課	課長	足立 哲啓	集落維持・活性化活動
商工観光課	課長	大野 真寛	エコバーク認定推進活動
			(敬称略)

○日本文理大学

所 属・役 職	氏 名	所 属・役 職	氏 名
学長	平居 孝之	産学官民連携推進センター長 /学長室WG担当(研究)	池畑 義人
学長室長/人間力育成センター長	吉村 充功	学長室WG担当(全体)	釘宮 啓
工学部長	安田 幸夫	学長室WG担当(教育)	鍋田 耕作
経営経済学部長	橋本 堅次郎	学長室WG担当(社会貢献)	高見 大介
大学院工学研究科長	河邊 博康	COC事業担当特任教員	市田 秀樹
大学教育長	島岡 成治		

日本文理大学 地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）
平成27年度 第2回 連携推進会議 次第

日 時：平成27年11月27日（金）13：30～15：30

場 所：日本文理大学 情報センター7階 プレゼンテーションルーム

1. 開会

開会あいさつ（学長 平居 孝之）

2. 出席者紹介（新規出席者のみ）

3. 議事

- (1) 平成27年度取組状況報告（対象とする地域課題7テーマ主要取組）[資料1](#)
- 3. 自然の積極的な活用による保全と地域活性化（観光・教育）（舩田）
- 6. NPO法人の活動・経営支援（吉本）
- 1. 小規模・高齢化が深刻な集落におけるコミュニティの維持・活性化（池畑）
- 2. 人口減少社会を支えるための先進的なものづくり（市田）
- 4. 地域商店及び商店街の活性化による地域振興（今西）
- 5. 健康増進及び生活支援によるコミュニティの維持（堀）
- 7. 地域ブランドの発掘による交流人口の増加・産業の活性化（6次化）（工藤）

その他：その他の取組・教育カリキュラム改革等の状況（吉村）[資料2・3](#)

(2) 意見交換等

(3) 今後のスケジュールについて

3. その他

4. 閉会

事務局：日本文理大学 学長室

日本文理大学 地（知）の拠点整備事業 平成27年度 第2回 連携推進会議

平成27年11月27日

<出席者名簿>

○大分県

所 属	職 名	氏 名	主な連携取組内容
企画振興部 政策企画課	主幹	角淵 達彦	本学との連携・調整窓口
企画振興部 芸術文化スポーツ局 芸術文化スポーツ振興課		(欠席)	ユネスコエコパーク認定推進活動
企画振興部 観光・地域局 地域活力応援室	室長	磯田 健	過疎地域の集落維持・活性化活動
	副主幹	武藤 祐治	
生活環境部 消費生活・男女共同 参画プラザ 県民活動支援室		(欠席)	NPO法人との協働・経営支援活動
商工労働部 経営金融支援室		(欠席)	学生起業家マイナード育成活動
商工労働部 商業・サービス業振興課	課長	武藤 康彦	商店街と連携した地域活性化活動
農林水産部 おおいたブランド推進課	課長補佐	上田 顕秀	地域ブランド発掘による6次化活動
教育庁 体育保健課	指導主事	島畑 欣史	総合型地域スポーツクラブ支援活動 (敬称略)

○大分市

所 属	職 名	氏 名	主な連携取組内容
企画部 市長室	主査	足立 威士	本学との連携・調整窓口
市民部 佐賀閣支所	支所長	太田 宏	地域と連携した地域活性化活動
商工農政部 産業振興課	課長	滝口 裕朗	地域ブランドを活かした6次化活動
教育部 スポーツ・健康教育課	教育部次長 兼 課長	有馬 徹	健康で活気に満ちた生活支援活動 (敬称略)

○豊後大野市

所 属	職 名	氏 名	主な連携取組内容
総務課 秘書広報係	係長	板井 孝文	本学との連携・調整窓口
まちづくり推進課	課長	足立 哲啓	集落維持・活性化活動
商工観光課		(欠席)	エコパーク認定推進活動 (敬称略)

○日本文理大学

所 属・役 職	氏 名
学長	平居 孝之
学長室長/人間力育成センター長	吉村 充功
工学部 学長	安田 幸夫
経営経済学部長	橋本 聖次郎
大学院工学研究科長	(欠席)
大学教育長	島岡 成治

所 属・役 職	氏 名
産学官民連携推進センター長 /学長室WG担当(研究)	池畑 義人
F D委員長	本村 裕之
学長室WG担当(全体)	釘宮 啓
学長室WG担当(教育)	鍋田 耕作
学長室WG担当(社会貢献)	高見 大介
COC事業担当特任教員	市田 秀樹

日本文理大学 地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）
平成28年度 第1回 連携推進会議 次第

日 時：平成28年6月27日（月）15:00～16:30

場 所：日本文理大学 情報センター7階 プレゼンテーションシヨナルーム

1. 開会： 開会あいさつ（学長 平居 孝之）

2. 出席者紹介

3. 議事

(1) 連携推進会議 運営ガイドラインについて [資料1](#)

(2) 本学COC事業の概要と平成27年度事業報告

○ 対象とする地域課題（7テーマ）についての取組状況報告 [資料2](#)

○ その他の取組・教育カリキュラム改革の状況報告等 [資料3](#)

○ 外部事業評価・検討委員会の評価報告 [資料4](#)

(3) 本学3つのポリシーと平成28年度事業計画

○ 3つのポリシー（学位授与・教育課程編成・入学者選抜方針）について [資料5](#)

○ 全体事業計画と対象とする地域課題と具体的な取組計画 [資料6](#)

○ 教育カリキュラム改革の状況（地域志向科目の設定状況） [資料7](#)

○ 地域志向プロジェクト研究採択結果 [資料8](#)

○ 地域貢献度調査（住民アンケート）について [資料9](#)

(4) 全体意見交換等

(5) 今後のスケジュールについて

○ 文科省 中間評価について [資料10](#)

4. その他

5. 閉会

事務局：日本文理大学 学長室

日本文理大学 地（知）の拠点整備事業 平成28年度 第1回 連携推進会議

平成28年6月27日

<出席者名簿>

○大分県

所 属	職 名	氏 名	主な連携取組内容
企画振興部 政策企画課	主幹	角 達彦	本学との連携・調整窓口
企画振興部 観光・地域局 地域活力応援室	主幹	川 越 誠	過疎地域の集落維持・活性化活動
商工労働部 商業・サービス業振興課	副主幹	中 宮 美穂	商店街と連携した地域活性化活動
教育部 体育保健課	指導主事	武 石 隆一	総合型地域スポーツクラブ支援活動
生活環境部 自然保護推進室	室長	山 崎 吉明	ユネスコエコパーク認定推進活動
農林水産部 おおいのブランド推進課	流通企画監	石 井 修三	地域ブランド発掘による6次化活動
商工労働部 経営創造・金融課	副主幹	阿 部 浩考	学生起業家マインド育成活動
生活環境部 消費生活・男女共同参画プラザ 県民活動支援室	室長	石 垣 和之	NPO法人との協働・経営支援活動

(敬称略)

○大分市

所 属	職 名	氏 名	主な連携取組内容
企画部 企画課	次長兼課長	永 松 薫	本学との連携・調整窓口
市民部 佐賀開支所	参事補	中 島 恭介	地域と連携した地域活性化活動
農林水産部 農政課	次長兼課長	重 松 勝也	地域ブランドを活かした6次化活動
教育部 スポーツ・健康教育課	—	(欠席)	健康で活気に満ちた生活支援活動

(敬称略)

○豊後大野市

所 属	職 名	氏 名	主な連携取組内容
総務課	課長	佐 保 正幸	本学との連携・調整窓口
まちづくり推進課	課長	足 立 哲啓	集落維持・活性化活動
商工観光課	課長	神 田 聖弘	エコパーク認定推進活動
高齢者福祉課	課長	足 立 建士	高齢社会における課題解決・福祉活動

(敬称略)

○日本文理大学

所 属・役 職	氏 名	所 属・役 職	氏 名
学長	平 居 孝之	産学官民連携推進センター長 /学長室WG担当(研究)	池 畑 義人
学長室長/人間育成センター長	吉 村 充功	FD委員長	本 村 裕之
工学部長	安 田 幸夫	学長室WG担当(全体)	釘 宮 啓
経営経済学部長	松 下 乾次	学長室WG担当(教育)	錦 田 耕作
大学院工学研究科長	室 園 昌彦	学長室WG担当(社会貢献)	高 見 大介
大学教育長	河 邊 博康	COC事業担当特任教員	市 田 秀樹

日本文理大学 地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）
平成28年度 第2回 連携推進会議 次第

日 時：平成28年11月30日（木）14：30～16：45

場 所：日本文理大学 情報センター7階

ブレゼンテーションルーム（全体会・第1分科会）

第3会議室（第2分科会）

<全体会①：14：30～14：55>

1. 開会： 開会あいさつ（学長 平居 孝之）

2. 議事

（1）平成28年度全体進捗報告 [資料1～4](#)

<分科会：15：00～16：20>

（2）各プロジェクト報告・意見交換会（報告 各5分＋質疑5分、全体意見交換 30分程度）

分科会①<ブレゼンテーションルーム>：

報告タイトル	報告者	地域課題該当テーマ
豊後大野市大野町土師地区における住民と学生による地域コミュニティ活動	池畑教授	1. 小規模・高齢化が深刻な集落におけるコミュニティの維持・活性化 3. 自然の積極的な活用による保全と地域活性化（観光・教育）
豊後大野市緒方町における域学協働によるエコパーク認定活動に向けた取り組み	鈴木(秀)教授	2. 人口減少社会を支えるための先進的なものづくり
位置検出システムのための画像処理ソフトの開発、高齢者向けものづくり教材の開発	今西准教授	3. 自然の積極的な活用による保全と地域活性化（観光・教育）
豊後大野市の地域資源を活かしたサービスラーニング科目への展開	坂口助教	5. 健康増進及び生活支援によるコミュニティの維持

分科会②<第3会議室>：

報告タイトル	報告者	地域課題該当テーマ
『地域にいきるものづくり』を目指したプロジェクト科目の実践	市田准教授	2. 人口減少社会を支えるための先進的なものづくり
大学生観光まちづくりコンテスト2016	橋本教授	3. 自然の積極的な活用による保全と地域活性化（観光・教育）

フィールド・スタディを中心とした学生主体の地域活性化カリキュラム	本村教授	4. 地域商店及び商店街の活性化による地域振興
スポーツイベント実践を通じた地域創生人材の育成	堀准教授	5. 健康増進及び生活支援によるコミュニティの維持
国際交流による地域活性化（韓国料理教室、道の駅原尻の滝インタナレーション）	泉教授	7. 地域ブランドの発掘による交流人口の増加・産業の活性化（6次化）
農産物の付加価値アップによる地域の活性化・産業創出活動への参加	工藤准教授	

<全体会②：16：25～16：45>

（3）分科会報告

（4）その他

3. 今後のスケジュールについて

4. 閉会

事務局：日本文理大学 学長室

日本文理大学 地（知）の拠点整備事業 平成28年度 第2回 連携推進会議

<構成員出席者名簿>

平成28年11月30日

○大分県

所 属	職 名	氏 名	主な連携取組内容
企画振興部 政策企画課	主幹	角淵 達彦	本学との連携・調整窓口
企画振興部 観光・地域局 地域活力広域室	室長	森高 美代子	過疎地域の集落維持・活性化活動
商工労働部 商業・サービス業振興課	副主幹	中宮 美穂	商店街と連携した地域活性化活動
教育庁 体育保健課	指導主事	武石 隆一	総合型地域スポーツクラブ支援活動
生活環境部 自然保護推進室	副主幹	師藤 京子	ユネスコエコパーク認定推進活動
農林水産部 おおいのブランド推進課	課長補佐 (総括)	牛島 裕美	地域ブランド発掘による6次化活動
商工労働部 経営創造・金融課	主任	大河原 大策	学生起業家マインド育成活動
大分県消費生活・男女共同参画プラザ 県民活動支援室	主査	伊東 大樹	NPO法人との協働・経営支援活動

(敬称略)

○大分市

所 属	職 名	氏 名	主な連携取組内容
企画部 企画課	参事補	安達 浩	本学との連携・調整窓口
	主事	園田 哲也	
市民部 佐賀開支所	参事補	中島 恭介	地域と連携した地域活性化活動
教育部 スポーツ・健康教育課		(欠席)	健康で活力に満ちた生活支援活動
農林水産部 農政課	次長兼課長	重松 勝也	地域ブランドを活かした6次化活動

(敬称略)

○豊後大野市

所 属	職 名	氏 名	主な連携取組内容
総務課	係長	宗像 修	本学との連携・調整窓口
まちづくり推進課	課長	足立 哲啓	集落維持・活性化活動
商工観光課	課長	神田 聖弘	エコパーク認定推進活動
高齢者福祉課	課長	足立 建士	高齢社会における課題解決・福祉活動

(敬称略)

○日本文理大学

所 属・役 職	氏 名	所 属・役 職	氏 名
学長	平居 孝之	産学官民連携推進センター長 / 学長室WG担当(研究)	池畑 義人
学長室長/人間力育成センター長	吉村 充功	FD委員長	本村 裕之
工学部長	安田 幸夫	学長室WG担当(全体)	釘宮 啓
経営経済学部長	松下 乾次	学長室WG担当(教育)	鍋田 耕作
大学院工学研究科長	室園 昌彦	学長室WG担当(社会貢献)	高見 大介
大学教育長	河邊 博康	COO事業担当特任教員	市田 秀樹

日本文理大学 地（知）の拠点整備事業（大学COO事業）
平成29年度 第1回 連携推進会議 次第

日 時：平成29年7月5日（水）15:00～17:15

場 所：日本文理大学 情報センター7階

プレゼンテーションルーム（全体会・第1分科会）
第3会議室（第2分科会）

<全体会①：15:00～15:20>

1. 開会：開会あいさつ（学長 菅 貞淑）
2. 議事

(1) 運営ガイドラインの変更について **資料1**

(2) 平成28年度取組状況報告 **資料2-1**～**資料2-7**

(3) 平成29年度事業計画 **資料3-1**～**資料3-3**

<分科会：15:25～16:55>

- (4) 各プロジェクト報告・意見交換会（報告 各7分+質疑5分、全体意見交換20分程度）

分科会①<プレゼンテーションルーム>：

報告タイトル	報告者	地域課題該当テーマ
地域住民主体の地域づくり支援 豊後大野市千歳町「楽らく広場ひょうたん」活動サポート	坂口助教	5. 健康増進及び生活支援によるコミュニティの維持
豊後大野市大野町土師地区における住民と学生による地域コミュニティ活動	池畑教授	1. 小規模・高齢化が深刻な集落におけるコミュニティの維持・活性化 3. 自然の積極的な活用による保全と地域活性化（観光・教育）
豊後大野市緒方町における域学協働によるエコパーク認定活動に向けた取り組み	今西准教授	3. 自然の積極的な活用による保全と地域活性化（観光・教育） 7. 地域ブランドの発掘による交流人口の増加・産業の活性化
豊後大野市の地域資源を活かしたフィールドスタディ科目への展開と地域観光プロモーションにおける需要予測に関する研究	川崎教授	2. 人口減少社会を支えるための先進的なものづくり
大分県農業のブランド化と関連産業活性化を目的とした自然エネルギー利用型ブラスマ農業に関する研究開発	鈴木(秀)教授	1. 小規模・高齢化が深刻な集落におけるコミュニティの維持・活性化 2. 人口減少社会を支えるための先進的なものづくり

分科会②<第3会議室>:

報告タイトル	報告者	地域課題該当テーマ
佐賀県地区における地域コミュニティでの活動を通じた観光・商店街・地域の活性化	吉村教授	1. 小規模・高齢化が深刻な集落におけるコミュニティの維持・活性化 4. 地域商店及び商店街の活性化による地域振興 7. 地域ブランドの発掘による交流人口の増加・産業の活性化 5. 健康増進及び生活支援によるコミュニティの維持
スポーツイベント表紙を通じた地域創生人材の育成	郷准教授	2. 人口減少社会を支えるための先進的なものづくり 4. 地域商店及び商店街の活性化による地域振興
地域経済を考慮した地域課題取組みに向けたプラットフォーム構築	市田准教授	4. 地域商店及び商店街の活性化による地域振興
生きているのあらゆるくらしを創るオープンイノベーションワークショップ	本村教授	4. 地域商店及び商店街の活性化による地域振興

<全体会②: 17:00~17:10>

(5) 分科会報告

(6) その他

3. 今後のスケジュールについて

4. 閉会

事務局: 日本文理大学 学長室

日本文理大学 地(知)の拠点整備事業 平成29年度 第1回 連携推進会議

平成29年7月5日

<出席者名簿>

○大分県

所 属	職 名	氏 名	主な連携取組内容
企画振興部 政策企画課	副主幹	平山 聡	本学との連携・調整窓口
企画振興部 観光・地域局	室長	岩崎 栄	過疎地域の集落維持・活性化活動
地域活力応援室			
商工労働部 商業・サービス業振興課	副主幹	中宮 美穂	商店街と連携した地域活性化活動
教育庁 体育保健課	指導主事	武石 隆一	総合型地域スポーツクラブ支援活動
生活環境部 自然保護推進室	主査	工藤 慎也	ユネスコエコパーク認定推進活動
農林水産部 おおいたブランド推進課	主幹	堺田 健	地域ブランド発掘による6次化活動
商工労働部 経営創造・金融課	主任	麻生 柳大朗	学生起業家マインド育成活動
大分県消費生活・男女共同参画プラザ			
県民活動支援室	室長	石垣 和之	NPO法人との協働・経営支援活動

(敬称略)

○大分市

所 属	職 名	氏 名	主な連携取組内容
企画部 企画課	参事補 主査	金子 明弘 中野 悠樹	本学との連携・調整窓口
市民部 佐賀南支所	主査	飯塚 智	地域と連携した地域活性化活動
企画部 スポーツ振興課	課長	永田 佳也	健康で活気に満ちた生活支援活動
農林水産部 農政課	次長兼課長	重松 勝也	地域ブランドを活かした6次化活動

(敬称略)

○豊後大野市

所 属	職 名	氏 名	主な連携取組内容
総務課	課長	左右知 新一	本学との連携・調整窓口
まちづくり推進課	課長	堀 善裕	集落維持・活性化活動
商工観光課		(欠席)	エコパーク認定推進活動
高齢者福祉課	課長補佐	高野 辰代	高齢社会における課題解決・福祉活動

(敬称略)

○日本文理大学

所 属・役 職	氏 名	所 属・役 職	氏 名
学長	菅 貞淑	産学官民連携推進センター長 /学長室WG担当(研究)	池畑 義人
学長室長	吉村 充功	F D委員長	西村 謙司
副学長	橋本 堅次郎	学長室WG担当(全体)	釘宮 啓
副学長	島岡 成治	人間力育成センター長 /学長室WG担当(社会貢献)	高見 大介
大学院工学研究科長/工学部長	室園 昌彦	学長室WG担当(教育)	鍋田 耕作
経営経済学部長	松下 乾次	COC事業担当特任教員	市田 秀樹

日本文理大学 地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）
平成29年度 第2回 連携推進会議 次第

日時：平成29年11月29日（水）15:00～17:15

場所：日本文理大学 情報センター7階

ブレゼンテーションセッションルーム（全体会・第1分科会）

第3会議室（第2分科会）

<全体会①：15:00～15:15>

1. 開会： 開会あいさつ（学長 菅 貞淑）
2. 議事

（1）平成29年度取組状況報告 [資料1](#)～[資料3](#)

<分科会：15:20～16:50>

- （2）各プロジェクト報告・意見交換会

（報告 各7分（最大10分）+質疑5分程度、全体意見交換15分程度）

分科会①<ブレゼンテーションルーム>：

No	報告タイトル	報告者	地域課題該当テーマ
1	地域住民主体の地域づくり支援 ～つながりある地域に向けて～ （豊後大野市千歳町での取組み）	坂口助教	5. 健康増進及び生活支援による コミュニティの維持
2	豊後大野市大野町土師地区における 住民と学生による地域コミュニティ活動	池畑教授	1. 小規模・高齢化が深刻な集落に おけるコミュニティの維持・活性化 3. 自然の積極的な活用による保全と 地域活性化（観光・教育）
3	城学協働によるエコバーク認定活動に向けた 取り組み		
4	豊後大野市の地域資源を活かしたファイナル ド・スタディ科目への展開と地域観光プロモー ションにおける需要予測に関する研究	今西准教授	3. 自然の積極的な活用による保全と 地域活性化（観光・教育） 7. 地域ブランドの発掘による 交流人口の増加・産業の活性化
5	高齢者向けものづくり教材の開発	鈴木(秀)教授	1. 小規模・高齢化が深刻な集落に おけるコミュニティの維持・活性化 2. 人口減少社会を支えるための 先進的なものづくり

分科会②<第3会議室>：

No	報告タイトル	報告者	地域課題該当テーマ
1	佐賀県地区における地域コミュニティでの 活動を通じた観光・商店街・地域の活性化	吉村教授	1. 小規模・高齢化が深刻な集落に おけるコミュニティの維持・活性化 4. 地域商店及び商店街の活性化に よる地域振興 7. 地域ブランドの発掘による 交流人口の増加・産業の活性化
2	COC+協働開発科目 『大分の地域ブランド創造体験』実施計画		
3	生きがいのあるくらしを創る オーブンイノベーションワークショップ	市田准教授	2. 人口減少社会を支えるための 先進的なものづくり
4	地域経済を考慮した地域課題取組みに向けた プラットフォーム構築	福島教授	2. 人口減少社会を支えるための 先進的なものづくり 4. 地域商店及び商店街の活性化に よる地域振興
5	ワールド・スタディを中心とした 学生主体の地域活性化カリキュラム	本村教授	4. 地域商店及び商店街の活性化に よる地域振興
6	スポーツイベント実践を通じた 地域創生人材の育成	堀准教授	5. 健康増進及び生活支援による コミュニティの維持

<全体会②：16:55～17:15>

- （3）分科会報告
 - （4）全体連絡事項
 - （5）その他
3. 閉会

事務局：日本文理大学 学長室

日本文理大学 地（知）の拠点整備事業 平成29年度 第2回 連携推進会議

平成29年11月29日

<出席者名簿>

○大分県

所 属	職 名	氏 名	主な連携取組内容
企画振興部 政策企画課	副主任	平山 聡	本学との連携・調整窓口
企画振興部 観光・地域局 地域活力応援室	主任	岡本 海里	過疎地域の集落維持・活性化活動
商工労働部 商業・サービス業振興課	副主任	中宮 美穂	商店街と連携した地域活性化活動
教育庁 体育保健課	指導主事	武石 隆一	総合型地域スポーツクラブ支援活動
生活環境部 自然保護推進室	主査	工藤 慎也	ユネスコエコパーク認定推進活動
農林水産部 おおいたブランド推進課	主幹	堺田 健 (欠席)	地域ブランド発掘による6次化活動
商工労働部 経営創造・金融課			学生起業家マイナンド育成活動
大分県消費生活・男女共同参画プラザ 県民活動支援室	室長	石垣 和之	NPO法人との協働・経営支援活動

(敬称略)

○大分市

所 属	職 名	氏 名	主な連携取組内容
企画部 企画課		(欠席)	本学との連携・調整窓口
市民部 佐賀関支所	参事補	中島 恭介	地域と連携した地域活性化活動
企画部 スポーツ振興課	課長	永田 佳也	健康で活力に満ちた生活支援活動
農林水産部 農政課	次長兼課長	重松 勝也	地域ブランドを活かした6次化活動

(敬称略)

○豊後大野市

所 属	職 名	氏 名	主な連携取組内容
総務課		(欠席)	本学との連携・調整窓口
まちづくり推進課		(欠席)	集落維持・活性化活動
商工観光課		(欠席)	エコパーク認定推進活動
高齢者福祉課		(欠席)	高齢社会における課題解決・福祉活動

(敬称略)

○日本文理大学

所 属・役 職	氏 名	所 属・役 職	氏 名
学長	菅 貞淑	産学官民連携推進センター長 / 学長室WG担当(研究)	池畑 義人
学長室長	吉村 充功	FD委員長	西村 謙司
副学長	橋本 堅次郎	学長室WG担当(全体)	釘宮 啓
副学長	高岡 成治	人間力育成センター長 / 学長室WG担当(社会貢献)	高見 大介
大学院工学研究科長/工学部長	室園 昌彦	学長室WG担当(教育)	鍋田 耕作
経営経済学部長	松下 乾次	COC事業担当特任教員	市田 秀樹

日本文理大学 地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）
平成30年度 第1回 連携推進会議 次第

日 時：平成30年7月4日（水）15:00～17:15

場 所：日本文理大学 情報センター7階

プレゼンテーションルーム（全体会・第1分科会）
第3会議室（第2分科会）

<全体会①：15:00～15:20>

1. 開会： 開会あいさつ（学長 菅 貞淑）
2. 議事

(1) 平成29年度取組状況報告 [資料1-1](#)～[資料1-6](#)

(2) 平成30年度事業計画 [資料2-1](#)～[資料2-4](#)

<分科会：15:25～16:55>

- (3) 各プロジェクト報告・意見交換会（報告 各7分+質疑5分、全体意見交換15分程度）

分科会①<プレゼンテーションルーム>：

報告タイトル	報告者	地域課題該当テーマ
正課外プロジェクトによる地域貢献	高見助教	L.「おおいた、つくりびと」育成の基盤となる活動
地域住民主体の地域づくり支援～豊後大野市千歳町 つながりある地域に向けて	坂口准教授	5. 健康増進及び生活支援によるコミュニティの維持
豊後大野市大野町土師地区における住民と学生による地域コミュニティ維持活動	池畑教授	1. 小規模・高齢化が深刻な集落におけるコミュニティの維持・活性化
豊後大野市の地域資源を活かしたフィールド・スタディ科目への展開と地域観光プロモーションにおける需要予測に関する研究	今西准教授	3. 自然の積極的な活用による保全と地域活性化（観光・教育） 7. 地域ブランドの発掘による交流人口の増加・産業の活性化
高齢者向けものづくり教材の開発	鈴木（秀）教授	1. 小規模・高齢化が深刻な集落におけるコミュニティの維持・活性化 2. 人口減少社会を支えるための先進的なものづくり
国際交流による地域活性化（料理教室による地域住民との交流活動）	泉教授	1. 小規模・高齢化が深刻な集落におけるコミュニティの維持・活性化

分科会②<第3会議室>:

報告タイトル	報告者	地域課題該当テーマ
佐賀県地区における地域コミュニティ活動を通じた観光・商店街・地域の活性化 三重町における商店街活性化支援(国民文化祭応援事業)	吉村教授	1. 小規模・高齢化が深刻な集落におけるコミュニティの維持・活性化 4. 地域商店街及び商店街の活性化による地域振興 7. 地域ブランドの発掘による交流人口の増加・産業の活性化
地域に生きるものづくりの取組	市田准教授	2. 人口減少社会を支えるための先進的なものづくり
スポーツイベントを通じた地域創生人材の育成	堀准教授	5. 健康増進及び生活支援によるコミュニティの維持
中野田駅を中心とするまちづくりプロジェクト	近藤教授	1. 小規模・高齢化が深刻な集落におけるコミュニティの維持・活性化
地域創生のための学生目線による地域企業リクルートビデオ制作プロジェクト	小島教授 星芝准教授	1. 「おおいだ、つくりびと」育成のための基盤となる活動 3. 自然の種々の活用による保全と地域活性化(観光・教育) 7. 地域ブランドの発掘による交流人口の増加・産業の活性化
学生の地域資源を活用した観光プロモーション活動におけるコースを横断した教育改革	本村教授	

<全体会②>: 17:00~17:15 >

(4) 分科会報告

(5) その他

3. 今後のスケジュールについて

4. 閉会

事務局: 日本文理大学 学長室

日本文理大学 地(知)の拠点整備事業 平成30年度 第1回 連携推進会議

<出席者名簿>

平成30年7月4日

○大分県

所 属	職 名	氏 名	主な連携取組内容
企画振興部 政策企画課	副主幹	平山 聡	本学との連携・調整窓口
企画振興部 観光・地域局 地域活力応援室	主任	岡本 海里	過疎地域の集落維持・活性化活動
商工労働部 商業・サービス業振興課	副主幹	中宮 美穂	商店街と連携した地域活性化活動
教育庁 体育保健課	指導主事	武石 隆一	総合型地域スポーツクラブ支援活動
生活環境部 自然保護推進室	室長	橋本 昌樹	ユネスコエコパーク認定推進活動
	副主幹	工藤 慎也	
農林水産部 おおいたブランド推進課	主幹	堺田 健 (欠席)	地域ブランド発掘による6次化活動
商工労働部 経営創造・金融課	主事	佐々木 祐紀	学生起業家マインド育成活動
大分県消費生活・男女共同参画プラザ 県民活動支援室			NPO法人との協働・経営支援活動

(敬称略)

○大分市

所 属	職 名	氏 名	主な連携取組内容
企画部 企画課	課長	小野 晃正	本学との連携・調整窓口
	参事補	山口 大介	
市民部 佐賀開支所	支所長	広瀬 英二	地域と連携した地域活性化活動
企画部 スポーツ振興課	次長兼課長	三好 正昭	健康で活力に満ちた生活支援活動
農林水産部 農政課	次長兼課長	重松 勝也	地域ブランドを活かした6次化活動

(敬称略)

○豊後大野市

所 属	職 名	氏 名	主な連携取組内容
総務課		(欠席)	本学との連携・調整窓口
まちづくり推進課		(欠席)	集落維持・活性化活動
商工観光課	課長	新宮 幸治	エコパーク認定推進活動
高齢者福祉課	課長	足立 健士	高齢社会における課題解決・福祉活動

(敬称略)

○日本文理大学

所 属・役 職	氏 名
学長	菅 貞淑
学長室長	吉村 充功
副学長	橋本 堅次郎
副学長	島岡 成治
大学院工学研究科長/工学部部長	室園 昌彦
経営経済学部長	松下 乾次

所 属・役 職	氏 名
産学官民連携推進センター長 /学長室WG担当(研究)	池畑 義人
F D委員長	西村 謙司
人間力育成センター長 /学長室WG担当(社会貢献)	高見 大介
学長室WG担当(全体)	釘宮 啓
学長室WG担当(教育)	鍋田 耕作
COC事業担当特任教員	市田 秀樹

日本文理大学 地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）
平成30年度 第2回 連携推進会議 次第

日 時：平成31年1月31日（木）14：00～16：30

場 所：日本文理大学 情報センター7階

ブレゼンテーションセッションルーム（全体会・第1分科会）

第3会議室（第2分科会）

<全体会①：14：00～14：20>

1. 開会： 開会あいさつ（学長 菅 貞淑）
2. 議事

（1）平成30年度取組状況報告 [資料1-1・2・3](#)

<分科会：14：25～15：45>

- （2）各プロジェクト報告・意見交換会（報告 各7分+質疑5分、全体意見交換 10分程度）

分科会①<ブレゼンテーションセッション>：（候補）

報告タイトル	報告者	地域課題該当テーマ
豊後大野市の地域資源を活かしたフィールド・スタディ科目への展開と地域観光プロモーションにおける需要予測に関する研究	今西准教授	3. 自然の種々の活用による保全と地域活性化（観光・教育） 7. 地域ブランドの発掘による交流人口の増加・産業の活性化
高齢者向けものづくり教材の開発	鈴木（秀）教授	1. 小規模・高齢化が深刻な集落におけるコミュニティの維持・活性化 2. 人口減少社会を支えるための先進的なものづくり
地域住民主体の地域づくり支援～豊後大野市千歳町 つながりある地域に向けて スポーツイベント実践を通じた地域創生人材の育成	坂口准教授 堀准教授	5. 健康増進及び生活支援によるコミュニティの維持 5. 健康増進及び生活支援によるコミュニティの維持
豊後大野市大野町土師地区における住民と学生による地域コミュニティ維持活動	池畑教授	1. 小規模・高齢化が深刻な集落におけるコミュニティの維持・活性化

分科会②<第3会議室>：

報告タイトル	報告者	地域課題該当テーマ
地域に生きるものづくりの取り組み～木佐上・ロボットプロジェクト関連科目の取り組み	福島教授	2. 人口減少社会を支えるための先進的なものづくり
学生の地域資源を活用した観光プロモーション活動におけるコース・学科を横断した教育改革	本村教授	3. 自然の種々の活用による保全と地域活性化（観光・教育） 7. 地域ブランドの発掘による交流人口の増加・産業の活性化
佐賀県地区における地域コミュニティ活動を通じた観光・商店街・地域の活性化 三重県における商店街活性化支援	吉村教授	1. 小規模・高齢化が深刻な集落におけるコミュニティの維持・活性化 4. 地域商店及び商店街の活性化による地域振興 7. 地域ブランドの発掘による交流人口の増加・産業の活性化
正課外プロジェクトによる地域貢献	高見助教	L. 「おおいだ、つくりびと」育成の基盤となる活動

<全体会②：15：50～16：30>

- （3）分科会報告 [資料2](#)
- （4）事業終了後の取り組みについて
- （5）その他

3. 今後のスケジュールについて

4. 閉会

事務局：日本文理大学 学長室

日本文理大学 地（知）の拠点整備事業 平成30年度 第2回 連携推進会議

<出席者名簿>

平成 31 年 1 月 31 日

○大分県

所 属	職 名	氏 名	主な連携取組内容
企画振興部 政策企画課	副主幹	平山 聡	本学との連携・調整窓口
企画振興部 観光・地域局 地域活力応援室	課長補佐 (総括)	加藤 俊一	過疎地域の集落維持・活性化活動
	副主幹 主事	中宮 美徳 高盛 航平 (随行者)	商店街と連携した地域活性化活動
商工労働部 商業・サービス業振興課	指導主事	武石 隆一	総合型地域スポーツクラブ支援活動
教育庁 体育保健課	主事	阿部 博文	ユネスコエコパーク認定推進活動
生活環境部 自然保護推進室	主幹	塚田 健 (欠席)	地域ブランド発掘による6次化活動
農林水産部 おおいいたブランド推進課	主幹	佐々木 祐紀	学生起業家マインド育成活動
商工労働部 経営創造・金融課	主事		NPO法人との協働・経営支援活動
大分県消費生活・男女共同参画プラザ 県民活動支援室			(敬称略)

○大分市

所 属	職 名	氏 名	主な連携取組内容
企画部 企画課	政策監 参事補	永野 謙吾 山口 大介	本学との連携・調整窓口
市民部 佐賀岡支所	参事補	中島 恭介	地域と連携した地域活性化活動
企画部 スポーツ振興課	次長兼課長	三好 正昭 (欠席)	健康で活力に満ちた生活支援活動
農林水産部 農政課			地域ブランドを活かした6次化活動

○豊後大野市

所 属	職 名	氏 名	主な連携取組内容
総務課	参事	安藤 久美子	本学との連携・調整窓口
まちづくり推進課	課長	堀 著裕	集落維持・活性化活動
商工観光課	課長	新宮 幸治	エコパーク認定推進活動
高齢者福祉課	課長	足立 建士	高齢社会における課題解決・福祉活動

○日本文理大学

所 属・役 職	氏 名	所 属・役 職	氏 名
学 長	菅 貞波	産学官民連携推進センター長 /学長室WG担当(研究)	池畑 義人
学長室長	吉村 充功	FD委員長	西村 謙司
副学長	橋本 堅次郎	人間力育成センター長 /学長室WG担当(社会貢献)	高見 大介
副学長	島岡 成治	学長室WG担当(全体)	釘宮 啓
大学院工学研究科長/工学部長	室園 昌彦	学長室WG担当(教育)	鍋田 耕作
経営経済学部長	(欠 席)		

6 . 大学COC事業 報道リスト



大学COC事業関連 メディア掲載・放映情報 一覧(平成26年度)

放映日時・掲載日	メディア名	タイトル	出演・掲載者名等
10月21日	大分合同新聞(朝刊)	子どもたちの夢膨らむ、文理大で「お仕事体験ランド」	一木 祭「お仕事体験ランド」
10月21日	西日本新聞	10種類の職業体験小学生120人楽しむ、日本文理大で催し	一木 祭「お仕事体験ランド」
11月1日	大分合同新聞(朝刊)	文理大 全学的カリキュラム導入へ、地域振興 学生も県、2市と協力	大学COC事業
11月7日	大分合同新聞(朝刊)	ユネスコエコパーク 宮崎県と登録めざせ 県・3市申請範囲広げPR	建築学科 杉浦 嘉雄 教授 (祖母傾ユネスコエコパーク推進協議会長)
11月11日 17:53~19:00	TOSテレビ大分「TOSスーパーニュース」	「チャレンジOITA人材育成フォーラム2014」開催	大学COC事業
11月25日	大分合同新聞(朝刊)	地方で活躍できる人材を育てよう 文理大がフォーラム	大学COC事業
12月4日 17:30~18:00	OCT大分ケーブルテレビ コム「もぎたてプラス」 OITAタウン情報～	「おおいた人権フェスティバル佐賀関」併設イベント 「お仕事体験ランド」	人間力育成センター
1月13日	大分合同新聞(朝刊)	自転車で冒険50キロ 文理大生豊後大野の見学地突破	人間力育成センター
1月16日	ぶんごおのケーブルテレビ「なないろ情報チャンネル週間！情報トレイン」	豊後大野のジオパークを自転車で巡る旅	人間力育成センター
1月24日	大分合同新聞(朝刊)	人材育成など 文理大と豊和銀が連携協力協定締結	-
1月24日 17:00~	琉球朝日放送「海が僕らのフィールド～海洋ロボット開発に挑む若者たち～」	沖縄海洋ロボットコンテスト・プレ大会	機械電気工学科 稲川 研究室
1月26日 17:30~18:00他	OCT大分ケーブルテレビ コム「もぎたてプラス」	豊和銀行との連携協力協定締結調印式	-
2月4日	大分合同新聞(朝刊)	身近な環境、理解深める 水中観測ロボ研究発表 整備工事 自然と調和を	機械電気工学科 稲川 直裕 准教授
2月5日	大分合同新聞(朝刊)	祖母傾エコパーク 17年の登録目指す 祖母傾ユネスコエコパーク大分・宮崎推進協議会 佐伯で初会合	建築学科 杉浦 嘉雄 教授
2月5日 17:30~18:00他	OCT大分ケーブルテレビ コム「もぎたてプラス」	佐賀関公民館「水中観測ロボットの開発」について講演	機械電気工学科 稲川 直裕 准教授
2月9日	大分合同新聞(夕刊)	トマト収穫ロボ文理大全国3位 労働者不足の現場に生かせ！	機械電気工学科 武村 研究室 武村 泰範 准教授
2月15日	大分合同新聞(朝刊)	佐賀関どう活性化？文理大生と住民が意見交換 (「チャレンジOITA地域創生人材講座」)	大学COC事業
2月17日 18:15~18:55	OBS大分放送「OBSイフニングニュース」	「第1回トマトロボット競技会」遠隔操作部門で全国3位	機械電気工学科 武村 研究室
2月19日 17:30~18:00	OCT大分ケーブルテレビ コム「もぎたてプラス」 OITAタウン情報～	チャレンジOITA地域創生人材講座2015in佐賀関	大学COC事業
2月24日	大分合同新聞(朝刊)	文理大生、豊後大野市で研究活動 体験村の魅力向上策報告	大学COC事業
2月25日 17:54~19:00	TOSテレビ大分「TOSスーパーニュース」	「おおいたものづくり王国総合展」水中観測ロボット	機械電気工学科(稲川研究室)水中観測ロボット

大学COC事業関連 メディア掲載・放映情報 一覧(平成26年度)

放映日時・掲載日	メディア名	タイトル	出演・掲載者名等
2月26日 17:30~18:00他	OCT大分ケーブルテレビ コム「もぎたてプラス」	佐賀関クロメ漁ニュース 水中撮影協力:稲川研究室 室水中観測ロボット	機械電気工学科 稲川 研究室 室水中観測ロボット
2月27日 7:00~8:00他	ぶんごおのケーブルテレビ「なないろ情報チャンネル週間！情報トレイン」	「チャレンジOITA地域創生活動報告会2015in豊後大野」	大学COC事業
3月3日 17:30~18:00他	OCT大分ケーブルテレビ コム「もぎたてプラス」	「第9回関崎シーサイドウォーキング」に人間力育成センター有志学生が参加	人間力育成センター学生
3月17日	大分合同新聞(朝刊)	全国「道の駅」連と文理大 体験実習で協定	-

平成28年度【大学COC事業】新聞記事掲載リスト

Table with columns: No., 見出し, 内容, 新聞名, 掲載日付. Contains 27 items related to university activities and news coverage.

平成28年度【大学COC事業】メディア放映リスト

Table with columns: No., 番組名, 放送局, 放送日. Contains 5 items for media broadcasts.

平成27年度【大学COC事業】新聞記事掲載リスト

Table with columns: No., 見出し, 内容, 新聞名, 日付. Contains 30 items related to university activities and news coverage.

平成27年度【大学COC事業】メディア放映リスト

Table with columns: No., 番組名, 放送局, 放送日. Contains 8 items for media broadcasts.

平成30年度【大学COC事業】新聞掲載記事リスト

No.	見出し	新聞名	掲載日付
1	NBUビデオ通信「府内南蛮ライティング」	大分合同新聞	2018年4月10日(火)
2	NBUビデオ通信「春到来、四浦半島の河津桜」	大分合同新聞	2018年5月1日(火)
3	駅無人化広がる影響	大分合同新聞	2018年5月19日(土)
4	ウミガメ産卵地で学生らが清掃活動	大分合同新聞	2018年6月25日(月)
5	NBUビデオ通信「中津干潟フェスティバル」	大分合同新聞	2018年7月17日(火)
6	ハピカムミライデザイン宣言 地域で育む、学びの力『飛び出す学生に信を贈る』	大分合同新聞	2018年8月20日(月)
7	NBUビデオ通信「父の日になにを贈る？」	大分合同新聞	2018年8月28日(火)
8	風呂職人は文理大生	大分合同新聞	2018年9月20日(木)
9	ボランティアや環境保全など「人間力」育つ活動発表	大分合同新聞	2018年10月17日(水)
10	NBUビデオ通信「大分GAME PARTYらしん拳」	大分合同新聞	2018年10月25日(火)
11	竹田に芸術家が集う「城原の家」来年の完成目指す	大分合同新聞	2018年3月3日(日)

平成30年度【大学COC事業】放送リスト

No.	見出し(本報告書掲載記事)	番組名	放送局	放送日
1	NBUチャレンジ011A地域創生活動 報告委 in佐賀園	ひるドキッ！おおいだ L I V E & N E W S	J: COVチャンネル大分	2019年3月8日(金)

平成29年度【大学COC事業】新聞掲載記事リスト

No.	見出し	内容(本報告書掲載記事)	新聞名	掲載日付
1	NBUビデオ通信「ゆわいん温泉まつり 献湯祭」	地域の話題や取り組みを、学生目線での動画ニュースとして配信。「地域の春、学生の日 NBUビデオ通信」	大分合同新聞(夕刊)	2017年5月2日
2	NBUビデオ通信「藤道の町白栢四柱社会間蔵開き 2017」地酒に愛情、町に誇り	地域の話題や取り組みを、学生目線での動画ニュースとして配信。「地域の春、学生の日 NBUビデオ通信」	大分合同新聞(夕刊)	2017年5月16日
3	日本文理大で「ふれあい市産栗」	「ふれあい市産栗」において、佐藤大分市長と学生の間で産栗交換を行う、「地域にいまあるものづくり」を目標としたプロジェクトの発表、p.79 中野田殿を中心としたまちづくりプロジェクト	大分合同新聞	2017年6月8日
4	NBUビデオ通信「第2回番匠川鮎友釣り大会」漁法に驚きと新激受ける	地域の話題や取り組みを、学生目線での動画ニュースとして配信。「地域の春、学生の日 NBUビデオ通信」	大分合同新聞(夕刊)	2017年7月13日
5	NBUビデオ通信「竜門の滝・瀬開き」映像に工夫を凝らす	地域の話題や取り組みを、学生目線での動画ニュースとして配信。「地域の春、学生の日 NBUビデオ通信」	大分合同新聞(夕刊)	2017年7月27日
6	NBUビデオ通信「親子ふれあい消防パーク」非常時の心構え学ぶ	地域の話題や取り組みを、学生目線での動画ニュースとして配信。「地域の春、学生の日 NBUビデオ通信」	大分合同新聞(夕刊)	2017年8月10日
7	NBUビデオ通信「セブプロウエイ」幻想的なクライマックス	地域の話題や取り組みを、学生目線での動画ニュースとして配信。「地域の春、学生の日 NBUビデオ通信」	大分合同新聞(夕刊)	2017年8月22日
8	NBUビデオ通信「魂来の市」見せ場の妙技に拍手	地域の話題や取り組みを、学生目線での動画ニュースとして配信。「地域の春、学生の日 NBUビデオ通信」	大分合同新聞(夕刊)	2017年9月14日
9	豊後大野に来てね 日本文理大生 列車で自作線はがきを配布	豊後大野の魅力をポストカードにまとめてJR列車内で配布。(p.40 あそび一い！ポストカードプロジェクト)	大分合同新聞	2017年10月5日
10	豊後大野紹介ポストカード	豊後大野の魅力をポストカードにまとめてJR列車内で配布。(p.40 あそび一い！ポストカードプロジェクト)	読売新聞	2017年10月20日
11	若者が作る企業PR動画 地元社の特色に注目「採用される側」の視点で	地元企業のプロモーションビデオを学生アイデアで作成。注目のため学生目線による地域企業リクルートビデオ制作プロジェクト	大分合同新聞	2018年1月9日
12	興味を引く仕掛け 人の流れ生み出す 日本文理大生が客の回遊性高める実験	パークプレイス大分で客の回遊性を高める実験を実施。「かた」から見えてくる地域課題 シカケプロジェクト	大分合同新聞	2018年3月1日

平成29年度【大学COC事業】放送リスト

No.	見出し(本報告書掲載記事)	番組名	放送局	放送日
1	Kids Smile Project「カミノコの家との田植え」(p.46 Kids Smile Project)	J: COM「地元情報満載ディレィーニュース」	OCT	2017年6月8日
2	岡崎の自然林保全活動 (p.29 佐賀県半島における地域体験交流活動研修「プロジェクト」)の取り組み	J: COM「地元情報満載ディレィーニュース」	OCT	2017年6月12日
3	大学で開発中！水中ロボット 様々な場面で活躍に期待 (p.76 防災用小型無人水中観測システムの研究開発)	TOS「ゆ〜わくワイド&ニュース」	TOS	2017年6月27日

2018年04月10日（火） 大分合同新聞 通覧版夕刊 さむや



みんなの夢、かないますように...

スームアップ
NBUビデオ通信

「府内南東ライティング」

学生から子どもまで、あらゆる年代の皆さんが、このサービスを通じて、自分たちの思いや願いを、動画で発信することができます。また、動画を通じて、自分たちの思いや願いを、他の人々に伝えることができます。

小川 心中心

2018年04月04日（火） 大分合同新聞 通覧版夕刊 さむや



ピンクと青のマッチング

春到来、四浦半島 河津桜

桜・海・保戸島がワンショット!!

スームアップ
NBUビデオ通信

「春到来、四浦半島の河津桜」

春の訪れとともに、四浦半島の河津桜が咲き始めました。桜のピンクと海の色が美しい風景が、今年も訪れることができます。

新名 悠樹さん

2018年05月19日（土） 大分合同新聞 通覧版朝刊 朝社J

駅無人化 広がる影響

波紋
JR

トラブルの際 障害者心細く 地域振興にも水差す

大分県内各地で駅が無人化されるにつれて、障害者の利用が難しくなっている。地域振興にも影響を及ぼしている。

大分県内各地で駅が無人化されるにつれて、障害者の利用が難しくなっている。地域振興にも影響を及ぼしている。

大分県内各地で駅が無人化されるにつれて、障害者の利用が難しくなっている。地域振興にも影響を及ぼしている。

2018年06月24日（日） 大分合同新聞 通覧版朝刊 朝社J

ウミガメ産卵地で
学生らが清掃活動
大分市の磯崎海岸
ウミガメの産卵地で知ら
れる大分市磯崎の磯崎海岸



清掃活動に学生ら参加

24日、環境保全イベント「大分の水辺をキレイにしよう」があった。県内の学生も地元住民ら約100人が参加した。

NPO法人おおい環境保全フォーラム（大分市）の小出祥太郎さん（28）が海のごみがウミガメに及ぼす影響などを説明。参加者は海岸を清掃し、砂の流出を防ぐ打撃を行った。終了後は地区の自治会がお茶会を開いた。

イベントはトヨタ自動車（大分県）が全面協賛している環境活動「トヨタ ソシヤル フォアキャスト18」の一環。日本文理大と大分高新聞社が主催した。



カフトろこに凝れる参加者の子ども

7月、豊後府市中央公園(同市三津)であった「小学者お祭り」で、下田さん(右)が、地域の小学生と一緒にお祭りを楽しんでいる様子。お祭りの会場には、地域の小学生と一緒にお祭りを楽しむ様子。お祭りの会場には、地域の小学生と一緒にお祭りを楽しむ様子。

スーパーステップ

NBUビデオ通信

「中道十温フェスティバル」

中道十温さん

豊後府市大野町の「ふるさと体験村」

豊後府市大野町の「ふるさと体験村」

豊後府市大野町の「ふるさと体験村」



大野町の「ふるさと体験村」

豊後府市大野町の「ふるさと体験村」

豊後府市大野町の「ふるさと体験村」

豊後府市大野町の「ふるさと体験村」

「風呂職人」は文理大生

風呂職人、文理大生

風呂職人、文理大生

風呂職人、文理大生

建築学科 五右衛門、ドラム缶設置



建築学科 五右衛門、ドラム缶設置

建築学科 五右衛門、ドラム缶設置

建築学科 五右衛門、ドラム缶設置

飛び出す学生に信頼を

飛び出す学生に信頼を

飛び出す学生に信頼を



飛び出す学生に信頼を

飛び出す学生に信頼を

飛び出す学生に信頼を



感謝の気持ち込めた力作

スーパーステップ

NBUビデオ通信

「父の日になにを贈る？」

スーパーステップ

NBUビデオ通信

「父の日になにを贈る？」

NBUがシカケる COC事業の今を伝える webとマガジン。

coc-nbu.jp

Since 2015 Nippon Bunri University, COC MAGAZINE



coc-nbu.jpにて、各号連携記事を掲載。



文部科学省「地（知）の拠点整備事業」平成 26 年度採択
『豊かな心と専門的課題解決力を持つおおいた地域創生人材の育成』

日本文理大学
「地（知）の拠点整備事業」成果報告書
平成 26 ～ 30 年度

発行日：平成 31 年 3 月 27 日
編集：学校法人 文理学園
日本文理大学 大学 COC 事業担当
編集責任者 吉村充功（事業推進責任者）
〒870 - 0397 大分県 大分市一木 1727
e-mail: coc@nbu.ac.jp
発行者：日本文理大学 学長 菅 貞淑
印刷：三和印刷出版（株）



文部科学省

地(知)の拠点



NBU 日本文理大学